

か

懐月堂安度 (かいげつどう・あんど/生没年不詳)

江戸生れ。懐月堂派の祖。1704～16年間弟子をかかえ、肉筆遊女絵を大量生産。弟子に安知、度繁、度辰、度種、度秀、いずれも「懐月堂末葉」を名のる。懐月堂派の作品は、遊郭の売れっ子の名妓を一人立の美人画として表現、ほとんどが豪華な衣装を着け、斜めを向いて身体をくの字にそらしたポーズをとる。1714年江島生島事件(→絵島事件)に連座。**江戸時代中期の浮世絵師**

甲斐サチ (かい・さち/1925～1995年)

別府市生れ。本名甲斐サチ子。女子美術大学日本画科卒、駒井哲郎に師事する。59年以来春陽会に出品を続け、62年研究賞、第3回東京国際版画ビエンナーレに出品。68年春陽会会員。国内での個展、NY、メキシコシティで個展を開催。**洋画家**

貝島福通 (かいじま・ふくみち/1929～2010年)

福岡市生れ。1950年福岡教育大学美術家卒。56、57年二科展入選。68年「今日の美術展」(福岡県文化会館)出品。73～81年「日本実在派展」出品、会員。79年「福岡県美術協会展」協会長賞。94年個展開催(福岡市美術館)。79年福岡市の委嘱によりインドネシアなどの東南アジアの美術調査。80年代の「アジア現代美術展」や「日韓現代絵画展」「アジア国際美術展」等に出品。2010年没、81歳、**洋画家**

戒田光雄 (かいだ・みつお/1961年～)

愛媛県生れ。1995年画装工房「額師風雅」を創立。97年OOGA×FUGA展、田部画廊。1999年～絵のない展覧会「額展」を毎年開催。2008年OOGA×FUGA展 風雅工房 2009年「額の中の物語展」を隔年開催 17年 NHK目撃日本列島「思い出は額の中に」。**額装**

甲斐荘楠音 (かいのしょう・ただおと/1894～1978年)

京都市生れ。1915年京都市立絵画専門学校卒業。24年国画創作協会会友。28年「新樹社」を結成。40年映画界に転身。56年「山賊会」活動を通じ絵画を発表する。78年没、83歳。(出典 わ眼) **日本画家**

甲斐仁代 (かい・ひとよ/1902～1963年)

佐賀市生れ。1919年青島女学校卒。22年女子美術学校西洋画科卒。23年二科展で入選、以後37年まで出品。33年婦人洋画協会の創立に参加。37～62年一水会展に出品、47年同会会員、55年会員優

秀賞、資生堂ギャラリーで個展。ブリヂストン石橋夫妻が支援。東京で没、61歳。**洋画家**

海北友松 (かいほう・ゆうしょう/1533～1615年)

海北派の祖。近江(おうみ)の人。初め狩野派を学び、梁楷(りょうかい)などの宋元水墨画風に傾倒し、独自の気迫と情感に富む画風を完成させた。作品に建仁寺本坊方丈の「山水図」など。**安土桃山時代の画家**

甲斐巳八郎 (かい・みはちろう/1903～1979年)

熊本市生れ。有田工業学校図案絵画科卒、1927年京都市立絵画専門学校卒。福田平八郎、菊池契月に師事。中国山西省の雲崗石窟調査隊に参加。30年中国東北地区に渡り、満州鉄道社員会報道部所属。中国各地の風俗をスケッチ、中国の自然風土や人々を表現した。中国滞在18年。48年再興美術院展出品、院友。福岡県美術協会参加や個展。1979年没、76歳。**日本画家**

海見久子 (かいみ・ひさこ/1931～2007年)

岡山県生れ。1954～63年グループせいき会で活動。58年から自由美術協会展に出品、65年会員。個展、グループ展で作品を発表。91年アート・SUN展(倉敷市立美術館)に参加。94、96年岡山県現代洋画選抜展に出品。2003年海見久子展「鳥の歌」(奈義町現代美術館)開催。2007年没、76歳。**洋画家**

河内成幸 (かうち・せいこう/1948年～)

山梨県生れ。1970年日本版画協会展・新人賞。73年多摩美術大学卒。76年日本版画協会展・最優秀賞、現代日本美術展・兵庫県立近代美術館賞。77年国際青年美術家展・佳作賞。78年日本国際美術家展・東京国立近代美術館賞、日本現代版画大賞展・優秀賞。79年版画グランプリ展・グランプリ、グレンヘン国際色彩版画トリエンナーレ・最高賞。82年ノルウェー国際版画ビエンナーレ・最高賞。83年カリフォルニア国際版画展・最高賞。85年文化庁在外研修派遣(NY)。89年リュブリアナ国際版画ビエンナーレ・受賞。92年TAMAうるおい美術展(東京都)・大賞。**版画家**

加賀孝一郎 (かが・こういちろう/1899～1988年)

岐阜県生れ。1916年名古屋洋画研究所で鈴木不知の教えるを受ける。18年岸田劉生に師事。31年春陽展に出品、入選。53年春陽会会員。百貨店を中心に個展。85年稲沢市荻須記念美術館で個展、犬山市で没、88歳。(出典 わ眼) **洋画家**

加賀美勲 (かがみ・いさお/1939～1999年)

甲府市生れ。1965年東京藝術大学大学院卒、大橋賞。国展で国画賞40周年記念賞を受賞。66年国

展で国画賞。68年国画会会員となる。92年愛知県立芸術大学教授。個展で発表。長野県で没、59歳。(出典 わ眼) **洋画家、美教**

ほか、版画、立体絵画、オブジェなど多彩な創作活動を展開した。**洋画家、水彩画家、版画**

各務鑛三 (かがみ・こうぞう/1896～1985年)

岐阜県生れ。愛知県立陶器学校、1916年東京高等工業学校図案科選科卒。5年間同校窯業科に勤務。20年満鉄窯業試験所に入社し窯業研究に従事。27年ドイツ留学、国立シュツットガルト美術工芸学校、校長のアイフ教授に師事。グラビール、カットなどガラス彫刻を1年半の間学。29年に帰国。34年各務クリスタル製作所を設立、34年帝展で特選。岩田藤七の色ガラス、各務のクリスタルガラスで、岩田と共に硝子工芸の先駆的役割を果し、硝子工芸を工芸美術の今野にまで高めた。日展に出品、審査員、日展評議員、日展参与。同28年芸術選奨文部大臣賞。58年のブリュッセル万国博覧会でグランプリ。同35年日本芸術院賞を受賞する。神奈川県で没、89歳。**ガラス工芸家**

加々美豊 (かがみ・ゆたか/1928年～)

長野県生れ。旧制松本中学校卒。教員を勤めた後、画家となる。1986年日本国際美術展(東京都美術館、京都市美術館)で受賞。85、87年日本現代美術展(東京都美術館、京都市美術館)で受賞。90年日本総合美術キューバ展作品同国立美術館収蔵。92年松本芸術文化協会特別賞。日仏現代美術展(東京、パリ・グランパレ・ナショナル・ギャラリー)'91・92・93年受賞、'94年各入選。2004年CAF-N創立展(埼玉県立近代美術館)。**洋画家、美教**

加賀谷武 (かがや・たけし/1932年～)

富山県生れ。1955年金沢美術工芸大学工芸科専攻科修了。54～59年二科展・九室会。67年国際青年美術家展(日米)優秀賞(東京西武百貨店)、第8回現代日本美術展(東京都美術館)、5人の現代日本美術家展 文化フォーラム主催(パリ・G.ランベール)。78年北日本美術賞展 北日本美術賞(高岡市美術館)。98年加賀谷武 川井昭夫 展(砺波市美術館ギャラリー)。2002年紺綬褒章。06年シロタ画廊で個展。**空間造形作家**

香川良海 (かがわ・りょうかい/1947年～)

東京生れ。都立日本橋高等学校卒、独学で水彩画をはじめ、日本水彩画展、二紀展などに出品。1956年ヨシダ・ヨシエらと「制作会議」を結成。読売アンデパンダン展に作品を発表し、シエル美術賞展や長岡現代美術館賞展で受賞、ユーモラスな形態の内に空虚感を込めたシリーズ作品により高い評価を得た。水彩の

柿崎 兆 (かきざき・きざし/1953年～)

山形県生れ。1981年多摩美術大学油画科卒。1984年日本版画協会展・山口源新人賞。木版画の可能性を追求し、抽象的ながらも暖かな色彩の作品を制作する。生まれ育った故郷の自然を感じさせる独自の風景を作り出す。**版画家**

柿崎順一 (かきざき・じゅんいち/1971年～)

長野県生れ。造形学と園芸学を学ぶ。花や木など、植物や自然環境を主材に、彫刻・インスタレーション・写真・ビデオ等、様々な形態による作品を国内外にて制作。2011年アーティストグループ Chim ↑ Pomとのコラボレーションにより、福島第一原子力発電所事故直後の福島第一原子力発電所周辺の植物および津波による漂流物を採取、それらを材料に用いた彫刻作品『被曝花』が注目を集める。また、坂本龍一等が発起し環境保護や自然エネルギー促進事業、省エネルギーなど環境保全のためのプロジェクトを行なう artists' Power 及び ap bank に賛同人として参加。イギリスの国立美術館テート・ギャラリーのライブラリーに作品集『あたらしい生命 — 揺りかごからの胎動』"NEW LIFE - Quickenning from the Cradle" が収蔵された。**現代美術家、インスタ、ビジュアル、フラワー、彫刻**

蠣崎波響 (かきざき・はきょう/1764～1826年)

北海道生れ? 1773年江戸で南蘋派の画家・建部凌岱に学ぶ、宋紫石に師事。83年松前に戻り、大原呑響が約一年松前に滞在し、以後親交を結ぶ。89年『夷酋列像』。80年フランスのブザンソン美術考古学博物館で「夷酋列像」11点が発見)を翌年冬に完成させ、後に代表作とされる。91年に同図を携え上洛、『夷酋列像』は京都で話題となり、光格天皇の天覧に供され、絵師波響の名は一時洛中で知られた。円山応挙につき、その画風を学び以後画風が一変。1807年)、松前藩家老。1826年没、63歳。**江戸時代後期の絵師**

柿手春三 (かきて・しゅんぞう/1909～1993年)

広島県生れ。1928年上京。太平洋画会研究所、川端画学校に学ぶ。30年「一九三〇年協会」展に入選。33年独立展に7年連続で入選。38年創紀美術協会結成に参加。39年美術文化協会を結成。49年自由美術協会会員。55年広島平和美術展を創立、代表幹事活躍。93年没、84歳。**洋画家**

郭 仁植 (かく・いんしゅく/1919～1988年)

韓国生れ。1937年日本に移住。41年帝国美術学校本科研究科卒。41年独立美術協会展入選。51年二科展入選、以後毎回入選。57年美術文化協会展出品。57～59年新エコール・ド・トーキョー創立参加。以後無所属。56年読売アンデパンダン展出品。60年頃ガラス、真鍮、鉄板を切断したり縫合した独自の作品を探究。素材自体に語らせようとする試みは1970年前後の“モノ派”の先駆的な作品。65年日本国際美術展出品。69年和紙を使った作品、和紙にノミをあて円を使った「物と言葉」を制作。70年代末頃からは和紙に彩墨の色斑を施した作品を制作、東洋的自然観を現代美術に表現する試みを続けた。69年サンパウロ・ビエンナーレ、76年シドニー・ビエンナーレ代表、77年「韓国現代美術の断面」に出品。版画やガラス、木の立体作品も制作。84年ギャラリー上田で回顧展。作品集に58年『郭仁植の世界』。東京で没、68歳。洋画家、モノ、版画

郭 徳俊 (かく・とくしゅん/1937年～)

京都府生れ。1955年京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸課程日本画科卒。70年メジャーシリーズの制作、写真やビデオによる作品を発表。72年東京国際版画ビエンナーレで文部大臣賞。74年《フォードと郭》を制作。以後「大統領と郭」シリーズを制作。84年ソウル国際版画ビエンナーレで優秀賞。2001年個展(新潟市美術館、他)。03年個展(国立現代美術館、ソウル)。11年京都市芸術功労賞。12年個展(光州市立美術館、韓国)。写真、ビデオ、日本画、版画

角間貴生 (かくま・たかお/1947年～)

富山県生れ。九州芸術工科大学版画研究室修了。2004大野城まどかびあ版画ビエンナーレにてグランプリ(池田満寿夫大賞)、05年日本タイ国際版画展奨励賞、08年プサン国際ビエンナーレ招待作家(ギャラリー展)、日本国内や様々な国(韓国・中国・ブルガリア・タイ・米国・ポーランド・豪州)で個展開催や国際交流展に参加。福岡市広報誌「鴻都」表紙制作(98～03)、トゥラ・モイラネン著「日本版画」の表紙制作(フィンランド 2003)など。「出版工房ゆめらいふ」を主宰。日本版画協会会員。版画家、アニメーション作家、小説家

加倉井和夫 (かぐらい・かずお/1919～1995年)

横浜市生れ。東京美術学校日本画科卒。在学中結城素明に学び、後、山口蓬春に師事。1947年日展入選。58新日展、61年日展で特選。日展を中心に活躍、菊華賞、桂花賞、内閣総理大臣賞。81年日本芸術院賞。日展理事として活躍。自然を純化した清澄な

色調と詩情あふれる心象表現に独自の展開をみせた。75年から山梨県山中湖村に在住し、付近の風景に取り組んだ。1995年没、76歳。日本画家

掛井五郎 (かきい・ごろう/1930年～)

静岡県生れ。木内克の作品に感動。1950年東京芸術大学に入学、彫刻科、彫刻専修科に進み、57、58年同大学副手。57年新制作協会展新作家賞、61年会員。68～70年ベラクルス大学(メキシコ)の客員教授。76年中原悌二郎賞優秀賞。81年現代日本彫刻展東京国立近代美術館賞・神奈川県立近代美術館賞。82年高村光太郎大賞展優秀賞。83年浅野順一賞。92年中原悌二郎賞。青山学院女子短大教授。81年現代日本彫刻展東京国立近代美術館賞・神奈川県立近代美術館賞。彫刻家、版画家

寛 本生 (かきい・もとなり/1951年～)

福岡県生れ。75年東京造形大学卒、渡仏。80年ユーゴスラビア・デッ サンビエンナーレ招待出品。88年安井賞展で佳作賞。90年昭和会展優秀賞。92年以降隔年日動画廊で個展。蔵丘洞画廊で個展。2005年寛本生画集刊行。09年パリから帰国(34年間在住)。洋画家

陰里鉄郎 (かげさと・てつろう/1931～2010年)

長崎県生れ。52年日本大学教養学部修了。56年東京藝術大学美術学部芸術学科卒、同校芸術学科副手、59年助手。62年神奈川県立近代美術館学芸員。土方定一の命により62年開催の「萬鉄五郎展」を担当、本格的に日本近代美術史研究。65年「司馬江漢とその時代」展を担当。65年東京国立博物館学芸部美術課絵画室、研究員。66年東京国立文化財研究所美術部第二研究室、研究所では萬鉄五郎研究に傾注し、「美術研究」に「萬鉄五郎一生涯と芸術」を連載。研究領域は、司馬江漢、石川大浪、亜欧堂田善、川原慶賀等の江戸洋風画、明治、大正期の美術まで広範囲。「近代の美術 29 萬鉄五郎」(至文堂、1975年1月)、「日本の名画 5 黒田清輝」(中央公論社、1975年)、「巨匠の名画 10 青木繁」(学研、1976年)「原色現代日本の美術 5 日本の印象派」(小学館、1977年)、「近代の美術 50 村山槐多と関根正二」(至文堂、1979年1月)、「夏目漱石・美術批評」(講談社、1980年)、東京国立文化財研究所編「黒田清輝素描集」(日動出版部、1982年)。「原色現代日本の美術 5 日本の印象派」は、研究所が近代美術研究の根幹とする黒田清輝を中心に、同時代のヨーロッパ美術まで視野に入れながら考察した代表的な研究成果。82年三重県立美術館館長。(1)江戸時代以降の作品で三重県出身ないし三重にゆかりの深い作家の作品、

(2)明治時代以降の近代洋画の流れをたどることのできる作品、また日本の近代美術に深い影響を与えた外国の作品、(3)作家の創作活動の背景を知ることのできる素描、下絵、水彩画等。82年開館記念展として9月「三重の美術・現代」、10月「日本近代の洋画家たち展」開催。館長在任中は展覧会の企画、日本近代美術、関連した海外展、現代美術展を順次開催。日本の近代美術では、「藤島武二」展(1983年4月)、「萬鉄五郎展」(1985年6月)、「橋本平八と円空展」(1985年9月)、「黒田清輝 生誕120年記念」展(1986年5月)、「関根正二とその時代展」(1986年9月)、「石井鶴三展」(1987年6月)、「鹿子木孟郎展」(1990年9月)等、基礎的、基本的な研究。「井上武吉展」(1987年1月)、「飯田善国展」(1988年1月)、「湯原和夫展」(1988年9月)、「向井良吉展」(1989年5月)、「多田美波展」(1991年8月)、「清水九兵衛展」(1992年5月)、「佐藤忠良展」(1994年4月)開催。「アーティストとクリティック―批評家・土方定一と戦後美術展」(1992年8月)は、土方定一の批評的な視線をとおして戦後美術を跡づける、ユニークな試み、土方へのオマージュ。94年名古屋芸術大学美術学部教授。94年横浜美術館館長。98年美術大学大学院美術研究科教授。「陰里鉄郎著作集」全3巻(一艸堂、2007年)に収録されている。横浜市で没、79歳。(引用東文研) **美術史家、評論家、美術館**

寛 忠治 (かへひ・ちゅうじ/1908~2004年)

愛知県生れ。22~68年愛知県測候所に勤務。1924年サンシオン自由洋画研究所に通う。25年名古屋洋画研究所に通う。27年頃からペンによる自画像制作。68年美術グループ「独潮会」を結成。98年刈谷市美術館で個展、中部日本放送より「ちなし賞」。2000年円空大賞展で円空賞。01年名古屋市芸術賞芸術特賞、名古屋画廊で個展。04年没、96歳。09年一宮市三岸節子記念美術館で個展。 **洋画家**

影山栄次 (かげやま・えいじ/1910?~1943年)

鳥取県生れ。本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。帝展、新文展に出品、入選。二科展に入選。春台賞2回受賞。春台美術会評議員。満州で没、34歳。 **洋画家**

かこ さとし (かこ 里子/1926~2018年)

福井県生れ。東京大学工学部応用化学科卒、昭和電工に就職。川崎市などでセツルメント活動(東大セツルメント川崎古市場)や、児童向け人形劇、紙芝居などの活動を行う。1962年工学博士。66年技術士。63年産経児童出版文化賞大賞。75年日本エッセイスト・クラブ賞。91年日本科学読物賞。2008年菊池

寛賞。東京大学等5つの大学で非常勤講師。 **絵本作家、児童文学者**

笠井誠一 (かさい・せいいち/1932年~)

札幌市生れ。1959年東京藝術大学美術学部専攻科修了、同校副手。59~66年フランス政府給費留学生として渡仏、パリの国立美術高等学校のモーリス・ブリアンション教室で学ぶ。サロン・ドートンヌに出品、62年フランス政府買い上げ。74年新樹会展に出品、同人。74~98年愛知県立芸術大学教授。68年名古屋画廊個展。85年立教会同人。90年名古屋市芸術賞芸術特賞。97年愛知県立芸術大学芸術資料館で個展。2001年安田火災東郷青児美術館大賞。 **洋画家、美教**

笠井正博 (かさい・まさひろ/1954年~)

東京生れ。1978年東京学芸大学美術科卒、渡仏。82年版画「期待の新人作家」大賞展・大賞。84年住友ビル版画ミニアチュール展・優秀賞。86年日仏現代美術展・佳作賞。92年大阪府立現代美術センター現代版画大賞展・大賞。94年大阪トリエンナーレ(97年住友海上賞)。2000年クラコウ国際版画トリエンナーレ(ポーランド)・受賞。11年スプリットグラフィックアートビエンナーレ・特別賞(クロアチア)。 **版画家**

葛西四雄 (かさい・よつお/1925~1990年)

青森県生れ。青森師範学校中退。1957年奈良岡正夫に師事。57年示現会展で入選、63年示現会会員、のち示現会理事。69年安井賞候補展に出品。62年日展入選、71、78年日展で特選、85年日展会員。82年新宿小田急百貨店で個展。東京で没、64歳。 **洋画家**

笠木 茂 (かさぎ・しげる/1934年~)

岐阜県生れ。東京芸術大学卒業。特許庁を経て、東京芸術大学大学院修了。伊藤廉、中根寛、フランス国立高等装飾美術校・デピュール教授に師事。安宅賞受賞。ル・サロン、サロン・ドートンヌなどに出品。資生堂ギャラリー、梅田画廊などで個展を開く。2012年岐阜県各界功労者表彰。ル・サロン会員、日本美術連盟会員。 **洋画家**

笠木治郎吉 (かさぎ・じろきち/1862~1921年)

金沢市生れ。1877年横浜に出て、絵の修行。五姓田芳柳らの影響を受ける。サムライ商会でお土産絵として売られ、海外に作品が流失。「田原坂激戦図」を描く。1911年東城鉦太郎による「日本海海戦図」制作に手伝う。21年没、59歳。90年日本パノラマ館の「南北戦争図」輸入の為、渡米。94年熊本市に九州

パノラマ館が開館。21年没、59歳。洋画家、水彩画

笠置季男 (かさぎ・すえお/1901~1967年)

兵庫県生れ。1921年未来派美術協会展出品。22年上京、川端画学校で学ぶ。33年東京美術学校彫刻本科塑像部卒。27年二科展に出品、29年二科展で樗牛賞、31年二科賞、36年会員。戦後、二科会再建、65年二科展で青児賞のち理事。幾何学的抽象彫刻制作。セメントによる大作制作。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。東京で没、66歳。彫刻家

風倉 匠 (かざくら・しよう/1936~2007年)

大分市生れ。1956年武蔵野美術大学油絵科入学、のち中退。56年赤瀬川原平、吉村益信を知る。57年大分県総合文化祭(大分県教育会館ホール)で椅子から何度も落ち続けるハプニングを行う。59年吉村益信らのグループ「オール・ジャパン」の結成に参加。60年吉村益信、赤瀬川原平、篠原有司男らと「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」結成に参加。63年大分県美術展で大分県美術協会賞。読売アンデパンダン展や現代日本美術展等に出品する一方で、パフォーマーとしての自覚を強め、小杉武久や刀根康尚らの「グループ音楽」や土方巽の「暗黒舞踏」と共演する。86年パリのボンピドゥ・センターで行われた「前衛芸術の日本 1910~1970」に参加し、小杉武久とバルーン用いたパフォーマンスを行い、同展後、ドイツでも小杉とのパフォーマンスを行う。ハプニングやパフォーマンスによって既成の概念を揺るがした。大分市で没、71歳。前衛、造形作家、ネオ・ダダ、ハプニング、パフォーマー

笠原吉太郎 (かさばら・きちたろう/1874~1954年)

桐生市生れ。代々意匠と機業を家業とする。1890年上京、日本画を学ぶ。97年渡仏、政府実習生としてリヨン国立美術学校で学ぶ、榎本武揚に支援を受ける。1903年帰国、石川県美術工芸品審査官。11年照憲皇太后の御掌の図案制作。23年油絵に専念。佐伯祐三、前田寛治と交友。33年渡中。1954年没、80歳。(田村)洋画家、日本画

風間 完 (かざま・かん/1919~2003年)

東京生れ。1939年東京高等工芸学校卒。43年新制作展に入選。49年同展で新作家賞。54年同展後に新制作派協会会員。猪熊弦一郎等に師事。53年から小説、新聞の挿絵。57年から2年間パリに留学、グラン・ショミエール研究所に学ぶ。64年講談社挿絵賞。67年再渡仏、銅版画を制作。2002年長年にわたる文学作品の挿絵制作に対して菊池寛賞。東京で没、84歳。洋画家、挿絵、版画

笠松紫浪 (かさまつ・しろう/1898~1991年)

東京生れ。14歳で鑄木清方に師事、文展や帝展に入選。1919年渡邊庄三郎の下で新版画を制作。画風を変えて芸艸堂で制作。伊東深水和山川秀峰の青衿会にも名を連ね、晩年は自画自刻の作品制作に専念。37年に海洋美術展大臣賞。1991年没、93歳。浮世絵、版画

笠松宏有 (かさまつ・ひろとも/1938~2005年)

長崎県生れ。1957年高校卒、阿佐ヶ谷美術学園入校。独立展入選、83年独立賞、84年会員。89年戦争と平和テーマに「昭和史」シリーズを発表。2000年ヨーロッパの町並みを俯瞰した「天使の連作」シリーズを発表。89年紺綬褒章。2005年没、67歳。06年笠松宏有回顧展(東京セントラル美術館)開催。洋画家、版画

加治亜委子 (かじ・あいこ/1944~1987年)

長崎県生れ。1962年聖和女子学院卒。心臓疾患と闘いながら福岡市で作家活動を続けた。グワッシュを用いた独自の手法で、鮮やかな色彩を奔放に駆使したアンフォルメル風作品。団体には属さず、1968年福岡市で初個展以後、福岡と東京で個展を続け、71年パリで個展を開催。1987年没、43歳。水彩画家

梶尾正次 (かじお・まさじ/1933年~)

福井県生れ。1956年福井大学卒。54年土岡秀太郎に師事、北美文化協会に参加、絵画を描きながら、内外の美術家について研究。当初は油絵を描いていたが、1960年代初め頃から鉄線に和紙を張り、表面に柿渋と鉄粉を塗った立体作品に転じる。1963年から福井の他、東京、大阪、京都などで個展を開き始める。1966年東京国立近代美術館の「現代美術の新世代」展、69年東京都美術館の「現代美術のフロンティア」展等に出品。洋画家、立体

梶川正男 (かじかわ・まさお/1912~1986年)

愛知県生れ。一線美術会委員。名古屋女子大学名誉教授。1986年没、74歳。洋画家、美術教育

梶 進 (かじ・すすむ/1915~1991年)

東京生れ。1941年東京美術学校油画科卒、藤島武二に師事。60年光風会会員、日展会友。1991年没、75歳。洋画家

梶田英一 (かじた・えいいち/1917~1993年)

呉市生れ。1941年東京美術学校卒、藤島武二、寺

内萬治郎に学ぶ。光風会展を軸に、戦前は官展、戦後は日展に出品。52年光風会展でS氏賞、同会会員。59年日展で特選。東京と呉で個展開催。1993年没、76歳。洋画家

梶田半古 (かじた・はんこ/1870～1917年)

東京生れ。鍋田玉英に四条派を学ぶ、菊池容齋にも私淑し歴史画研究。1891年日本青年絵画協会、96年日本絵画協会、98年日本画会結成参加。新聞や雑誌の挿絵手がけ、1904年図案集『若草』を出版。日本美術院には特別賛助員参加。門下に日本美術院を背負う作家が育つ。1917年没、47歳。日本画家、挿絵、浮世絵

梶山九江 (かじやま・きゅうこう/1840～1890年)

熊本県生れ。細川藩に絵師として仕えた。1856年、淵野桂仙の門に入った。59年南画・大和絵の田中亀水に学んだ。64～67年門人の内海羊石とともに、中国、四国を遊歴。78年再度、中国、四国地方を遊歴するが、父九嶽の死去のため熊本に帰った。三度、長三洲を訪ねた。1890年没、50歳。江戸、明治の絵師、南画、大和絵

梶山俊夫 (かじやま・としお/1935～2015年)

東京生れ。1956年武蔵野美術大学西洋画科中退。61年日本大学芸術学部卒。博報堂制作部に嘱託勤務、このころ日本宣伝美術会会員。62年シェル美術賞(3等)、木島始との共著で詩画集『グラフィック・マニフェスト—のどかなくわだて』(未来社)を上梓。63～64年渡欧。36年間福音館書店を中心に絵本を描く。73年、『いちにちにへんとおるバス』(中山正文作、ひかりのくに、1972年)で講談社出版文化賞受賞。73年、『いちにちにへんとおるバス』(中山正文作、ひかりのくに、1972年)で講談社出版文化賞受賞。82年、『こんこんさまにさしあげそうろう』(森はなさく、PHP 研究所、1982年)で絵本につぼんだ賞受賞。壁画、ブロンズ像、挿絵。98年、市川市民文化賞・奨励賞。2015年没、79歳。洋画家、絵本作家

柏木治子 (かしわぎ・はるこ/1908～1989年)

京都府生れ。帝展 新文展に出品、1947年? 会員推挙。58年日展で特選、75年会員優賞、76年日展会員。1989年没、81歳。洋画家

柏原覚太郎 (かしわばら・かくたろう/1901～1977年)

高松市生れ。1923年東京美術学校図案師範科卒。27年二科展入選。32～33年渡欧。33年二科展に滞欧作特別陳列、37年二科展で会友賞、43年二科会

会員。45年行動美術協会の結成に参加、会員。以降没年まで同会出品。東京で没、75歳。洋画家

柏本龍太 (かしわもと・りゅうた/1973年～)

長崎県生れ。1997年長崎美術学院本科研修科修了。2000年春季二紀選抜展大賞。2000年雪梁舎フレンツェ賞展フレンツェ大賞。01年イタリア・フレンツェ研修。02年二紀展で二紀賞、03年日本アートアカデミー大賞グランプリ、03年昭和会展日動美術財団賞、損保ジャパン美術財団選抜展秀作賞。マケドニア国際芸術文化交流・イタリア研修。04年新宿小田急百貨店で個展。05年スペイン美術賞展優秀賞。06年二紀展同人優賞。12、14年日本橋三越にて個展。洋画家

梶原貫五 (かじわら・かんご/1887～1958年)

福岡市生れ。1914年大正博覧会で受賞。16年東京美術学校西洋画科卒。17年光風会展で今村奨励賞。16、17年文展入選。帝展で入選多く、招待、無鑑査出品。28年光風会会友。31年光風会会員。東京で没、71歳。洋画家

梶原琢磨 (かじわら・たくま/1876～1959年)

福岡県生れ。中学修猷館卒。同級生に吉田博がいた。1893年17歳でアメリカに移住。シアトルで写真術を学ぶ。セントルイスで写真スタジオを開く。「タクマ・レンズ」の開発に当たる。後、油彩画に転向。肖像を中心に制作。セントルイス・アーティスト・ギルドで度々受賞。1926年カンザス・シティー美術館から銀メダル。35年ニューヨークに移住。49年サブリスキー賞。51年アメリカ美術家連盟から金メダル。59年3月11日ニューヨークで没、享年83歳。(佐)洋画家

春日清彦 (かすが・きよひこ/1897～1952年)

長野県生れ。東京美術学校西洋画科卒。風刺漫画・政治漫画を『東京パック』に投稿し、波乱の青年時代を送った。終戦で帰国し、長野師範学校・信州大学教育学部で絵画を教える。1952年没、55歳。1994年ギャラリー82で個展。洋画家

春日部たすく (かすかべ・たすく/1903～1985年)

福島県生れ。1924年川端画学校に学ぶ。29年日本水彩画会会員。30～33年帝展に入選。38年文展で入選。40年小堀進、荒谷直之介らと水彩連盟を創立。風景画を得意とし、鮮やかな色彩、情緒ある画風。43年みつゑ賞。日本山岳画協会会員。日本ガラス絵協会員。東京で没、82歳。水彩画家

春日部洋 (かすかべ・ひろし/1930～1998年)

東京生れ。1949年旧東京高等工芸学校修。独立美術展・水彩連盟展等に出品。55年国立近代美術館主催「日米水彩展」招待出品。63年ル・サロンで受賞。国際形象展に招待出品。64年日動画廊にて個展。70年再渡仏パリに定住。71年サロン・ドートンヌ会員。79年サロン・デ・ボザール会員。81年帰国、松坂屋

(名古屋)、和光(銀座)、大坂梅田近代美術館で個展。
1998年没、68歳。水彩画家

糟野勝美 (かすの・かつみ/1942年～)

京都市生れ。1979年二紀展入選、81年関西二紀展新人賞、83年関西二紀展佳作賞(連続5回)、84年二紀選抜招待出品、87年二紀会同人。88年より名古屋を中心に個展を開催。洋画家

數野繁夫 (かずの・しげお/1940～2013年)

甲府市生れ。甲府第一高等学校を卒業後、1961年東京藝術大学油画科入学、65年卒業制作は東京藝術大学買い上げ、67年同大学院油絵科修了、同大学油絵科副手、助手。1971年渡欧。うねるような線で描写されるかたち、強い色彩のコントラストが80年以降の作品の特徴。89年「立軌会」同人。2001年池田町立美術館主催企画「數野繁夫の軌跡」展を開催。2013年没、73歳。洋画家

糟谷 実 (かすや・みのる/1901～1972年)

長崎県生れ。1922年長崎県師範学校卒。24年東京美術学校図画部師範科入学、26年卒、31年同校油絵研究科修了。27年熊本県第二師範学校教諭。43年東京第二師範学校教授。29年聖徳太子奉讃美術展に入選。30～33、35年帝展に入選。49年東京芸術大学教授。53年創元会会員。55年美術教育学会常任委員として国際美術教育会議に出席。日展に出品。東京で没、70歳。洋画家、美教

片岡銀藏 (かたおか・ぎんぞう/1896～1964年)

岡山県生れ。1919年帝展に入選。1921年東京美術学校西洋画科卒、同校研究科に進む。藤島武二、満谷国四郎に師事。27年渡欧。28、30年帝展で特選。56年光風会会員。日展にも出品続けた。64年没、68歳。洋画家

片岡真太郎 (かたおか・しんたろう/1926～2016年)

1926年生れ。52年関西学院大学経済学部卒。58年一陽展出品、特待賞。59年シュル美術賞展(神奈川県立美術館)出品、佳作賞。65年作家高橋和巳『邪宗門』(朝日ジャーナル連載)の挿絵制作。71年多摩美術大学助教授、教授。74年講談社出版文化賞 さしえ賞。76年立軌会会員。79年サロン・オンフルール「海」展でグランプリ。2002年「ウィーン芸術展」招待出品、金賞。03年兵庫県文化賞。2016年没、90歳。洋画家、挿絵、美教

片岡球子 (かたおか・たまこ/1905～2008年)

札幌市生れ。札幌高等女学校、女子美術専門学校日本画科卒、横浜市立大岡尋常小学校教諭。1930年院展入選。以来、院展を中心に活動を続ける。女子美術大学、愛知県立芸術大学で後進の指導に当

たり、67年サンパウロ・ビエンナーレ展日本代表。66年以来「面構」シリーズの連作。日本画壇を代表する画家の一人として活躍した。86年文化功労者。89年文化勲章。日本画家、美術教育

片小田栄治 (かたおだ・えいじ/1951～1995年)

東京生れ。東京藝術大学絵画科油画専攻卒。同大学院絵画科修了。1982年第46回新制作協会展で新作家賞。83年第47回新制作協会展で新作家賞。88年この頃、新制作協会協友。91年第2回浅井忠記念賞展で優秀賞。第20回現代日本美術展で佳作賞。文化庁主催現代美術選抜展出品。日本国際美術展にて佳作賞。紀伊国屋画廊で個展。無所属。95年没、享年44歳。(佐)洋画家

片多徳郎 (かただ・とくろう/1889～1934年)

大分県生れ。1909年文展に入選。1912年東京美術学校西洋画科卒。17、18年文展で特選、帝展審査員。19年牧野虎雄らと新光洋画会創立会員。明治神宮絵画館壁画「憲法発布観兵式行幸啓図」制作。29年第一美術協会創立、会員。名古屋市で没、44歳。洋画家

片谷暖子 (かたたに・あいこ/1918年～)

横浜生れ。女子美術専門学校西洋画科に学ぶ。福沢一郎に師事し、シュルレアリスムを学ぶ。1948年美術文化協会展に出品、会員。50年女流画家協会会員。52年前衛美術会に出品。シュルレアリスムから幾何学的形態に変化。54年アートクラブ会員。93年シロタ画廊にて美香名で木版画を発表。洋画家、版画

片柳忠男 (かたやなぎ・ただお/1908～1985年)

栃木県生れ。ライオン歯磨宣伝部に勤務、オール女性社社長、宣伝文化研究所長、アルス取締役、大和書店社長、オリオン社社長。浜田増次とともに商業美術運動を始め、戦時中は大東亜宣伝連盟常務理事、海軍嘱託、戦後は東京都民劇場運営委員、日本宣伝研究所長、電通PRセンター取締役。1985年没、77歳。テレビ、ラジオのプロデューサー。宣伝家、プロデューサー、画家、作家。洋画家

片山公一 (かたやま・こういち/1910～1969年)

広島県生れ。1931年独立展に出品。以降同展で入選。31年福山師範学校を退学、上京。34年法政大学を退学、34年独立美術研究所に入る。田中佐一郎、中山巍に師事。48年独立展で独立賞。50年天満屋、福山市民会館で個展。51年独立美術協会会員。60～63年渡欧。東京で没、59、60歳。洋画家

片山利弘 (かたやま・としひろ/1928～2013年)

大阪生れ。1950年代初頭、永井一正、木村恒久、田中一光とデザインの研究会『A クラブ』を作る。50年代後半、亀倉雄策ら主催の『21の会』に参加。日本を代表する亀倉雄策、河野鷹思、早川良雄、杉浦康平、福田繁雄、丹下健三など、多くのデザイナー、建築家らと交流を深める。スイス時代以降、デザインのみならずアート、建築など幅広い分野で活躍。長年のハーバード時代の教え子の多くがアートディレクター、デザイナー、建築家として活躍。米、ボストンで没、84歳。洋画家、デザイナー

堅山南風 (かたやま・なんふう/1887～1980年)

熊本市生れ。24歳上京して歴史画家の高橋広湖に師事。翌年の異画会展 3 等褒状。1913年横山大観の強い推薦で 2 等賞。意見対立から大観が審査員を辞退し日本美術院を再興すると、賛同して24年同人。「大観先生」など肖像画に新境地を開いた。また日展への参加要請を美術院が受諾したことで、46年以降は審査員、参事。一方で日光東照宮など名所名跡の障壁画や天井絵を多く手掛けた。58年日本芸術院会員。63年文化功労者。68年文化勲章。1980年没、93歳。日本画家

片山みやび (かたやま・みやび/1965年～)

兵庫県生れ。1990年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画科修了、現代版画コンクール(大阪府立現代美術センター)・優秀賞。92年エンバ美術コンクール(エンバ中国近代美術館・芦屋)・新人賞、現代日本美術展(東京都美術館、京都市美術館他)・兵庫県立近代美術館賞。93年 TOKYO まちだ国際版画展(町田市立国際版画美術館)・町田市立国際版画美術館賞。94年エンバ美術コンクール(エンバ中国近代美術館・芦屋)・国立国際美術館賞。版画家

片山楊谷 (かたやま・ようこく/1760～1801年)

長崎県生れ。1772年諸国を巡歴して、17歳で鳥取の興禅寺に逗留して絵を描き、若桜藩主・池田定常に絵を気に入られた。92年鳥取藩士で茶道役の片山家に夫婦とも養子。95年円山応挙に弟子入り、友人として迎えた。光格天皇は楊谷を宮中に招き、従五位下の位階を与え楊谷に数十幅の画作を依頼する。楊谷が画を完成させ披露すると、天皇はその出来に満足し褒美として名硯・石王寺硯を与えた。楊谷はこれを愛用し一生肌身離さなかった。1800年但馬の山路寺で数多くの障壁画を手掛け、兵庫県指定文化

財。1801没、42歳。江戸時代中期に活躍した長崎派の絵師

片山芳樹 (かたやま・よしき/1902～1978年)

1902年生れ。1956年日展で会員優賞。60年一水会委員。足立源一郎等と並び称される山岳画家。一水会、日展を中心に活躍した。1978年没、76歳。洋画家

勝川春好 (かつかわ・しゅんこう/1743～1812年)

江戸生れ。勝川春章の門人。姓は清川、名は伝次郎。役者絵、役者の大首絵、相撲絵などを描く。45歳頃中風をわずらったため左手で描き、左筆斎と号する。主要作品『中村仲蔵の石川五右衛門』。1812年没、69歳。江戸時代中・後期の浮世絵師

勝川春章 (かつかわ・しゅんしょう/1726～1792年)

勝川派の祖。姓は藤原、名は正輝、字を千尋、別号に旭朗井・李林・酉爾・六々庵等。宮川春水の門人。鈴木春信らと共に錦絵の発展に尽力し、また一筆斎文調と協力して細判役者絵を創造した。晩年は肉筆美人画を多く手懸ける。適確な描写力と婉麗な作風は一世を風靡した。1792年没、67歳。江戸中期の浮世絵師

香月泰男 (かづき・やすお/1911～1974年)

山口県生れ。1929年上京、川端画学校洋画部に通う。36年東京美術学校西洋画科卒。39年新文展で特選、39年国画奨励賞。40～62年国画会同人。45～47年シベリア抑留。戦後シベリアシリーズを描く。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。68年西日本文化賞。36年～美術教師。69年九州産業大学教授。69年日本芸術大賞。72年東京セントラル美術館で回顧展。山口県で没、62歳。洋画家、美教、立体

葛飾北斎 (かつしか・ほくさい/1760～1849年)

江戸生れ。14～15歳で彫版技術を学ぶ。1778年勝川春章の門人、勝川春朗と称し以降、群馬亭、宗理、可侯、辰政、画狂人、戴斗、卍など 30 を超す号。1807～08年曲亭馬琴「椿説弓張月」86冊挿絵。04～17年「北斎漫画」。23～32年「富嶽三十六景」発表。江戸で没、90歳。浮世絵、江戸時代絵師

葛飾北岱 (かつしか・ほくたい/生没年不詳)

葛飾北斎の門人。森川氏の次男だったという。葛飾の画姓を称した。作画期は享和から天保の頃にかけて。二代雷斗を号するが文化末年頃の作とみられる肉筆画には「辰々子雷斗画」の落款がある。作は読本や狂歌絵本の挿絵、錦絵、肉筆画。狂歌師としても

活躍し、琵琶連の一員として便々館湖鯉鮒選の『袖玉狂歌集』(1806年)刊行、狂歌を発表。江戸時代の浮世絵師

勝田貫一 (かつた・かんいち/1913～1997年)

広島県生まれ。中之島洋画研究所に学ぶ。中村真、山口正城、長谷川三郎の影響を受ける。1938年自由美術展に出品。50年立命館大学哲学科卒。同年モダンアート協会に参加。51年大阪市立美術館にて瑛九と二人展。71年画集「勝田貫一集」刊行。97年没、84歳。洋画家

勝田蕉琴 (かつた・しょうきん/1879～1963年)

福島県生まれ。1900年橋本雅邦の門に入る。05年東京美術学校日本画科選科卒。05～07年農商務省海外実業練習生として凶案研究のためインドに滞在。07年文展に出品。インドや釈迦を主題にした作品を国画玉成会や雅邦門下の二葉会に出品。14年日本美術院の院友。日展・帝展を中心に写実味をかかせた花鳥画で定評を得る。1963年没、84歳。日本画家

勝平得之 (かつひら・とくし/1904～1971年)

秋田県生まれ。1921年独習で木版画を制作、独学で多色摺り木版技術を習得。28年農民美術研究所講習で木村五郎に学ぶ。28年日本創作版画協会展入選。29、30年卓上社版画展、31年～日本版画協会展、31～43年国画会展、34～56年光風会展、31年～帝展・文展に出品。32～60年日本版画協会会員。51年秋田市文化賞、54年秋田魁新聞社文化賞、62年河北文化賞。秋田市で没、66歳。版画家

勝間田武夫 (かつまた・たけお/1895～没年不詳)

静岡県生まれ。1918年東京美術学校図画師範科卒。27年～32年渡仏。29年第10回帝展初入選。以後、11、14、15回展に出品。36年昭和十一年文展出品。38年第2回～4回新文展出品。40年個展(銀座:青樹社)。43年この頃、東京府北多摩郡砧村成城587に居住。44年戦時特別展に無鑑査出品。没年不詳。(佐)洋画家

勝本富士雄 (かつもと・ふじお/1926～1984年)

石川県生まれ。1938年京都市立絵画専門学校入学、須田国太郎に師事、中退。戦後、京都自由美術研究会で学ぶ。1946年自由美術展に出品。50年モダンアート協会創立参加。51年モダンアート展招待出品、会員。アートクラブ会員。53年抽象と幻想展(国立近代美術館主催)招待出品。55年日米抽象美術展(国立近代美術館主催)招待出品。61年第2回パリ国際青年ビエンナーレ展(パリ近代美術館)招待出品。64年第15回朝日秀作美術展招待出品。第4回東京国際版画ビエンナーレ展(国立近代美術)招待出品。1984年没、58歳。洋画家、版画

勝山正則 (かつやま・まさのり/1942年～)

京都生れ。15歳より独学で木版画を始め、以後、京都を中心に作品を発表し続ける。現在は朝日新聞京都版俳句欄にて季節感溢れる挿絵が掲載。日本版画会会員・日本版画会近畿支部顧問・関西版画会会長。版画家、挿絵

桂川 寛 (かつらがわ・ひろし/1924～2011年)

札幌市生れ。1950年多摩美術専門学校中退。49年アヴァンギャルド芸術運動体「世紀」に参加。52年前衛美術会入会。ルポルタージュ的連作制作。58年日本美術会事務局長。60年超現実絵画の展開展(東近美)、前衛美術会が復活。65年不忍画廊で円形タブロオ展。94年アートギャラリー環で個展。2011年熊谷守一美術館で個展。11年没、87歳。洋画家

桂 ゆき (かつら・ゆき/1913～1991年)

東京生れ。アヴァンギャルド洋画研究所に学ぶ。1938年九室会創立会員。46年女流画家協会創立会員。50年二科会会員。渡欧米、アフリカ旅行。現代日本美術展で最優秀賞。山口県立美術館、下関市美術館で回顧展。東京で没、77歳。(出典 わ眼)洋画家

加藤アキラ (かとう・あきら/1937～2012年)

高崎市生れ。1965年頃に、前衛美術集団「群馬NOMOグループ」に参加。1966年「第7回現代日本美術展」入選(東京都美術館)、同年シュル賞佳作入賞(白木屋、日本橋)、68年「第8回現代日本美術展」入選(東京都美術館)、69年「国際青年美術家展」入選(西武百貨店、池袋)、同年「第9回現代日本美術展」入選(東京都美術館)、同年「現代美術の動向」展(京都国立近代美術館)、同年「ジャパン・アート・フェスティバル」優秀賞(東京国立近代美術館)。93年に「現代美術への招待—加藤アキラ・金井訓志展」(高崎市美術館)。車の整備工だった加藤は身近な素材であった部品を磨くワイヤーブラシを選び、擦る行為によって残る筋状痕に着目し、「REPORT」シリーズを制作した。彫刻、インスタ、パフォ

加藤昭男 (かとう・あきお/1927～2015年)

愛知県生れ。東京芸大卒。1952年より新制作協会展に出品、58年会員。74年長野市野外彫刻賞、中原悌二郎賞優秀賞。82年高村光太郎大賞展優秀賞。平成6年中原悌二郎賞。同年武蔵野美大教授。2002年円空大賞。2015年没、87歳。彫刻家、美教

加藤 陽 (かとう・あきら/1907～1989年)

東京生れ。麻布中学校卒。光彩会洋画研究所、本

郷洋画研究所、「一九三〇年協会」洋画研究所に学ぶ。31年～独立展に出品。40年独立賞。41年同会会友。48年独立美術協会会員。東京で没、82、83歳。**洋画家**

加藤 泉 (かとう・いずみ/1969年～)

島根県生れ。1992年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。2002年より伊、独の美術展に作品を出展。04年頃立体作品を発表。05年米、NYジャパン・ソサエティー・ギャラリー美術展「リトルボーイ:爆発する日本のポップカルチャー」に立体作品と絵画作品を出展。07年ヴェネツィア・ビエンナーレ国際企画展に招待、絵画作品出展。ハラミュージアムアークで個展。**洋画家、彫刻家**

加藤栄三 (かとう・えいぞう/1906～1972年)

岐阜市生れ。弟は日本画家加藤東一。1931年東京美術学校卒、結城素明に師事。36年文展で文部大臣賞。59年日展出品作で日本芸術院賞。69年日展理事。1972年没、65歳。**日本画家**

加藤一豊 (かとう・かずとよ/1910～2000年)

小樽市生れ。庁立小樽中学(現小樽潮陵高校)頃、独学で油絵を始めた。美術学校への進学を希望しながら大学の法学部へ進学。日展入選、一水会入選。1970年代画業に復帰。72年訪欧、群像表現が個性。一水会委員。2000年没、90歳。市立小樽美術館作品収蔵。小樽市立美術館で2014年加藤一豊・群像表現への招待展。**洋画家**

加藤清美 (かとう・きよみ/1931年～)

東京生れ。1958年日本大学演劇科中退。駒井哲郎に師事。59年春陽展、60年春陽会賞、77年退会。66年養清堂画廊「銅版画展」。76年横浜市民ギャラリーで「加藤清美展」。「銅版画展」(大阪フォルム画廊、69～75年)、「油彩展」(同画廊、77～85年)、「銅版画展」(ギャラリーユマニテ、87～93年)。86年日本版画協会理事。**版画家**

加藤金一郎 (かとう・きんいちろう/1921～1997年)

名古屋市生れ。1935年尋常小学校卒、40年鬼頭鍋三郎に師事、緑ヶ岡洋画研究所に通う。48年新制作協会展入選し、猪熊弦一郎に師事、52年新作家賞、同会会員。65年欧米巡遊し、70年仏、伊、西へ旅行、71年西を中心に訪欧。77年「メキシコ紀行展」(名古屋日動画廊)、77年日本ガラス絵協会会員。88年松坂屋本店で「画業45年記念展」、97年松坂屋本店で「加藤金一郎新作展」。名古屋市で没、75歳。**洋画家、ガラス絵**

加藤肇司 (かとう・けいじ/1947年～)

1947年生れ。70年制作・発表活動を始める。2020年つくば美術館の第1展示室で、「加藤肇司展 [絵画]」。茨城県在住の現代美術作家・加藤肇司氏による展覧会で、新聞紙やアクリル絵具を用いたコラージュ作品など。**現代美術作家、洋画家**

加藤頌清 (かとう・けんせい/1894～1966年)

岐阜県生れ。1920年東京美術学校彫刻科卒。28、29帝展特選。帝展、新文展、日展で審査員。52年芸術院賞。62年芸術院会員。日展理事。日本彫塑会会長。神奈川県で没、71歳。**彫刻家**

加藤源之助 (かとう・げんのすけ/1880～1946年)

京都生れ。1901年伊藤快彦の私塾鐘美会で洋画を学ぶ。02年浅井忠に学ぶ。03年聖護院洋画研究所で学ぶ。06年関西美術院に入る。04、07年関西美術会競技会水彩画部門で一等賞。09年同会で三等賞。10年同会で二等賞。16年浅井忠同人会設立。46年没、66歳。**水彩画家、洋画家**

加藤孝一 (かとう・こういち/1908～1988年)

愛知県生れ。瀬戸窯業学校を卒。1938年日本水彩画会入選。19年新制作派展入選。46年北川民次に師事、46年二科展入選、57年会友、70年会員、79年会員努力賞、84年評議員。遠近、大小関係を自在に変化させ幾何学的形体に簡略化したモチーフにより明快でユーモラスな作風を示した。1988年没、80歳。**洋画家**

加藤貞雄 (かとう・さだお/1932～2014年)

千葉県生れ。1955年早稲田大学第一法学部卒。毎日新聞社大阪本社に入社。65年毎日新聞社東京本社学芸部に異動。主に70年代、80年代の公募・団体系の展覧会評を担当。78年から学芸部編集委員、80年から学芸部長、82年から学芸部編集委員兼論説委員。87年退職。87年目黒区美術館長に就任。95～2007年茨城県近代美術館長。94年、96年、98年には文化功労者選考審査委員、93年、94年、97年、98年には芸術選奨選考審査委員、91年、93年には安井賞選考委員。2014年没、82歳、**美術館長**

加藤晨明 (かとう・しんめい/1910～1998年)

愛知県生れ。中村岳陵に師事。1935年院展入選。38年日本美術院賞。戦後は日展に出品、47年特選。74年日展評議員。89年文部大臣賞。1998年没、88歳。**日本画家**

加藤静児 (かとう・せいじ/1887～1942年)

愛知県生れ。1907年文展初入選、以降官展連続出品。10年東京美術学校西洋画科卒。12年文展二等賞。光風会展出品、以降連続出品。18年「愛知社」を結成。20～22年渡欧。23年光風会会員。30年帝展無鑑査。36年文部省買上。著書「風景画の新研究」アトリエ社。東京で没、55歳。洋画家

加藤雪窓 (かとう・せつそう/1971～1918年)

秋田県生れ。橋本雅邦に入門して技を磨き、1889年酒田に戻った。禅的作品が多く描かれ黄檗宗の高僧・紫石禅師とも交際し、秀作「擔薪読書図」と「釣艇夕照図」は宮内省に買い上げされた。酒田の漢学者・須田古龍とも親交があって詩文をたしなみ、1918年没、47歳。日本画家

加藤大道 (かとう・だいでう/1896～1965年)

安曇野出身。木版画家。1965年没、69歳。松本市安曇資料館では加藤大道の木版画、上高地や槍・穂高連峰をはじめ、安曇の風景や、子どもを題材にした作品が多くあり、大道の代表作を常設展示。版画家

加藤 正 (かとう・ただし/1926～2016年)

宮城県生れ。1950年東京藝術大学油絵科卒。52年瑛九等とデモクラート美術協会設立。機関誌「DE MOKRATO」編集発行。73、74年渡仏。2001年宮崎で「フラクタス」を結成。東京で没、90歳。(出典わ眼)洋画家、デモクラート

加藤太郎 (かとう・たろう/1915～1945年)

神戸市生れ。1932年東京府立工芸学校在学中、白日会展に油彩画入選。同年同校金工科卒。同舟舎絵画研究所に学び、杉全直を知る。33年東京美術学校油画科予科入学。36年平塚運一に木版画の指導を受ける。37年グループ「貌」を結成。38年東京美術学校油絵科卒。日本版画協会会員。版画集、木版画集を発刊。東京で没、30歳。洋画家、版画家

加藤俊雄 (かとう・としお/1945～2014年)

新潟県生れ。1970年東京藝術大学大学院油画科修了。93年東京セントラル美術館‘93油画大賞展で大賞。第4回雪梁舎展大賞。西独で3回個展開催。1989年昭和会展入選。2014年没、69歳。洋画家

加藤敏子 (かとう・としこ/1907～1988年)

大阪生れ。1925年大手前高等女学校国文科卒。鍋井克之に師事し洋画を学ぶ。29年二科展に出品。38年特待、会友推薦。華やかなモダニズムで描く。47年二紀会結成に参加、同人。54年同人賞受賞。56年二紀会委員。大阪で没、81歳。洋画家

加藤成之 (かとう・なりゆき/1893～1969年)

東京生れ。1917年学習院高等科卒、20年東京大学文学部美学美術史科卒、21年大学院を修了。21年東京美術学校講師。22～25年文部省より依頼されてヨーロッパにおける美学教育を調査渡欧。帰国後は、28年私立東京高等音楽院、30年私立日本音楽学校講師、31年女子美術専門学校講師。34年貴族院議員。35年東北大学法文学部講師、40年女子美術専門学校副校長、49年女子美術大学長。46年以降講師をつとめていた東京音楽学校校長。52年以後は東京芸術大学音楽部長を。57年女子美術大学理事長兼学長。66年勲二等瑞宝章。文化財保護審議会専門委員。東京で没、75歳。洋画家、美教、女子美術大学長、女子美術大学長

加藤 一 (かとう・はじめ/1928～1995年)

愛知県生れ。1947年愛知第二師範学校本科入学。49年同校中退、東京教育大学教育学部芸術学科入学。50年自由美術家協会入選。56年会員、64年退会。53年東京教育大学教育学部芸術学科構成科卒。59年個展(いづみぎやらりい、村松画廊、地球堂ギャラリー、画廊アートフロア)。64年主体美術協会結成に参加、会員。65年～主体美術展出品。83年開館記念-郷土作家百人展(刈谷市美術館)。現代美術選抜展。86年スペイン・グラダナに渡り、93年までスペインに滞在。1995年没、67歳。洋画家、美教

加藤八洲 (かとう・はつしゅう/1907～1997年)

東京生れ。京都工芸繊維大学でデザインを学ぶ。平塚運一に出会い、木版画家として出発。柏に居住。東葛船橋地域で版画指導。北海道やヨーロッパ各地を遍歴し作品にした創作版画家。1997年没、90歳。版画家

加藤まさを (かとう・まさお/1897～1976年)

静岡県生れ。立教大学英文科卒。詩画集『カナリヤの墓』(1920)出版。少女雑誌、婦人雑誌に挿絵を描く。童謡、叙情詩集『合歓の揺籃』(1921)、『まさを抒情詩集』(1926)、小説・少女小説集に『遠い薔薇(ばら)』(1926)、『消えゆく虹(にじ)』(1929)、彼の作詩になる童謡『月の沙漠(さばく)』(佐々木すぐる作曲)は有名。1976年没、79歳。挿絵画家、童謡詩人、小説家

加藤水城 (かとう・みずき/1910～1991年)

東京生れ。1935年帝国美術学校卒。北アルプス上高地に籠り、10年近く上高地を取り巻く穂高連峰、焼岳、霞沢などの四季の移り変わりを描き「上高地画家」と親しまれた。安井曾太郎に師事。安井門下生の会「連袖会」会員。足立源一郎、中村善策、石井鶴三ら

に請われ日本山岳画協会員。1991年没、81歳。松本市、市教育委員会が「山と信州を愛した画家・加藤水城油彩展」開催。洋画家

門坂 流 (かどさか・りゅう/1948～2014年)

京都市生れ。1968年東京藝術大学油絵科入学、雑誌『ワンダーランド』挿画デビュー。85年エングレービング技法研究。87年京橋 INAX ギャラリーで個展。以後、ガレリア・グラフィカ、不忍画廊、青木画廊個展。98年朝日新聞朝刊小説、高樹のぶ子「百年の預言」挿絵。ルーマニア、オーストリアを取材し、リグラフ、ペン画、水彩、あるいは銅版画で発表。「エングレービングの第一人者」。作品集『水の光景 ビュランによる色彩銅版画集』(ぎょうせい、1990年)、『門坂流作品集 百年の預言』(朝日新聞社、2000年)、『Ryu KADOSAKA DrawingWorks』(不忍画廊、2006年)、『Engraving』(不忍画廊、2013年)。東京で没、65歳。洋画家、挿絵、版画、水彩

角 卓 (かど・たく?/1928年～1999年)

高松市生れ。1950年光風会展入選、57年光風会特別賞、58年光風会会員、70年光風会評議員推挙、78年退会。51年日展入選、57年日展特選、岡田賞、67年日展無鑑査、79年審査員、80年会員、92年評議員。78年日洋展運営委員審査員。87年兵庫県文化賞。88年神戸市文化賞。1999年没、71歳。洋画家

角野伴治郎 (かどの・ばんじろう/1889～1966年)

神戸市生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。27～30年渡欧。31年光風会会員。50年神戸大学工学部講師。神戸市で没、76歳。洋画家

角 浩 (かど・ひろし/1909～1994年)

日立市生れ(広島県生れ説も)。同舟舎に通う。1931年光風会展に入選。32年独立展に入選。33年東京美術学校西洋画科卒。37～39年渡仏。サロン・ドートヌヌ入選。サロン・チュイレリー無鑑査。50年新制作展で新作家賞。53年新制作派協会会員。79年日伯国際展のためブラジルを訪れ、フランシスコ・コマンドール勲章受章。80年渋谷東急で個展開催。83年広島県立美術館で個展。トキワ松学園女子短大美術学科教授。東京で没、84歳。洋画家、美教

鹿取武司 (かとり・たけし/1949年～)

東京生れ。1978年東京学芸大学大学院修了。81年個展(ギャラリーミキモト、83、85年)。85年ロックフォード国際版画ビエンナーレ・最高賞。リュブリアナ国際版画ビエンナーレ、86年クラコウ国際版画ビエ

ンナーレ、91年個展(アネックス日動画廊、海画廊、他)に出品。2001年CWAJ現代版画展(東京アメリカンクラブ・神谷町)出品。版画家

門脇俊一 (かどわき・しゅんいち/1913～2006年)

香川県生れ。1928年独学で絵を描く。33年海軍兵として軍艦に乗りヨーロッパ美術に接する。39、40、41年海洋美術展入選、50年銀座資生堂画廊にて油彩個展開催。61年阪急百貨店洋画部で版画展開催。64年日本橋三越で木版画展。67年門脇木版美術館開館。80年「現代の絵師・門脇俊一」放映(NHK)。95年南フランス・ルルド「国際ビエンナーレ」に特別招待、ルルド国際ジュマイユ宗教絵画ビエンナーレ賞。2000年香川県文化会館で「米寿記念門脇俊一展」開催。2002年画集「門脇俊一草花百点」出版。香川県文化功労者。2006年没、93歳。洋画家、版画家

金井訓志 (かない・さとし/1951年～)

群馬県生れ。1970～79太平洋美術学校。86年独立展で安田火災美術財団奨励賞、88年奨励賞、991年独立賞、92年独立展記念賞・会員推挙。93年加藤アキラ・金井訓志展(高崎市美術館)、95年度文化庁買上優秀美術作品。95年油絵大賞展優秀賞。2002文化庁在外研修員伊留学。ギャラリー椿(東京)個展。洋画家

金井文彦 (かない・ふみひこ/1886～1962年)

東京生れ。東洋大学文学科卒。川端画学校に学び、長田雲堂に師事、南宗水墨画制作。1919年帝展入選。24年牧野虎雄、田辺至、斎藤与里ら槐樹社結成、槐樹社発行の美術雑誌「美術新論」編集主任を約7年間担当。槐樹社は31年解散、34年金沢重治、大久保作次郎らと白朝会創立。独自の制作、48年旺玄社に迎えられ同展に作品を発表。東京で没、76歳。洋画家、墨画

金沢一彦 (かなざわ・かずひこ/1954年～)

小樽市生れ。1973年北海道教育大学特美入学。85年道展会員推挙。90年北海道女子短期大非常勤講師。91～96年春陽会会員。日本美術家連盟会員。97年日本版画協会会員。98年あおもり版画大賞展大賞受賞。版画家

金沢重治 (かなざわ・しげはる/1887～1960年)

東京生れ。1912年東京美術学校西洋画科選科卒。14年文展で入選。26、27年帝展で特選、無鑑査。24年牧野虎雄らと槐樹社を創立。40年創元会創立に参加。戦後は日展に依嘱出品。日展会員。鎌倉市で没、73歳。洋画家

金沢秀之助 (かなざわ・しゅうのすけ/1895～1967年)

秋田県生れ。1920年東京美術学校西洋画科卒。20～24年パリのアカデミー・ランソンで学ぶ。52年日展特選、58年日展会員、無鑑査、委嘱、審査員、評議員。光風会に参加し、会員、審査員、理事、評議員。57年日本大学講師時に抗血栓。東京で没、72歳。
洋画家

金澤 毅 (かなざわ・たけし/1935年～)

満州生れ。上智大学外国語学部卒。外務省在外公館(ウルグアイ)勤務の後、(社)国際芸術見本市協会にて国際文化交流に10年間関わり、以後原美術館の設立・運営に17年間、成安造形大学教授、現代美術、ラテンアメリカ美術。名誉教授。**評論家、美教**

金重素山 (かなしげ・そざん/1909～1995年)

岡山県生れ。備前焼窯元金重煤陽(慎三郎)は父。兄の金重陶陽に陶芸を学び、1927年より陶陽の助手。59年京都府綾部の鶴山窯に築窯して独立。64年岡山市に登窯を築窯した。65年電気窯による「緋襷」制作を創案。同83年岡山県指定重要無形文化財保持者。90年伝統文化保存振興貢献で文化庁長官表彰岡山県で没、86歳。**備前焼作家**

金重陶陽 (かねしげ・とうよう/1896～1967年)

岡山県生れ。父金重煤陽にまなび、備前焼の再興につとめ、古備前の茶器を再現した。1949年備前窯芸会を結成、55年日本工芸会の創立に参加。今日の備前焼隆盛の基礎をきづき、56年備前焼で人間国宝。1967年没、71歳。**陶芸家**

金谷朱尾子 (かなたに・におこ/1953～2004年)

岡山市まれ。1972年京都市立芸術大学入学。卒業後は岡山へ戻る、日展入選。特別の師を持たない朱尾子は周囲の勧めもあり、日展の重鎮・池田遙邨の画塾「青塔会」に入る。28歳日展特選。1982年岡山大学教育学部の非常勤講師。日展や女流画家展に出品。青塔社を退会。女流画家としての地位を確立。的確な人物デッサンから描かれる女性像は甘美な妖しさをともなう。昭和60年代に入ると描かれた対象の強さが強調され、画面に一層の迫力をもたらされる。1997年没、51歳。**日本画家、美教**

金丸悠児 (かなまる・ゆうじ/1978年～)

神奈川県生れ。2001年東京藝術大学デザイン科卒、03年同大学大学院修了。02年アーティスト集団「C-DEPOT」を設立、代表。EXHIBITION C-DEPOT

2003(以降毎年)。04年新生展で新生賞。10年「C-DEPOT 2010 旅」(Shun Art Gallery/上海)。**洋画家**

要 樹平 (かなめ・じゅへい/1906～1994年)

大阪生れ。1924年京都市立美術工芸学校卒。27年京都市立絵画専門学校卒、同研究科に進む。25、26、28年国展に出品。26、27、29、30、33、34年帝展入選。28年新樹社を結成。36年「柏舟社」42年「三三会」結成。94年没、87歳。**日本画家、水墨画**

金森宰司 (かなもり・さいじ/1949年～)

長野県生れ。1975年東京芸術大学大学院、大橋賞。82年新制作協会展で新作家賞。84年油絵大賞展で佳作賞、昭和会展で優秀賞、具象現代展で大賞、86年新制作協会展で新作家賞、87年会員。89年文化庁在外研究員として仏滞。90年パリ日動画廊で個展開催('93,'96)。98年熊谷守一大賞展 大賞。2000年イタリア・The Bologna Ragazzi Award大賞。**洋画家**

金守世士夫 (かなもり・よしお/1922～2016年)

富山市生れ。永瀬義郎「版画を作る人へ」により木版画制作を始める。1947年棟方志功を訪ね木版の道に進む。47年国展に入選。48～52年志功と共に版画誌『越中版画』を刊行。『日本版画』に参加。『富山版画』を推進。国展、日本版画協会展、国際版画展に出品。独特の自摺り技法を確立、幻想風景を表出。2016年没、94歳。**版画家**

金森良泰 (かなもり・りょうたい/1946年～)

奈良市生れ。1971年東京芸術大学油画科卒業(大橋賞)、73年同大学大学院壁画科修了、74年同大学絵画研究室修了。81年安井賞展出品(以降'83・'91・'94年)。82年明日への具象展出品(同'83年)。国際形象展出品(以降'84・'86年)。84年日本青年画家展出品('87年 優秀賞)。88年奈良シルクロード博協賛自選展出品(奈良文化会館)。88～2009年フレスコ画壁画制作。現在 独立美術協会会員 千葉大学教授。**洋画家、美教**

金山 明 (かなやま・あきら/1924～2006年)

兵庫県生れ。1947年多摩美術大学中退、大阪市立美術研究所に学ぶ。52年同研究所で村上三郎、白髪一雄等と0会結成。妻となる田中敦子を知る。54年0会展を大阪そごう百貨店で開催。54年具体美術展を東京で開催、出品(会場、小原会館)。65年具体美術展まで毎回出品。68～69年米、加を巡回した「エア・アート」展出品。81年「現代美術の動向 I 1950年代 その暗黒と光芒」展(東京都美術館)、86年の

「前衛芸術の日本 1910～1970」展(パリ、ポンピドーセンター)、90年の「具体—未完の前衛集団」展(渋谷区立松涛美術館)。93年「金山明 第1回個展。三重県で没、82歳。没後の2007年豊田市美術館にて「金山明」展が開催。現代美術、具体、空間、環境

金山平三 (かなやま・へいぞう/1883～1964年)

神戸市生れ。1909年東京美術学校西洋画科卒。12～15年渡欧。16年文展に初入選、特選。17年文展で特選。44年帝室技芸員。57年日本芸術院会員。東京で没、80歳。(出典 わ眼) 洋画家

金山平三II (かなやま・へいぞう/1883～1964年)

神戸市生れ。東京美術学校西洋画科を首席で卒業。1912～15年渡欧。16、17年文展で特選。帝展審査員。44年帝室技芸員。57年日本芸術院会員。日展に出品。風景画は一貫したテーマ、マチエールを探索する。東京で没。80歳。(出典 わ眼) 洋画家

金山康喜 (かなやま・やすき/1926～1959年)

大阪生れ。1939年今宮中学校卒。富山高等学校(旧制)で学ぶ。45年東京帝国大学、同大学院で数理経済学を学ぶ。猪熊弦一郎主催の田園調布純粋美術研究所で絵画を学ぶ。51～58年渡仏(田淵安一と渡航)、52年ソルボンヌ大学入学、同年サロン・ドートンヌ展入選、53年フランス政府買上。野見山暁治、菅井汲らと交友。50年新制作展に入選、新作家賞。58年銀座・文藝春秋画廊で個展。59年没、33歳。洋画家

矩 幸成 (かね・こうせい/1903～1980年)

金沢市生れ。1928年東京美術学校彫刻科卒、同校研究科修了。26年帝展入選。28年より北村西望に師事。36年文展招待展以後無鑑査出品し、61年日展審査員、63年会員、68年評議員。69年改組日展内閣総理大臣賞。51年金沢美術工芸大学教授。61年金沢市文化賞、北国新聞社賞。69年退官後名誉教授。58年日彫会北陸支部結成以来部長。72年日本彫塑会監事。1980年没、77歳。彫刻家、美教

金子國義 (かねこ・くによし/1936～2015年)

埼玉県生れ。1959年日本大学芸術学部デザイン科卒。舞台美術家・長坂本弘に師事。64年独学で油彩を描く。65年渋澤龍彦に賞讃され、認められる。66年挿絵を制作。67年青木画廊で個展開催。無邪気さとエロチズム漂う画風。2015年没、78歳。洋画家、挿絵

金子九平次 (かねこ・くへいじ/1885～1968年)

東京生れ。岡山県金光中学校卒、父金子吉蔵、長谷川栄作に彫刻を学ぶ。1921年帝展入選。22～26年渡欧、グランド・シヨミエールでブールデルに師事、サロン・ドートンヌ、サロン・デ・チュイレリー、サロン・ナショナル等に出品。26～28年国画創作協会会員、以降～32年まで国画会会員。37年新古典美術協会を創立主宰。63年日本橋丸善で個展。1968年没、73歳。彫刻家

金子堅太郎 (かねこ・けんたろう/1853～1942年)

福岡県生れ。1870年東都に遊学し、71年選ばれて渡米、ハーバード大学に法律を学び、帰朝後東京大学講師、元老院権大書記官、84年太政官権大書記を兼ね、憲法草案作成に参与し、総理大臣秘書官、枢密院、貴族院の書記官長、農商務次官等を経て、98年農商務大臣、1900年司法大臣に歴任した。後枢密顧問官となり、19年以降は維新資料編纂会総裁として尽瘁した。美術に理解を有し、01年日本美術協会副会頭に就任、19年同会々頭。従1位宣下、並に大勲位菊花大授章を賜った。美術関係者

金子周次 (かねこ・しゅうじ/1909～1977年)

銚子市生れ。1957年一線美術展入選。版画家・船崎光治郎主宰の「版画を創る会」会員。64年日本版画院展新人賞。大調和展に出品。生前の個展は一度だけであった。77年没。68歳。97年、松山庭園美術館で遺作展。2017年千葉県立美術館で個展。(出典 わ眼) 版画家

金子徳衛 (かねこ・とくえ/1914～1998年)

埼玉県生れ。浦和画家の一人。兄は元蕨市市長の金子吉衛。1930年浦和中学校卒、40年東京美術学校油画科卒、寺内萬治郎に師事。47年日展特選。61年滞欧。ニコラ・ド・スタールに大きく影響を受け、以後心象風景画と表現されるようなカオスな作風へと移行。1998年没、84歳。洋画家

金子 保 (かねこ・たもつ/1891～1981年)

新潟県生れ。1915年東京美術学校西洋画科卒、17年同研究科を修了。神奈川県藤沢中学の図画教師。19年太平洋画会会員。帝展、新文展に入選。39年新文展無鑑査。旺玄社に所属、委員。55年新世紀美術協会創立に参加、同会委員。太平洋美術学校教授。日本山岳画協会名誉会員。神奈川県で没、90歳。洋画家、水彩画、美教

金子博信 (かねこ・ひろのぶ/1898～1988年)

福岡県生れ。県立中学明善校を経て1924年東京美術学校西洋画科卒。28年第二科展出品。36年一水会創立後同会に所属し、41年一水会賞、のち会員、

常任委員。新文展無鑑査展出品。戦後も一水会に制作発表を行う。東京で没、90歳。洋画家

金子光晴 (かねこ・みつはる/1895～1975年)

愛知県生まれ。早大、東京美術学校、慶大いずれも中退。1919年初の詩集「赤土の家」を出版後、渡欧。帰国後「こがね虫」を刊行。37年日本の現実を風刺した「鮫(さめ)」を発表。戦後、反戦詩集「落下傘」「蛾(が)」などを刊行。54年「人間の悲劇」で読売文学賞。森三千代の夫。東京で没、79歳。詩人、画家

兼城賢章 (かねしろ・けんしょう/1907～1975年)

沖縄県生まれ。1933年東京美術学校卒。34年南風原朝光らと「沖縄美術協会展」開催。37年北海道町立網走中学校教諭。52年創元会に出品、54年一般賞、新準会員、56年会員。71年賢明女学院短期大学講師。90年回顧展「童心とロマンを求め続けて」(兵庫県姫路市・ヤマトヤシキ 8F 催事場)。1975年没、68歳。洋画家

金田辰弘 (かねだ・たつひろ/1916～1996年)

大阪生まれ。1931年大阪市立実業学校図案科を中退。関西美術院で洋画を学ぶ。46年二紀展入選、同人。49年二紀賞。54年二紀会委員。58年シェル美術展で佳作賞。68年京都精華大学教授。71年二紀展で文部大臣賞。72年二紀会理事。96年没、80歳。洋画家、美教

金網照夫 (かねつな・てるお/1945年～)

木更津市生まれ。1999年一陽展特待賞。2000年千葉一陽展一陽賞、07年一陽会会員。一陽会会員。千葉県美術界会員委嘱。2016年木更津わたくし美術館で個展。洋画家

兼平英示 (かねひら・えいじ?/1898～1946年)

神奈川県生まれ。小樽に移住。16歳の時に日本水彩画会小樽支部研究科に入り、加藤悦郎らとともに平澤大樟に指導を受けた。1915年日本水彩画会展入選。17年兄三浦鮮治とともに小樽洋画研究所を設立。38年児童画塾を開く。以後闘病生活が続いた。1946年没、48歳。洋画家、水彩

金光松美 (かねみつ・かつみ/1922～1992年)

米、ユタ州生まれ。1995年帰国、旧制中学校卒業後、1940年再渡米。NYのアート・ステューデントズ・リーグで国吉康雄らに学び、レジエに師事。戦後、墨絵と抽象画を融合した画風で1950年代抽象表現主義の旗手、NYで活躍。50～60年代ジャクソン・ポロックやデ・クーニングらと交友。62年ニューヨーク近代美

術館の「十四人のアメリカ人」展の一人として出品。1960年代訪欧、巡遊。65年ロスに移住。67年国際青年美術家展で日本文化フォーラム賞。83年までカリフォルニア州立大学バークレー校で教えた。米ロスで没、69歳。洋画家、水墨、版画、美教

兼行武四郎 (かねゆき・たけしろう/1903～1996年)

山口県生まれ。1923年朝鮮美術展 3 等賞。28年東京美術学校図画師範科卒後、兵庫県御影師範学校教諭。神戸大学教育学部、助教授、教授。31年頃銅版画、日本エッチング展出品。47年日展入選。56年日展以降、光風会展に出品、56年会友、58年会員。86年兵庫県文化賞。1996年没、93歳。水彩画、美教、版画

狩野興以 (かのう・こうい/生誕年不詳～1636年)

栃木県生まれ。のち刑部少輔と称する。狩野光信の高弟。紀州の徳川家に仕え、のち法橋に叙せられる。牧溪や雪舟等の水墨画の古典的画法を研究し、人物・山水、草花等を能くした。光信の弟孝信の三子探幽・尚信・安信の指南を託され、その功を以て狩野の名を許された。1636年没。江戸前期の狩野派の絵師

狩野山雪 (かのう・さんせつ/1589、90～1651年)

肥前生まれ。狩野山楽の門人で女婿。宋の牧溪等を研究し、山楽よりも装飾的だといわれる。京都の狩野派の中心的人物で山水・人物・花鳥獸を能くする。法橋に叙せられ、1651年没、63歳。江戸前期の画家

狩野山楽 (かのう・さんらく/1559～1635年)

近江生。豊臣秀吉の近侍木村永光の子。姓は木村、名は光頼。狩野永徳に学び養子となる。二代將軍徳川秀忠の用命を受けて画壇の重鎮として活躍した。筆法は強く装飾的で人物・鳥獸の動的表現に秀でる。1672年没、77歳。江戸前期の狩野派の画家

狩野宗秀・元秀 (かのう・そうしゅう、もとひで/1551～1601年)

1551年生れ。狩野松栄の次男、狩野永徳の弟。1572年永徳と共に豊後国の大友宗麟に招かれ障壁画を描く。82年羽柴秀吉が、姫路城 殿舎の彩色のために、宗秀を播磨国に招いている。90年天正度京都御所造営では永徳を補佐し障壁画製作に参加。94年頃法眼。99年桂宮家新御殿造営にあたり甥の光信を補佐し障壁画製作に参加。1601年没、50歳。安土桃山時代の狩野派の絵師

狩野探淵 (かのう・たんえん/1805～1853年)

狩野探信守道の長男。1836年父の跡をうけて鍛冶

橋狩野家をつぐ。江戸城本丸・西の丸の障壁画の制作などに参加。弘化年法眼となった。1853年没、49歳。江戸時代後期の画家

狩野探幽 (かのう・たんゆう/1602～1674年)

京都生れ。元和3年(1617)徳川幕府の御用絵師となり、その4年後には、江戸城鍛冶橋門外に屋敷を拝領、禄高200石を受け、鍛冶橋狩野家を興した。また宗家の貞信没後は名実ともに狩野家の中心的存在となり、江戸狩野の基礎を確立した。幕府の命を受け、江戸城改築のたびに障壁画を担当。また寛永3年(1626)の京都二条城御幸殿の障壁画制作に際しては、一門を率いて制作にあたる。同12年(1635)には34歳で入道となり、探幽と号し、後に法眼、宮内卿法印に叙せられた。1674年没、72歳。徳川幕府の御用絵師

狩野探幽 II (かのう・たんゆう/1602～1674年)

京都の人。名は守信。幼名、采女(うねめ)。孝信の長男。永徳の孫。江戸に出て幕府御用絵師となり、桃山時代の豪壮豪麗な様式に対して、瀟洒(しょうしゃ)、淡白な画風を特色とし、江戸狩野派繁栄の基礎を築いた。江戸初期の画家。鍛冶橋狩野派の祖。1674年没、72歳。江戸時代の絵師

狩野常信 (かのう・つねのぶ/1636～1713年)

父である木挽町狩野家の祖尚信を継いで第二代となる。父の歿後、叔父探幽の薫陶を受け、幕府の奥絵師となる。のち法印に叙せられた。また中院通茂に和歌を学び能くする。狩野派の四大家に一人。1713年没、78歳。江戸前・中期の狩野派の画家

狩野洞春美信 (かのう・どうしゅん・よしのぶ/1747～1797年)

1747年生れ。狩野探幽や雪舟の画風を学んで一家を成し、駿河台初代洞雲益信に比し名手とされ85年式部卿法眼に叙せられた。64年幕府より朝鮮国王に贈る屏風や東叡山の客殿、壁、天井などのほか浅草観音に板額「天女奏楽図」を描いた。97年没、51歳。江戸絵師

狩野尚信 (かのう・なおのぶ/1607～1650年)

京都生れ。木挽町狩野家初代。孝信の次男、探幽の弟、安信の兄。初名は一信、のち家信、通称を主馬。薙髪して自適齋と号し、幕府の奥絵師となり、多くの障壁画を描く。山水画に優れ、情緒ある作品を残した。1650年没、43歳。江戸前期の画家

狩野寿一 (かのう・ひさいち/1910～2003年)

千葉県生れ。1930年安井曾太郎に師事。37年一水会展出品、47年会員、53、58年一水会優賞、73

年退会。1956年渡仏。49年丸善にて初個展開催。58年三越にて滞欧油彩画展を開催。松下幸之助がコレクション。2003年没、93歳。洋画家

狩野芳崖 (かのう・ほうがい/1828～1888年)

山口県生れ。狩野雅信に学び、狩野派の伝統を受け継ぎ、明治初期、フェノロサに見いだされ、日本画革新運動の強力な推進者となった。東京美術学校創立に尽力。絶筆「悲母観音」は近代日本画の代表作。東京で没、60歳。日本画家、美教

狩野正信 (かのう・まさのぶ/1434～1530年)

正信は1463年には京で絵師として活動、幕府御用絵師。幕府御用絵師の小栗宗湛に師事。63年相国寺雲頂院の昭堂に十六羅漢を描いたという記事である。83年足利義政の造営した東山山荘の障壁画を担当。96年日野富子の肖像を描いた(『実隆公記』)。狩野派は、室町時代から明治に至るまで400年にわたって命脈を保ち、常に日本の絵画界の中心にあった画派であった。この狩野派の初代とされるのが、室町幕府に御用絵師として仕えた狩野正信である。1530年没、97歳。室町時代の絵師、狩野派の祖

狩野光信 (かのう・みつのぶ/1561/65?～1608年)

京都生れ。狩野永徳の長男。織田、豊臣、徳川の3氏に仕え、安土城、肥前名護屋城、二条城、伏見城などの城郭や寺院、禁裏の障壁画を制作。父永徳に比し繊細、優美な画風で、宗秀、山楽らとともに永徳没後の桃山画壇を支えた。遺作は園城寺勸学院「四季花木図」襖絵(1600)、法然院「花鳥図」襖絵、相国寺法堂「雲竜図」天井画(05)、高台寺霊屋「浜松図」(05)など。三重県で没、47～43歳。桃山時代の画家

加納光於 (かのう・みつお/1933年～)

東京生れ。銅版画を独学。1953年ごろ瀧口修造を知り、56年タケミヤ画廊で個展。66年『半島状の!』シリーズ。69年函形立体のオブジェ作品制作。コラージュやフロッタージュ等展開。76年よりデカルコマニーを利用したリトグラフ連作『稲妻捕り』、一転して油彩画に興味をむけ80年油彩画のはじめての作品群を個展『胸壁にて』発表。版画家、立体

狩野元信 (かのう・もとのぶ/1476～1559年)

京都生れ。狩野派の祖・狩野正信の子で、狩野派2代目。大炊助、越前守、法眼に叙せられ、後世「古法眼」と通称された。父・正信の画風を継承するとともに、漢画の画法を整理しつつ大和絵の技法を取り入れた。

狩野派の画風の大成し、近世における狩野派繁栄の基礎を築いた。1559年没、83歳。室町時代の絵師

狩野朗左門 (かのう・ろうのさもん/1911～2001年)

東京生れ。本郷絵画研究所、川端画学校、芸術学研究所を経て日本大学芸術学科卒。岡田三郎助に師事。芸術学を外山卯三郎に学ぶ。1930年槐樹社展、白日会展に出品。第5回春台展にも出品し受賞。31年春台展に無鑑査出品。NOVA展にも同31～33年出品。日本画に転向し、落合朗風に師事。35年巴里・東京新興美術展に出品。35年朗風率いる明朗美術連盟の第2回展入選。36年明朗美術連盟の盟友、37年に同人、39年主席、42年明朗展まで同連盟を主宰。個展を39、40年銀座・鳩居堂で、41、42年に日本橋・白木屋で開催。調花画塾を主宰。43年日本作家協会展に出品。46、47年日本作家協会展に出品。49年銀座松坂屋で個展。50年画人展に出品。53年「光伸(こうしん)の号を使う。光伸塾を主宰。女子美術大学、東京写真短期大学で講師。晩年は「朗左門」を名乗る。2001年没、90歳。洋画家、日本画家

鹿子木孟郎 (かのこぎ・たけしろう/1874～1941年)

岡山市生れ。父は池田藩士・池田長守の次男。1888年天彩学舎、92年不同舎に学ぶ。1900年渡米。01～04年渡仏、ローランスに師事。京都に鹿子木室町画塾を開設。05年浅井忠らと関西美術院を創設。06～08年再渡仏、アカデミー・ジュリアン一等賞牌。08年関西美術院長。18年下鴨画塾を開設。32年仏レジオン・ドヌール勲章。京都で没、66歳。洋画家、美教

樺島勝一 (かばしま・かついち/1888～1965年)

長崎県生れ。高等商業学校中退、「ジオグラフィック・マガジン」のペン画を見て独自の細密描写の技法を確立。朝日新聞東京本社の専属画工、1923年「東風人」の筆名で織田小星と『正チャンの冒険』を朝日新聞に連載。大正末期から昭和前期にかけて「軍事・冒険小説」に軍艦・戦車・飛行機・動物などの重厚で細密なペン画を提供し「船のカバシマ」などの異名を得た。戦後はロケットや人工衛星・ジェット機・未来都市の時代に移り変わり、小松崎茂など新世代の挿絵画家に次第に席を譲っていくが晩年まで絵筆をにぎり続けた。代表作に『正チャンの冒険』、『敵中横断三百里』、『亜細亜の曙』、『吼える密林』。1965年没、76歳。挿絵画家、漫画、ペン画

樺山愛輔 (かばやま・あいすけ/1865～1953年)

鹿児島生れ。米、独に留学、実業界で活躍、貴族院

議員、枢密顧問官、国際文化振興会、東洋美術国際研究会理事長として日本文化の海外紹介に尽力、戦後は社会教育事業のためグルー基金の創設や国際文化会館の建設に尽力。日米協会長、国際文化振興会顧問、国際文化会館理事長。黒田清輝の縁故者として美術研究所(現東京国立文化財研究所美術部)の創立と発展に尽くした。神奈川県で没、88歳。東文研創、文化財研究所美術部の創立

鎌木清方 (かぶらぎ・きよかた/1878～1972年)

東京生れ、水野年方に入門、新聞や雑誌で挿絵を執筆。烏合会、金鈴社を結成。江戸文化の教養に支えられ、粋の美意識を反映した人物画、ことに美人画に多くの秀作を生み出す。文筆家としても優れ『こしかたの記』等多くの随筆集がある。帝室技芸員・芸術院会員。文化功労者。1954年文化勲章。鎌倉で没、93歳。日本画、浮世絵師、挿絵

鎌木昌弥 (かぶらぎ・まさや/1938年～)

東京生れ。1962年多摩美術大学油画科卒。63年前衛美術展出品、67年前衛美術会会員。70年個展、鉛筆画を発表。67年前衛美術展が齟齬に改組。以後、齟齬に出品。99年齟齬を脱退。個展を中心に発表。「幻想の力」(宮城県美術館、90年)、「女性の肖像-日本現代美術の顔」(渋谷区立松涛美術館、96年)に出品。練馬区立美術館2011年にコレクションによる特集展示「うす羽の幻想 鎌木昌弥展」を開催。洋画家、鉛筆画

鎌倉秀雄 (かまくら・ひでお/1930～2017年)

東京生れ。父は染織家の鎌倉芳太郎。安田靉彦に師事。1951年再興院展入選。インドやエジプトに取材し、78、81年日本美術院賞。81年日本美術院同人。87年再興院展にて文部大臣賞。89年再興院展で内閣総理大臣賞。日本画家

蒲地清爾 (かまち・せいじ/1948年～)

佐賀県生れ。1971年3つの美術学校を退学。日本美術家連盟工房にて銅版画を始める。78年日本版画協会・準会員賞・会員推挙。80年ソウル国際小品版画ビエンナーレ・受賞(86、90年)。89年ニューヨーク国際小品版画ビエンナーレ・受賞(91年)。90年ルビン国際版画トリエンナーレ・展覧会賞、特別賞。90年フレヘン国際版画トリエンナーレ・買上賞(93年)。95年東京国際ミニプリントトリエンナーレ(98年も)。版画家

かみかぜ いのうえ (1952年～)

佐賀県生れ。1987年油絵を描き始めた。99年「天

使のらくがき」シリーズ。個展 岡崎西武百貨店、セントラルギャラリーなど。2000年スペインバレンシア国際美術展出品/グランコレクシヨナブレ名誉賞。01年パリ国際サロン会員。03年イタリア美術賞展マリア・クラウディア・シモッティ賞。05年パリ国際サロンアンビエーユ賞。06年(仏) テーラー財団美術協会会員。08年西湖芸術博覧会(中国) / 地球塊宝賞。10年新エコールド・パリ浮世・絵美術家協会創立会員。(仏) テーラー財団 永久会員、パリ国際サロン会員、JIAS日本国際美術家協会会員、BIANGE 展主宰・ミニ美術館 ひろ代表。洋画家、浮世絵

神坂雪佳 (かみさか・せつか/1866～1942年)

京都生れ。1881年四条派の日本画家・鈴木瑞彦に師事。90年凶案家・岸光景に師事し、工芸意匠凶案を学ぶ。琳派の研究を始めた。1901年英国グラスゴー国際博覧会の視察で渡欧。世界各地の凶案の調査。絵画から染織や陶芸・漆芸など暮らしを装う工芸品の凶案も積極的に行った。1942年没、77歳。凶案家、日本画家

上島一司 (かみじま・いっし/1920～1994年)

高知県生れ。1944年東京美術学校師範科卒。寺内萬治郎に師事。44年中学校教師。47年日展入選。49年光風会会員。51年東京学芸大学助教授。60年渡欧。大丸百貨店で滞欧作発表。67年奈良教育大学教授。奈良市にアトリエ。68年資生堂で個展開催。81年現洋会を結成。85年奈良教育大学名誉教授。88年日展評議員。78年大学美術教育会副理事長。奈良市で没、74歳。洋画家、美教

上條静光 (かみじょう・せいこう/1908～2007年)

東京生れ。1930年川端画学校日本画科卒業。1935～43年青龍社展に出品入選、49～55年青龍社に復帰し51年「一天紅」で社友に、55年春展賞。58～69年新興美術院に参加、常任理事を歴任、59～69年野田九浦率いる煌土社に参加。58年全日本学士会よりアカデミア賞、前全日本学士会名誉会員。59～97年真美術を主宰、以後、毎年真美術展を開催。舞踏舞台装置も手掛けた。2007年没、99歳。日本画家、美教

上條陽子 (かみじょう・ようこ/1937年～)

横浜市生れ。1954年画家を志し、清泉女学院を2年で中退。鈴木満に師事。64年女流画家協会展で奨励賞のち委員。65～81年独立展で入選。78年安井賞。81～82年文化庁派遣芸術家在外研究員として渡欧。92年池田20世紀美術館で個展。2001年パレスチナ人難民キャンプで子供の絵画指導。洋画家

神近 昭 (かみちか・あきら/1933年～)

朝鮮生れ。1945年長崎市に引揚げ。56年長崎県展文部大臣賞。61年二紀展出品奨励賞、62年同人に推挙、75、76年同人賞、77年会員、79年会員賞、83年大谷美術館賞。73年渡欧、パリ滞在。洋画家

上村一夫 (かみむら・かずお/1940～1986年)

神奈川県生れ。1964年武蔵野美術大学デザイン科を卒業。広告代理店・宣弘社のイラストレーターとして広告制作に携わる。68年『平凡パンチ』にて『パラダ』の連載を開始。2014年京都嵯峨芸術大学にて『漫画家 上村一夫の世界』展開催。16年弥生美術館にて『わが青春の「同棲時代」上村一夫×美女解体新書展』開催。17年アングレーム国際漫画祭にて遺産賞。『ヤングコミック』、『週刊プレイボーイ』、『漫画アクション』、『ビッグコミック』に連載を手がた。『修羅雪姫』、『同棲時代』、『しなの川』、『悪魔のようなあいつ』、『サチコの幸』が映像化され。1985年没、45歳。漫画家、イラストレーター、エッセイスト

上矢 津 (かみや・しん/1942年～)

東京生れ。1961年東京都立工芸高等学校・木材工芸科卒。63～4年写真専門学校。70年「ジャパン・アートフェスティバル」優秀賞、「芸術生活画廊コンクール」コンクール賞。「東京国際版画ビエンナーレ」(72年)神奈川県立近代美術館賞、「リュブリアナ国際版画ビエンナーレ」(73年/ユーゴスラビア)ザグレブ科学技術アカデミア賞、「世界版画コンペティション」スペシャルエディション・パーチェス賞、「クラコウ国際版画ビエンナーレ」(74年)メダル賞。93～96年東京藝術大学・美術学部版画研究室の非常勤講師。版画家

亀山知英 (かめやま・ともひで/1962年～)

群馬県生れ。1987年創形美術学校版画科卒。88年創形美術学校研究科版画課程修了。91年文化庁芸術家国内研修員。1995～97年レジデンス Cite internationale des arts、パリ。版画家

鴨下葉子 (かもした・ようこ/1936年～)

東京生れ。1978年日仏現代美術展一席(グラン・パレ美術館)。84年アカデミー・ド・ボザール賞(日仏現代美術展)。86年サロン・ド・メ展へ招待出品(グラン・パレ美術館)。95年亀高文子記念赤艸社賞。2003～04年ブラジルに滞在。04年サンパウロ市制450年祭の文化交流サンパウロ州の芸術文化に貢献、勲章を授与。抽象画を得意。洋画家

加山又造 (かやま・またぞう/1927～2004年)

京都生れ。東京美術学校卒。山本丘人に師事。日本芸術大賞・芸術選奨文部大臣賞・第一回美術文化振興協会賞受賞。斬新な発想と動的な描写で早くから注目される。大和絵や琳派といった伝統的な様式美を学びながら、そこから現代的な感覚を盛り込み、華麗で装飾的な作品を生み出した。創画会創立会員。多摩美大・東京藝大教授。文化功労者・文化勲章。2004年没、76歳。 **日本画家、版画家、美教**

神山 明 (かみやま・あきら/1953～2012年)

東京生れ。1975年東京芸術大学美術学部工芸科デザイン専攻卒、安宅賞、77年同校大学院美術研究科デザイン基礎造形、理論専攻修了、作品買上。2000～01年パリ国立高等装飾学校。埼玉大学非常勤講師、東京芸術大学助手、東京大学非常勤講師、東海大学教養学部芸術学科教授／東京芸術大学非常勤講師、2012年没、59歳。 **彫刻家、デザイン、美教**

上山二郎 (かみやま・じろう/1895～1945年)

東京生れ。1914年川端画学校に学ぶ。20～21年日本創作版画展入選。22～24、25～27年渡仏、藤田嗣治の知遇を得る。サロン・ドートンヌ等に出品。24年二科展に出品。27年東京、大阪で滞欧作品展開催。31年新興洋画研究所を設立。八王子市で没、50歳。 **洋画家、版画**

神谷万吉 (かみや・まんきち/1895～1969年)

愛知県生れ。岡田三郎助に師事。東京美術学校に学んだ。帝展、光風会展、太平洋画会展、槐樹社展などに出品。日本童画家協会や新興童画協会に参加し、児童雑誌「赤い鳥」などに童画を掲載した。光風会会員。戦時中に鴨川市に移住し、鴨川文化協会など地域の活動にも参加した。千葉県で没、74歳。 **洋画家、童画**

上永井正 (かみながわ・ただし/1899～1982年)

広島県生れ。1914年インドネシアで働く。27年渡仏、パリに住む。ボナール、ドラン、シャガール、ブラック、マティス、藤田嗣治らと交流。40年戦争で一時帰国。41年リオに居住、ブラジルで画家に専念、リオ国立美術館のサロンで銀メダル。55年日本に戻り、2年後パリに渡る。パリで没、83歳。 **洋画家**

神谷信子 (かみや・のぶこ/1914～1986年)

香川県生れ。高等女学校で国文を教えながら、絵画研究所で指導を受け画家の道に入る。浅草の神谷パー「神谷酒造」の4男と結婚するが翌年に夫が召集され戦病死。その後、画家広幡憲に心酔し同棲、広

幡も事故死。晩年までNYで絵を描いた。病で帰国、1986年没、72歳。 **洋画家**

亀井貞雄 (かめい・さだお/1909～2011年)

高松市生れ。1927年香川県立工芸学校卒。大阪美術学校に学ぶ。33年より林重雄に師事。31年全関西展入選。34年独立展入選。40年紀元2600年奉祝文展入選。42年国展に出品。59年国画会会友。63年国画会会員推挙。97年西宮市民文化賞。2011年没、102歳。 **洋画家**

亀井至一 (かめい・しいち/1842～1905年)

1842年生れ。国沢新九郎、横山松三郎に師事、石版と油絵を学ぶ。内国勸業博覧会第1回～3回出品。木版画も作製、玄々堂印刷所で石版画を学ぶ。「日光名所」、「東海道名所」、「観古図説」を制作。矢野竜溪の小説『経国美談』(1883年刊行)の挿絵、東海散士の『佳人之奇遇』(1885年から1897年刊行)の挿絵、砂目石版。1905年没、64歳。 **版画家、挿絵**

亀井竹二郎 (かめい・たけじろう/生年不詳～1879年)

東京生れ。石版画家として有名な亀井至一の異父弟。兄とともに写真家・横山松三郎のもとで西洋画を学んだあと、版画工房・玄々堂で活動。作品がほとんど残っていないため、これまで忘れられた画家。1891～92年 石版「懐古東海道五十三驛眞景」が刊行。1879年没、23歳。(郡山市美術館に收藏)。 **洋画家、版画家**

亀川盛武 (かめがわ・せいぶ/1808～1890年)

沖縄県生れ。唐名は毛允良。琉球王国末期の三司官、亀川親方盛亮の長男。絵は伊良皆盛昆(扇宏熙)に学ぶ。1842年の江戸上りで楽土として随行し、描いた「鶴の図」が将軍・徳川家慶に激賞。冠船奉行、勘定奉行を経て、三司官。72年辞任、明治政府による琉球処分に反対し、頑固党の指導的立場に立ち抵抗。1990年没、82歳。 **沖縄の江戸絵師**

亀高文子 (かめたか・ふみこ/1886～1997年)

横浜市生れ。1907年女子美術学校本科西洋画科卒。09年文展で褒状、10年文展で3等賞。18年「朱葉会」の創立に参加。26年赤艸社女子絵画研究所を神戸に創立。30年兵庫県美術家連盟創立会員。62年兵庫県文化賞。75年大谷記念美術館で亀高文子自選展。西宮市で没、91歳。 **洋画家**

亀高文子 II (かめたか・ふみこ/1886～1977年)

横浜市生れ。旧姓渡辺。1907年女子美術学校卒。満谷国四郎に師事。その後、太平洋画会研究所に学

ぶ。東京府勸業博覧会に出品。08年太平洋画会展に出品。09年第3回文展で褒状。以後文展、帝展に出品。19年女子の美術団体「朱葉会」創立。24年赤艸社女子洋画研究所設立。62年兵庫県文化賞。71年西宮市民文化賞。75年西宮大谷美術館で自選展開催。77年9月6日没、享年91歳。(佐)洋画家

亀山全吉 (かめやま・ぜんきち/1910～1973年)

師小林和作、尾道美術協会に参加。尾道市美術館に収蔵。1973年没、63歳。洋画家

亀山浩嗣 (かめやま・ひろつぐ/1935～2010年)

岩手県生れ。武蔵野美術大学卒、捕鯨船の船員に。仏ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール正会員、仏との文化交流、海上美術集団会長、21世紀新美会会長。茨城県民文化センター、西武等で個展55回。独特の「亀山ブルー」の海は、多くのファンを魅了。1976年ニュージーランド、ネルソン市で個展。86年茨城県民文化センターにて海洋画展、87年訪中記念展。92年紺綬褒章、「鯨神」1000号制作記念個展(水戸)。93年内閣総理大臣招待芸術文化懇親会出席。96年和歌山県太地町、石垣記念館にて海洋画「捕鯨への希望」展。98年岩手県山田町、鯨と海の科学館にて海洋画「捕鯨への希望」展。2003年茨城県民文化センターにて海洋画「捕鯨への道」展、日立街かど美術館にて海洋画「捕鯨への道」展。2010年没、75歳。洋画家

亀山良雄 (かめやま・よしお/1921～1997年)

登別市生れ。1943年東京美術学校油画科卒。47年終戦後、札幌第一中学校教諭、51年道展会員。54～57年読売アンデパンダン展、55年自由美術展に出品、57年佳作賞。65年主体展に出品、66年佳作作家賞、主体美術協会会員。68年北海道秀作美術展で3年連続賞候補賞、74年道立近代美術館賞。70年道庁からの依頼により開拓記録画「入植地の測設」を制作。84年札幌市民芸術賞。87年北海道女子短大名誉教授。札幌市で没、76歳。2002年札幌芸術の森美術館にて大規模な回顧展「亀山良雄展」。洋画家、美教

鴨居羊子 (かみい・ようこ/1925～1991年)

大阪生れ。スキヤンティーの命名者とされる。洋画家の鴨居玲は弟。父はジャーナリストの鴨居悠。豊中高等女学校卒。旧制大阪府女子専門学校卒。新関の校正係・家庭欄記者や、大阪読売新聞の学芸課記者を経て、独立。56年、大阪市内に「チュニック制作室」という下着メーカーを設立(1958年に株式会社化)。デザイナー、画家として活躍する傍ら、文筆活動にも

才能を発揮し、エッセイを数多く残した。1991年没、66歳。洋画家、版画

鴨居 玲 (かみい・れい/1928～1985年)

出生地は諸説あり。1946年金沢美術工芸専門学校入学。宮本三郎に師事。50年二紀会同人に推挙。52年田村孝之介の六甲洋画研究所に学ぶ。59～61年渡仏。68年二紀会会員。69年昭和会賞、安井賞。71～74年スペインで制作。84年金沢美術工芸大学の非常勤講師。84年兵庫県文化賞。神戸市で自死、57歳。洋画家

嘉門安雄 (かもん・やすお/1919～2007年)

石川県生れ。1937年東京帝国大学文学部美術史学科卒。西洋美術史研究者の児島喜久雄教授の助手を務めた。47年東京国立博物館、表慶館で開催されたマチス展、ブラック展、ルオー展等を担当。59年開館の国立西洋美術館に転じ事業課長。56年ブリヂストン美術館の運営委員、76～95年ブリヂストン美術館同美術館長。美術館のコレクションの収集。東京都現代美術館の設立準備のための諮問委員会委員、94年～2000年東京都現代美術館長。全国美術館会議の会長、ジャポニスム学会長歴任。戦中期から近年までの日本における「西洋美術研究」史、及び美術評論等の出版の歴史を示すものとなっている。東京で没、93歳。西洋美術史研究、美術評論家、ブリヂストン美術館長、東京都現代美術館名誉館長

香山小鳥(藤緑) (かやま・ことり・とうろく/1892～1913年)

長野県生れ。1911年長野県飯田中学校卒。12年竹久夢二と交友、恩地孝四郎を知る。東京美術学校予備科彫刻科塑造部志望に入学。田中恭吉・藤森静雄との交友。神戸で文芸雑誌『歓楽』詩歌、絵を発表。12年東京美術学校除籍、木版彫師の伊上凡骨に弟子入り。自画・自刻木版画も始めるも東京で没、21歳。版画家

加山四郎 (かやま・しろう/1900～1972年)

横浜市生れ。神奈川県立工業学校図案科卒。葵橋洋画研究所で石膏デッサンを学ぶ。21年東京美術学校西洋画科中退、23年再入学、27年卒。26年春陽会展で春陽会賞。39年春陽会会員。30～33年渡仏、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。47年美術団体連合展に春陽会代表委員として出品。北荘画廊で個展。53～68年東京藝術大学講師。東京で没、71歳。洋画家

栢森 義 (かやもり・よし/1901～1992年)

新潟県生れ。1921年新潟県立三条中学卒、本郷

洋画研究所に入り、岡田三郎助に師事。30年「一九三〇年協会」展入選。27、28、29年帝展入選。33年光風会展光風賞受賞、38年光風会会員。34年帝展入選、36年文展鑑査展入選、37年新文展出品、40年紀元2500年奉祝展出品、41年新文展無鑑査出品、42年戦時特別展出品。47～49年日展出品。光風会展に出品。56年和田三造、大久保作次郎ら創立の新世紀美術協会展に参加、59年黒田賞、76年大久保賞、78年和田賞。91年『栢森義画集』刊行。東京で没、90歳。**洋画家、ガラス絵**

柄澤 齊 (からさわ・ひとし/1950年～)

栃木県生れ。1971年創形美術学校版画科入学、日和崎尊夫に木口木版を学ぶ。74年同校研究科版画課程修了。75年日本版画協会会員。77年「鑿の会」結成。91年「柄澤齊木口木版画集1971-1991」刊行。93年印刷と出版の工房「梓丁室」開設、十九世紀の活版印刷機アルビオンプレスをうい作品制作。オリジナルカラージュ、ボックスオブジェ手がけ、2008年絵画作品を中心に制作。書籍の装丁『堀田善衛全集』(筑摩書房1993年)、辻邦夫『西行花伝』(新潮社1995年)、『矢川澄子作品集』(書肆山田1998年)作成。06年栃木県立美術館、神奈川県立近代美術館鎌倉館で回顧展。**版画家、装填**

辛島一誓 (からしま・いつせい/1921～2006年)

大分県生れ。20歳の時、岡田三郎助主宰の本郷絵画研究所にてデッサン、油絵を学ぶ。戦後、中学校教諭退職、1947年日展入選。光風会、日水展を経る。靖国神社に戦没将兵慰霊のため歴史画三点奉納。10数回個展。仏教美術にひかれ、仏画や絵巻物の臨写、研究。水墨画、木彫、陶芸制作。2006年没、85歳。**洋画家、水墨**

彼末 宏 (かれすえ・ひろし/1927～1991年)

東京生れ。1952年東京美術学校卒、54年油画科助手。梅原龍三郎、久保守に師事。56年国画会展出品、57年国画会賞、58年会友、60年会友賞、会員。西欧学芸研究所の奨学金で渡欧。62年国際具象派美術展(朝日新聞主催)、65年「具象絵画の新たなる展開」展(東京国立近代美術館)に出品。69年東京芸術大学助教授、80年同教授。78、82年高島屋で個展。85年有楽町アートフォーラムで「彼末宏展」、1991年東京芸術大学資料館で退官記念展。東京で没、64歳。**洋画家、美教**

河合卯之助 (かわい・うのすけ/1889～1969年)

京都府生れ。1905年京都市立美術工芸学校絵画科、10年京都市立絵画専門学校本科に学ぶ。帝展、

京都市展出品。版画は13年開始。『詩と版画』第5輯(1924)から「詩と版画社」の同人、挿絵・表紙絵を発表。京都で開かれた「詩と版画社第1回展」の開催に尽力。自身も石版、エッチングを出品。日本創作版画協会展に銅版画出品。26年石版と木版の陶器図案を集めて『河合卯之助陶画集』出版。本業の陶芸以外にも絵画、版画、染色、図案創作。京都府で没、80歳。**陶芸家、版画家、挿絵、染色**

川合玉堂 (かわい・ぎよくどう/1873～1957年)

愛知県生れ。望月玉泉・幸野煤嶺・橋本雅邦に師事。1890年 内国勸業博覧会に入選。98年日本美術院に参加。1900年頃からは私塾「長流画塾」を主宰。07年文展審査員に任命。15年東京美術学校日本画科教授、17年帝室技芸員。日本画壇の中心的存在の一人となる。31年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章。33年にはドイツ政府から赤十字第一等名誉章を授与。40年に文化勲章。横山大観・竹内栖鳳と共に日本画壇の三巨匠。帝室技芸員・帝国美術院会員。文化功労者。文化勲章。1957年没、83歳。**日本画家**

川井健司 (かわい・けんじ/1976年～)

川崎市生れ。1999年サンタモニカ大学入学。2002年カリフォルニア大学アーバイン校転入。03年彫刻開始。05年個展「ego」ギャラリーseven degrees(カリフォルニア)。08年個展「Human Maze」ギャラリーseven degrees(カリフォルニア)。10年個展「人間迷路」ONO MEMORIAL。**彫刻家**

河合健二 (かわい・けんじ/1908～1996年)

京都府生れ。京都市立絵画専門学校卒。西村五雲、山口華楊に師事。47年日展で特選、64年特選・白寿賞。78年日展評議員。風景画を得意とする。1996年没、87歳。**日本画家、水彩、版画**

河井清一 (かわい・せいいち/1891～1971年)

奈良市生れ。1914年文展に入選。16年東京美術学校西洋画科卒。17光風会で今村奨励賞、26年光風会会員。22、28年帝展で特選。32年渡欧。33年資生堂画廊で個展。46年日展で特選。70年光風会名誉委員。日展参与。横浜で没、88歳。**洋画家**

河合新蔵 (かわい・しんぞう/1867～1936年)

大阪生れ。上京、不同舎に学ぶ。1900年満谷国四郎、鹿子木孟郎らと渡米。01年渡仏ジュリアン、コロロッシに学ぶ。04年帰国、太平洋画会会員。06年大下藤次郎らと水彩画講習所を設立。関西美術院の教授。13年日本水彩画会創立会員。文展、帝展に出品。京

都で没、68歳。(出典 わ眼) **洋画家、水彩画家、美教**

河合新蔵 II (かわい・しんぞう/1867～1936年)

大阪生れ。1891年上京、不同舎に入り、小山正太郎に師事。1900年渡米、アメリカ各地で水彩画個展。04年帰国。太平洋画会会員。07年第1回文展に出品。10年京都に移住、関西美術院の教授となる。13年日本水彩画会創立に参加。第7回文展で三等賞。35年第二部会を結成。36年2月15日京都で没、享年68歳。(佐) **洋画家、水彩画家、美教**

河井達海 (かわい・たつみ/1905～1996年)

岡山県生れ。斎藤藤与里に師事。東光会名誉会員。大阪教育大学教授。大阪芸術賞。大阪文化功労者。1996年没、90歳。 **洋画家、美術教育**

河内文夫 (かわうち・ふみお/1939～2008年)

新潟県生れ。笹岡了一に師事。1964年光風会展で記念賞受賞。光風会会友。66年スペインへ取材旅行。68年光風会・会友賞。70年光風会会員。71、91年中村研一賞受賞。74年光風会員賞。93年安田火災美術財団奨励賞。95年西山真一賞。99年光風会記念賞。2007年光風会・文化科学大臣賞。野田市で没、69歳。 **洋画家**

川上邦世 (かわかみ・くによ/1886～1925年)

東京生れの彫刻家。川上冬崖の孫、弟は画家の川上涼花。1906年東京美術学校彫刻科選科卒。高村光雲に師事。07年第1回文展に出品。16年院展初入選し、戸張孤雁、中原悌二郎とともに院友推挙。18年院展試作展にて奨励賞。25年没、39歳。弟子に中平四郎などがある。(出典 わ眼) **彫刻家**

川上左京 (かわかみ・さきょう/1889～1971年)

山口県生れ。1905年関西美術院に入る。のち上京し、太平洋画会研究所に通う。13～28年日本水彩画会の創立会員。20年光風会展で今村奨励賞。21年光風会会員、審査員。23年日本美術展で最優秀賞。46年日本美術会会員。27年二科会会員。山口県で没、81歳。 **洋画家、水彩画家**

川上尉平 (かわかみ・じょうへい/1917～1979年)

熊本県生れ。1939年上京、絵を独学。41年独立美術協会展入選。47年春陽会展入選、春陽会賞、翌年準会員、53年会員。60年北九州市立八幡美術館で個展。65年東京大丸百貨店個展、昭和画廊で8回個展を開催、76年吉祥寺東急美術サロン個展。東京で没、62歳。 **洋画家**

川上四郎 (かわかみ・しろう/1889～1983年)

長岡市生れ。1913年東京美術学校西洋画科本科卒。藤島武二に学ぶ。独協中学に奉職、16年コドモ社に入り童画家、同社の雑誌「童話」を舞台として活躍。児童画の芸術的地位を高めるため、童画という名称を作り、日本童画家協会を結成、会員。講談社絵本童謡画集「アリババ」「アラジン」、小学館幼年文庫「良寛さま」児童書に挿絵を描き、37年野間挿絵奨励賞。83年没、94歳。 **洋画家、童画**

川上澄生 (かわかみ・すみお/1895～1972年)

横浜市生れ。青山学院高等科卒。1921年宇都宮中英語教師。木版画を始める。27年自作木版画集「青髭」を刊行。恩地孝四郎らと自画、自刻、自摺の創作版画を提唱。版画集「文明開化の往来」、詩画集「ゑげれすいろは」「とらんぶ絵」。28年日本創作版画協会会員、31年日本版画協会創立会員。43年国画会会員。49年栃木県文化功労賞。宇都宮市で没、77歳。92年鹿沼市川上澄生美術館が開館。 **版画家**

川上全次 (かわかみ・ぜんじ?/1913～1955年)

東京生れ。暁星中学校を経て、1938年東京美術学校彫塑科卒。43年には日本彫刻家協会から第二奨励賞を受けた。戦後日展に出品し、47年特選。51年第二紀会彫刻部発足に際し参加して会員。50年サロン・ド・プランタンで一等賞、留学、52年ベルギーへ赴いた。53年国立美術学校を卒業し、続いてロワイヤル・アカデミーへ入学し、54年グランプリ賞。ベルギーで没、42歳。 **彫刻家**

河上大二 (かわかみ・だいじ/1893～1949年)

山口県生れ。1918年東京美術学校西洋画科卒。21年徳山市に定住。26年徳山洋画協会を結成。27、28、30、31年帝展に水彩画入選。27年日本水彩画会会員。38年新文展に入選。47年日展委員。49年没、56歳。 **水彩画家**

川上涼花 (かわかみ・りょうか/1887～1921年)

東京生れ。1905年太平洋画会研究所に学ぶ。1912年ヒュウザン会(後のフユウザン会)結成に参加。16年斎藤藤与里らと日本美術家協会を創立。17年二科展に初入選。1921年没、33歳。(出典 わ眼) **洋画家**

河井清一 (かわい・せいいち/1891～1979年)

奈良市生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。14年文展に入選、22年帝展で特選、46年日展で特選、70年日展参与。23年資生堂画廊で個展。17年

光風会展で今村奨励賞、70年光風会名誉会員。横浜市で没、88歳。洋画家

万国博覧会事務官として渡欧。帰国後は事業家に転向。山口市で没、57歳。洋画家

川上冬崖 (かわかみ・とうがい/1828～1881年)

長野市生れ。上京、大西椿年に学ぶ。蕃書調書に入り、絵画取調出役、画学出役となって洋画法を研究し、後進を指導。明治維新後、大学南校(東京大学の前進)、文部省、陸軍兵学寮、陸軍参謀局に勤める。第1回、第2回内国勸業博覧会美術部の審査主任。1870年下谷に私塾聴香読画館を設け、西洋画法を教える。熱海で没、自死、52歳。南画家、洋風画家、版画、美教

川北英司 (かわきた・えいじ/1912～1989年)

茨城県生れ。1937年帝国美術学校卒。36、39年国展に入選。78年愛宕山画廊、81年大和田画廊(土浦)、82～86年現代画廊にて個展。83年ロートレック画廊(長野)、マエダ画廊(名古屋)で個展。89年没、78歳。龍ヶ崎市歴史民俗資料館にて遺作展。洋画家

河北倫明 (かわきた・みちあき/1914～1995年)

福岡県生れ。1938年京都帝国大学大哲学科卒、同大学院に進学。43年帝国美術院附属美術研究所助手、日本近代画家の調査・研究に取り組む。48年日本近代美術史、現代美術評論活動開始。48年「青木繁」(養徳社)を刊行。48年「近代日本画論」(高桐書院)刊行。52年国立近代美術館事業課長。54年美術評論家連盟結成、事務局長。63年東京国立近代美術館次長。67年美術交流展覧会のため訪ソ。美術による国際交流で中、西欧、米、南米訪問。69年京都国立近代美術館館長、70年大阪万博美術館委員。82年美術館連絡協議会理事。86～94年美術評論家連盟会長。87年京都芸術短期大学学長。89～92年横浜美術館館長。91～95年京都造形芸術大学学長。89年「倫雅美術奨励賞」創設。主要著書に「日本の美術」(社会思想研究社出版部)、「大観」(平凡社)、「村上華岳」(中央公論美術出版)、「坂本繁三郎」(中央公論美術出版)、「河北倫明美術論集」全5巻(講談社)、「近代日本絵画史」(高階秀爾と共著 中央公論美術出版)、「河北倫明美術時評集」全5巻(思文閣)。文化功労者。東京で没、80歳。(引用 東文研)美術評論家、京都国立近代美術館館長、京都造形芸術大学学長、美教

河北道介 (かわきた・みちすけ/1850～1907年)

山口県生れ。川上冬崖に師事。1889年陸軍士官学校教授として渡仏。黒田清輝、久米桂一郎と親交。98年明治美術会10周年記念展に出品。1900年パリ

川口雄男 (かわぐち・いさお/1908～1993年)

姫路市生れ。1934年東京美術学校図画師範科卒、神奈川師範学校に奉職。創元会に所属し、戦前は新文展に出品。戦後は創元会展、日展に出品。51年日展で特選、朝倉賞。52年創元会展で会員努力賞。日展委嘱出品、63年日展で菊華賞、66年審査員、67年会員、84年参与。60年仏、伊を巡遊、67年訪米。鎌倉市で没、85歳。洋画家、美教

川口軌外 (かわぐち・きがい/1892～1966年)

和歌山県生れ。1911年和歌山師範学校中退、上京、太平洋画会研究所で中村不折に師事。14年日本美術院洋画部に移り小杉未醒に師事。安井曾太郎の滞欧作に感銘。19～22年渡仏。23～29年渡仏、アンドレ・ロートやフェルナン・レジェに学ぶ。29年二科賞。「一九三〇年協会」会員。30年独立美術協会創立に参加。47年国画会会員。58年神奈川県立近代美術館で「川口軌外・脇田和展」。66年没、73歳。洋画家

川口起美雄 (かわぐち・きみお/1951～)

長崎県生れ。1974～77年オーストリア国立応用美術大学でウィーン幻想派の画家フッターに師事、混合技法を習得。85～86年文化庁在外研修員として渡伊。静謐な幻想的空間を描く。2002年池田20世紀美術館、2015年平塚市美術館で個展。洋画家、幻想

川口精六 (かわぐち・せいろく/1907～1997年)

東京都生れ。1925年川端画学校に学ぶ。第一美術協会展で協会賞、会員となる。30年第一美術協会退会。32年第19回光風会展に出品。33年国画会展に出品。50年自由美術協会展で協会賞。会員となる。53年毎日現代美術展に出品、55年まで出品。58年自由美術協会を退会。60年日本実在派展同人。65年日本実在派退会。66年渡欧。72年立軌会会員。74年現代美術選抜展に出品。76年五百住乙と二人展(資生堂g)。80年渡欧。88年現代の幻想展に出品。97年7月没、享年90歳。(佐)洋画家

河口龍夫 (かわぐち・たつお/1940年～)

神戸市生れ。1962年多摩美術大学絵画科卒。卒業後は神戸を拠点に作家活動を開始。65年グループ〈位〉を結成。70年日本国際美術展「人間と物質」展、83年筑波大学芸術学系助教授、91年教授。2003筑波大学名誉教授。03年京都造形芸術大学客員

教授及び倉敷芸術科学大学教授。09年東京国立近代美術館で個展。16年度毎日芸術賞。洋画家、彫刻、美教

川口輝夫 (かわぐち・てるお/1928年～)

東京生れ。1953年春陽会に出品(以降71年まで出品)。87年スイス・バーゼルアートフェアに出品。90年CWAJ 版画展に出品。全国各地で個展開催。国内外の受賞多数。無所属。洋画家、版画

河久保正名 (かわくぼ・まさな/生没年不詳)

東京生まれ。1874年頃、国澤新九郎に師事。90年～98年明治美術会展に7回出品。96年頃印刷局勤務。1900年パリ万博出品。02年巴会に参加。03年第5回内国勸業博覧会に出品。06年、08年太平洋画会展に出品。(出典 わ眼) 洋画家

河越虎之進 (かわごえ・とらのしん/1891～1989年)

松本市生れ。松本中学卒。1918年東京美術学校西洋画科卒。27、28年帝展入選。30年早稲田第一高等学院講師。40年日本山岳画協会会員。戦後、長野県美術展や中信美術展に無鑑査出品。33年から丘庵の号を使う。中央画壇から離れ、東京や大阪での個展で作品を発表。1989年没、98歳。洋画家

川崎麻児 (かわさき・あさこ/1959年～)

東京生れ。1982年 武蔵野美術大学日本画科卒。86年日展特選。88年日展特選。97年山種美術館賞展優秀賞。現在日展評議員。日本画家

川崎小虎 (かわさき・しょうこ/1886～1977年)

岐阜県生れ。9歳の時に上京して祖父千虎に大和絵を学び、没後は千虎門下の小堀鞆音に師事した。1910年東京美術学校日本画科卒。以来、一貫して文展、帝展、日展に属し、69年日展顧問。1938年日本画院を創設。44年から4年間、山梨県中巨摩郡落合村(現、甲西町)に疎開した。日本画家、版画

川崎鈴彦 (かわさき・すずひこ/1925年～)

東京生れ。父は日本画家の川崎小虎、東山魁夷は義兄。東京美術学校卒。1949年日展入選。魁夷の指導のもと森々会を結成、日本画院展、日本美術協会展に出品。第12回日展、第3回新日展で特選。第10回新日展で菊華賞。1980年改組日展で内閣総理大臣賞。日展の委嘱、会員、評議員。女子美術大学助教授、同大学教授、武蔵野美術大学教授、ハーバード大学、ボストン美術館付属美術学校で客員教授として日本画、水墨画を教えた。現在、日展評議員、日本美術家連盟理事。日本画家、美教

川崎大治 (かわさき・だいじ/1902～1980年)

札幌市生れ。1926年早稲田大学英文科卒。児童文化の研究、童話の創作に従事し、18歳で巖谷小波の門をたたき、童話作家を志す。昭和初年の社会主義運動の影響を受けて新興童話作家連盟に、30年日本プロレタリア作家同盟に加入。31年代表作となる『小さい同志』を榎本楠郎などと共著で出版。35年童話作家協会に入会。戦後は日本児童文学者協会の設立に関わり、民主主義児童文学運動、芸術紙芝居に情熱を傾ける。67年日本児童文学者協会会長。童話集など児童関係の著作多数あり。1980年没、78歳。童画作家、版画

川崎千虎 (かわさき・ちとら/1837～1902年)

愛知県生れ。沼田月斎、土佐光文に師事。大蔵省勤務などをへて博物館御用掛となる。1882年「佐々木高綱被甲図」で歴史故実画家として名をあげ、日本美術協会審査員、東京美術学校教授。1902年没、67歳。日本画家、美教

河崎千代子 (かわさき・ちよこ/生誕年不詳～1989年)

東京生れ。女子美術学校卒。1950年朱葉会会員、のち理事。元一線美術協会委員。1989年没、77歳。洋画家

川崎春彦 (かわさき はるひこ/1929～2018年)

東京生れ。父は川崎小虎。父方の曾祖父は川崎千虎。長女は日本画家の川崎麻児。親戚に元京成電鉄社長の川崎千春。父と義兄の東山魁夷に師事。1950年東京美術学校日本画科卒。61、64年日展特選。80年日展評議員。83年日展文部大臣賞。2005年日本芸術院賞・恩賜賞。06年日本芸術院会員。18年旭日中綬章。日本画院展、日本美術協会展で活躍。2018年没、89歳。日本画家

河崎ひろみ (かわさき・ひろみ/1960年～)

和歌山県生れ。1984年京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。毎年個展京都、大坂、一宮、名古屋、兵庫、三田等。グループ展;80年京都府洋画版画美術展(京都府ギャラリー・京都)。86年図象の現在(信濃橋画廊5・大阪)。89年いま絵画は—OSAKA'89(大阪府立現代美術センター・大阪)。98年名古屋コンテンポラリーアートフェア(名古屋市民ギャラリー・名古屋)。2003年京都・洋画の現在—85人の視点(京都文化博物館・京都)。2013年日本の絵画五十年(和歌山県立近代美術館)。洋画家

川崎正人 (かわさき・まさと/1903～1960年)

青森県生れ。森県師範学校卒、西洋画の教員検定試験に合格し、青森県立木造中学の図画教諭。1930年西郡図画教育研究会の発起人となり、創立に尽力。32年今純三を講師に招いた「版画講習会」でエッチングを知り、今の世話でエッチングプレス機入手。36年日本版画協会展に入選。また、今純三・関野準一郎と「青森エッチング協会」を設立。戦後は郷里に引き上げ、小中学校の校長などを歴任。青森県で没、57歳。 **版画家**

川崎光草子 (かわさき・ゆりこ/1944年～)

東京生れ。日本女子大学卒。1984年真樹会(田畑弘代表)入会。85～2012年真樹会展に毎年出品。91、94、99年個展。97～2014年隔年で真樹会・レザン展に出品。元陽展入選。新芸術協会展入選。01年新芸術協会選抜展に出品。08、12、19年ギャラリーKANI個展。 **洋画家**

河嶋淳司 (かわしま・じゅんじ/1957年～)

東京生れ。1981年東京藝術大学日本画専攻卒、サロン・ド・バランタン賞、83年同大学院修士課程修了、86年博士課程修了。95年五島記念文化賞新人賞。96年五島記念文化財団助成、海外研修。99年増上寺天井制作。07年両洋の眼展河北彬倫明賞。 **日本画家**

川島昭隠 (かわしま・しょういん/1865～1924年)

岐阜県生れ。11才の時、平善院則門和尚の弟子となり、天龍寺峨山・南宗寺蜻州守拙に参じる。のち大徳寺僧堂師家となり、正眼寺僧堂に移った。1924年没、60歳。 **禅僧**

川島昇太郎 (かわしま・しょうたろう/1908～1991年)

東京生れ。京都美術工芸学校に学ぶ。赤松麟作に師事。1939年新文展に入選。53年春陽会会員。大阪で没、83歳。 **洋画家**

川島理一郎 (かわしま・りいちろう/1886～1971年)

栃木県生れの洋画家。1905年渡米し、のちに渡欧。度々外遊。パリで藤田嗣治と交友。22年サロン・ドートンヌ会員。26年国画創作協会洋画部を創設。35年国画会を退会。36年女子美術学校教授。48年日本芸術院賞。55年新世紀美術協会を創立。東京で没、85歳。(出典 わ眼) **洋画家、美教、版画**

川島 猛 (かわしま・たけし/1930年～)

高松市生れ。香川県立工芸高校卒、武蔵野美術専門学校油絵科で学ぶ。1956年新樹会展、57年日本アンデパンダン展出品。58～62年読売アンデパン

ダン展と個展。63年渡米、NY定住。65年ニューヨーク近代美術館「現代日本絵画彫刻」展出品。67年NYワールド画廊個展。NY近代美術館の「1960年代の選抜コレクション」展に出品。近年は、木やアルミニウムを使って、キャンバスの上に集合的で錯綜するイメージを構成するなど新しい表現を探求している。 **洋画家、版画、立体、カラー**

川路柳虹 (かわじりゅうこう/1888～1959年)

東京生れ。1903年京都の美術工芸学校に入学。07年口語体自由詩「塵溜」などを『詩人』に発表。13年東京美術学校日本画科卒、詩作は旺盛で『早稲田文学』、『文章世界』、『創作』などに発表。10年処女詩集『路傍の花』。27年外遊、パリ大学で東洋美術史を学び、美術評論家としても知られ『現代美術の鑑賞』(1925年)、『マティス以後』(1930年)などの美術評論の著書もある。評論でも『詩学』など著書も多い。象徴主義詩人のポール・ヴェルレーヌ詩集も選訳した。58年『波』などにより日本芸術院賞。東京で没、70歳。 **詩人・評論家、版画、油彩、挿絵**

川隅路之助 (かわすみ・みちのすけ/1906～1992年)

群馬県生れ。春陽会研究所に学ぶ。1947年春陽会展で春陽会賞。52年春陽会会員。51年群馬美術家連盟を川隅路之助と日本画家の遠藤燦可の2人を中心に、オノザトシノブ、深谷徹、住谷磐根、成田一方らによって結成創立。1992年没、86歳。 **洋画家**

川面義雄 (かわづら・よしお/1880～1963年)

大分県生れ。1905年東京美術学校卒。08年審美書院に複製模写の技術者として入社し、08年「東洋美術大観」(18年全巻完成)を初め、同書院発行の古美術書16種の着色木版の製作従事。23年頃、原三溪所蔵名宝の複製模写、～41年大和絵同好会、大塚工芸社、東京美術社、聚楽社大阪山中商会等発行の美術書の着色木版の製作。42年徳川黎明会の委嘱により同会所蔵の国宝源氏物語の複製に着手、49年中巻を完成。53年文化財保護委員会の技術保存事業として、東京国立博物館保管の単庵「鷺」、大阪四天王寺蔵の扇面古写経の着色木版の複製。54年東京芸術大学の依頼により、再び徳川黎明会本の源氏物語の着色木版複製に着手し、58年に上・下二巻を完成。複製木版技術第一人者、精妙細緻な技術を大成、59年紫綬褒賞。1963年没、83歳。 **版画家、複製模写、複製**

川瀬巴水 (かわせ・はすい/1883～1957年)

東京生れ。本名文次郎。1908年葵橋洋画研究所に学び、岡田三郎助に師事。10年鎌木清方に師事。12

年異画会に日本画初出品。13年異画会で褒状三等受賞。18年以降木版画の制作に打ち込む。30年米国オハイオ州トレド美術館の現代日本版画展に92点出品。33年日本美術協会第93回展で銅賞牌。54年日本木版画協会主催第1回新版画展に出品。57年11月27日東京で没、享年74歳。(佐) **浮世絵師、版画家、日本画家**

川田 清 (かわた・きよし/1932～1997年)

埼玉県生れ。1951年埼玉県立熊谷高校卒、55年東京芸術大学彫刻科卒。55年タケミヤ画廊で行われた「六土会展」に出品したほか、平和美術展、日本アンデパンダン展にも出品する。64年国画会彫刻部入選。65年同会彫刻部で野島賞。66年同会彫刻部会友、67年会友優作賞を受賞し、同会会員。66年東京銀座のスルガ台画廊で個展を開催。69年年毎日現代日本美術展に出品。70年、73年に東京のときわ画廊で個展。64年東京の愛宕山画廊で個展。小学校教員。東京で没、65歳。 **彫刻家、美教**

河内雅溪 (かわち・がけい/1874～1943年)

山梨県生れ。本名は菊太郎、別号に帰雲斎。上京して橋本雅邦に入門、東美校に入学するが、岡倉天心・雅邦らの辞職に殉じて退校、日本美術院に入る。連合絵画共進会で活躍、セントルイス万国博覧会で銀牌受賞。美術研精会・二葉会会員。1943年没、70歳。 **日本画家**

河内成幸 (かわち・せいこう/1948年～)

山梨県生れ。1973年多摩美術大学油画科卒。76年日本版画協会会員。79年日動版画グランプリ展で受賞し、グレンヘン国際版画トリエンナーレ展で最高賞。82年ノルウェー国際ビエンナーレ展最高賞。85年文化庁芸術家在外研修員制度でコロンビア大学留学。2011年紫綬褒章。 **版画家**

河地知木 (かわち・ともき/1944年～)

京都府生れ。1967年佐賀大学教育学部特設美術科卒。73年二科展デザイン部受賞、会員。76年SDA賞、連続して同賞、77年九州グラフィックデザイン協会展会員出品。84年イタリア・ファエンツァ市国際デザインコンペで大統領賞。85年福岡県美術協会会員。九州産業大学芸術学部デザイン学科教授。 **デザイナー**

川名広喜 (かわな・ひろき/1910～1945年)

山口県生れ。1933年東京美術学校図画師範科卒。32年帝展入選。青森県立師範学校教諭。41年東京府立第二十一中学校教諭。第2回大東亜戦争美術展に「敵潜水艦と闘ふ輸送船〇〇丸」(1942年)、「洞庭湖鷺進船団」(1943年)。人物画や風景画をよく描い

た。講談社雑誌『少女倶楽部』(昭和17年9月号かー昭和19年2月号)、東京・大阪日日新聞雑誌『大日本少年』(昭和15年3月15日号から昭和18年4月15日号)の表紙や挿絵も描いている。45年戦没、34歳。 **洋画家、挿絵**

河鍋曉齋 (かわなべ・きょうさい/1831～1889年)

茨城県生れ。はじめ歌川国芳に浮世絵を、次いで狩野派に学ぶ。1858年狂斎と号し狂画、錦絵を描き、71年曉齋に改めた。73年ウィーン万国博に出展。独自の画風を確立し、肉筆画、錦絵、版本を制作。東京で没、58歳。 **江戸時代絵師、日本画家、浮世絵師、版画**

川邊正巳 (かわなべ・まさみ/1906～1997年)

鹿児島市生れ。九州帝国大学卒。鹿児島で銀行員として働き、終戦まで日本各地や中国大陸、朝鮮半島などの郷土玩具を蒐集した。「川邊コレクション(玩具、版画、文献等8743点)」として鹿児島県歴史資料センター黎明館の所蔵となり、鹿児島県指定有形文化財の指定を受けた。清永完治を訪問し、交友を深めている。版画はその清永に勧められ制作。1997年没、91歳。 **玩具コレクター、版画**

川辺御楯 (かわべ・みたて/1938～1905年)

福岡県生れ。6歳で父に狩野派を学び、1849年久留米藩の絵師三善真琴に入門、師と共に狩野派から土佐派に転向。68年藩命上京、太政官に出仕。70年神祇少祿官、74年伊勢神宮権禰直、77年公職を辞し以後画業に専念。「新田義頭血戦図」(宮内庁蔵)など、東洋絵画会、日本美術協会で活躍。幕末から明治初年の活動は、平田派神道、国学者の典型を示す。1905年没、67歳。 **日本画家**

川西 英 (かわにし・ひで/1894～1965年)

神戸市生れ。1915年神戸商業学校卒。25年家業を継ぎ、22年～60年兵庫東出郵便局長。山本鼎版画に感動、木版画。23年日本創作版画協会展入選。32年日本版画協会会員。28年国画会展入選、35年国画会会員。代表作に「神戸百景」(33～36年)、「兵庫百景」(39年)。49年兵庫県文化賞。神戸市で没、70歳。 **版画家**

川西祐三郎 (かわにし・ゆうさぶろう/1923～2014年)

神戸市生れ。父は版画家・川西英。父を師として8歳の頃より木版画制作をはじめ、後に日本版画協会、国画会会員として活躍。1947年関西学院大学商経学部卒。42年日本版画協会展、新文展に入選。日本版画協会会員。66年奈良教育大学非常勤講師。60

年神戸市文化賞受賞。71年国画会会員。2014年没、91歳。版画家、美教

河野 扶 (かわの・たすく/1913～2002年)

宮崎県生れ。1930年高鍋中学校卒、有田四郎に師事。31～33年川端画学校に学ぶ。41年東京帝国大学理学部数学科卒。45年旧制専門学校、新制大学、都立高校で教員。46年毎日新聞社主催の論文募集に応募、「天皇制を論ず」で最優秀賞。60年独立美術協会展に出品、会友、65年退会。無所属として活動。70年教職を辞して、渡欧。72～77年巴里画廊、現代画廊、アートプラザ、あかね画廊で個展。84年宮崎県総合博物館に作品を収蔵。96年多摩美術大学附属美術館で個展。2002年没、89歳。洋画家、美教

川端玉章 (かわばた・ぎよくしょう/1842～1913年)

京都府生れ。父に蒔絵を学び、1852年中島来章に入門、円山派を学ぶ。小田海僊に <https://kotobank.jp/word/%E7%94%BB%E8%AB%96-48145> んだ。66年視眼鏡、版下絵、新聞付録などを描く、洋画も学ぶ。内国勸業博覧会、内国絵画共進会などで受賞。東京美術学校設立に際し、天心らに認められ、88年同校雇、90～1912年教授。日本絵画協会、新派系の日本画団体に出品、旧派の日本美術協会にも参加し、円山派に西洋絵画の写実をとり入れ、晩年は文人画も研究96年帝室技芸員、09年川端画学校を開設。89年臨時全国宝物取調局臨時鑑査掛嘱託、97年古社寺保存会委員、古美術保護にも尽力し、画壇の重鎮として幅広い活動を展開した。1913年没、71歳。日本画家、版画

川端謹次 (かわばた・きんじ/1909～1998年)

兵庫県生れ。1929年上京、川端画学校に学ぶ。37年東京美術学校西洋画科卒。47年神戸に転居、第四神戸高等女学校教諭。53年光風会会友。55年日展で特選。56年光風会会員に推挙、日展無鑑査。68年神戸女子短期大学教授、関西大学講師。97年神戸市文化賞。98年没、89歳。洋画家、美教

川幡正光 (かわばた・まさみつ/1890～1973年)

1890年生れ。草土社にも所属。岸田劉生作「川幡正光氏之肖像」(1918作/東京国立近代美術館所蔵)のモデルにもなっている。樺貞雄、中川一政、木村莊八らと同時期に活躍した。1919年白樺派の仲間。草土社第七回展覧会記念/写真に劉生たちと一緒に写っている。1926年聖徳太子奉賛展に出品。27、28、29年「一九三〇年協会」展出品。川幡瑞徳の父。1973年没、83歳。洋画家。洋画家

川端 実 (かわばた・みのる/1911～2001年)

東京生れ。1934年東京美術学校油画科卒。39年渡欧。50～67年多摩美術大学教授、～85年特別講師。53年日本アブストラクト・アート・クラブ結成。58年現代日本美術展で神奈川近代美術館賞、渡米、グッケンハイム国際展で個人表彰名誉賞。92年京都国立近代美術館、大原美術館で個展。東京で没、90歳。川端玉章の孫、父は日本画家・茂章。洋画家

川端弥之助 (かわばた・やのすけ/1893～1981年)

京都市生れ。1918年慶應義塾大学法学部卒。19年関西美術院で澤部清五郎に師事。22～25年渡仏、アカデミー・コラロッシに入学、シャルル・ゲランに師事。24年サロン・ドートヌヌ入選。32年春陽会賞。39年春陽会会員。56～63年京都市立美術大学教授。71～79年嵯峨美術短期大学教授。73年京都市文化功労者。京都市で没、88歳。洋画家、美教、版画

川端龍子 (かわばた・りゅうし/1885～1966年)

和歌山市生れ。1904年葵橋洋画研究所、太平洋画会研究所で学ぶ。国民新聞社などに勤め、挿絵を描く。13年訪米、帰国後と日本画に転じた。15年再興日本美術院展に「狐の怪」が入選、翌年には「霊泉由来」が樗牛賞を受賞するなど頭角を現し、17年には同人。28年脱退。29年青龍社を創立、主宰。59年文化勲章。63年龍子記念館開館。東京で没、80歳。日本画家、版画

河端亮治 (かわばた・りょうじ/1924?～1989年)

1924年頃生れ、53年行動美術協会展で奨励賞、55年同会会友、59年行動美術協会賞、同会会員。大阪で没、65歳。洋画家

河原朝生 (かわはら・あさお/1949年～)

東京生れ。1970年文化学院美術科入学。72年渡伊、ローマ国立美術学校で油彩画を学ぶ。77年ローマのイル・テット画廊で個展。79年湯島・羽黒洞で個展開催。ピッツォ・カラプロ絵画展でヴァレンティア賞。ペルージャのジャニコロ画廊、ローマのイル・テット画廊と契約。83年「从展」上野・東京都美術館に招待出品。銀座・画廊轍で個展。85年新宿・小田急百貨店で個展。93年以降ギャラリー椿中心に個展開催。84年銀座三越で個展。2011年東京オペラシティギャラリーで個展。洋画家

川原慶賀 (かわはら・けいが/1786～1860年)

長崎県生れ。別号に聴月楼主、のち田口に改姓。父の川原香山に画の手ほどきを受け、石崎融思に学

んだ。1811年出島に自由出入り権利を長崎奉行所から得て「出島出入絵師」として活動。23年に長崎にオランダ商館の医師として来日したシーボルトに画才を見出され、多くの写生画を描いた。28年のシーボルト事件の時にも連座していた。42年にその作品が国禁にふれ、長崎から追放された。その後再び同地に帰り、75歳まで生存していた。画法は大和絵に遠近法あるいは明暗法といった洋画法を巧みに取り入れたもので、父香山とともに眼鏡絵的な写実画法を持つ。来日画家デ・フィレニューフェの影響も受けたとみられる。1860年没、75歳。洋風画家、長崎画

河原修平 (かわはら・しゅうへい/1915～1974年)

倉敷市生れ。金光中学校卒、上京し、川端画学校、太平洋美術学校に通う。藤島武二に学ぶ。1934年東光会展入選、のち会員。47年倉敷素描絵画研究所を開設。47年坂田一男に学ぶ、坂田の没後、燈灰会を主宰した。1974年没、59歳。洋画家

河原英雄 (かわはら・ひでお/1911～2005年)

兵庫県生れ。1928年兵庫県立豊岡中学校卒。30年家業のナガセ印刷に務め、絵画制作。豊岡市展で市長賞、以後招待作家。52年国画会展入選、以後5回入選、55年版画部入選、新人賞、61年新人賞。56年日本版画協会展入選、新人賞、58年福井賞、会友、63年会員、75年審査員。78年兵庫県「ともしびの賞」。兵庫県美術家同盟展出品、会員。88年「このとり天空を飛ぶ」障壁画を制作(豊岡市総合体育館)。豊岡市公益功労者表彰。89年豊岡市「ふる里創生案」最優秀賞。91年ギリシャ国際版画展出品。画集『河原英雄作品集』を出版。2005年没、94歳。版画家

川原慮谷 (かわはら・ろこく?/生誕年不詳～1872年)

川原慶賀の子。登七郎、張六。姓を田中に改め、通称を富作。写生を得意とし、西洋画風を巧みに用いた。弘化の頃、今下町で長崎版画や銅版画を作って販売していたとみられる。1872年没。江戸時代の絵師、長崎版画、版画家

川辺外治 (かわべ・そとじ/1901～1983年)

富山県生れ。1920年富山師範学校卒。23年「図画指導法」を出版。32年富山県立砺波高等女学校に転任。37年大潮展で特選。46年富山県洋画連盟を發起、結成する。56年北陸美術功労賞。65年「画業40年回顧展」(佐藤美術館)。72年富山県文化功労賞。73年北日本文化賞。74年「川辺外治作品集」刊行。76年彩彫会富山県文化功労賞。78年勲五等瑞宝章。1983年没、82歳。洋画家、版画

河辺昌久 (かわべ・まさひさ/1901～1990年)

新潟県生れ。1924年日本初のアンデパンダン(無選展)である首都無選展に出品。参加構成員となる。単位三科会員。35年新興美術協会展に入選。38年二科展に入選。戦後は光陽会を中心に発表。81年光陽会名誉会員。90年没、89歳。洋画家

川辺御楯 (かわべ・みたて/1838～1905年)

福岡県生れ。父は狩野派の川辺正胤。三谷三雄に師事し、狩野派を学ぶ。後に土佐派に転じる。維新後に上京、太政官に出仕。土佐光文に師事して大和絵を学ぶ。免職後は京都で友禅の下絵や正倉院御物の模写などを手掛け、1882年内国勸業博覧会、84年同会で受賞。大和絵歴史画家として名をあげる。皇室への献画も多数。門人に邨田丹陵、中村岳陵など。1905年没、67歳。日本画家、版画

川俣 正 (かわまた・ただし/1953年～)

北海道生れ。1972年北海道岩見沢東高等学校卒、79年東京藝術大学美術学部油絵科卒。84年東京藝術大学大学院博士後期課程満期退学。82年ヴェネツィア・ビエンナーレ。87年ドクメンタ8、サンパウロ国際ビエンナーレ。99～2005年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。00年越後妻有アートトリエンナーレ/日本文化芸術振興賞。07年フランス国立高等美術学校教授。13年芸術選奨文部科学大臣賞。造形作家、インスタ

川又常正 (かわまた・つねまさ/生没年不詳)

1700年代に作品が多く制作。川又常行の門人。作画期は享保から延享の頃にかけてで、師の常行と同様の温雅な画風の肉筆美人画を数多く残す。釣雪斎と号したが、署名は「常正筆」でほぼ一貫している。古典文学や故事を題材とした見立絵を得意とし、江戸で活躍したと見られるが、京都の人気絵師西川祐信の絵本から図様を拝借した京風俗を描いた作品もある。現在確認されている作品数は50点前後である。門人に川又常辰がいる。江戸時代の浮世絵師

川村 勇 (かわむら・いさむ/1927～2013年)

岩手県生れ。独学で学び、画壇から離れた活動で「孤高の画家」と称された。1948年ころ「画家を志して上京。60年香港大学から招かれ、2年間助手として従事。外遊は16回。78、79年日展入選。85年湯田町に町立川村美術館が開館。92年湯田町に町立川村デザイン館が開館。盛岡市で没、86歳。洋画家

河村目呂二 (かわむら・めろじ/1886～1959年)

岐阜県生れ。大阪医科専門学校を中退し、1914年美術学校を卒、大正博に出品。15年レート化粧品本舗図案部に入社。竹久夢二に傾倒し、目呂二人形を制作し始める。26年銀座松屋で猫うちわ展開催。28年主情派美術会を結成。29年構造社会員。49年名古屋丸栄デパートで猫絵展開催。1959年没、73歳。目呂二人形、立体、版画

川村悦子 (かわむら・えつこ/1953年～)

滋賀県生れ。1980年京都市立芸術大学西洋画科専攻科修了。克明な描写と虚実が絡み合う作風が注目集める。2004～05年文化庁芸術家在外研修員としてミラノに滞在。09年京都の真澄寺襖絵を手掛ける。10年京都府文化賞。12年京都美術文化賞。12年京都造形芸術大学教授。洋画家

川村清雄 (かわむら・きよお/1852～1934年)

江戸生れ。1863年川上冬崖、高橋由一に西洋画技法を学ぶ。71年徳川家留学生として渡米。73年渡仏。76～81年ヴェネツィア美術学校に学ぶ。83年勝海舟の援助で画室。89年明治美術会評議員。99年日本美術院で川村清雄絵画展覧会。1901年「巴会」を結成。奈良県で没、82歳。洋画家

川村吾蔵 (かわむら・ござう/1884～1950年)

長野県生れ。1902年県立上田中学卒、03年美術研究学生として渡米し、以来米国を主として仏、英、伊、独にあること約40年、其の間、1909年仏国に留学、彫塑家ド・F・W・マクモニースの助手として、研究、12年エコール・デ・ボザール入学、特待生。恩師マクモニースと共同して製作した紐育市図書館前の噴水像や同じく市庁前の噴水像等紐育市の著名な記念像製作者として名をなし、17年以降にはケーリツヂ大統領胸像や故華頂宮博忠王殿下の胸像等知名の士の胸像製作の他、ホルスタインの模範乳牛牝牝一対製作以来牛馬の研究10年、作品は教育材料として全米の農科大学及び日、英、仏、独、カナダの農科大学に設置され、牛の彫塑の一人者。欧米彫塑界では著名、40年帰朝故郷に引揚げた。46年日展に「ミスター・ブロッター」を出品し、47年横須賀米海軍基地司令官デツカー少将により横須賀に移住、アトリエを貸与、再起製作。マッカーサー元帥、ア中將、デツカー少将等々進駐軍首脳のブロンズを次々と製作、最後に尾崎弔堂、ヘレン・ケラーの塑像製作半ばにして長逝した。横須賀市で没、66歳。彫刻家

河村俊子 (かわむら・としこ/1910～1966年)

東京生れ。聖心女子学院卒。1925年小林万吾に油絵の指導をうけ、39年熊岡美彦の絵画研究所に学

ぶ。40年東光会展入選、41、42年受賞、43年会友、47年会員、52年退会。43年文展入選。46、50年日展入選。47年女流画家展、47年美術団体連合展に参加出品。以後、53年・55年・57年・60年個展開催。55年日本版画院に入会。56年立軌会の会員。56年国際アートクラブ会員。61年女流版画会員。1966年没、56歳。洋画家、版画

川村信雄 (かわむら・のぶお/1892～1968年)

熊本市生れ。東京開成中学校中退、1908年太平洋画会研究所で洋画を学ぶ。川上涼花らと雑誌を150号続け、展覧会開催。11年齋藤与里、高村光太郎、岸田劉生らと「ヒュウザン会(のちフェウザン会)」結成。26年齋藤与里、裕伊之助らと日本美術家協会をつくり展覧会を開催。25年横浜に川村画塾開設。38年太平洋画会会員、戦後も太平洋画会委員、神奈川県美術家協会会員。65年横浜文化賞。横浜市で没、76歳。洋画家

川村曼舟 (かわむら・まんしゅう/1880～1942年)

京都府生れ。1898年円山派、山元春挙門に入塾。1900年～身古美術品展出品、20代で認められた。19年帝展審査員。22年京都市立絵画専門学校教授。31年帝国美術院会員。33年山元春挙の死去に伴い早苗会を継承。36年京都市立絵画専門学校校長就任。文展特選、二等賞、三等賞多数。京都で没、63歳。日本画家、美教

河村目呂二 (かわむら・めろじ/1886～1959年)

岐阜県生れ。大阪医科専門学校を中退し、1914年美術学校を卒、大正博に出品。15年レート化粧品本舗図案部に入社。竹久夢二に傾倒し、目呂二人形を制作し始める。26年銀座松屋で猫うちわ展開催。28年主情派美術会を結成。29年構造社会員。49年名古屋丸栄デパートで猫絵展開催。1959年没、73歳。目呂二人形、立体、版画

河目悌二 (かわめ・ていじ/1889～1958年)

愛知県生れ。1913年東京美術学校西洋画科卒。15年『トモダチ』(二葉社)の挿絵を描く。小林商店(現・ライオン株式会社)広告部図案係に勤務し、博覧会会場の装飾、新聞・雑誌広告を手がける。25年『少年倶楽部』(大日本雄弁会講談社)の挿絵。27年『子供之友』(婦人之友社)の挿絵。28年『観察絵本キンダーブック』(フレーベル館)の挿絵。『少女倶楽部』(講談社)の挿絵。46年『観察絵本キンダーブック』の表紙絵。47年『こどもクラブ』(大日本雄弁会講談社)の挿絵。1958年没、69歳。挿絵作家、表紙

河本一男 (かわもと・かずお/1906～1962年)

松山市生れ。小学校卒業後朝鮮に渡り、1925年朝鮮美術展特選。27年太平洋画研究所で中村不折に師事。27年帝展入選。29年太平洋画会準会員。二科展二度入選、43年以降創元会に所属。46年愛媛美術協会の創設、運営に参画。51年愛媛美術連盟を結成、52年合体して愛媛県美術会を結成。53年県美術会理事長。1962年没、56歳。洋画家

河本緑石 (かわもと・りよくせき/1897～1933年)

鳥取県生れ。倉吉中学校卒。盛岡高等農林学校卒。兵役。同校の一学年上にいた宮沢賢治と、文学同人誌「アザリア」を発行するなど交流を持った。四十連隊の入隊中「砂丘社」結成に参加、同人誌で編集を担当。自由律俳句や詩のほか油彩画も描いた。詩集『夢の破片』、遺稿集『大山』などの著書がある。1933年没、36歳。編集、俳句、洋画

川面稜一 (かわも・りょういち/1914～2005年)

大阪生れ。1934年京都市立絵画専門学校卒、40年絵画専門学校時代の恩師である入江波光より、文部省紀元2600年事業・法隆寺金堂解体修理に伴う壁画模写事業に、助手の一人として参加を要請。47年に復帰。50年文化財保護委員会美術工芸課の委嘱を受け、56年の京都・平等院鳳凰堂中堂扉絵をはじめとする五ヶ寺の所蔵する美術作品の模写事業を立案し、60年には京都・醍醐寺五重塔初重壁画、62年京都・法界寺阿弥陀堂壁画、63年奈良・室生寺金堂壁画及び金堂諸像の板光背、66年京都・海住山寺五重塔内陣扉絵など、次々と重要な美術作品の現状模写を行った。平等院鳳凰堂中堂の扉絵模写を手掛けた際に翼楼の柱の朱塗を依頼されたのが、「建造物彩色」というそれまでにはなかった新しいジャンルの確立、そして氏がその第一人者となる契機となった。柱をはじめとする建築部材の現存する彩色を、綿密に調査した上でそれを尊重しつつ修理・復元彩色を施す「建造物彩色」は、60年代頃になってようやく定着を見せ始める。68年の京都・六波羅蜜寺本堂の向拝の復原彩色事業であった。京都・北野天満宮本殿中門、西本願寺唐門、二条城唐門などをはじめ数多くの建造物の復原彩色を手掛け、72年には、二条城二の丸御殿襖絵の模写事業が開始。三十年を経た現在もなお継続中のこの事業では、経年変化を見せる建築と新しく模写を行った襖絵とが調和するように、制作当初と考えられる彩色を復元しつつ、それに一定の古色を付す「古色復元模写」の手法が初めて取り入れられた。84年有限会社川面美術研究所を設立。その後も、京都・清水寺三重塔、富貴寺大堂内部壁画の彩色復元等建造物彩色の草分けとしてその業績は特筆に値する。84年京都府文化財保護基金より文

化功労賞。86年内閣総理大臣より木杯授与。97年建造物彩色選定保存技術保持者に認定。2000年日本建築学会より建築学会文化賞。養父野村芳光が祇園都をどりの舞台美術を担当していた縁により、それを継承し長年にわたって背景画制作を行った。92年舞台美術協会より伊藤熹朔賞。その他、美術作品のレプリカ製作にも携わった。2005年没、91歳。建造物彩色の国選定保存技術保持者、日本画家

河原 温 (かわら・おん/1932～2014年)

愛知県生れ。51年上京、54、56年タケミヤ画廊で個展。59年渡米後、北米、中南米、欧州各地を遍歴。65年NYに定住。「色彩暗号文」、「Today」シリーズ制作。80年ストックホルム近美個展、各地を巡回。81年国立国際美術館個展。2008年東京都現代美術館個展。NYで没、81歳。コンセプチュアル、版画家

川原田徹 (かわらだ・とおる(別名トーマス・カボチャラダムス)/1944年～)

鹿儿島県生れ。1963年東京大学に入学。69年東京大学を中退。門司港に戻り、独学で絵を描き始める。76年銅版画を始める。81年西武美術館大賞展優秀賞。絵画、銅版画、絵本、ポスターを制作。建築デザインにもたずさわる。90年詩人:谷川俊太郎との共著『かぼちゃごよみ』を出版。91年絵本『かぼちゃ人類学入門』を出版。2002年門司港の古い洋館を改築したカボチャドキヤ国立美術館国立美術館を開館する。自らが館長。版画家

川原井正 (かわらい・ただし/1906～2008年)

茨城県生れ。1924年川端画学校を経て、26年本郷絵画研究所に移り、岡田三郎助に師事。春台展にも数回出品。39年進藤章ら「菁々会」を結成。戦後、計器製造会社に勤めた。68年役員定年63歳で退職。69年自宅に事務所を置き、進藤章、葛西康と3人で「菁々会」を復活。銀座・月光荘ギャラリーで開催。76年会長の進藤章が逝去し、追悼進藤章菁々会展を葛西康と二人で開催。2008年没、101歳。洋画家

菅 一郎 (かん・いちろう/1894～1975年)

大分県生れ。1912年大分中学校卒。上京、19年彫刻家・片岡角太郎の家に寄宿、川端画学校に通い、片多徳郎宅へ出入りした。21年帝展特選。帝展に出品し、37年以降の新文展で無鑑査。26～42年佐伯中学校の図画教師・郷里の美術教育に貢献。1975年没、81歳。洋画家、美教

菅 一郎 II (かん・いちろう/1894～1975年)

大分県生れ。川端画学校卒。1920年中央美術展に出品。21年九州沖縄八県連合美術展に出品。第3回

帝展で特選。その後も帝展、新文展に無鑑査出品。大分県美術会展に出品。22年平和記念東京博覧会に出品。第4回第帝展に無鑑査出品。23年聖徳太子奉賛美術展に出品。25年から27年にかけて大分画壇に出品。36年佐伯中学の壁画「神の井」制作。37年新光会第1回展に出品、以後3回展まで出品。44年戦時特別展に出品。75年没、享年81歳。(佐) **洋画家、美教**

神吉敬三 (かんき・けいぞう/1932～1996年)

山口県生れ。浦和市に転居し、1948年埼玉県立浦和高等学校卒、56年上智大学経済学部卒。56～59年までスペイン政府給費留学生としてマドリド・コンプルテンセ大学に留学、65年上智大学外国語学部助教授、69年教授。70年にスペインの文化勲章である「賢王アルフォンソ十世章」。85年会田由賞。東京大学、東北大学、慶應義塾大学、学習院大学でも講じた。専攻は16世紀のバロック期からパブロ・ピカソに至る美術史。日本で催された大半のスペイン絵画美術関連の展覧会図録の解説を担当するなど、スペイン美術研究の第一人者だった。1996年没、63歳。**美術史家**

岸 駒 (がんく、きし・こま/1749～1838年)

金沢市生れ。幼少より画事を好み上洛。1790年禁裡造営の際、円山応挙らと障壁画の御用をつとめ、のち朝廷に仕え、1809年)息子の岱(たい)と金沢城の障壁画を描く。晩年は洛北岩倉に天開窟を構えて隠棲。1836年長年の功により蔵人所衆、従五位下。特定の師はなく、狩野派、南蘋派、四条派を独習。筆法の鋭い写実的描写によって、トラ、クジャクなどの動物画にすぐれる。長男の岱、養子の良、義子の連山、望月玉川、白井華陽など門人が多く、四条派に対抗して岸派を形成。主要作品『自画像』、『猛虎図』(前田育徳会)、『孔雀図』。京都で没、89歳。岸派の祖、**江戸時代後期の画家**

神田日勝 (かんだ・にっしょう/1937～1970年)

東京生れ。1945年終戦直前の集団疎開。50年鹿追中学校入学し、美術部53年中学卒、美術が特に優れ賞を受ける。東京芸術大学に進んだ兄に代わり、農業を継ぐ。56年平原社展出品、朝日奨励賞を受賞。60年全道展入選、66年全道展会員。70年全道展に代表作『室内風景』を出品。1970年没、32歳。代表作:「室内風景」(1970)美術史に残る名声。北海道立近代美術館「神田日勝の世界展」や、NHK「日曜美術館」でも紹介され、多くの感銘を呼ぶ。2013NHK新・日曜美術館で再び紹介された。**洋画家**

神田禎之 (かんだ・よしゆき/1914～1993年)

横浜市生れ。東京美術学校在学中の1938年小林源太郎らと「成層絵画研究集団」結成。第1回展を銀座紀伊国屋画廊で開催。福田豊四郎の知遇を得て、創造美術、新美術協会に参加。46～87年都立石神井高校の美術教師。日本画は60年新制作展へ出品が最後。「Group13」展に出品、油彩画で新たな画境を開いた。**日本画家、洋画家**

菅野 功 (かんの・いさお/1927～2006年)

川崎市生れ。松村画廊、横浜せんたあ画廊で個展を開催。1980年TVK テレビで作品が紹介される。86年横浜市主催の横浜美術招待展に出品。横浜美術協会会員、川崎市美術展審査員。2006年没、79歳。(出典 わ眼) **洋画家**

菅野くに子 (かんの・くにこ/生誕年不詳)

東京生れ。武蔵野美術大学油画科卒、山口長男に師事。リトグラフ、エッチングを制作。1998年より手漉き和紙による制作。2001年ガレリア・グラフィカ(東京)、05・07年ギャラリー一舫(東京)、09年アトスペースエリコーナ(いわき)、11年新発田市市民ギャラリー(第1回アート・ナウしばた)、mu-an(長岡)、12年ギャラリーゴトウ(銀座)、15年ギャラリーアビアント、02・04・06・08・10・13年新潟絵屋で個展。**洋画家、版画家、手漉き和紙に描く**

神原 泰 (かんばら・たい/1898～1997年)

仙台市生れ。中央大学卒業後、フランス語、ラテン語、イタリア語を学び、前衛詩人として活動。1922年アクションを創立、24年解散。未来派美術協会、MAVO、DSDと結集して三科造形美術協会を結成。24年「造形」が結成参加。「造形」が「造形美術家協会」に再編集されると同会に参加せず、以後、詩作や美術評論などで活躍。97年没、99歳。画家、詩人として大正期の前衛芸術運動の指導者として活躍した。**洋画家、美術評論**

神原 浩 (かんばら・ひろし/1892～1870年)

神戸市生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1916年関西学院を中退、渡米、キューバで制作。20～24年渡仏。アカデミー・コラロッシンに学ぶ。サロン・ドートンヌ入選。エッチングを研究。28年帝展入選。37年新文展入選。神戸女学院、関西美術院等で教える。日本版画協会会員。西宮市で没、78歳。**洋画家、美教、版画**

神戸智行 (かんばん・ともゆき/1975年～)

岐阜県生れ。1999年多摩美術大学日本画専攻卒、

2001年同大学大学院日本画専攻修了。99～02年岐阜市美術展奨励賞受賞、佐藤国際文化育英財団奨学生に選出。2008年文化庁在外研修員としてアメリカのボストンで研修。**洋画家**

神戸文子 (かんべ・ふみこ/1926～2009年)

東京生まれ。女子美術大学卒。日展特選、光風会賞、女流画家協会賞。女流画家協会委員、日本ガラス絵協会委員に所属。国内外の油彩風景画を展開、近年には中東地域の取材を元に砂漠地方の人々を描いたシリーズを制作。2009年没、83歳。**洋画家**

き

喜井黄羊 (きい・こうよう/1901～1997年)

徳島県生れ。関西芸術院を卒業後、1932年矢野鉄山に師事。大阪美術協会常任委員監査、吹田市美術家連盟役員、吹田市展審査員、大阪美術家協会委員などを歴任。文部大臣賞や大阪府芸術文化功労賞。吹田市文化賞。徳島県由岐町名誉町民。紺綬褒章。富岡鉄斎の流派を受け継いでいる。1997年没、96歳。**日本画家**

木内 廣 (きうち・ひろし/1920～1989年)

栃木県生れ。1940年太平洋美術学校卒。青山義雄に師事、48年国画会入選、49年国画会会友、51年同会員。同展への出品を続けたほか、東京・銀座兜屋画廊をはじめ毎年個展を開催し制作発表を行う。東京で没、69歳。**洋画家**

祇園井特 (ぎおん・せいとく/1755～1815年)

1755年生れ。肉筆画を中心に、円山派の写生を基礎とした、遊女や芸妓などの美人画を多く遺している。本居宣長の肖像画や解剖図を手がけた。1815年没、60歳。**江戸時代の京都の浮世絵師**

祇園卓志 (ぎおん・たくし/1913～1980年)

岡山県生れ。1938年新文展入選。以後新文展、日展に出品。54年光風会会員。美術団体連合展に出品。1980年没、68歳。**洋画家**

菊川英山 (きくかわ・えいざん/1787～1867年)

江戸生れ。本姓は菊川俊信、通称は近江屋万五郎、号は重九齋。絵は初め狩野派を学んだ父に習い、のち鈴木南嶺の門人となり、また葛飾北斎、喜多川歌麿の影響も受けて一家をなした。菊川流の祖。門人に溪齋英泉らがいる。主要作品『風流美人近江八景』。上州で没、80歳。**江戸時代後期の浮世絵師**

菊川多賀 (きくかわ・たか/1910～1991年)

札幌市生れ。清原斎、堅山南風に師事。1948年院展入選。61年から3年連続で日本美術院賞(大観賞)、82年院展で内閣総理大臣賞。文楽や歌舞伎に画題を求めた作品を多く描いた。力づよい群像表現で知られた。1991年没、80歳。**日本画家、版画**

菊池 理 (きくち・おさむ/1950年～)

東京生れ。1968年新宿美術研究所。75年早稲田大学東洋哲学科卒。仏、ボルドー市立大学留学。1981年「成瀬美術の会」主宰。85年「如魯の会」設立。93年等迦会に出品。95年等迦会会員。99年以降金井画廊で個展開催。豊橋で個展。2002年等迦会賞。04年TVでイッキ描き披露。12年渡欧。**洋画家**

菊池一雄 (きくち・かずお/1908～1985年)

京都生。藤川勇造に師事。東大在学中に1930年二科展に入選。36年渡仏。デスピオに師事。帰国、新制作展に出品。戦後京市美教授、48年には第1回毎日文化賞、49年には毎日出版文化賞。52～76年東京藝大教授。東京で没、76歳。(出典 わ眼)**彫刻家、美教**

菊池契月 (きくち・けいげつ/1879～1955年)

長野県生れ。1896年内海吉堂に南画を学ぶ。四条派の菊池芳文に師事し、98年新古美術品展で一等賞、99年絵画共進会展で一等賞。菊池家の婿養子、菊池姓を名乗。長男・菊池一雄は長じて彫刻家、次男・菊池隆は日本画家。1908年文展で二等賞、09年3等賞、10年二等賞、同作は11年にローマで開催された万国芸術博覧会に出品。11年京都市立絵画専門学校助教諭。14年の『ゆふべ』、『媼』、16年『花野』などが生み出された。16年文展で永久無鑑査作家、17年絵画専門学校助教諭。18年芳文が死去すると、師の後継者として「菊池塾」の主宰者。18年絵画専門学校の教授、文展の審査員。1955年没、77歳。**日本画家、美教、版画**

菊池健蔵 (きくち・けんぞう/1925～1996年)

神奈川県生れ。1953年日展入選、1962年日展特選、日展依属26回、日展会員。1960光風会展でプールブ賞、光風会会員、創業会会長。八王子市で没、70歳。**洋画家**

菊池秀一 (きくち・しゅういち/1910～1983年)

北海道生れ。中村善策に師事。1948年一水会会員、61年同展で会員優品、のち同会委員。東京で没、73歳。**洋画家**

菊池寿太郎 (きくち・じゅたろう/1859～1944年)

江戸生れ。国沢新九郎に洋画学ぶ。1876年工部美術学校でラグーサに洋風彫刻を学ぶ。82年工部美術学校卒。95年明治美術会展覧会委員。96年白馬会の結成に参加、会員。98年白馬会絵画研究所が菊池邸に設置。1910年日英博覧会の為、久米桂一郎と渡欧。帰国後彫刻家として西洋彫刻、石膏複製の制作普及に努める。44年没、86歳。**彫刻家**

菊池精二 (きくち・せいじ/1908～1973年)

札幌市生れ。1927年上京、同舟舎洋画研究所で学び、佐伯祐三に師事。「1930年協会」展に出品。31年独立展に入選。以後、同展に発表。33年北海道独立美術作家協会の結集に参加。巴里新興美術展の出品作や三岸好太郎に影響。40年独立美術協会会員。55年多摩美術大学教授。東京で没、65歳。**洋画家、美教**

菊地武彦 (きくち・たけひこ/1960年～)

栃木県生れ。1984年多摩美術大学大学院油画科修了。84年行動展で新人賞。88年行動展で行動美術賞。89年安田火災美術財団奨励賞展で新作秀作賞受賞。90年行動美術協会記念賞、行動美術協会会員。和紙に岩絵具を樹脂膠で線条に定着させた《線の気韻》シリーズ、96年資生堂ギャラリーで個展開催。多摩美術大学で後進の指導。**洋画家**

菊池芳文 (きくち・ほうぶん/1862～1918年)

大阪生れ。初め滋野芳園を師とし、のち幸野楳嶺に就き、竹内栖鳳・谷口香嶠・都路華香とともに楳嶺門下の四天王に数えられる。近代的な構図や色彩を取り入れた花鳥画で知られ、特に桜の絵を能くした。京都絵専教授。帝室技芸員・文展審査員。1918年没、57歳。**日本画家、版画**

菊地又男 (きくち・またお/1916～2001年)

札幌市生れ。1949年、自由美術協会会員推薦。56年、北海道美術協会創立。97年「北海道の抽象絵画—未知の形象を求めて」(北海道立旭川美術館)、98年「菊地又男展 芸術の森美術展」(札幌)開催。2001年没、85歳。(出典 わ眼)**洋画家**

菊池容齋 (きくち・ようさい/1788～1878年)

江戸生れ。狩野(かのう)派をはじめ和・漢・洋の画法や有職故実をまなぶ。全国の古社寺、旧家をたずねて名書画、宝物などを研究し、1836年成果を「前賢故実」に集大成し、歴史画に新生面をひらいた。東京で没、89歳。作品に「堀河夜討図額」「阿房宮図」など。**江戸、明治時代絵師、日本画家**

菊地養之助 (きくち・ようのすけ/1889～1983年)

福島県生れ。1924年川端画学校で絵画を、35年クロッキー研究所でデッサンを学ぶ。56、62、63年新制作春季展で春季賞。59年原水爆禁止世界大会記念美術展に出品。62、63、66年新制作展日本画部で新作家賞、67年会員。創画会が結成、会員。東京で没、95歳。**日本画家**

菊池怜司 (きくち・れいじ/1946～1968年)

北朝鮮生れ。1965年上智大学経済学部入学、美術研究会に入会。日本美術家連盟(JAA)版画工房に通う。68年大学中退、日本版画協会展で新人賞。68年JAF(国際芸術見本市協会)展入選、シェル美術展で3等入選。68年没、22歳。作品は町田市立国際版画美術館に収蔵。**版画家**

菊畑茂久馬 (きくはた・もくま/1935～2020年)

長崎県生れ。1953年福岡県立中央高校卒。56年〈ペルソナ展〉に出品。57年前衛美術グループ「九州派」設立に参加。58年より、読売アンデパンダン展に出品。国立近代美術館で開催の「現代美術の実験」展、南画廊で62、64年個展以後、前衛美術のホープとして注目。83、86年油彩作品「天動説」シリーズ、「月光」を東京画廊で発表。88年北九州市立美術館で個展。オブジェ、レリーフ作品で知られ、近年は絵画制作を中心。執筆《菊畑茂久馬著作集全4巻》。2020年没、73歳。**洋画家、オブジェ、レリーフ、前衛、九州派、版画**

菊谷 栄 (きくや・さかえ/1902～1937年)

青森県生れ。1915年青森県立青森中学校入学。20年同校卒。21年上京日大芸術科入学し川端画学校に通う。28年白日会入選。30年新カジノ・フォーリー舞台装置家参加。エノケンがオペラ館に「ピエール・ブリアント」を創設した際に文芸部員。エノケンの全盛期時代の軽演劇の作品を手掛けた。1937年戦没、34歳。**舞台装置**

木坂宏次朗 (きさか・こうじろう/1968年～)

京都府生れ。1991年に京都精華大学造形学部洋画科卒。93年にフィンランドに渡り、市、政府より奨学金、助成金。96年帰国後は京都を中心に活動。作品はイギリスの詩人の言葉を基本的な主題とし、卵テンペラによる絵画と木炭による素描を描く。絵画のみに留まらず、ダンスや演劇、オペラグループのためのステージデザイン、衣装デザイン、メイクアップデザイン、グラフィックデザイン等を含む舞台美術家としての活動。**洋画家、舞台美術、デザイン**

木澤定一 (きざわ・ていいち/1929～2007年)

東京生れ。1948年日大芸術学部入学。50年林武・田近憲三選出による新進15人展十月会出品。55年安井賞候補以後2回。56年三杉会結成。57年新進46人展。58年兜屋画廊にて個展 以後6回。62年横浜高島屋、63年東京高島屋にて個展。69年渡欧フランス・イギリス・イタリア・スペイン、オランダ・ベルギー・ギリシャ取材。高島屋中心に個展。2007年没、7

8歳。2007年高島屋美術部創設百周年記念展(横浜、大阪、京都、東京、米子、岡山、岐阜) **洋画家**

岸田淳平 (きしだ・じゅんぺい/生誕年不詳)

大阪生れ。関西学院大学卒。1984年個展以降全国で個展。東京ではギャラリー椿、シブヤ西武百貨店、杏美画廊、日辰画廊。グループ展多数。著書に「放課後読書」、「犯罪的放浪」(立風書房)、詩画集「春の涙腺」(ギャラリー椿)。ウヅジ市立美術館、東京オペラシティ美術館、米子市立美術館等に作品収蔵。 **洋画家**

岸田夏子 (きしだ・なつこ/1940年～)

和歌山県生れ。岸田劉生の孫。1963年東京芸術大学絵画科油絵専攻卒。65年同大学院を修了。84年個展(東京銀座の資生堂ギャラリー)。99年尾道白樺美術館館長。2000～05年清春白樺美術館館長就任。ブリュッセルにて個展(ベルギー大使館主催)。10年個展「岸田夏子の世界展(香美市立美術館/高知) **洋画家**

岸田陸象 (きしだ・りくぞう/1919～2002年)

長野県生れ。1947年長野県展に木彫作品が入選。49年中村直人、53年新海竹蔵に師事、院展に入選、以後連続入選して57年、日本美術院院友。62年創造美術会に彫刻部を新設して同展に出品を続け「冥想の曲」が東京都知事賞。85年長野県立信濃美術館で個展。2002年没、83歳。 **彫刻家**

岸田劉生 (きしだ・りゅうせい/1891～1929年)

東京生れ。1908年葵橋洋画研究所で学ぶ。10年文展入選。雑誌「白樺」の影響を受ける。12年ヒューザン会(のちフェウザン会)展を開催。独特の写真表現へ転向。15年草土社創立、22年まで9回開催出品。17年二科展で二科賞。春陽会の創立に客員参加、のち会員、25年退会。27年大調和会展に出品。23年京都へ移住。29年渡満。山口県で没、38歳。 **洋画家、版画、日本画**

岸田麗子 (きしだ・れいこ/1914～1962年)

東京生れ。父は劉生。15歳で父を喪う。武者小路実篤の1937年の新しき村で知り合った歯科医師と結婚。梅原龍三郎らに師事。大調和会創立会員。朱葉会会員。62年没、48歳。娘の岸田夏子は油絵画家、清春白樺美術館館長。 **洋画家、美術館館長**

木島桜谷 (このしま・おうこく/1877～1938年)

京都市生れ。京都市立商業学校を中退。19歳のとき今尾景年の門に入って四条派を学ぶ。同時に山本

谿愚について漢詩を学んだ。花鳥、山水、人物すべてをこなすほど画技の冴えをみせ、1907年文展で毎回受賞。13年文展では景年にかわって審査員を務めた。12年京都市立美術工芸学校教諭、15年京都市立絵画専門学校教授。円山四条派風の様式のうえに自己の工夫を加えて、平明で親しみのある画風をつくり、菊池契月とならんで文展が生んだ最初の花形作家。1938年没、63歳。 **日本画家、美教**

岸本清子 (きしもと・きよこ/1939～1988年)

名古屋生れ。1959年多摩美術大学日本画科卒。60年読売アンデパンダン展に出品。ネオ・ダダイズム・オルガナイザーに参加。ネオ・ダダの紅一点。60年代から扇情的で反体制的なパフォーマンスを行い、前衛作家として活躍。64年新橋内科画廊で個展。65年シェル美術賞展で3席。金沢21世紀美術館、宮城県立美術館で展示、収集。88年没、49歳。 **洋画家**

北大路魯山人 (きたおおじ・ろさんじん/1883～1959年)

京都府生れ。賀茂別雷神社の社家の家柄、養子先を転々として幼年時代。画家志望であったが、書や篆刻(てんこく)、日本画の分野で才能を認められ、1921年東京に美術店。料理にも興味をいだき修行を重ね、会員制の食堂を開く。陶磁器の制作にも意欲的に取り組み、桃山時代の陶芸を範とする作品を次々と生み出した。25年東京、赤坂に会員制の料亭「星岡茶寮」、27年鎌倉に「魯山人窯芸研究所星岡窯」を開設。陶芸に専念。戦後は進駐軍に才能を認められた。その縁で欧米各地の博物館や美術館をめぐり、講演する機会を得、日本の伝統美と独自の美を融合させた芸術家として国際的な評価。1959年没、76歳。 **篆刻家、日本画家・陶芸・書家・漆芸・美食、料理**

北岡数彦 (きたおか・かずひこ/1910～1978年)

神奈川県生れ。神戸洋画研究所に学ぶ。太平洋美術会参与。1978年没、68歳。 **洋画家**

北岡文雄 (きたおか・ふみお/1918～2007年)

東京生れ。東京美術学校卒。平塚運一主宰の「キツツキ会」、戦後は恩地孝四郎主宰の「一木会」に参加。1951年春陽会版画部を創立。55、56年渡欧米。抽象的な版画、木口版画を制作。風景版画に秀品。93年北海道立近代美術館で個展。東京で没、89歳。(出典 わ眼) **版画家**

北折 整 (きたおり・せい/1960年～)

東京生れ。1985年東京藝術大学大学院修了(油画技法材料)。2000年上野の森美術館大賞展(優秀

賞)。02年宮城県芸術選奨。現在 東北生活文化大学勤務。洋画家

喜多川歌麿 (きたがわ・うたまる/1773～1806年)

川越又は江戸生れ。繊細で優麗な描線の特徴とした美人画で知られる歌麿の作品は、写楽、北斎、広重らと肩を並べ国際的に高名な浮世絵師として広く名声を得ている。生年、出生地、出身地などは不明な点も多い。幼い頃に狩野派の絵師、鳥山石燕に学び1780年代には黄表紙や挿絵の錦絵などを手掛けた、1800年代には浮世絵美人画の第一人者。歌麿が活躍した寛政年間には歌麿や写楽ら人気絵師たちが活躍した浮世絵黄金期。1806年没、33歳？江戸時代の浮世絵師

喜多川歌麿 II (きたがわ・うたまる/1753～1806年)

埼玉県生れ。幼い頃に狩野派の絵師、鳥山石燕に学び1780年代には黄表紙や挿絵の錦絵などを手掛けた。1800年代には浮世絵美人画の第一人者に上り詰める。歌麿が活躍した寛政年間には歌麿や写楽ら人気絵師たちが活躍した浮世絵黄金期。葛飾北斎と並び国際的にもよく知られる浮世絵師で繊細で優麗な描線の特徴とし、さまざまな姿態、表情の女性美を追求した美人画の大家。1806年没、33歳？江戸中・後期の浮世絵師・狂歌師

北川五郎 (きたがわ・ごろう/1916～1988年)

岐阜県生れ。本郷洋画研究所、川端画学校に学ぶ。1963一水会展佳作賞。一水会会員。岐阜県文化奨励賞。1988年没、72歳。洋画家

北川威夫 (きたがわ・たけお/1912～1990年)

滋賀県生れ。1960年光風会会員。滋賀大学1967年「美術科教育」が設置。絵画を専門とする北川威夫(滋賀県師範学校・文検西用)が学科目「美術科教育」に所属した。77年退任。元滋賀大学教授。大津市で没、78歳。滋賀県立美術館に収蔵。洋画家、美術教育

北川健次 (きたがわ・けんじ/1952年～)

福井県生れ。1976年多摩美術大学大学院美術研究科修了。駒井哲郎に銅版画を学び、池田満寿夫の推挽を得て作家活動を開始。75年現代日本美術風ブリヂストン美術館賞。89年より「箱」を主題に立体表現展開、90年文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。銅版画とオブジェの分野における第一人者的存在。版画、油彩画、オブジェの他に写真、詩、評論も手がける。造形作家(版画、オブ)、洋画、評論

北川民次 (きたがわ・たみじ/1894～1989年)

静岡県生れ。早稲田大学予科中退。1914年渡米。18年アート・ステューデントズ・リーグ夜間に通う。24年メキシコ国立美術大学卒。31年タスコに野外美術学校を移転し、校長を務める。36年帰国。37～79年二科会会員。52年創造美育協会を創立。愛知県で没、95歳。(出典 わ眼)洋画家、美術教育、版画家

北川 実 (きたがわ・みのる/1908～1957年)

広島県生れ。大正末期に上京。霞光や鶴岡政男らと交友し、野間仁根に師事した。1936年二科展に初入選、以後も同展で活動した。45年帰郷し、府中造形美術協会を結成。1957年没、49歳。洋画家、版画家

木田金次郎 (きだ・きんじろう/1893～1962年)

北海道生れ。1908年上京。有島武郎を知る。19年東京で作品展開催。28年満州・朝鮮写生旅行。大連個展。45～49年全道美術協会創立会員。54年北海道文化賞。59、62年日本橋高島屋で個展を開催。北海道で没、69歳。(出典 わ眼)洋画家

木田金次郎 II (きだ・きんじろう/1893～1961年)

北海道生れ。1909年開成中学中退。10年黒百合会第三回展で、有島武郎の描いた海の小品に感銘、数日後に自宅訪問。18年木田をモデルにした有島の小説「生まれ出る悩み」の連載が大阪毎日新聞と東京日々新聞で始まる。19年東京の有島のアトリエで作品展開催。21年上京。23年このころ漁業を離れ画業に専念。30年岩内町議会議員。45年全道美術協会の創立に参加。50年岩内町文化賞。54年北海道文化賞。岩内大火で油彩など1500点程焼失。57年北海道新聞文化賞。59年日本橋高島屋で個展開催。61年12月15日岩内町で没、享年68歳。(佐)洋画家

北久美子 (きた・くみこ/1945～2019年)

大阪生れ。1966年浪速短期大学美術科卒。二紀展(以降毎年出品 褒賞、奨励賞、佐伯賞、宮本賞、宮永賞、菊華賞受賞)。73年女流画家協会展(以降毎年出品 花椿賞、O夫人賞、K夫人賞、女流画家協会賞受賞)。84年安井賞展(～'86、'88、'90年安井賞受賞)。90年文化庁芸術家在外特別研修員。二紀会委員 女流画家協会委員。2019年没、73歳。洋画家

北郷 悟 (きたごう・さとる/1953年～)

福島県生れ。1977年東京造形大学彫刻科卒。79年東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。83年奈良天理ビエンナーレ大賞。91年新潟大学助教授。96年文化庁在外研修(イタリア・ミラノ、ブレラアカ

デミア美術学校)。97年東京芸術大学助教授(2006年教授)。80, 82年新制作展新作家賞。04年いわき市立美術館で回顧展。テラコッタ具象彫刻を先導。2001年ギャラリーせいほうと、ときの忘れものの2会場で新作展を同時開催、銅版画を制作。彫刻家、版画

北澤映月 (きたざわ・えいけつ/1907～1990年)

京都市生れ。1922年京都市立第二高等小学校同校卒、23年上村松園に師事。32年土田麦僊に入門、その画塾山南塾で学ぶ。36年改組帝展に入選。40年院展で院友。41年院展で日本美術院賞第三賞。同人。70年院展で内閣総理大臣賞、80年文部大臣賞を受賞。61年日本美術院評議員。川崎市で没、82歳。日本画家

北澤収治 (きたざわ・しゅうじ/1890～1960年)

長野県生れ。横浜商業学校に学ぶ。1912年に細井種生につき、石版画を習得。16年日本水彩画展、17年二科展に入選。19年日本創作版画協会展に入選、27年同会会員。39年長野県立長野商業学校で教えた。31年日本版画協会の創立に会員、参加。春陽会展にも参加。36年「信濃創作版画協会」を結成。長野県で没、70歳。版画家、美教

北沢楽天 (きたざわ・らくてん/1876～1955年)

東京生れ。大幸館絵画研究所で松室重剛、堀江正章に師事。横浜の英字週刊誌ボックス・オブ・キュリアスに入社、絵画を担当。1900年時事新報社に入り漫画を描く。05年漫画週刊誌「東京パック」を創刊し、漫画の普及につくした。27～29年欧州巡遊、漫画を描いて毎週送り、ロンドンで個展を開催。帰国後「楽天全集」7巻、「楽天パック」を刊行、「家庭パック」発行。大宮市で没、79歳。漫画家、日本画家、版画

北沢良知 (きたざわ・りょうち/1937～1980年)

長野県生れ。60年日本アンデパンダン展出品。県展、独立展、二科展に出品。78年アンデス地方旅行。石切り場で働く傍ら絵を描く。東京で個展開催。80年没、43歳。2001年諏訪市美術館で北沢良知展開催。洋画家

北島浅一 (きたじま・あさいち/1887～1948年)

佐賀県生れ。1906年上京、白馬会洋画研究所で長原孝太郎に師事。12年東京美術学校西洋画科卒。17年光風会展で今村奨励賞。13, 15年文展入選。25年帝展で特選。19～22年渡欧、アカデミー・コロロン等に学ぶ、21年サロン・ドートンヌ入選。24年白日会創立に参加。29年第一美術協会の創立に参画、会員。東京で没、61歳。洋画家

北園克衛 (きたぞの・かつえ/1902～1978年)

中央大学経済学部卒。1927年「薔薇・魔術・学説」を創刊、超現実主義運動を起こす。35年「VOU」を創刊。写真をく詩そのもの」と定義する「プラスチック・ポエム」にたどり着く。グラフィック・デザイナーでありイラストレーター。当初は油彩を描き二科展入選画才にも恵まれた。おびたしい芸誌書に装幀、挿画家として関与。東京で没、75歳。多摩美術館図書館内に北園克衛文庫が設置。前衛詩運動の中心的存在。写真、絵画、デザイン、翻訳でも活躍。彫刻家橋本平八は兄。洋画家、グラフィック、イラスト、挿絵

北代省三 (きただい・しょうぞう/1921～2001年)

東京生れ。1939年新居浜高等工業専門学校機械科入学。48年モダンアート夏季講習会に参加。51年総合芸術グループ「実験工房」を結成、舞台美術等を担当。51年タケミヤ画廊、構成的油彩画で個展。ベニア・レリーフ、モビール等制作。2001年没、80歳。立体、モビール

北田克己 (きただ・かつみ/1955年～)

東京生れ。1984年東京藝術大学大学院後期博士課程満期退学。93年院展で奨励賞。95年文化庁買い上げ、山種美術館賞展 大賞。2001年 個展 高島屋(大阪・京都・東京) 松坂屋(名古屋)。03年院展 日本美術院賞・大観賞。10年日本美術院同人。愛知県立芸術大学 教授/広島市立大学 名誉教授。日本画家、美教

喜多武四郎 (きた・たけしろう/1897～1970年)

東京生れ。1915年東京府立第三中学を中退。17年戸張孤雁に師事。孤雁の勧めで川端画学校に学ぶ。版画は19年日本創作版画協会展に木版画が入選。20年再興日本美術院展に彫刻入選。20年日本美術院研究会員、石井鶴三から学ぶ。27年日本美術院同人。62年紫綬褒章。68年日本画府彫塑部会員。東京で没、73歳。彫刻家、版画

北爪益夫 (きたつめ・ますお/1897～1971年)

埼玉県生れ。1917年東京外国語学校卒。二科会展入選。22年東京美術学校西洋画科卒。中、高等学校の図画教師。65年槐樹社展に出品。67年槐樹社会員。71年没、74歳。洋画家、美教

喜多迅鷹 (きた・としたか/1926年～)

長崎県生まれ。埼玉県立浦和中学校、第一高等学校を経て、1948年東京大学法学部卒。埼玉県立浦

和高等学校、東京都立大学附属高等学校教諭、東京都立大学、横浜市立大学講師。71年学園紛争を機に画業に転向。92年「東京を描く市民の会」創立に参加。94年「彩の国を描く会」を創立、主宰。2001年読売・日本テレビ文化センターで「ペン水彩」講座開講。02年読売・日本テレビ文化センターで「模写による西洋美術史」講座開講。[著書] 珍陀の酒 ポルトガルスケッチ紀行 弥生書房。洋画家、美教、水彩、ペン画

杵谷精一 (きたに・せいいち/1897～1970年)

鳥取県生れ。1912年米子市角盤町角盤尋常高等小学校高等科卒。12年山陰日々新聞社石版部に入り、13年退社して上京、米子出身の彫刻家戸田海笛に師事。20年日本彫工会第34回展に出品し、22年日本美術院入選し、以後入選22回に及ぶ。61年同院彫塑部の解散により、同部有志と共に日本画府に合体し、日本画府彫塑部を新設し、その創立委員。主要作「首」(22年日本美術院)、「父の像」(25年)、「戸田海笛氏像」(日本美術院19回展)、「鈴木千代松先生像」(日本美術院21回展) 東京で没、72歳。彫刻家

木谷千種 (きたに・ちぐさ/1895～1947年)

大阪生れ。夫は木谷蓮吟。池田蕉園、北野恒富、菊池契月に師事し、1915年文展第9回以来官展に出品、女性的な人物画をよくした。近松研究家木谷蓬吟の夫人で私塾「八千草会」を開き後進の指導にも当たっていた。大坂で没、51歳。日本画家、版画

北野熊雄 (きたの・くまお/1905～1992年)

長崎県生れ。1933年東京美術学校図画師範科卒、浜松師範学校に赴任。一水会展に出品。1992年没、87歳。北野熊雄遺作画集。洋画家

北野恒富 (きたの・つねとみ/1880～1947年)

金沢市生れ。版画や南画の修業、1897年に画家を志して大阪に出る。稲野年恒の門下に入り、新聞小説の挿絵を描きながら修業を重ねた。1910年文展入選、11年文展で三等賞。14年再興院展に出品、17年同人院展で活躍。写生を根底に据えた官能的な美人画にはじまり、歴史人物に題材を取った浮世絵風の古典主義的な画面をへて、35年頃からは、しつとりとした情感を淡々と表現する作風に变化した。1947年没、67歳。日本画家、版画、浮世絵

北原悌二郎 (きたはら・ていじろう/1924～2012年)

福岡県生れ。1945年福岡第一師範学校卒。58年二紀展入選、以後、入選、同人賞、73年会員、76、8

7年鍋井賞。70年安井賞に出品。72年西日本美術展で特賞。79年九州大谷短期大学教授。柳川に住し、筑後の風景や風土を緻密なタッチで描く。2012年没、88歳。洋画家、美教

北村今三 (きたむら・いまぞう/1900～1946年)

神戸市生れ。1923年関西学院高等部商科卒。21年日本創作版画協会展出品。24年神戸版画雑誌『HANGA』に作品発表。京阪神の都会的な風景を木版画制作。29年川西英らと三紅会を結成三紅会版画展に14点出品(以後全6回展に出品)。32年日本版画協会会員。43年日本版画奉仕会会員。1946年没、46歳。版画家

喜多村知 (きたむら・さとる/1907～1997年)

大連生れ。1921年京都府絵画専門学校入学。26年川端画学校に学ぶ。30年帝展入選。41年新文展で特選。50年三越、52年資生堂ギャラリーで個展。63年渡欧。67年三越、76年現代画廊で個展。95年下関市立美術館で個展。97年没、90歳。(出典 わ眼) 洋画家

北村四海 (きたむら・しかい/1871～1927年)

長野県生れの彫刻家。1893年上京し島村俊明に牙彫を学ぶ。99年頃から大理石彫刻を試み、1900年渡仏。帰国後は日本大理石彫刻の第一人者として活躍。07年の霞事件は有名。代表作に「春秋」「イヴ」「凡てを委ねる」。27年没、56歳。(出典 わ眼) 彫刻家

北村西望 (きたむら・せいぼう/1884～1987年)

長崎県生れ。1907年京都市立美術工芸学校卒、12年東京美術学校卒、08年文展入選。以後文展、帝展などの官展に出品を続けた。19年帝展審査員、25年帝国美術院会員。21～44年東京美術学校教授。58年文化勲章受章、日本芸術院会員。代表作に『怒濤』(1915)、『晩鐘』(16、東京国立近代美術館)、巨像『長崎平和祈念像』(55)。東京で没、102歳。彫刻家、美教

北村種三 (きたむら・たねぞう/1902年～没年不詳)

大阪生れ。1921年青木大乘に師事。23年新燈社展に出品、28年新燈美術院展に出品。32年大阪三越で個展。42年新燈社20周年記念展に出品。洋画家

北村綱義 (きたむら・つなよし/1909～2006年)

佐世保市生れ。1936年文展入選。48年毎日新聞社主催連合展招待出品。53年国画会会員。58年渡

欧。67年銀座資生堂ギャラリーで個展。78年長崎展実行委員長。80年福岡市美術館主催のアジア現代美術展招待出品。83年長崎県特別教育功労章、長崎新聞社文化章。86年佐世保市政功労章(文化)。87年長崎県展審査員。88年地域文化功労者として文部大臣表彰。2006年没、97歳。洋画家

北村治禧 (きたむら・はるよし/1915～2001年)

長崎県生まれ。北村西望の長男。1937年東京美術学校彫刻科塑造部卒。68年日本芸術院賞を受賞。80年日本芸術院会員。81年日展常務理事、日本彫刻会常務理事。86年勲三等瑞宝章受章。87年日展理事長。90年日本彫刻会理事長。95年東京都北区名誉区民。東京で没、86歳。彫刻家

北村正信 (きたむら・まさのぶ/1889～1980年)

新潟県生まれ。北村四海の嗣子(四海の甥)。1911年文展に初入選。15年文展三等。18年文展で特選。以後無鑑査となり文展審査員。戦後は日展審査員・評議員として活躍した。80年没、91歳。(出典 わ眼) 彫刻家

木田安彦 (きた・やすひこ/1944～2015年)

京都市生まれ。1967年京都教育大学特修美術科構成専攻卒。66年ポスターが京都産業デザイン展で市長賞銀賞。70年京都市立芸術大学美術専攻科デザイン専攻修了。博報堂制作部勤務、毎日商業デザイン賞。77年にはグラフィック・デザイナーの世界で活躍。87年池袋の西武アートフォーラムで個展開催。2000年ニューヨーク ADC 賞、銀賞、優秀賞。04年京都美術文化賞。06年京都府文化賞功労賞。11年京都市文化功労者。04年松下電工汐留ミュージアムで「煌めきのガラス絵 木田安彦の世界」展。12年ミネルヴァ書房より『一刀の無限 木田安彦木版画集成』刊行、また池田20世紀美術館で「木田安彦 祈りの道」展が開催。2015年没、71歳。デザイナー、版画、ガラス絵、水墨

北 連蔵 (きた・れんぞう/1876～1949年)

岐阜市生まれ。1889年山本芳翠の画塾生巧館に入門、天真道場で黒田清輝に師事。92、95年明治美術会展に出品。97年東京美術学校西洋画科入学。昭和初期まで挿し絵を描く。98年白馬会展に会員として出品。1903年我が国最初のオペラの舞台背景画制作。14年まで帝国劇場背景画主任。16年文展入選。27年渡欧。戦争画を描いた。東京で没、73歳。洋画家、挿絵

北脇 昇 (きたわき・のぼる/1901～1951年)

名古屋市生まれ。1919年鹿子木孟郎の洋画塾、津田青楓洋画塾で学ぶ。33年独立美術京都研究所の設立に尽力。35年日本洋画協会を組織。36年以降シュルレアリスム絵画に傾倒、草分け。38年「創紀美術協会」結成。39年美術文化協会結成に参加。47年日本アヴァンギャルド美術家クラブ、京都新美術協会を結成。京都で没、50歳。洋画家、版画

吉川靈華 (きっかわ・れいか/1875～1929年)

東京生。幕儒吉川淡斎の子。浮世絵師橋本周延の門に入り、のち狩野派・土佐派を学ぶ。一時橋本雅邦や洋画家の小山正太郎に師事する。国史内典・有職故実に精通し、冷泉為恭に私淑して、大和絵風の画境を創り、端麗な白描画を能くした。金鈴社同人。帝展審査員。1929年没、55歳。日本画家、版画

橋野富彦 (きつの・とみひこ/1930～1994年)

山口県生まれ。1950年東京芸術大学油学科卒、フランスのパリで洋画に影響を受け、帰国し洋画家安井曾太郎に師事。55年国画会展 1955年にプルブ賞、56年30周年記念賞、56年同会会員、名誉会員。60年日本のグラフィックデザインの普及商業デザインにも注力した。1994年没、64歳。洋画家、デザイン

鬼頭 暁 (きとう・あきら/1925～1994年)

東京生れ。1946年東京美術学校日本画科卒。49年自由美術家協会会員。52年仏政府保護留学生。53年パリ国立美術学校入学。57年アマテュール・ダール賞、抽象絵画スイス賞。74年自由美術協会自由美術賞。個展中心に発表。94年没、69歳。(出典 わ眼) 洋画家

鬼頭甕二郎 (きとう・かめじろう/1897～1952年)

名古屋市生まれ。名古屋市立商業学校卒。本郷絵画研究所と日本美術院洋画研究所に学ぶ。1915、18、19年院展に入選。日本美術院院友。21～23年二科展に入選。23～28年渡仏、サロン・ドートンヌに入選。セザンヌの影響を受ける。院展洋画部同人より27～34年春陽会会員。52年没、55歳。洋画家

鬼頭鍋三郎 (きとう・なべさぶろう/1899～1982年)

名古屋市生まれ。名古屋商業学校卒。23年「サンサン」結成。1931年光風会会員。34年帝展で特選。44年陸軍美術展で陸軍大臣賞。63年日本芸術院会員。68～73年愛知県立芸術大学教授。70～80年光風会理事長。56年日本芸術院賞。63年日本芸術院会員。75年日展顧問。名古屋市で没、82歳。洋画家、美教

鬼頭鍋三郎 II (きとう・なべさぶろう/1899～1982年)

名古屋市生れ。1916年市立名古屋商業学校卒、明治銀行に入社(21年退社)。23年松下春雄らとグループ・サンサシオンを設立。第10回光風会展に初入選。岡田三郎助に師事。24年第5回帝展に初入選。辻永に師事。27年第14回光風会展で光風賞。31年光風会会員。33年第10回展でサンサシオンを解散。34年第15回帝展で特選。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。52年日展運営会参事。53年中日文化賞。54～55年渡欧。56年日本芸術院賞。58年日展評議員、光風会理事。63年日本芸術院会員。日展理事。68～73年愛知県立藝術大学教授。70年勲三等瑞宝章。光風会理事長。80年松坂屋で画業60年展開催。82年6月14日没、享年82歳。(佐)洋画家、美教

城所 祥 (きどころ・しょう/1934～1988年)

東京生れ。57年早稲田大学第一商学部卒。1961年日本版画協会会員。国際版画コンクール等国際展に多数出品。71年「鑿の会」結成。77～78年文化庁芸術家在外研修員としてパリ、ジュネーブ滞在。小口木版の代表作家。68～77年武蔵野美術大学講師。78～88年金沢市立工芸大学講師。東京で没、53歳。版画家、美教

城所昌夫 (きどころ・まさお/1920年～)

千葉県生れ。1938年自由美術家協会展出品。49年自由美術協会会員。50年モダンアート協会結成に参加、会員。51年タケミヤ画廊で個展。55年国際アートクラブ会員。装填に高い評価。60年全国美術家協議会結成に参加。65年主体美術協会の結成に参加、会員。洋画家

木戸征郎 (きど・せいろう/1938年～)

熊本県生れ。1970年二科展絵画部入選、76年熊本支部長、79年絵画部特選、80年会友、85年会友賞、89年会員、2000年会員賞。現在二科会監事、二科熊本支部支部長。洋画家

絹笠省三 (きぬがさ・しょうぞう/1920～1998年)

長野県生れ。篠田省三に師事。一陽会会員。日本水彩画会会員。戸隠の山岳風景を油彩、水彩で制作。80年絹笠省三画集刊行。1996年没、75歳。洋画家、水彩画家

衣笠泰介 (きぬがさ・たいすけ/1989年～)

京都市生れ。15歳から現代美術家の下村千砂子、北村信樹に油彩画、陶芸、立体造形を師事。20歳の時、京都のギャラリーミラクルで初個展。以下個展開

催地は大阪、京都、大阪、NY、札幌、東京。2014年、ニューヨーク現代美術 Zeroart 展優秀賞。洋画家

絹谷幸二 (きぬたに・こうじ/1943年～)

奈良市生れ。1966年東京藝術大学美術学部油絵学科卒、大橋賞、68年同大学院壁画科修了。68年独立美術協会会員。71年新鋭選抜展で優秀賞。71年伊留学、プレスコ画法を研究。74年安井賞。87年日本芸術大賞。93年東京芸術大学教授。2000年日本芸術大賞。01年日本芸術院賞。日本芸術院会員。洋画家、美教

杵淵やすお (きねぶち・やすお/1925～2014年)

東京生れ。1942年東京保善商業学校本科夜学課程卒。1960年漫画家から、挿絵画家へ転身。64年「ひよっこりひょうたん島」の絵本(全10巻)が、「絵・杵淵やすお」で鈴木出版から出版。70年学習研究社の「小学生の漢字読み書き字典」の初版から改訂版を含め、30年間挿絵を担当。86年現代童画展にて東京都知事賞。87年神奈川県展にて横浜市長賞。92年現代童画展にて委員作家賞。元・出版美術家連盟常任理事、日本児童出版美術家連盟(童美連)会員、元・現代童画会審査委員、元・現代パステル協会委員、麻生区美術家協会会員、元・文部省(現・文部科学省)教科書作成委員、元・東京都交通安全ノート作成委員。川崎市で没、89歳。漫画家(1960年前後まで)、挿絵画家、イラストレーター、童画家、洋画家

木内 克 (きのうち・よし/1892～1977年)

水戸市生れ。海野美盛に師事。1914年上京、朝倉文夫の彫塑塾で学ぶ。21年パリに留学、15年間仏滞。ブールデルに師事。27年テラコッタ技法を修得。35年帰国。37年二科会会友。48年より新樹会に出品。62年現代日本美術展優秀賞。70年中原悌二郎賞受賞。東京で没、84歳。彫刻家、版画

木下勝治郎 (きのした・かつじろう/1897～1972年)

大阪生れ。1915年本郷洋画研究所で岡田三郎助に師事。23年東京美術学校卒。23年佐伯夫妻と渡仏。グラン・ショミエール修了、デザインに進む。ラファエツト百貨店、パリの図案所主任。34年鐘紡図案依頼。29年鐘紡招聘帰国。40年鐘紡入社。72年没、74歳。洋画家、デザイナー

木下克己 (きのした・かつみ/1905～1972年)

和歌山県生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。教職。40年和歌山県美術協会創立に加わり、のち同会会長。41年新文展で特選。49年示現会会員。青甲会に属す。県展審査員。67年和歌山県文化賞。72年没、67歳。洋画家

木下佳通代 (きのした・かづよ/1939～1994年)

神戸市生れ。1962年京都市立美術大学西洋画科卒。63年京都アンデパンダン展出品。65年河口龍夫らと「位」と行動を伴にする。73年写真を用いたコラージュやドローイングの発表。77年現代日本美術展に出品、兵庫県立近代美術館賞。国際的に高い評価。81年ドイツ・ハイデルベルグで個展開催。82年から油彩に取り組む。**洋画家、コラージュ**

木下邦子 (きのした・くにこ/1904～1990年)

福岡市生れ。1921年九州高等女学校卒業後上京、和田三造に師事。24年帝展入選し、以後官展に6回入選。30年帰郷。戦後も日展にはほぼ毎年入選し、61年特選。49年示現会会員。花や静物を対象とした作品を得意とした。1990年没、86歳。**洋画家**

木下恵介 (きのした・けいすけ/1960年～)

福岡県生れ。1986年東京芸術大学大学院修了。84～98年日本版画協会展に出品、84年奨励賞(86年奨励賞、88年準会員賞、92年準会員賞)、第2回西武美術館版画大賞展・87年優秀賞。87年 VISIVA POESIA—7人の版画展(西武渋谷店美術画廊、92年まで毎年出品)。89年現代日本美術展(東京都美術館、京都市美術館)。99年アルゼンチン・リトグラフ展(アルゼンチン国立版画美術館、シボリ造形美術館)。2001年個展「I walk 2001」(6.4-6.16 養清堂画廊・銀座)。**版画家、洋画家、イラスト**

木下 繁 (きのした・しげる/1908～1988年)

和歌山県生れ。1928年建昌大夢に師事。帝展に出品、33年東京美術学校彫刻科卒、35年同研究科修了。文展に出品、38年特選、47年日展特選、53年日展審査員、62年日展評議員、69年日展文部大臣賞、75年日展理事。70年日本彫塑会理事。72年武蔵野美術大学教授。73年和歌山県文化賞。74年日本芸術院賞。77年日本芸術院会員、78年日展常務理事。79年勲三等瑞宝章。東京で没、80歳。**彫刻家、美教、版画**

木下秀一郎 (きのした・しゅういちろう/1896～1991年)

福井市生れ。日本医学専門学校卒。1920年未来派美術協会に出品。21年同会会員。22年未来派美術協会を三科インデペンデントと改称。24年アクションの神原泰や「MAVO」の村山知義ら急進的な青年画家と三科造形美術協会を結成。25年に同会は分裂、以降美術運動から離れ、医業に専念。91年没、95歳。**洋画家、版画**

木下 新 (きのした・しん/1929～2001年)

福岡県生れ。1947年現・糸島高校卒業。47年山田栄二、児島善三郎に師事。48年独立美術展入選、～56年入選。57年福岡県美術協会会員。57年前衛美術家集団「九州派」に参加。58年九州派展、88年九州派展(福岡市美術展)に出品。64年 渡米、ニューヨークに居住。絵画制作を継続。70年チェース・マンハッタン銀行のコレクション。74年渡仏、パリに居住。91年巨匠と新人展(グランパレ/パリ)に招待出品。98年ネオ・ダダ JAPAN1958-1998(アートプラザ/大分)に出品。パリで没、72歳。**洋画家、九**

木下 晋 (きのした・すすむ/1947年～)

富山市生れ。1963年自由美術協会展にクレヨン画出品最年少で入選。81年後に鉛筆画の第一人者と言われる鉛筆画を始める。現代画廊で個展。金沢美術工芸学校専任教授。名古屋芸術大学客員教授。2007年梅野記念絵画館、12年平塚市美術館で個展。**鉛筆画、美教**

木下孝則 (きのした・たかのり/1894～1973年)

東京生れ。1918年京都帝大、19年東京帝大中退。24年二科賞。26年「一九三〇年協会」創立会員。26～34年春陽会会員。28～35年渡欧。36年二科会会員。36年一水会創立に参加。58年日本芸術院賞。個展で発表。横浜市で没、79歳。(出典 わ眼)**洋画家、版画**

木下敏彦 (きのした・としひこ/1961年～)

兵庫県生れ。1975年独学で油彩画を学ぶ。90年渡米、ボストンで学ぶ。98年尼崎のカフェ・ド・コムシュトワで個展。2000年渡仏、取材の為毎年渡仏。03年近鉄阿倍野店で個展。13年大丸心齋橋店で個展。16年福岡三越で個展。**洋画家**

木下富雄 (きのした・とみお/1923年～2014年)

三重県生れ。1941年名古屋市立工芸学校卒。木版画を独習。58年日本版画協会展で日本版画協会賞。58年ニューヨーク、セント・ジェームズ教会主催の版画展で2等賞、作品はニューヨーク近代美術館の買い上。1995年三重県立美術館・県民ギャラリーで木下富雄展開催67点を展示。2014年没、91歳。2015年三重県立美術館で追悼展示 木下富雄展が開催。**版画家**

木下雅子 (きのした・まさこ/1905～1936年)

東京生れ。1922年女子学習院中等科卒。二科会の横井禮市に油絵を学ぶ。27年二科展入選。木下義謙と結婚。28～32年滞欧。33年「木下義謙、雅子

滞欧作品展」日動画廊。33年婦人美術協会を設立。36年、31歳で没。36年資生堂ギャラリーで「木下雅子遺作展」開催。洋画家

木下義謙 (きのした・よしのり/1898～1996年)

東京生れ。木下孝則は兄。1918年東京高等工業学校機械科卒。同年同校助教授。油彩画は独学。26年二科展で二科賞。26年「一九三〇年協会」会員。28～32年渡欧、サロン・ドートンヌに出品。36年二科会員を辞退、一水会創立会員。47年女子美術専門学校教授。50年日展で芸能選奨文部大臣賞。50年陶芸をはじめ一水会に出品、陶芸部を創設。76年和歌山県立近代美術館で個展。東京で没、97歳。洋画家、美教

宜野湾朝宏 (ぎのわん・ちょうこう/1834～1870年)

沖縄県生れ。唐名は向有章。三司官の宜野湾親方朝昆の四男。山水画、人物画、花鳥画を得意とした。1870年没、36歳。日本画

木葉井悦子 (きばい・えつこ/1937～1995年)

東京生れ。武蔵野美術大学油絵科中退。1970年代に2年間アフリカのナイジェリアで過ごし、帰国後の1978年に初めての絵本作品となる『あかいめのしろへび』を銀河社より出版した。生涯に17冊の絵本を出版。1995年没、58歳。洋画家、絵本

木原和敏 (きはら・かずとし/1958年～)

広島市生れ。ひろしま美術研究所出身。1983年東京セントラル美術館油絵大賞展入選。93年白日会展入選、95年会員、2011年内閣総理大臣賞。97年日展入選、99、2006年特選、10年審査員、11年会員。洋画家

木原 信 (きはら・しん/1914～2005年)

1914年生れ。篆刻入選3回、福岡墨画会主催、南林社同人、郵便記念切手ふるさとシリーズ「黒田節」などが存在する。「黒田節」では郵政省からの要望で一般の博多人形にはみられない髭を描き野性味あふれる九州男児を表現した。書も手掛けた。福岡県美術協会副会長、福岡市文化賞受賞、日本南画院展特選、日本南画院理事、福岡県展特選。日本画家

木原千春 (きはら・ちはる/1979年～)

山口県生れ。2001年 Gallery Kitamura/企画:舟越桂、個展。04年、05年柏わたくし美術館、神戸わたくし美術館で個展、06年「VOCA2006」上野の森美術館、09年山口県美術展覧会 佳作、09年前橋アートコンペライブ 2009 グランプリ、10年「木原千春展」池

袋西武、11年「木原千春展」現代 HEIGHTS GalleryDEN。12年よりロイドワークスギャラリーで毎年個展「Vitalism」開催。18年神戸わたくし美術館で個展。洋画家

木原康行 (きはら・やすゆき/1932年～)

北海道生れ。1954年武蔵野美術学校本科西洋画科卒。在学中は山口長男に師事。52年春陽会入選。70年渡仏、ウィリアム・ヘイターが主催するパリの銅版画工房「アトリエ 17」で銅版画を学び、パリに在住し制作を続ける。ヨーロッパ各地の展覧会に出品し、また日本でも個展を行う。77年中村真一郎と合作詩画集「死と転生」発表。99年フランス・画家・版画家協会の正会員。(日本人会員は長谷川潔について二人目)。版画家

儀間比呂志 (ぎま・ひろし/1923～2017年)

那覇市生れ。1946～51年大阪市立美術館研究所で学び、70年木版画に専念。55年堺市展会頭賞。58年行動美術展激励賞、59年新人賞、66年会友賞。69年『儀間比呂志版画集・沖縄』。71年『ふなひき太良』(岩崎書店刊、毎日出版文化賞。75年『鉄の子カナヒル』(岩波書店刊、サンケイ児童出版文化賞。『赤いソテツの実』『ねずみのハーリー』刊。80年中山良彦と沖縄戦版画集『戦がやってきた』(集英社)で沖縄タイムス社芸術選賞絵画部門大賞。74年『儀間比呂志の沖縄』(講談社)刊。94年版画集『儀間比呂志の沖縄』(海風社)、99年絵本『沖縄のわらべうた』(沖縄タイムス社)。2017年没、94歳。絵本、版画家

金 景承 (きむ・ぎょんすん/1915～1992年)

開城市生れ。39年東京美術学校彫刻科卒、建島教室で学ぶ。37年朝鮮美術展覧会入選。41年朝鮮美術家協会で評議員と彫刻分科会の委員、44年決戦美術展覧会の審査員。49年にソウル市の文化委員、50年朝鮮戦争勃発時、鐘路区の豊文女子高校の校長、戦争中はパルチザン討伐作戦に参加。マッカーサー像のほか、国会議事堂内に長らく展示されていた李舜臣像、ソウル・南山の白凡広場の金九像(関福鎮との共作)等の銅像を数多く手掛けた。1992年没、76歳。韓国の彫刻家

金 昌烈 (キム・チャンギョル/1929年～)

ソウル市生れ。1950年ソウル国立美術大学卒。パリや66～68年ニューヨーク・アート・スチューデントリーグで版画を学ぶ。69年パリに在住。97年 ポンピドーセンターで「メイド イン パリ展」に出品。2004年パリのジュードポム美術館で個展。作家生涯のほとんどにおいて、水滴を描くことに焦点を当てており、彼

の描く水滴はまるで今にも指で触れられそうな、精緻な立体感をもっている。1973年にその基本手法を確立してから、徹底して水滴とその影、浸み、したたりを描き続け、立体作品によってもその表現をぶれずに行っている。**洋画家**

金 昌烈 II (キム・チャンギョル/1929年～)

韓国ソウル市生れ。1950年ソウル国立美術大学卒。ニューヨークで版画を学ぶ。写実的な手法で水滴を描き「水滴の画家」として知られる。自己表現の意思を押し殺し、単純な作業の中で自然との一体化を求める韓国抽象絵画特有の求道的精神。「痛みを癒し、記憶を消す東洋の山水画」の世界。**洋画家**

金 復鎮 (きむ・ぼくじん/1901～1940年)

朝鮮生れ。1925年東京美術学校卒業後、左翼運動のため28年より6年間囹圄の身となり、35年より暫く京城中央日報学芸部長を勤務、又朝鮮美術院を創立して後輩の指導に当った。帝展、文展に入選3回、鮮選では6回特選。大作に全北金堤郡金山寺の丈60尺の弥勒仏があり、又忠北報恩僧離山法住寺の丈80尺の弥勒仏を未完成のまま逝去。京城で没、40歳。**彫刻家**

木村一生 (きむら・いっしょう/1932～2015年)

長崎市生れ。1951年長崎県立長崎東高等学校卒。57年東京芸術大学絵画科卒。55年浜屋百貨店で個展開催。58年読売アンデパンダン展に出品。59年モダンアート協会展出品し、60年会員。89年「木村一生の世界」展(池田20世紀美術館企画)。60～85年「新表現展」に出品。72年多摩美術大学助教授、83年教授。2015年没、83歳。**洋画家、美教**

木村克朗 (きむら・かつろう/1941年～)

岡山県生れ。1967年東京芸術大学油画科卒(安宅賞、卒業制作買上)、69～75年同大学院卒、渡伊(ミラノ国立ブレア美術学校在籍)。創形美術学校、東京造形大学勤務。すいどーばた美術学院主任、創形美術学校校長を歴任。個展;スルガ台画廊、グッゲンハイム画廊(ロンドン)、ボナパルテ画廊(ミラノ)、ギャラリー山口、ギャラリーセンターポイント、ギャラリーなかむら、奈義町現代美術館。**洋画家、美教**

木村瑛二 (きむら・けいじ/1904～1981年)

兵庫県生れ。1927年東京美術学校彫刻科本科塑造部卒。26年帝展入選、以後官展に出品を続け、38、39年新文展特選。戦後も日展に出品、度々審査員、33年評議員。52年東京教育大学教授。50年白

日会彫塑部常任委員、56年日本彫塑家倶楽部運営委員。1971年没、67歳。**彫刻家**

木村希八 (きむら・きはち/1934～2014年)

新潟県生れ。独学で各種版画に取り組み、1959年鎌倉市で石版画工房を開設。リトグラフの刷り師の草分け的な存在として活躍。商業主義的な「複製版画(エスタンプ)」を善しとせず、一貫して作家と刷り師との信頼関係、協働から生まれるオリジナル版画の制作。木村の刷りによる作家は平山郁夫、加山又造、片岡球子、草間彌生、篠田桃紅、鬚嘯等。刷り師の保存用に作られるP.P.版という非売扱いの版画が多く蓄積、新潟市美術館への374点が寄贈。2014年没、80歳。**版画家、版画摺師、コレクター**

木村光佑 (きむら・こうすけ/1936年～)

大阪生れ。1959年京都市立美術大学日本画科卒。63年コラージュ作品制作を契機に版画家に進む。71年リュブリアナ国際版画ビエンナーレで国際大賞。71年サンパウロ・ビエンナーレに日本代表参加。87年京都工芸繊維大学工芸学部教授。98～2004年同大学学長。92年国際芸術文化賞。99年京都美術文化賞。**版画家**

木村五郎 (きむら・ごろう/1899～1935年)

東京生れ。1915年山本瑞雲に木彫を習う。のち石井鶴三の指導を受け、19年日本美術院研究会会員。21年院展入選。26年日本美術院院友。27年日本美術院同人。1935年没、37歳。**彫刻家、版画**

木村 茂 (きむら・しげる/1929年～)

奈良県生れ。1953年神戸市立外語専門学校英米科卒。57年油絵から銅版画制作に転じ、泉茂の指導を受ける。62年東京国際版画ビエンナーレに出品。65年画業に専念。70年フィレンツェ国際版画ビエンナーレ、73年リュブリアナ国際版画展、74年ドイツ国際版画展に出品。国内外で高く評価。**版画家**

木村荘八 (きむら・しょうはち/1893～1958年)

東京生れ。葵橋洋画研究所で学ぶ。1912年岸田劉生らとヒュウザン会を結成。草土社を結成。院展、二科展に出品、18年第5回再興院展樗牛賞。24年春陽会会員。挿絵画家でもある。東京で没、65歳。59年日本芸術院恩賜賞。(出典 わ眼)**洋画家、挿絵、版画**

木村昭平 (きむら・しょうへい/1949年～)

愛知県生れ。1968年愛知県立岡崎北高等学校卒。76年現代日本美術展入選。77年個展(青木画廊、東

京)。80年、渡米、個展(アジア・グラフィック・センター、NY)開催。81年人人会会員。88年『鳥にんげんカワカワ』(福武書店)刊行。89年『大きな石のモアイ』(福武書店)、90年『不思議なロンゴ・ロンゴ』(福武書店)刊行、90年個展(中村正義の美術館)。91年、『オッペルと象』(文・宮沢賢治、福武書店)刊行。2004年、名古屋大学大学院文学研究科(インド文化学)修了。13年刈谷市美術館で個展。洋画家、絵本

木村辰彦 (きむら・たつひこ/1916~1973年)

東京生れ。1933年東京都立第四中学校を四学年で中途退学し、二科会美術研究所に入所、37年以降は安井曾太郎に師事。38年一水会展に初入選、以後、毎回出品、41年には岡田賞。46年一水会会員。43年文展無鑑査。45年信州に疎開。1973年没、57歳。洋画家

木村忠太 (きむら・ちゆうた/1917~1987年)

高松市生れ。1942年独立賞を受賞。43年帝国美術学校に学ぶ。48年独立美術協会会員。53年渡仏し、定住する。70年サロン・ドートンヌ会員。パリで没、70歳。(出典 わ眼)洋画家

木村定三 (きむら・ていぞう/1913~2003年)

名古屋市生れ。1932年第八高等学校文科甲類卒。東京帝国大学法学部、法学部政治学科卒、名古屋に戻り家業。66年大名古屋建物株式会社の社長。美術好きは書画骨董に関心を寄せた父と兄の影響、コレクションの幅は中国北魏の彫刻から現代の作品にまで及ぶ。38年名古屋丸善の画廊で開かれた熊谷守一の日本画の個展で強い感銘を受け、熊谷の芸術を賞揚し続けた。“法悦感”と“厳粛感”を第一義とする独特の芸術観を持ち、両者を兼ね備えた画家として熊谷を、また前者を代表する画家として小川芋銭、次いで池大雅を、後者の画家として浦上玉堂を第一とし、与謝蕪村がそれに続くとした。晩年には与謝蕪村「富嶽列松図」、浦上玉堂「山紅於染図」等の重要文化財、また熊谷守一、小川芋銭の作品を含む近世・近代の作品140点、北魏石仏等古美術品16点、考古工芸資料177件を愛知県美術館に寄託、寄贈、同館で2003年「時の贈りもの—収蔵記念 木村定三コレクション特別公開」展開催。名古屋市で没、89歳。美術収集家、コレクター

木村東介 (きむら・どうすけ/1901~1992年)

米沢市生れ。米沢商業学校を中退して上京し、一時憲政公論社に入社して侠客となったが、のち美術商を志し、1932年美術商「羽黒洞」を創立する。同36年東京・湯島に店舗を開く。柳宗悦、吉川英治ら広く

文化人と交流し、肉筆浮世絵、大津絵、泥絵のほか、幕末、明治初期の洋画を蒐集。また、長谷川利行、斎藤真一ら異色の画家たちを無名時代から支援した。著書に『女坂界限』『浮世絵渡世』等がある。東京で没、90歳。(出典;文化財研)美術商(古美術・近現代美術) 扱

木村八郎 (きむら・はちろう/1903~1979年)

愛媛県生れ。1911年、本郷絵画研究所に学ぶ、岡田三郎助に師事。春台展、帝展、光風会で活躍。42年文展で岡田賞、無鑑査。44年八幡浜美術館を結成。52年愛媛大学講師、愛媛県美術会創設理事長。1979年没、76歳。洋画家

木村秀樹 (きむら・ひでき/1948年~)

京都生れ。1974年京都市立芸術大学西洋画科専攻科修了。第9回東京国際版画ビエンナーレ・京都国立近代美術館賞。76年クラコウ国際版画ビエンナーレ・メダル賞。80年クラコウ国際版画ビエンナーレ・ポーランド写真協会賞。82年ビルバオ国際版画ビエンナーレ・第2席。87年和歌山版画ビエンナーレ・大賞。88年 MAXI GRAPHICA 設立。文化庁派遣在外研修員(米国)。2009年京都府文化賞・功労賞。嵯峨美術短期大学助教授を経て、京都市立芸術大学教授。版画家、美教

木村武山 (きむら・ぶざん/1876~1942年)

茨城県生れ。1888年南画家桜井華陵に師事。91年川端玉章の天真社で学ぶ。96年東京美術学校卒。日本画協会に参加。98年日本美術院創設に際し幅員。1906年日本美術院五浦移転に際し同行。07年文展3等賞受賞。14年日本美術院再興に際し経営者同人として参加。日本画家、版画

木村義男 (きむら・よしお/1899~1985年)

松江市生れ。1914年丸山晚霞を迎え開催の水彩画講習会に参加。平塚運一、清野耕主催の洋画研究所郷土社で学ぶ。15年上京、川端画学校で藤島武二に師事。16年日本美術院展入選。18年帰郷し、島根画壇の振興に貢献。松江洋画研究所の結成に参加。45年島根洋画会創立に参加、会長。1985年没、85歳。洋画家、美教

木村義治 (きむら・よしはる/1934年~)

東京生れ。笹島喜平氏に師事。日本版画院展工芸館賞・国画会展野島賞受賞。木版画制作。版画家

木村利三郎 (きむら・りさぶろう/1924~2014年)

横須賀市生れ。1947年神奈川師範卒。54年法政

大学哲学科卒。64年渡米。NYで、都市の崩壊と再生、宇宙をテーマに亡くなるまで制作活動。NYで没、90歳。ニューヨーク近代美術館、ブルックリン美術館、IBM本社、東京国立近代美術館、東京藝術大学等収蔵。14年没、90歳。 **版画家**

喜友名安信 (きゆうな・あんしん/1831～1892年)

沖縄県生れ。唐名は毛裔氏安信。1875年絵画修業のため沖縄島に渡り、首里の小波蔵安章に学んだ。91年まで蔵元絵師。兄の喜友名安著も蔵元絵師だったが、早世。八重山蔵元絵師画稿中に安信の作「牡丹図」が確認。弟子に黒島孫正、山里得次がいる。1892年没、61歳。 **洋画家**

喜友名朝記 (きゆうな・ちようき/1936年～)

沖縄県生れ。1959年琉球大学文理学部美術工芸科卒。64年沖展奨励賞。80年新象作家協会会員。96年文部省中学校課高等学校課編集表紙に「久高島のイザホー祭り」が採用。81年日本国際美術家協会会員。海外の展覧会に出品。87年沖縄タイムス芸術選賞大賞。 **洋画家**

清川泰次 (きよかわ・たいじ/1919～2000年)

浜松市生れ。1944年慶応義塾大学経済学部卒。51年二科展で二科賞。51～4年滞米、欧。55年美術文化協会会員。63年再渡米。83年浜松市美術館で個展。83年安田火災東郷青児美術館大賞。95年御前崎に「清川泰次芸術館」開館。2000年没、81歳。 **洋画家**

清田英作 (きよた・えいさく/1933～1989年)

久留米市生れ。1951年県立明善高校卒。51年西部水彩画協会展で協会賞。51年日本水彩展入選。61年一陽会入選。66年日本水彩画会会員、一陽会で受賞、73年会員。66、68年二度渡欧。帰国後は名古屋や東海地区を中心に各地で個展を開催。1989年没、56歳。 **水彩画家**

清塚紀子 (きよつか・のりこ/1940年～)

満州国奉天省撫順生れ。1968年東京芸術大学大学院油絵専攻を修了。～72年東京芸術大学、77年～東京造形大学で版画指導。2002～06年愛知県立芸術大学教授。70年東京国際版画ビエンナーレ展出品、71年日本版画協会展友賞。1976年第12回現代日本美術展で東京国立近代美術館賞。 **版画家、挿絵、美教**

清野克己 (きよの・かつみ/1916～1995年)

山形県生れ。山形中学校卒業後上京、近代洋画研究所に学ぶ。1938年自由美術協会展に入選。52年モダンアート展に出品、56年会員、審査員。62年東京国際ビエンナーレ展に選抜出品。88年山形美術館で「清野克己画業55年展」。95年没、79歳。 **洋画家**

清野 恒 (きよの・つね/1910～1955年)

山形県生れ。1935年早稲田大学文学部卒業。津田青楓洋画塾で学ぶ。35年黒色洋画展を組織。同年渡欧。39年帰国、自由美術協会を経て、モダンアート協会。87年までトキワ松学園横浜美術短期大学で教授。横浜市で没、84歳。 **洋画家、美教**

清原啓一 (きよはら・けいいち/1927～2008年)

富山県生れ。1948年富山師範学校卒。52明治大学政経学部卒。52年日展入選。東京で中学校教諭、辻永に師事。59年新日展特賞。64年光風会展会員賞。69年光風会審査員、73年光風会評議員。74年特別賞。75年日展審査員、78年辻永記念賞。79年日展評議員。88年光風会理事。94日展内閣総理大臣賞、2002年光風会常務理事、日展理事、日本芸術院賞・恩賜賞、同会員。03年日展常務理事。08年旭日中綬章。富山県立近代美術館で「清原啓一回顧展」開催。『清原啓一画集』(求龍堂)刊行。2008年没、81歳。 **洋画家**

清原啓子 (きよはら・けいこ/1955～1987年)

八王子市生れ。1976年多摩美術大学絵画科入学。深澤幸雄、渡辺達正らに銅版画を学ぶ。81年多摩美術大学大学院中退。82年日本版画協会展・日本版画協会賞。83年初個展(番町画廊・銀座)。84年個展(中野紅画廊・東京、ギャラリー保坂・甲府、由美画廊・浜松、NDA 画廊・札幌)。1987年没、31歳。 **版画家**

清原重以知 (きよはら・しげいち/1888～1971年)

徳島県生れ。1912年東京美術学校西洋画科卒。14年光風会展、文展に入選。以後、帝展、新文展、日展に入選。16年光風会展で今村奨励賞。28年光風会会友。31年光風会会員。帝展では37年から無鑑査出品。53年日展から無鑑査。東京で没、83歳。 **洋画家**

清原 玉 (きよはら・たま/1861～1939年)

江戸生れ。ラグーサ・玉とも称される。1877年ピンツェンツォ・ラグーサに西洋画の指導を受ける。彫刻のモデルになる。82年姉夫婦とともにパルモの工芸美術学校の教師としてイタリアに渡る。89年姉夫婦帰国後、ラグーサと結婚。1910年NY開催の国際美術展にイタリア画家として出品、婦人部最高賞。28年没、78歳。 **洋画家**

清原馬目 (きよはら・ばもく/1927～1998年)

東京生れ。父・重以知は洋画家。1942年旧制明星中学入学、障害で退学。1945年北海道に疎開。55年旺玄展努力賞、56年旺玄会賞、会員、58年牧野賞、同会委員、62年特賞、常任委員。66年美術集団0結成。68年吉祥寺のみつぎ画廊、80、82年ギャラ

リー陽栄で個展。83年以降武蔵野美術家協会展に発表。1998年没、71歳。洋画家

清原ひとし (きよはら・ひとし/1896～1956年)

茨城県生まれ。1913年県立土浦中学校卒。松本楓湖の画塾「安雅塾」に入門。今村紫紅、速水御舟、更に堅山南風に師事。『面白倶楽部』(講談社)に挿絵や童画を描く。26年北原白秋、岡本一平と「三人社」を設立、同人展開催。30年院展入選。院展に出品、54、55、56年日本美術院賞(大観賞)、1956年没、60歳。挿絵、童画、日本画家、木版画

清水九兵衛・清水六兵衛(7代) (きよみず・きゅうべえ/1922～2006年)

名古屋市生まれ。愛知一中へ進学。名古屋高等工業学校で建築を学ぶ。1953年東京藝術大学美術学部鍍金科彫刻卒。在学中に京都の清水焼の名跡、六代清水六兵衛の養子となり陶芸をはじめた。陶芸家として評価を高め日展の審査員も務めたが、その間もヨーロッパ、特にイタリアの現代彫刻に関心を持ち続け、67年日展を辞し陶芸をやめ抽象彫刻の制作を開始した。70年に、それまでの真鍮にかわり、アルミ合金を鑄造して艶消した抽象彫刻の制作を開始。81年七代清水六兵衛を襲名。陶芸活動を再開し、花器などの制作を行う一方、彫刻制作も引き続き行った。2000年に長男の清水柁博が八代清水六兵衛を襲名した後は彫刻に専念し、アルミやステンレス、陶を組み合わせた造形を模索した。75年宇部市の現代日本彫刻展で毎日新聞社賞・東京国立近代美術館賞。77年日本芸術大賞。79年ヘンリー・ムーア大賞展優秀賞。80年神戸須磨離宮公園現代彫刻展で大賞。85年吉田五十八賞。88年京都府文化賞功労賞。90年京都市文化功労者。90年紫綬褒章。京都で没、84歳。彫刻家、陶芸家

清水礼四郎 (きよみず・れいしろう/1915～1961年)

京都生まれ。5代目清水六兵衛の4男。芸術院会員6代目六兵衛の実弟。1933年京都市立美術工芸学校卒、38年東京美術学校彫刻科塑造部卒業、同校研究科に進み、40年修了。37年文展入選、以来2600年奉祝展をはさみ、第6回文展まで連続入選。50年年京都学芸大学彫刻科の講師、52同大学助教授。49年日展で特選。59年まで毎年入選。戦前戦後を通じ、京都市展や関西総合美術展で授賞したり、審査員を勤めるなど、また日本彫塑家クラブ関西支部展などで、関西彫塑界の中心的な存在として活躍した。京都で没、45歳。彫刻家、美教

桐谷洗鱗 (きり[が]や・せんりん/1877～1932年)

新潟県生まれ。1897年上京、富岡永洗に師事、橋本雅邦に師事。1907年東京美術学校日本画科選科卒。07年文展に入選。08年京都、奈良に赴いて仏画模写、「訪古画帖」を作成。インドに渡って「アジャンタ石窟壁画」の模写。16、17年文展入選。版画も制作。23年大震災火災絵巻制作。1932年没、56歳。日本画家、版画

桐弘史郎 (きり・こうしろう/1936～2016年)

広島県生まれ。東京芸術大学卒、大橋賞、同大学大学院修了、助手。牛島憲之に師事。現代日本新人作家展、国際形象展に出品。個展多数。無所属。東京で没、80歳。洋画家、版画

桐田頼三 (きりた・らいぞう/1910～1933年)

函館市生まれ。函館中学を4年で中退して上京。日本画を学ぶ一方、前田寛治に私淑し、3年間東京で絵の勉強をした。1930年第一美術協会展入選。31、32年独立展入選。函館で彩人社を結成し、前衛的美術運動を意識した活動を行なった。1933年没、23歳。洋画家

桐村 茜 (きりむら・あかね/生誕年不詳)

京都府生まれ、武蔵野美術大学美術学科(油絵専攻)卒。1992年パリのシテデザール(国際芸術都市)滞在のため渡仏、以後パリにて制作活動、2001年パリ郊外に仏政府のアトリエを得、活動の場を移し現在にいたる。2006年、日本政府文化庁海外特別研修員としてニューヨーク滞在。10～11年アーティスト・イン・レジデンス(メゾンドラグラヴェール、フランス)。ランスメゾンドアーティスト会員。サロン・ドートンヌ、アーティスト・ブック部門ADAGP賞(パリ、2010、2014)。日本美術家連盟会員。洋画家

桐谷天香 (きりや・てんこう/1896～1929年)

東京生まれ。桐谷洗鱗の妹。鈴木華邨に日本画を学ぶ。天香更紗を創始。1927年帝展に壁掛けが入選。1929年没、33歳。日本画家、染色家

木和村創爾郎 (きわむら・そうじろう/1900～1973年)

松山市生まれ。1924年京都市立絵画専門学校卒。33年から版画制作。42年上京、版画を制作。46年日展、版画協会展、20回国画会展版画を出品。48～60年日本版画協会会員、50年から光風会展出品、56年光風会会員。69年渡欧、巴里に滞在し、72年ル・サロンで金賞、ル・サロン無鑑査。71年渡欧ル・サロンで受賞、1973年没、73歳。版画家

金 景承 (きん・けいしょう/1915～1992年)

開城市生れ。39年東京美術学校彫刻科卒、建畠教室で学ぶ。37年朝鮮美術展覧会入選。41年朝鮮美術家協会で評議員と彫刻分科会の委員、44年決戦美術展覧会の審査員。49年にソウル市の文化委員、50年朝鮮戦争勃発時、鐘路区の豊文女子高校の校長、戦争中はパルチザン討伐作戦に参加。マッカーサー像のほか、国会議事堂内に長らく展示されていた李舜臣像、ソウル・南山の白凡広場の金九像(関福鎮との共作)等の銅像を数多く手掛けた。1992年没、76歳。韓国の**彫刻家**

金月炤子 (きんげつ・しょうこ/1942年～)

秋田県生れ。1966年神戸女子薬科大学卒、神戸大学理学部大学院助手。73年渡米、NYのアート・ステューデントズ・リーグで学ぶ。78年頃からNY中心に作品発表。85年帰国。88、92年「兵庫の美術家」(兵庫県立近代美術館)に出品。兵庫県杜町にアトリエ。**洋画家**

金城安太郎 (きんじょう・やすたろう/1911～1999年)

那覇市生れ。16歳の時に「沖縄朝日新聞」に挿絵が掲載。1930年に山田真山に師事し、日本画と彫刻を学ぶ。33年に「琉球新報」の連載小説「熱帯魚」(山里永吉作)で本格的に挿絵画家として活動。生涯で32作の新聞連載小説の挿絵を描いた。61年日本画に力点を移した。1999年没、88歳。**日本画家、挿絵画家**

釘町 彰 (くぎまち・あきら/1968年～)

神奈川県生れ。1993年多摩美術大学絵画科日本画専攻卒(首席、国際龍富士美術賞)、95年同大学院修士課程修了。上野泰郎、松尾敏男に師事。千住博の助手。95～96マルセイユ国立美術学校にて研修。99年パリ第8大学大学院メディアアート科修士課程修了。2000～02年文化庁在外派遣芸術家としてパリで活動。現在、パリ在住。和紙に天然岩絵の具という日本画の技法により、ランドスケープ、光、海などを描く。広く空間インスタレーションへの志向を実現している。「松林図」は高田賢三氏邸宅の壁画を元にしたもの。07年三菱商事パリ支店エントランス、およびオフィス内に複数作品を設置。17年東京のギャラリーアートコンポジションにおける個展[Erewhon]、オープニングにてコンテンポラリーダンサーの安藤洋子によるダンスパフォーマンス。19年阿倍野ハルカス個展ではほぼ完売し話題となる。19年グラン・パレ(パリ)にて行われたアートフェア、アートパリで出展作品中2/3が売却、好評を博した。初のインテグラル作品集「Akira KUGIMACHI」を刊行。**日本画家、美術家**

愚極礼才 (ぐきょく・れいさい/1370～1452年)

山城の国生れ。法諱は礼才、道号は愚極。別に曹溪・風月主人とも称する。南禅寺や東福寺などの住持を歴任、東福寺中の曹源院に退隠し、83歳で示寂した。当時の五山では有数の名筆家であり、自画賛の作品が多い。『臥雲日件録』を著した瑞溪周鳳(1392-1473)と親交があり、瑞溪に自派の祖である円爾の関与説を付加した渡唐天神説話を語っている。水墨の観音や文殊、雑画にたくみで、牧谿を学んだほか、明兆を慕ったという。1452年没、83歳。**室町時代の臨済宗聖一派の禅僧**

日下賢二 (くさか・けんじ/1936年～)

岡山県生れ。1964年毎日現代美術展で神奈川県立近代美術館賞、シェル美術賞で佳作賞、東京国際版画ビエンナーレで国立近代美術館賞。67、89年サンパウロ・ビエンナーレ、リュブリアナ国際版画ビエンナーレ。68年東京国際版画ビエンナーレ。72年現代木版画国際トリエンナーレ(伊)。76、83、93、96年ザイロン国際版画ビエンナーレ。81年世界の現代版画25年(東京都美術館)。84年日本の現代木版画展(スイス)。93年国際版画ビエンナーレ(オランダ)。**版画家**

久野大正 (くさの・ひろまさ/1913～1987年)

福岡市生れ。1930年福岡商業学校卒、南画家・小柴春泉に学ぶ。のちに三岸節子を知り、新制作協会に出品。40年上海に渡り、終戦とともに帰国。47年上田宇三郎らと朱貌社を結成。「如月会」水墨画グループを主宰し、後進の育成とともに発表の場とした。墨を生かした抽象的作品を描いた。1987年没、74歳。**日本画、水墨**

草間彌生 (くさま・やよい/1929年～)

松本市生れ。少女時代より水玉、編模様をモチーフに絵を描く。1948年京都市立美術工芸学校で日本画を学ぶ。52年松本市で大規模個展。57年渡米。NYで無限の網、ソフト・スカルプチュア、電飾インスタレーション等を発表。73年帰国。93年ヴェネツィア・ビエンナーレで日本代表。98～99年ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム、NY近代美術館、ウォーカー・アート・センター、東京現代美術館を巡回展。2016年文化勲章。17年「草間彌生美術館」が開館。**洋画家、版画、現代彫刻家、水彩**

草光信成 (くさみつ・のぶしげ/1892～1970年)

島根県出雲生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。27、28、30年帝展で特選。38年従軍画家として

戦地へ赴く。55年新世紀美術協会創立に参加。70年没、78歳。(出典 わ眼) **洋画家、水彩**

選。59年歌集「虫媒花」刊行。77年光風会会員。84年星野画廊で個展。 **洋画家、版画**

串田ベル (くしだ・べる/1913～1994年)

岡山県生れ。岡山師範学校技能科美術部卒。高等女学校教諭。1938年二科展で入選。藤田嗣治、東郷青児に師事。50年二科展で特待、61年二科会会員。57年渡仏。欧州で個展開催。61、62年渡米。66年海外取材。67～69年フランス～米で取材。76年コマンドール文化勲章。サロン・ドートンヌ会員を歴任。63年二科展で会員努力賞、73年二科展で内閣総理大臣賞、84年二科会理事。岡山市で没、81歳。 **洋画家**

楠永直枝 (くすなが・なおえ/1860～1939年)

高知市生れ。陶冶学校から大阪に出て啓蒙舎で学んだ。1881年上京、国沢新九郎の創設した画塾・彰技堂で本多錦吉郎に学ぶ。85年文検図書科教員の免許状、高知師範学校三等助教諭、高知尋常中学校へ転任1916年まで勤めた。彰技堂での同窓である上村昌訓とともに高知県洋画界の先駆者となり、「土佐洋画界の父」と称された。多くの教え子があり、山脇信徳、橋田庫次、加賀野井久寿彦、岡崎精郎、西内清顕、中村博、若尾瀾水、公文菊僊、田岡秋邨、山六郎、寺田寅彦らがのちに画家として活躍。1939年没、80歳。 **洋画家、美教**

楠永直枝 II (くすなが・なおえ/1860～1939年)

高知県生れ。1881年上京し、国澤新九郎の画塾、彰技堂で本多錦吉郎に師事。85年図画教員の免許状を得て帰郷、高知尋常中学校で長年指導を続ける。90年第2回明治美術会展に出品。教育の傍ら浦戸湾や室戸岬など県内各地の風光明媚な光景を緻密な画風で描き残し、高知の洋画家の先駆者として「土佐洋画界の父」と称された。39年没、享年79歳。(佐) **洋画家、美教**

楠 瓊州 (くすのき・けいしゅう/1892～1956年)

広島県生れ。1907年服部五老の内弟子となり、南画を学ぶ。10年江上瓊山宅に寄寓。18年上京。画壇から離れ、新しい南画を研究。東京で没、64歳。76年京都国立近美にて「異色の水墨画家水越松南・山口八九子・楠瓊州」展(出典 わ眼) **南画家**

楠見文雄 (くすみ・ふみお/1914年～没年不詳)

京都生れ。1931年京都師範学校卒。47年立命館大学日本文学部卒。49年京都丸善で個展。54年光風会関西賞、京都作家賞。56、57、60、72年日展入

楠本 繁 (くすもと・しげる/1900～1982年)

宮崎県生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。1938年富山県立富山中学校で行われた講師西田武雄によるエッチング講習会に参加。当時は富山県立高岡中学校(現・富山県立高岡高等学校)に教師として勤務。戦後は美術団体新構造社の委員を長年務める。1982年没、82歳。 **洋画家、美術教育、版画**

沓掛利通 (くつかけ・としみち/1911～2003年)

長野県生れ。旅館業経営のかたわら、倉田白羊や山本鼎に出会い絵を描く。主に東信地区、春陽展を中心に作品を発表し続けた。その画は現代絵画を思わせる色彩と造形を特長。2018年ギャラリー82で個展。91歳。 **洋画家**

沓間 宏 (くつま・ひろし/1954年～)

甲府市生れ。東京藝術大学油画科入学、1982年大学院修了。82年春陽展春陽会賞。以後毎年春陽展に出品、86年春陽会会員、92年中川一政賞。88年山梨県新人選抜展で山梨県立美術館賞。テンペラ技法を用いた繊細な沓間の作品は、日本的な潤いや情趣を感じさせる独特の個性を放っている。 **洋画家**

工藤甲人 (くどう・こうじん/1915～2011年)

青森県生れ。川端画学校でまなび、のち福田豊四郎に師事。新制作協会をへて1974年創画会創立に参加。78年東京芸大教授。88年芸術選奨。蝶や樹木をモチーフにした幻想的作風で知られた。2011年没、95歳。 **日本画家、版画**

工藤三郎 (くどう・さぶろう/1888～1932年)

小樽市生れ。東京美術学校卒。片多徳郎、萬鉄五郎、金沢重治、栗原忠二らと40年社を結成。国民美術協会の会員。1915、6年文展出品。20年渡仏して約3年間滞在し、サロン・ドートンヌ、サロン・ナショナル・デ・ボサーに出品。帰国後は小樽に定住し、太地社の創立会員。1932年没、44歳。 **洋画家**

工藤繁造 (くどう・しげぞう/1900～1936年)

青森県生れ。農家に生れ自由労働者をしながら彫刻に精進し、前田照雲に約1年間師事した外は独力で勉強し、1924年院展入選以来「村童」「雪路」「山鳩」「添乳」「俵結ぶ男」「牡鶏」等を殆ど毎年出品、33年院友。29～31年国際美術協会内国展(第1回～4回展、第2回展で協会賞受賞)。青森県立弘前工業学校の彫刻図画嘱託教師。1936年没、37歳。 **彫刻**

家、版画

工藤信太郎 (くどう・しんたろう/1895～1953年)

青森県生れ。1914年異画会展第三等賞。15年草土社展、二科会展に出品。23年円鳥会展に28～32年春陽会出品。パリに渡り、37年の春に帰国。西田武雄の日本エッチング研究所で銅版画試作。作品は研究所機関誌『エッチング』掲載。41年日本エッチング協会「日本エッチング展覧会」(資生堂画廊)銅版画出品。1953年没、58歳。洋画家、版画家

工藤哲巳 (くどう・てつみ/1935～1990年)

大阪生れ。1958年東京芸術大学油画科卒。58年読売アンデパンダン展でタピエに激賞された。59年南画廊で個展、オブジェ出品。62年国際青年美術展で大賞。62年パリに移住。70年ドイツで大規模な個展。83年帰国。90年没、55歳。94年国立国際美術館で個展。現代美術家、立体、オブジェ

工藤晴巳 (くどう・はるみ/1929～1984年)

東京生れ。槐樹社展に出品、新槐樹社創立会員。第一美術協会会員。美術団体連合展に出品。1984年没、55歳。洋画家

工藤晴也 (くどう・はるや/1955年～)

札幌市生れ。1980年東京芸術大学絵画科油画卒。82年同大学大学院美術研究科壁画修了。83年同大学研究生修了。84～86年イタリア政府給費留学生ラヴェンナ美術アカデミア在籍。87年東京芸術大学絵画科油画非常勤講師(～1995年03月)。92年国際現代モザイク作家協会会長。2002年文部科学省在外研究委員。2000年東京芸術大学美術学部助教授(2007年04月准教授)。09年東京芸術大学美術学部教授。洋画家、美教

国井 澄 (くにい・きよし/1917～1971年)

札幌市生れ。1935年札幌一中卒。43年独立展初入選('63 奨励賞)、48年同会会友。47年全道展で道新賞、48年全道展会員。65年三軌展で三軌会賞65年三軌会会員('66 委員)。55年大丸ギャラリーで個展。1971年没、54歳。洋画家

国枝金三 (くにえだ・きんぞう/1886～1943年)

大阪生れ。関西美術院卒。1914年二科展に出品。23年二科会会員。24年小出檜重らと信濃橋洋画研究所を開設、その後31年中之島洋画研究所で教える。27年全関西洋画会結成に参加。関西洋画壇に重きをなした。大阪で没、57歳。洋画家、美教

国沢和衛 (くにさわ・かずえ/1902～1983年)

山口県生れ。猪熊弦一郎、平賀亀祐に師事、渡仏、カンヌ国際展招待、ドートンヌ入選。帝展、新文展、日展に入選。皇大神宮徴古館に収蔵。1983年没、81歳。洋画家

国沢新九郎 (くにさわ・しんくろう/1848～1877年)

高知市生れ。1867年土佐藩陸軍第一大隊二番小隊司令、68年陸軍所指南役、海軍へ転じ海軍局頭取。69年土佐藩の軍艦・夕顔丸の船長、函館戦争に参加。70年渡英留学、ジョン・エドガー・ウィリアムスに西洋画を学ぶ。「西洋婦人像」など太平洋戦争で焼失。東京で画塾・彰技堂を開き、持ち帰った洋画技法書、参考図書、美術標本、画材などを備えて後進を育成、本多錦吉郎、浅井忠らが学ぶ。75年彰技堂で我が国初の洋画展覧会を開催、高橋由一、荒木寛畝らに大きな影響を与えた。1877年没、30歳。洋画家、画塾長、美教

國田敦子 (くにた・あつこ/1923～2003年)

大阪生れ。1944年女子美術専門学校師範科西洋画部卒。田中一松に師事。45年中学校教師、米軍伊丹基地P x で肖像画制作。58年米軍岩国基地で美術指導。自宅に絵画教室を開講。71、93年銀座・地球堂ギャラリー個展。82年山口県美展佳作賞。90、91年山口県創作文芸県知事賞。2003年没、80歳。08、09年岩国市、周南市で回顧展。洋画家、美教

国武久巳 (くにたけ・ひさみ/1930～2008年)

福岡県生れ。1952年フリーランスデザイナー。60年日本宣伝美術会会員。58年世界観光ポスター展(ベルギー)特選。59年全国カレンダー展にて日本印刷工業会会長賞。93年全国カレンダー展にて通商産業省 生活産業局長賞。52年フリーランスデザイナー。60年日本宣伝美術会会員。79年以降、版画作品の制作に取り組む。2008年没、78歳。デザイナー、版画、イラスト

国頭繁次郎 (くにとう・しげじろう/1916～1969年)

鳥取県生れ。絵は独学。新槐樹社会員。創造美術会創立会員。独立美術協会会員。米子美術協会会員。1969年没、53歳。1960年米子市美術館「国頭繁次郎生誕100年記念—シベリアの記憶—国頭繁次郎と宮崎進」。洋画家

国松桂溪 (くにまつ・けいけい/1883～1962年)

滋賀県生れ。1904年聖護院洋画研究所、関西美術院に学ぶ。浅井忠没後、鹿子木孟郎に学ぶ。21～23年渡仏、アンドレ・ロート、ロジェ・ビシエールに師

事。二科展に出品。眼病により制作遠ざかる。京都で没、78歳。洋画家

国松桂溪 II (くにまつ・けいけい/1883~1962年)

滋賀県生れ。1898年膳所中学入学。1904年聖護院洋画研究所に学ぶ。06年関西美術院に移る。関西美術会第5回競技会で三等賞。07年関西美術会第6回競技会で油絵の部で二等賞、水彩の部で三等賞。08年関西美術会第7回競技会で三等賞。20年渡欧、アンドレ・ロート、ピッシエールに師事。24年帰国。二科展に出品。眼病により40年頃より制作から遠ざかり、晩年は茶の湯の師匠として活躍した。62年没、享年78歳。(佐)洋画家

国松 登 (くにまつ・のぼる/1907~1994年)

函館市生れ。上京、赤城泰舒や本郷洋画研究所に学ぶ。三岸好太郎の知己を得、33年独立展に入選。1939年帝国美術学校本科西洋画科卒。45年北海道独立美術協会結成に参加。1940年国展で岡田賞、国画会会員。45年全道美術協会創立会員として活躍。59年北海道文化賞。85年北海道近代美術館で特別展「風魔の心象—国松登展」開催。東京で没、86歳。洋画家

国光宣二 (くにみつ・せんじ/1908~1941年)

東京生れ。1935年有道佐一、関口俊吾と渡欧。36年鹿子木孟郎アカデミー下鴨家塾で鹿子木に師事。関西美術院に学ぶ。40年鹿子木の日光旅行に随行、鹿子木の制作、背景等を手伝う。41年戦病死。33歳。洋画家

国本克己 (くにもと・かつみ/1921~1986年)

石川県生れ。石川県立工業学校卒。一創会副代表。石川県立美術文化協会常務理事。1986年没、64歳。洋画家

国盛義篤 (くにもり・よしあつ/1897~1951年)

広島県生れ。1918~23年京都市立絵画専門学校で日本画、関西美術院でデッサン、洋画を学ぶ。25、26年春陽会賞。34年春陽会会員。31年田中善之助らと新興美術協会を結成。39年文展無鑑査。49年京都市立絵画専門学校教授。50年京都市立美術大学助教授。51年没、54歳。洋画家、美教

国吉康雄 (くによし・やすお/1889~1953年)

岡山市生れ。渡米。ロサンゼルス美術学校、1916年ニューヨークのアート・ステューデントズ・リーグに学ぶ。29年ニューヨーク近代美術館の19人の現代アメリカ作家に選抜。36年アメリカ美術家会議に参加、全米執行委員・展覧会委員長に就任。48年ホイットニー美術館で回顧展。NYで没、63歳。(出典 わ眼)洋画家、版画

久野和洋 (くの・かずひろ/1938年~)

名古屋市生れ。1963年武蔵野美術学校第二本科西洋画科卒、65年同校本科美術科彫刻専攻編入学、卒。66~70年助手。74年国立パリ高等美術学校に招待研究生として入学。油彩画と絵画技法のアトリエに学ぶ。82年立軌展に出品、同人。91年両眼の眼展で奨励賞、99年同展で河北倫明賞。99年文化庁芸術家在外研修生として渡欧、14、15世紀のイタリア絵画技法の研究。2002年武蔵野大学油画学科教授。09年練馬区立美術館で個展。洋画家、美教

久野修男 (くの・のぶお/1917~1983年)

福島県生れ。太平洋美術学校で油画を学ぶ。1940年二科展入選。44年まで出品。42年大東亜戦争美術展、43年陸軍美術展に出品。47年二紀会が創立に参加し、48年褒賞、50年同人、56年同人優賞、57年委員、審査員、80年鍋井賞、77年福島支部を創立してその支部長、評議員。76年の外遊後、色彩が豊麗。福岡県で没、66歳。洋画家

久野 真 (くの・しん/1921~1998年)

名古屋市生まれ。1943年東京高等師範学校芸能科卒。51~67年名古屋市立工芸高等学校教諭。52~60年新制作展に出品。59年新制作展で新作家賞。66~67年ロックフェラー・フォード財団の奨学金でNYにて研究。70年代はステンレス・スチール素材作品や建築壁面造形制作。98年愛知県美術館で久野真、庄司達展—鉄の絵画と布の彫刻。98年没、77歳。2002年名古屋市美術館で個展。造形作家、立体、美術家、美教

久場島清輝 (くばしま・きよてる?/1864~1920年)

那覇市生まれ。絵画だけでなく舞踊、三線に秀でる。27歳頃に沖縄芝居の巡業で八重山を訪れ、石垣島宮良村に定住、宮良を拠点に画家・芸能家として活躍した。作品に「彌勒と唐子図」「花鳥図」「琉装旅女の図」「樹下織婦理糸図」「大浜村龕幕の仏画」や約130点の画稿を残す。1920年没、55歳。洋画家

久保一雄 (くぼ・かずお/1901~1974年)

群馬県生れ。川端画学校に学ぶ。日活向島撮影所の背景絵師。東宝美術監督。1938年から独立展に連続出品。44年独立賞、会友。48年独立美術協会会員。50年毎日映画コンクールで美術賞。日活、東映等多くの映画のフリー美術監督。東京で没、72歳。洋画家

久保 浩 (くぼ・こう/1932年~)

神戸市生れ。朝倉文夫に師事。1963年日展入選。以後、日展、日彫展中心に活躍。千葉県美術会常任理事。2019年地域文化功労者文部科学大臣表彰。佐倉市美術館で20年久保浩展。彫刻家

久保孝雄 (くぼ・たかお/1918~1967年)

東京生れ。1938年第二早稲田高等学院を卒、42

年4月東京美術学校彫刻科卒。47年新制作派展入選し、以来20年近く新制作に終始所属し、49年新制作派展で新作家賞、52年会員。第25回展(61年)「真夜中の椅子」になると、意識的に一種のシュールレアリズムへの志向。そのように基本的にはマッシヴな量塊の構築にありながら心理的な陰影をこめた作品に特色を示した。64年現代日本美術展でコンクール賞。従来の堅実な写実から一歩進めて確信にみちた彼独自のフォルム。東京で没、49歳。彫刻家

久保卓治 (くぼ・たくじ/1948年～)

愛媛県生れ。1970年多摩美術大学美術学部絵画科油画専攻入学、76年同大学美術研究科修了。大英博物館版画素描室でエンブレイピングやシルバークラフト銅版画の古典作品研究。79年モーリー・カレッジ(ロンドン)で素描・銅版画・製本技術を、ビルギット・ショールドのもとで銅版画を学ぶ。帰国後81年春陽会新人賞。2000年ロイヤル・アカデミー・サマー・エキシビションにてアーキテクチャル・ドローイング賞。02年アメリカン・グラフィック・アーティスト・ソサエティ版画展にてジョージ・シャーマンG.メタル賞。
洋画家、版画家

久保田米僊 (くぼた・べいせん/1852～1906年)

京都生れ。鈴木百年の門。民友社に入り新聞挿絵に新生面を開き、日清戦争時には画報記者として従軍、画才をふるった。やがて眼疾により失明のちは俳諧狂歌や評論にいそしんだ。1906年没、55歳。
日本画家、口絵、挿絵、美教

久保田米僊 II (くぼた・べいせん/1852～1906年)

京都生れ。1867年鈴木百年に入門。78年幸野榊嶺らと画学校設立建議書を知事に提出し80年京都府画学校開設。82年内国絵画共進会出品作で銅賞及び画学校設立功勞で絵事功勞賞。89年パリ万国博覧会で金賞。90年徳富蘇峰招聘により図画主筆。芝在住で「司馬画塾」開設。93年シカゴ万博出品作品が受賞。国民新聞特派員として渡米。97年石川県立工芸学校絵画教授。1906年没、54歳。
日本画家、口絵、挿絵、美教

久保守 (くぼ・まもる/1905～1992年)

札幌市生れ。1929年東京美術学校西洋画科卒。29年渡仏、アカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ、ルーヴル美術館で模写。31年イタリアでプレスコ画の質感に共感。31年北海道美術協会会員。春陽会展に出品。41年国展に参加。新文展に出品。42年国展で佐分賞。43年国画会会員。66～72年東京芸術大学教授のち名誉教授。61年北海道立美術館で

回顧展。82年から日本橋三越で久保守展開催。静岡県で没、87歳。洋画家、美教

久保田成子 (くぼた・しげこ/1937～2015年)

新潟市生れ。東京教育大学彫塑科卒。品川区立荏原第二中学校で教鞭を執った。64年の初め東京・内科画廊で開催した初個展「Make a Floor of oveLetters」では、くしゃくしゃにした新聞紙を山のように積み、その上を白の布で覆ってブロンズの彫像を設置し、観客が紙の山に這い上がって鑑賞する作品を発表。NYから帰国したオノ・ヨーコと、一柳慧に会い、国際的な前衛美術運動で、ダダの流れを組むフルクサスに関与する。64年5月29日、ドイツのフルクサス運動で活躍中であつた芸術の反抗児、ナムジュン・パイク(白南準)の東京・草月会館ホールでの公演に強い衝撃を受ける。64年渡米NYのフルクサス本部として使われていたマチューナスの事務所。フルクサス本部で「コモン・システム」という共同生活を始め、この運動の副議長となる。65年7月の「不朽のフルクサス・フェスティヴァル」では、パイクの提案で、股座に筆を挿して描いたように演出したパフォーマンス「ヴァギナ・ペインティング」を披露。ビデオ・アートの先駆者であるパイクの影響で、映像作品と、大学時代に学んだ彫刻の技術とを組み合わせさせたビデオ・スカルプチャーに転向。NYで初個展「Shigeko Kubota Video Sculpture」(1976年)をRen = Block Art Galleryで開催。「階段を降りるヌード」(1976年)は、同年ビデオ作品で初めてニューヨーク近代美術館(MoMA)に収蔵される。世界の美術の今後5年間の方向性を示す「ドクメンタ6」(1977年)や、MoMAの「Projects」(1978年)で紹介された。84年の雑誌『アート・イン・アメリカ』のビデオ・アーティスト特集では、作品「River」(1979-81年)が表紙を飾り、久保田は巻頭記事で特集される。その後もグループ展では「ホイットニー・ビエンナーレ」(1983年)や「ドクメンタ8」(1987年)で紹介され、1991(平成3)年にはニューヨークの映像芸術専門美術館American Museum of the Moving Imageで大回顧展が開催。このほかアムステルダム・ステデリック美術館(1992年)や、日本の原美術館(1992年)、ホイットニー美術館(1996年)などで次々と個展が開催され、シカゴ美術学校、ブラウン大学、スクール・オブ・ビジュアルアーツなどで教鞭を執った。久保田の考案したビデオ・アートに彫刻的要素を合わせたビデオ・スカルプチャーは、パイクに影響を与えたとも言われている。私生活では77年3月21日パイクと結婚。その後1977-87年は、パイクの仕事の関係でドイツ在住。2000年にLance Fung画廊で「セクシャル・ヒーリング」として発表。パイクの死後07年にMaya Stendhal Galleryで開催された「パイクとともに歩んだ

生涯」が、最後の個展となった。今後、新潟県立近代美術館をはじめ国内で回顧展が予定されている。NYで没、77歳。彫刻家、造形作家、フルクサス、ビデオ

文部大臣より地域文化功労者。『熊谷元一写真全集』で第48回毎日出版文化賞特別賞。2010年没、101歳。童画家、写真家、絵本、版画、美教

久保田孝司 (くぼた・たかし/1935～1979年)

川崎市生れ。1951年寺田政明に師事。53、54年読売アンデパンダン展に出品。54年自由美術協会展に入選。65年主体美術協会展の出品、66、67年佳作作家賞、同会会員。74年アートユニオン賞。1979年没、44歳。洋画家

熊岡正夫 (くまおか・まさお/1912～1990年)

茨城県生れ。熊岡美彦に師事、熊岡美彦絵画道場に学ぶ。東光会賞3回、運営委員、審査員。帝展、文展に出品、奉職展に入選9回、岡田賞。国会肖像画買い上げ。1990年没、78歳。洋画家

窪田知矩 (くぼた・とものり/1921～1995年)

甲府市生れ。尋常小学校高等科卒業後、上京し日本美術学校洋画科と文化学院美術科で絵画を学ぶ。読売アンデパンダン展と、シュルレアリスト米倉壽仁の興したサロン・ド・ジュワン展へ出品。62年記号派美術協会を創立。古代遺跡に記された文字や記号のような形をモチーフにして、生命的なイメージの表出を目指した。1995年没、74歳。洋画家

熊岡美彦 (くまおか・よしひこ/1889～1944年)

茨城県生れ。1913年東京美術学校西洋画科卒。同年、光風会展今村奨励賞。19、21年帝展特選。21年光風会会員。24年槐樹社創立会員。25年帝展で帝国美術院賞、帝展委員。26～29年渡仏。31年熊岡洋画研究所を開設し、多くの後進を育成。32年東光会創立会員。東京で没、55歳。洋画家、美教、熊岡洋画研究所

久保貞次郎 (くぼ・ていじろう/1909～1996年)

栃木県生れ。1928年日本エスペラント学会入会。33年東京帝国大学文学部教育学科卒、同大大学院に進学。35年宮崎で瑛九(杉田秀夫)に出会い、現代美術へ興味、瑛九を通じて作家たちと交遊。38年真岡町小学校に久保講堂で児童画展を開催、審査員。38～39年渡米欧。51年瑛九を中心にデモクラート美術協会が結成、評論家として支援。52年創造美育協会設立に参加した。評論家、収集家として主に現代版画の振興に尽くし、瑛九のほか、北川民次、利根山光人、泉茂、吉原英雄、池田満寿夫、小田襄、深沢史朗、木村光佑らと交遊。66年ヴェネツィア・ビエンナーレの日本代表。77～85年跡見学園短期大学学長。86～93年町田市立国際版画美術館館長。著書に「ブリウゲル」、「シャガール」、「児童画の見方」、「児童美術」、「子どもの創造力」、「児童画の世界」、「ヘンリー・ミラー絵の世界」、「久保貞次郎 美術の世界」全12巻(叢文社)などがある。1992年町田市立国際版画美術館で「久保貞次郎と芸術家展」が開かれ、業績が回顧。東京で没、87歳。(引用 東文研) 評論家、コレクター、美教、美術館館長、創美、美普

熊岡美彦 II (くまおか・よしひこ/1889～1944年)

茨城県石岡町生れ。1913年東京美術学校西洋画科卒。第2回光風会展で今村奨励賞(第7回展でも受賞)。19年第1回帝展で特選。21年光風会会員。23年槐樹社を結成、第8回展まで続く。25年第6回帝展で第一回美術院賞。26年渡仏、満3年滞欧。29年帰国、東京、大阪及び郷里水戸・石岡などで滞欧作展を開く。32年槐樹社解散と同時に斉藤与里と東光会を結成。35年熊岡絵画道場を設立。41年湯河原の奥地に画室を設け、戦時中ここで制作する。度々従軍画家として中国各地に赴き従軍記録画を納める。44年10月1日東京で没、享年55歳。(佐)洋画家、美教

熊谷元一 (くまがい・もといち/1909～2010年)

長野県生れ。1929年飯田中学卒、童画家武井武雄の指導を受ける。32年童画作品が『コードモノクニ』に掲載、幼年雑誌に継続的に投稿し、絵本も出版。38年朝日新聞社より写真集『会地村』を出版、55年毎日写真賞を受賞。88年出身地にふるさと童画写真館(現在は熊谷元一写真童画館と改称)を設立。94年

熊谷九寿 (くまがい・きゅうじゅ/1908～1993年)

大分県生れ。関西美術院卒。1942年梅原龍三郎、福島繁太郎の推薦により国画会会員に迎えられ、以後同展を主な作品発表の場とした。50年型生派美術家協会を結成した。51年秀作美術展、美術団体連合展、55年秀作美術展出品。61年渡欧し、帰国後も杉本健吉、須田尅太らとグループ展を続けた。1993年没、84歳。洋画家

熊谷吾良 (くまがい・ごろう/1932年～)

青森県生れ。1955年武蔵野美術学校洋画科卒。日本版画協会展、国画会展などに出品。1960年シェル美術賞展・I氏賞。第4回東京ビエンナーレ展出品・著書「木版画を始める人へ」。版画家

熊谷登久平 (くまがい・とくへい/1901～1968年)

岩手県生れ。1925年中央大学商学部卒。24年川端画学校修了。長谷川利行と交友。1925年白日会に入選、26年白日会会員。29～30年二科展に出品。31年より独立展に出品。33、35年独立展で海南賞。41年独立美術協会会員。62～66年毎年日本橋・三越で個展。63年ヨーロッパ旅行。東京で没、67歳。

洋画家

熊谷守一 (くまがい・もりかず/1880~1977年)

岐阜県生れ。1897年慶応義塾普通部に在籍、中退。1904年東京美術学校西洋画科選科卒。09年文展に入選。16年二科会会員。29年二科技塾で指導。30年二科展で特別陳列。47~51年二紀会創立会員。67年文化勲章辞退。72年勲三等叙勲も辞退。72年渋谷西武百貨店で回顧展。東京で没、97歳。「熊谷守一美術館」開館。2017~18年東京国立近美で個展開催。洋画家

熊沢欽三 (くまざわ・きんぞう/1916~1995年)

1916年生れ。慶応普通部在学中、1934年6月30日に行われた生徒のためのエッチング講習会に参加。制作作品が西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第21号(1934.7)に掲載される。光風会会員。44年名古屋画廊の第4回壮潮会展に作品出品。1995年没、79歳。版画家、洋画家

熊代 駿 (くましろ・しゅん/1918~1975年)

福岡県生れ。1933年築上農学校卒。35年から東京独立美術協会研究所の児島善三郎のもとや赤堀孝、山田栄二らのアトリエに通う。39年独立展に入選。第26、31回展で独立賞。47年同会会友。71年独立美術協会会員。49年福岡県美術協会再興に参加。中学教諭、短大講師等教育現場で活躍。地元紙の挿絵、舞台の美術・衣装を担当。75年没、57歳。洋画家、美教、挿絵

熊代熊斐 (くましろ・ゆうひ/1693~1773年)

元禄6年生まれ。長崎出身。唐通事の神代(くましろ)家の養子。享保16年来日した清の沈南蘋(しん・なんぴん)に学ぶ。沈南蘋流写生花鳥画の先駆者。姓名を熊代斐にあらため、中国風にちぢめ熊斐と称した。1773年没、80歳。作品に「三千歳図」「浪(なみ)に鵜(う)図」。江戸時代中期の絵師

熊田千佳慕 (くまだ・ちかぼ/1911~2009年)

横浜市生れ。1924年神奈川県立工業学校図案科入学。1929年同校を卒業して東京美術学校鑄造科に入学。34年デザイナー山名文夫に師事。34月名取洋之助が主宰する日本工房(第二期)に入社し、山名文夫の助手として『NIPPON』ほか対外グラフ雑誌のデザインに従事。49年絵本作家に専念。49年児童書装幀賞。『世界名作童話全集』(講談社)、『講談社の絵本』、『世界絵文庫』(あかね書房)、『幼年世界名作全集』(あかね書房)、『なかよし絵本』(偕成社)、『児童名作全集』(偕成社)の挿絵を描く。81年『絵本ファ

ーブル昆虫記 1』(コーキ出版)を刊行し、88年より『Kumada Chikabo's Little World』(創育)の刊行を始め、89年に7巻シリーズが完結、小学館出版文化賞。96年回顧展「小さな命の大切さを描く一熊田千佳慕展」が横浜高島屋で開催。2002年には福島県立美術館で「熊田千佳慕の世界—はな・むし・とり・ゆめ」展、06年には目黒区美術館で個展。「日本のプチ・ファール」と称され、子供にも親しまれる平明な作風を示した。横浜市で没、98歳。花や昆虫の細密画家

熊野俊一 (くまの・しゅんいち/1908~2005年)

香川県生れ。1928年より3年間、香川県の小学校教諭。32年上京。二科展に出品。43年中国に取材。52年より二紀会に所属。63年に渡欧し、生涯に12回の渡欧・滞在を重ねてヨーロッパの光の下で油彩画を描いた画家。無所属。2005年没、97歳。洋画家、水彩、美教

熊野礼夫・禮夫 (くまの・のりお/1909~1993年)

福岡県生れ。1929年東京美術学校入学、藤島武二教室に学び、また同郷の先輩である中村研一の指導を受ける。卒業後の同41年新文展入選。43年光風会展入選。戦後は福岡高校美術教員を務め、福岡県美術協会の創立会員。60年光風会会員。67年九州産業大学助教授。1993年没、84歳。2002年福岡市美術館で回顧展。洋画家

隈元謙次郎 (くまもと・けんじろう/1903~1978年)

鹿児島生れ。1928年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒、31年東京帝国大学大学院西洋美術史専攻中退。32年帝国美術院附属美術研究所に入り、51年第二研究部長、52年改組により東京国立文化財研究所美術部第二研究室長、66年退職。66~74年東京家政大学教授。文化財保護審議会専門委員、東京国立近代美術館評議員などを務め、近代日本美術の研究に貢献。39年レオナルド・ダ・ビンチ賞。「明治初期来朝伊太利亜美術家の研究」「近代日本美術の研究」「黒田清輝」「藤島武二」「浅井忠」などの著書がある。東京で没、74歳。美術史家、東文研、美教

熊本正義 (くまもと・まさよし/1938年~)

広島県生れ。1962年東京芸術大学油絵科卒、64年東京芸術大学油絵専攻科終了。65年渡欧、グッピオ市主催在イタリア外国人芸術家コンクール入賞。アカデミアが作品買上げ。71年ニューヨーク近代美術協会展出品、渡欧、モデナ市ファリーニ23画廊で個展。75年帰国。80~84年東京(三越本店)、名古屋(松坂屋本店)で個展。洋画家

久米桂一郎 (くめ・けいいちろう/1866～1934年)

佐賀市生れ。1874年上京、藤雅三に師事。86～93年渡仏、ラファエル・コランに師事。黒田清輝と終生の交友。94年山本芳翠の画塾生巧館を譲り受け、黒田清輝と天真道場を起す。95年内国勲業博覧会で妙技二等賞。96年白馬会創立会員。98年東京美術学校西洋画科教授。1900年パリ万博博覧会に出品、褒状。22年帝国美術院幹事。東京で没、67歳。
洋画家、美教

久米宏一 (くめ・こういち/1917～1991年)

東京生れ。1935年豊島師範学校卒、太平洋美術研究所修了。滝野川第五小学校の教員となる。傍ら太平洋画会研究所に通い修了。1943年日本版画奉公会会員。童画グループ「車」同人。「版の会」同人。76年小学館絵画賞。1991年没、84歳。
童画家、版画家

糸田恵造 (くめだ・けいぞう/1910～1994年)

弘前市生れ。1931、32、36。39年日本版画協会展に入選。32、38年東奥美術展にも版画を出品入選。34年の河北美術展と日本水彩展でも入選。1994年没、84歳。
版画家、水彩

久米民十郎 (くめ・たみじゅうろう/1893～1923年)

1893年生れ。父は政治家の久米民之助。渡英、イギリスに藤田が訪ね世話になる。神奈川県立近代美術館に13点の作品が収蔵。将来を嘱望されていたが関東大震災で夭折1923年没、30歳。
洋画家

久米福衛 (くめ・ふくえ/1882～1951年)

徳島県生れ。旧制徳島県立富岡中学校卒。1904年第9回白馬会展に出品。以後11回展まで出品。08年第1回文展に出品。09年東京美術学校西洋画科本科卒。卒業後は宮崎県や鳥取県で教職についた。24年頃、東京高等工芸学校に勤務。26年東京高等工芸学校印刷工芸科教授に就任。30年構造社の会友となり、33年構造社会員。35年から37年にかけて、「アルス最新写真大講座」「修理の実技」をアルス社で刊行。47年丹松会に参加。48年三重県美術協会の創立に参加。51年没、享年69歳。(佐)
洋画家、美教

公文菊僊 (くもん・きくせん/1873～1945年)

高知市生れ。高知県尋常中学校で楠永直枝の指導を受けた。1892年卒業後に上京して久保田米僊について四条派を学び、人物画を得意とした。土陽美術会にも参加し、歴史人物画などを描いた。坂本龍

馬や中岡慎太郎、武市瑞山(半平太)ら維新の志士らの肖像画を多く描く。特に龍馬の肖像画は、1928年の桂浜の龍馬像建立からはじまった龍馬人気の高まりの中で、肖像画は数多く描く。大正天皇にも坂本龍馬像を献上。1945年没、72歳。
日本画家

倉垣辰夫 (くらがき・たつお/1901～1951年)

兵庫県生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。30年帝展入選して以来、官展に作品を発表、戦後日展第5回に「競馬」第6回に「スタート前」を出品、第7回出品の「牧馬」が絶作。馬の洋画家。東京で没、50歳。
洋画家

鞍掛徳磨 (くらかけ・とくま/1930年～)

広島県生れ。1954年吉岡憲に師事。日本大学芸術学部美術科卒業。71、72、73、77、78年安井賞展入選。76年現代画廊で個展。2000年ギャラリー川船で個展。13年キッド・アイラック・アートギャラリーで個展。(出典 わ眼)
洋画家、美教

倉島重友 (くらしま・しげとも/1944年～)

長野県生れ。平山郁夫に師事。初入選。1971年再興日本美術院展覧会で日本美術院賞(大観賞)。2001年再興院展で同人推挙。2001年日本美術院奨学金賞。2010年再興院展で部科学大臣賞。12年再興院展出品で閣総理大臣賞。日本美術院同人、広島市立大学名誉教授。
日本画家

倉員辰雄 (くらかず・たつお/1900～1978年)

福岡県生れ。1922年上京し、川端画学校に学ぶ。29年東京美術学校西洋画科卒。29年帝展に入選、35年第二部会展で文化賞特選。36年文展鑑査展で選奨、翌年同作品で昭和洋画奨励賞。37、38年新文展で特選。41年創元会創立会員、のち常任委員。54年日展審査員。58年日展会員。60年日展評議員。62～63年渡欧。76年日展参与。東京で没、78歳。
洋画家

倉田三郎 (くらた・さぶろう/1902～1992年)

東京生れ。1920年葵橋洋画研究所に通う。東京府師範学校本科を経て、26年東京美術学校図画師範科卒。24年春陽展に入選。32年春陽展で春陽会賞。36年春陽会会員。49～66年東京学芸大学教授。58年バーゼル国際美術教育会議日本代表。美術教育に関わる国際会議及び研究の為40ヶ国を歴訪。66年プラハ国際美術教育会議においてINSEA(国際美術教育学会)第4代会長。87年青梅市立美術館で個展。東京で没、90歳。
洋画家、美教

庫田 焜 (くらた・てつ/1907～1994年)

福岡県生れ。1924年川端画学校に入り人体研究。35、36年青樹社展で個展。38、39年新文展で特選。41年資生堂ギャラリーで個展。60、61年渡欧。68～74年臥龍会展に出品。72年東京芸術大学油画科教授。78年渡伊。日動画廊で個展。83年日本橋三越で個展。東京で没、87歳。洋画家、美教

倉田白羊 (くらた・はくよう/1881～1938年)

浦和市生れ。1898年明治美術会の準通常会員。1901年東京美術学校西洋画科選科を首席で卒。02年太平洋画会創立、会員。07年文展入選。10年「方寸」同人。15年再興日本美術院洋画部同人に推挙。22年同志6名と春陽会創立会員。22年「日本農民美術研究所」副所長。農村の風景を描き続けた。26年頃長野、東京、大阪で個展。29、34年銀座資生堂で個展。38年没、57歳。洋画家、美教

倉橋孝彰 (くらはし・たかあき/1955年～)

高知県生れ。関西学院大学社会学部中退。アトリエKURA 主宰くらあーと代表。第65回高知県展グラフィックデザイン部特選・県展賞受賞。高知県美術振興会奨励賞受賞。現代美術家協会展で会友。第94～101回二科展デザイン部で入選。第95回二科展デザイン部で奨励賞受賞。第66～67回モダンアート展絵画部入選。イラストレーター・洋画家

倉俣史朗 (くらまた・しろう/1934年～1991年)

東京生れ。東京都立工芸高等学校木材科で学ぶ。53～56年桑沢デザイン研究所リビングデザイン科で学び、57年三愛の宣伝課に就職、デザインを手掛ける。65年クラマタデザイン事務所を設立。67年横尾忠則らとコラボレーションしたインテリア・デザインで脚光を浴びる。アクリル素材を用いて、日常の空間に無重力を作り出したような、透明で浮遊感のある作品を生み出していく。70年「Furniture in Irregular Forms」シリーズで世界に広く認知される。72年毎日デザイン賞。81年エットレ・ソットサス Jr.らによるイタリアンデザインの新しいムーブメントであるメンフィス(Memphis)の展示会に磯崎新、マイケル・グレイブスらと共に参加。90年フランス文化省芸術文化勲章。1991年没、56歳。デザイン

栗木幸次郎 (くりき・こうじろう/1907～1981年)

盛岡市生れ。旧制盛岡中学校を中退、1923年上京。27年木谷忠一郎詩集『北方の曲』(文武堂刊)、28年平澤貞二郎詩集『街の小民』(金蝙蝠社刊)、29年一瀬直行詩集『蜘蛛』(獅子発行所刊)の装幀・挿画を手がけ、版画を用いる。31年画集刊行目的に「栗木幸

次郎版画頒布会」を立ち上。1981年没、74歳。装填、表紙絵、版画家、デザイン

久里四郎 (くり・しろう/1886～1953年)

東京生れ。1902年学習院中等科を退学。10年東京美術学校西洋画科卒。07年文展に入選。08、10年文展で三等賞。11～12年渡欧。1914年二科会創立に際し、鑑査委員に推されたが辞退。二科展に出品。長野で没、67歳。洋画家

クリスト【Christo】 (くりすと/1935～2020年)

ブルガリア生れ。本名クリスト・ヤバチェフ Christo Javacheff。1958年パリで物体を布で梱包した作品によってデビュー。以来、対象を包む、視界を遮るということの仕事の基本としてきた。60年代後半より、対象のスケールを巨大化し、公共建築の梱包、谷間に布を張りわたす《バレー・カーテン》(72年)、野外で数kmにわたって幕をはる《ランニング・フェンス》(76年)など巨大空間の視界の遮断の計画を次々と実現した。「アンブレラ・プロジェクト」(1991年秋、アメリカ、カリフォルニア州および、日本、茨城県)。環境芸術作家

栗田政裕 (くりた・まさひろ/1952年～)

水戸市生れ。1975年東海大学教養学部芸術学科卒、76年創形美術学校版画科研究科修了。77年日本版画協会展・新人賞。82年日本版画協会展・記念賞。84年版画集『街燈夜想1』、詩文集『山音』刊行。91年個展(茨城県つくば美術館)。95年文化庁派遣芸術家在外研修員(イタリア滞在)。版画家

栗田 雄 (くりた・たけし・ゆう/1895～1961年)

静岡県生れ。1917年日本美術院研究室で洋画部同人の指導をうけ洋画家としての第一歩。19年東京に移住、20年日本美術院に出品、同年日本美術院洋画部同人の脱退と共に同院を離れた。21年日本版画協会々員。23年春陽会創立第1回展より出品、27年春陽会賞、無鑑査。30～31年渡仏。35年春陽会々員。東京で没、65歳。洋画家、版画

栗原一郎 (くりはら・いちろう/1939～2020年)

東京生れ。小貫政之助に師事。武蔵野美術大学卒。立軌会同人。1975年シェル美術賞展三席。95年池田20世紀美術館で栗原一郎展。2001年青梅市立美術館で回顧展。11年高島屋で個展。15年紺綬褒章。2020年没、81歳。洋画家

栗原喜依子 (くりはら・きいこ/1935年～2009年)

茨城県生れ。1958年女子美術大学洋画科卒。65

年二科展出品(以後毎年)、67年同展特選。67年サロン・ドートンヌ出品 ル・サロン銀賞。73年安井賞展出品、渡仏。78年具象現代展、現代の裸婦展出品(以後毎年)。80年国際形象展出品(以後毎年)。84年渡欧 五都展出品。86年個展(銀座松屋)、現美展出品(以後毎年)。二科会会員。二科展特選、会員努力賞、二科会会員。画集「裸婦」京都書院、「裸婦」学習研修社にて出版。2009年没、74歳。洋画家

栗原玉葉 (くりはら・ぎょくよう/1883～1922年)

長崎県生れ。大久保玉珉の指導を受け、1906年上京し小林富次郎商店運営の小林夜学校教員をしながら女子美術学校に学ぶ。09年女子美術学校卒。寺崎広業のもとに入門。13年文展に入選。14年文展で褒状、文展での入選を重ねる。19年松岡映丘に師事。21年帝展で入選。東京で没、39歳。日本画家、挿絵、版画

栗原 信 (くりはら・しん/1894～1966年)

茨城県生れ。1911年茨城師範学校卒。17年二科展に入選。28～31年渡仏、アカデミー・グラン・シヨミエールで学ぶ。31年帰国二科展に特別出品し、昭和洋画奨励賞。36年二科会会員推挙。47年正宗得三郎、宮本三郎らと二紀会創立、会員。49年新潟大学教授。日本美術家連盟理事として活躍。57年サンパウロ・ビエンナーレ展に日本委員として参加。東京で没、72歳。洋画家、美教

栗原大輔 (くりはら・だいすけ/1971年～)

埼玉県生れ。埼玉県立狭山高等学校卒業後、独学で絵の勉強を始め、1998年精密画家としての活動を始める。「高松琴平電鉄 850 型電車」(不透明水彩画)で、2006年現在までに戦闘兵器を除く題材約300点の「乗り物精密画」を全国の博物館、企業、個人愛好家の依頼で作画。当初は国鉄型機関車の精密画を中心に描いてきたが、現在は日本全国各地で活躍した旧型路線バスを題材にした作品が多い。07年浅草セントラルホテル・ロビー:歴史のりもの博物館内に栗原大輔精密画美術館が開館。洋画家、細密

栗原忠二 (くりはら・ちゅうじ/1886～1936年)

三島市生れ。1912年東京美術学校西洋画科卒、渡英。ブラングインに師事。王立美術家協会準会員。24年帰国、白日会創立会員、日本水彩画会会員。26年再渡英。第一美術協会創立会員。築地洋画研究所を設立。東京で没、50歳。(出典 わ眼)洋画家、水彩画家

栗原 誠 (くりはら・まこと/1888～1974年)

静岡県生れ、韮山町に生まれる。1908年東京美術学校入学。河目悌二、牧野虎雄、三宅鑑吉、川上四郎と同期。中国遊学後、三島・沼津地区の高校を在職、美術教諭。龍城美術館に作品収蔵。1974年没、86歳。洋画家、美教

栗山 茂 (くりやま・しげる/1912～2010年)

静岡市生れ。静岡市役所に勤務する傍らで創作版画を作り続け1934年飛白社創設、版画と工芸の同人誌「飛白」を刊行。後には静岡創作版画活動の中心的人物となる。1936年日本版画協会賞を小野忠重と二人で受賞し、同じく国画会版画部で奨学賞、日本版画協会会員に推挙。紐や紙を版としたミクストメディアによる表現を多く試みた。2000年島田市博物館で栗山茂版画展を開催。2010年没、98歳。版画家

久里洋二 (くり・ようじ/1928年～)

福井県生れ。漫画雑誌に投稿するなどし、漫画家になることを夢見た。1950年上京、共同通信社の画信部の嘱託、風刺漫画を描く。54年文化学院美術科に入学し、漫画を描きながら美術を学ぶ。55年二科展出品、入選、58年特選。60年アニメーションも手がけた、62年にはく人間動物園>でヴェネツィア映画祭の青銅賞。絵画においては70年代中頃、丁寧に描かれた色彩のグラデーションと単純化された形態によってシュルレアリスム的な不思議な空間を表現する独自の画風を確立した。洋画家、アニメ

胡桃沢源人 (くるみざわ・げんじん/1902～1992年)

松本市生れ。1928年帝展に入選。29年大阪美術学校西洋画科卒。斎藤与里に師事。32年より東光展に出品。35年東光会会員。41、42年新文展で特選。戦後は日展に依嘱出品。58年日展会員。53、59年日展審査員。日展参与、浪花芸術大学教授を歴任。松本市で没、89歳。洋画家、美教

呉 建 (くれ・けん/1882～1940年)

1882年生れ。予て油絵を余技とし、忙中数多くの大作を執筆、帝展文展には入選6回。東京帝国大学教授、呉内科の呉建博士。1940年没、58歳。洋画家、美教

樽松正利 (くれまつ・まさとし/1916～2008年)

東京生れ。1940年東京美術学校卒。48年日展で特選。48年光風会会員。48、49年渡仏。84年光風会展で辻永記念賞。84年日展会員、97年日展参与。2000年光風会名誉会員。08年没、92歳。洋画家

黒木一明 (くろき・かずあき/1956年～)

宮崎県生れ。1983年渡米、ドン・キューブリに師事。86年独立。90年広告写真界の巨匠アーヴィング・ペンに会う。「写真は究極的に哲学によって決まる」の啓示。2003年帰国、宮崎県西都市にカズスタジオ設立、以降、自然と世界の自然という二つのテーマで活動中。展覧会開催。写真集制作。写真家

黒木邦彦 (くろき・くにひこ/1932～2018年)

東京生れ。1960年春陽会研究所に学ぶ、西村龍介に師事。79年ル・サロン銀賞受賞、オンフルール展名誉賞受賞。80年ル・サロンで金賞・銀賞・銅賞・セラフィヌリボワ賞・フランス国際展でオディロン、ルシュール、アドリアン賞、オンフルール展で名誉賞、そしてドートンヌで会長コーナーに特選展覧。現在、サロン・ドートンヌ会員、ル・サロン無鑑査会員、仏国風景画家協会会員。2018年没、86歳。洋画家

黒木貞雄 (くろき・さだお/1908～1984年)

延岡市生れ。1931年宮崎県師範学校専攻科卒。～34年川端画学校に学ぶ。33年平塚運一に版画を学び、恩地孝四郎に学ぶ。36年国展入選、52～78年国展会会友。35年日本版画協会展出品、38年日本版画協会展版画道賞、40年記念大賞、日本版画協会会員。51年延岡市文化功労賞。57年宮崎県文化賞。63年置県百年記念教育文化功労賞。延岡市で没、76歳。版画家、壁画、美教

黒崎 彰 (くろさき・あきら/1937～2019年)

満州大連市生れ。神戸に育つ。1950年頃より芦屋の新制作神戸研究所に通う。62年京都工芸繊維大学卒。65年頃より木版画制作。67年国展会展新人賞。70年東京国際版画ビエンナーレ文部大臣賞。72年フイレントゥエ国際版画ビエンナーレ金賞。81年東亜国際版画ビエンナーレ大賞。2006年京都精華大学教授。2019年没、82歳。版画家、美教

黒崎義介 (くろさき・ぎすけ/1905～1984年)

長崎県生れ。1926年川端画学校に学ぶ。27年童話の挿絵を描く。小茂田青樹、安田靫彦に師事。48年日本美術院展院友。53年新興美術院会員。59年日本著作権協議会理事。61年ユネスコ派遣、著作権調査で渡米、13ヶ国を訪問。61年新世紀美術会を結成。63年現代美術家協会会員。48年童画研究会を主宰、展覧会を開催し、日本童画家協会理事。79年日本児童文芸家協会から児童文学賞。藤沢市で没、79歳。洋画家、挿絵、童画

黒沢信男 (くろさわ・のぶお/1930年～)

埼玉県生れ。1949年東京芸術大学美術学部入学。

52年日展入選。59年白日会会員、79年白日会記念展内閣総理大臣賞。73年安井賞展入選(同翌年)。92年日展特選、その後会友。96年白日展中沢賞、その後委員。洋画家

黒沢芳男 (くろさわ・よしお/1949年～)

埼玉県生れ。15歳より、松永敏太郎に師事。1978年パリ美術研究所(東京)で、絵画理論とデッサンを学ぶ。90年より5年間、I氏の企画でビュッフェとの2人展。93年全国5都市同時開催 他にニューヨーク、パリで個展。洋画家

黒島孫正 (くろしま・まごまさ?/1848～1905年)

石垣島生れ。喜友名安信に師事した。師と同門の山里得次とともに宮良殿内の板戸絵を作成した。書もよくした。1905年没、57歳。絵師、日本画家

黒滝俊雄 (くろたき・としお/1907～1988年)

弘前市生れ。1926駒澤大学専門部に入学。翌年予科に転じ、同時期に本郷絵画研究所夜間部に入所。27年穴沢赳夫、常田健らと洋画グループ「未青社」を創立し、33年佐藤麻吉らを迎え「紀元社」と改名。68年弘前美術作家連盟を創立、委員長。71年津軽書房より『画譜印度仏蹟巡拝』を上梓。版画も制作した。1988年没、81歳。洋画家、版画家

黒田久美子 (くろだ・くみこ/1914～1995年)

東京生れ。1930年金城女学校中退。遠山清に油画、パステル画を習う。30年名古屋市展に入選。31年中村研一に入門。32年岡田三郎助の女子研究所で学ぶ。36年春台展で受賞。46年光風会会員。47年女流画家協会を設立、会員。50、51、65年資生堂ギャラリーで個展。東京で没、81歳。夫は黒田頼綱。洋画家、パステル画

黒田茂樹 (くろだ・しげき/1953年～)

横浜市生れ。1977年多摩美術大学大学院修了。78年日本現代版画大賞展・優秀賞。79年文化庁芸術家国内研修員奨学金。84年文化庁芸術家在外研修員として米国に遊学。85年ロックフェラー日米交換留学生奨学金。91年横浜文化賞奨励賞。96年ポートルランド国際版画展(招待)。98年現代日本版画展(ティコティン美術館・イスラエル)。2000年横浜ゆかりの作家展(横浜美術館)、多摩美術大学版画の30年展(東京都)。版画家

黒田重太郎 (くろだ・じゅうたろう/1887～1970年)

大津市生れ。慶応義塾普通部中退。1904年鹿子

木孟郎、05年聖護院洋画研究所で浅井忠に師事。16～18年渡欧、西洋美術史を学び、21～23年再渡仏、アンドレ・ロートの影響を受ける。画論、技法史等を学ぶ。19年二科賞、23年二科会会員。24年小出檜重らと信濃橋洋画研究所を開設。37年全関西洋画研究所を設立。47年二紀会創立会員。47年京都市立美術専門学校洋画科教授、京都市立美術大学洋画科主任教授、63年同校名誉教授。京都で没、82歳。洋画家、美教

黒田清輝 (くろだ・せいき/1866～1924年)

鹿児島市生れ。1872年上京。二松學舎、築地英学校、東京外国語学校などに学ぶ。84～93年渡仏、86年画家に転向。ラファエル・コランに師事。94年山本芳翠から生巧舎を譲り受け、久米桂一郎と画塾天真道場を開設。印象派の影響を取り入れた外光派の作風を確立。96年明治美術会から独立、白馬会を結成、98年東京美術学校西洋画科教授。1910年帝室技芸員。13年国民美術協会会頭。20年貴族院議員。22年帝国美術院院長など歴任。東京で没、58歳。洋画家、美教

黒田征太郎 (くろだ・せいたろう/1939年～)

大阪生れ。1961年デザイン事務所勤務。NYでデザイン事務所。67年帰国。69年イラスト人気イラストレーター。85年 EXPO'85 科学万博サントリー館壁画制作。同年講談社出版文化賞、さしえ賞。92年NYに移住。94年連作アニメ「戦争童話集」。2003年「戦争童話集一冊になったお母さん」ピーボディ賞。イラスト、デザイナー、挿絵、アニメ

黒滝大休 (くろたき・だいきゅう/1907～1988年)

弘前市生れ。1921年弘前中学校入学。26年駒澤大学専門部に入学、27年予科に転じ、本郷絵画研究夜間部に通った。27年穴沢起夫らと「未青社」を結成。32年駒澤大学卒、弘前和洋裁高等女学校就職。以後33年間高校で教鞭。33年に「未青社」を「紀元社」に改称し、新たに佐藤麻古杜らを加えて活動。57年棟方寅雄と洋画グループ「鼓楼社」を結成。68年弘前美術作家連盟創設委員長。70年弘前博物館建設協議会結成。1988年没、81歳。洋画家、美教

黒田鵬心 (くろだ・ほうしん/1885～1967年)

東京生れ。第一高等学校を経て、東京帝国大学文科大学哲学科(美学専攻)に進み、大塚保治の指導

を受けた。在学中は、哲学科の講師を務めていた関野貞を通じて建築学科の後藤慶二、咲寿栄一らと親交を深める。卒業後、読売新聞に入社、文化欄の記者になった。美術評論、建築評論を多く執筆。『建築畫報』の編集に携わる。趣味叢書を企画し、『都市の美観と建築』(1914年)などを刊行した。1918年三越呉服店に入社し、PR誌「三越」を編集。この頃から建築評論に距離を置くようになる。22年より、フランス人画商デルスニスが開催するフランス美術展(仏展)に関わるようになり、24年には三越を退社し、デルスニスと共同で日仏芸術社を設立。展覧会によりフランス美術の紹介に努め、作品の販売も行った。しかし、採算を度外視してロダンの大作を搬入したことや、パリで開催した日本美術展の赤字などにより、デルスニスも経済的苦境に陥り、31年に日仏芸術社は解散した。文化学院教授。49～66年は東京家政大学教授。著書;美術辞典(石井柏亭、結城素明共著 日本美術学院、1913年)、東京百建築(編著、1915年)、仏蘭西創作版画集(日佛藝術社、1927年)、鵬心選集(1・2・3・5・7・8・9巻が既刊、1953-1956年)、(1)日本中心とする東亜美術史、(2)岡倉天心と其時代、(3)美学及芸術学入門、(5)古社寺行脚、(7)自然美と風景、(8)都市美と建築、(9)巴里の思出。1967年没、82歳。美術評論家、美教

黒田嘉治 (くろだ・よしはる/1915～1985年)

東京生れ。1931年東京美術学校彫刻科塑造部卒。29年帝展入選し、二度特選、33年帝展無鑑査。40～63年大須賀力と彫刻二人展開催。戦後は日展に出品した他、国立近代美術館主催「近代の彫刻展」、日本国際美術展、現代日本美術展、秀作美術展等に出品。58年日展評議員、59年改組日展出品作で文部大臣賞。59日展参与。東京で没、76歳。彫刻家

黒田頼綱 (くろだ・よりつな/1909～1998年)

東京生れ(黒田清輝は伯父)。1926年開成中学校在学中、川端画学校に通う。27年東京美術学校西洋画科入学。33年光風会展で光風賞、会友、37年会員。33年帝展入選、37年文展無鑑査、52年日展委嘱。47～51年朝井閑右衛門らと新樹会設立同人。64～74年女子美術大学教授。85年日本橋高島屋個展。1998年没、89歳。洋画家、美教

黒光茂樹 (くろみつ・しげき/1909～1993年)

愛媛県生れ。1925年金島桂華に入門、38年京都市立絵画専門学校卒。53年日展で特選(白寿賞・朝倉賞)。51年関西総合美術展開催にあたり、桂華が主宰する「衣笠会」に会員として参加し出品。同会は桂華が没した翌年の75年まで独自に展覧会を年に一

度開催。59～53年個展開催(大阪高島屋画廊)。73年改組日展では審査員。74年日展会員。76年愛媛県立美術館で黒光茂樹展開催。85～88年妙心寺靈雲院(御光の間)の障壁画を制作。87年京都府文化賞。京都で没、83歳。 **日本画家**

桑田喜好 (くわた・きよし/1912～1991年)

東京生れ。日本美術学校卒。新興版画會、新興美術協会、十人展(創元美術協會)、渡台。台湾美術聯盟結成。台湾美術展で特選3回、無鑑査。71～72年渡欧、年太平洋画会展に出品。1991年没、79歳。 **洋画家、水彩**

桑田道夫 (くわた・みちお/1916～2002年)

東京生れ。1938年京都高等工芸学校卒。38～45年日本ビクター入社勤務。50年新制作協会会員。54年現代日本美術展に出品。55年国際美術展に出品。59年東京都野外公告2等賞。、S. D. A賞銅賞。60年京都大学工学部建築学科非常勤講師。68年成安女子短期大学教授。71京都教育大学教授。80年京都芸術大学短期大学教授。京都市で没、86歳。 **洋画家、美教**

桑重儀一 (くわしげ・ぎいち/1883～1943年)

山口県生れ。1907年渡米、カリフォルニア州立大学美術科特待。11～15年渡仏、ローランスに師事。20、22、24、26、27、28年帝展入選。31年帝展無鑑査。31～31年再渡仏。33年日本橋三越で滞仏作品展開催。34年滞欧作品展を神戸画廊で開催。太平洋美術学校で教鞭。43年没、60歳。 **洋画家、美教**

桑原巨守 (くわはら・ひろもり/1927～1993年)

群馬県生れ。1949年東京美術学校彫刻科卒。64年二紀展入選。66年二紀展同人賞。71年女子美術大学教授。75年二紀展で菊華賞。82年高村光太郎大賞展で美ヶ原高原美術館賞。83年二紀展で文部大臣賞。89年二紀展で宮本三郎賞。93年女子美術大学名誉教授。群馬県渋川市に桑原巨守彫刻美術館。1993年没、67歳。 **彫刻家、美教**

桑原福保 (くわばら・ふくやす/1907～1963年)

山梨県生れ。1924年帝展入選。27年山梨県立師範学校卒。33年上京、熊岡美彦に師事。34年～東光展に出品。1936年文展入選。40年東光展で美術之友賞。42年東光会賞。47年東光会会員。終戦後、桑原絵画研究所を開設し、指導にあたる。54年日展で岡田賞。56年以降依嘱出品。58～60年米国経由で渡欧、留学。1963年没、56歳。 **洋画家**

桑原 実 (くわばら・みのる/1912～1979年)

新潟県生れ。1933年東京美術学校図画師範科卒。35年二科展で入選。38年「新世紀美術協会」を結成。42年二科会会友。46年東京第二師範学校。47年二科会会員。70年東京芸術大学教授(美術教育課程担当)。ユネスコ・ジュニア文化センター理事長。日本造形教育連盟委員長、教育美術振興会理事を務める。79年没、66歳。 **洋画家、美教**

桑原盛行 (くわはら・もりゆき/1942年～)

広島県生れ。1967年日本大学芸術学部美術学科造形専攻卒。卒業制作で日本大学芸術学会奨励賞。67年シュル美術賞展で三席、68年同展で一席。個展(サトウ画廊 9.30-10.12)に群の造形的性質を扱った作品[自由を主題とする造形組織体の変奏シリーズ]を展示。国際青年美術家展、現代日本美術展、ジャパン・アート・フェスティバル展に出品。66～77年南画廊で個展。78年インド・トリエンナーレ招待出品。80～96年ギャラリー上田で個展。日本現代美術展、現代日本美術の動勢展等に招待出品。世田谷の美術展(世田谷美術館)に招待出品。2009年個展(池田20世紀美術館・7.23-8.7)に[点から円へ〇格子図上の旅]のテーマで回顧的展示。 **洋画家、造形**

桑山忠明 (くわやま・ただあき/1932年～)

名古屋市生れ。1956年東京芸術大学卒。58年渡米、以降NY在住。61年NYで個展。ミニマル・アートを思わせる、モノクロームの緊張感漂う絵画を制作。変形キャンバスを使用することもある。近年は化学塗料を用いて、より人工的な美を追求している。96年千葉市美術館、川村記念美術館で個展。 **洋画家**

郡司卯之助 (ぐんじ・うのすけ/1879年～没年不詳)

茨城県生れ。小杉放菴とともに五百城文哉に学ぶ、1903年東京美術学校西洋画科卒、09年文展に出品。挿絵を描いた。24年福秀に改名。1902年「三菱ヶ原」丸の内が三菱ヶ原と言われた頃を描いた油絵が三菱一号館美術館に所蔵。 **洋画家、挿絵**

け

溪斎英泉 (けいさい・えいせん/1791～1848年) 江戸生れ。狩野白珪斎に学び、菊川英山の門に入る。1822年頃から美人の大首絵に専念。歌麿の理想的様式美の追求とは異質の、女性の内面の抽出に独自のスタイルを完成。洋風手法を用いた風景画、人情本挿絵、春本を作成。女郎屋を営み、好色的な筆名を用いる。天保の改革後は藍摺を用い、晩年は戯作者に転向。著書『无名翁随筆』。主要作品『浮世風俗美女競(くらべ)』『今様美人拾二景』、安藤広重との合作『木曾海

道六拾九次』、『江戸日本橋ヨリ富士ヲ見ル図』。江戸で没、57歳。江戸時代末期の浮世絵師

解良常夫（けら・つねお/1939～1997年）

東京生れ。1966年、光陽展に初出品以来、連続出品。76年、光陽展で奨励賞を受賞、委員に推挙。81年土陽美会を創設し、指導を続ける。光陽会や個展、葛飾区美術家展などを中心に発表。97年没、57歳。（出典 わ眼）洋画家

見目陽一（けんもく・よういち/1949年～）

栃木県生れ。72年新道繁、金子徳衛に師事。81年日本板画院展・新人賞、ニュートン賞。86年個展（伊勢丹アートホール・浦和）。88年個展（西武アートギャラリー・所沢、埼玉県立近代美術館）、『埼玉の自然100選』木口木版画集刊行。89年『EX-LIBRIS』木口木版画集刊行。91年『四季』詩画、木口木版画集出版。99年画集『見目陽一の世界』（下野新聞社刊）。2002～09年日本板画院理事長。10年日本板画院展棟方志功賞、15年文部科学大臣賞。町民学校の木版画教室で版画普及。版画家

こ

呉 亜沙（ご・あさ/1978年～）

神奈川県生れ。2001年女子美術大学絵画科洋画専攻卒、東京芸術大学大学院美術研究科修士課程入学、03年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。第21回上野の森美術館大賞展優秀賞。05年文化庁新進芸術家海外留学制度で渡米。洋画家

小石サダヲ（こいし・さだを/1952～2010年）

下関市生れ。1989年ウィーン派アートスクールで川口起美雄に師事。90年ドイツ・ローランツホーフ画廊、2002年アートスペース美蕾樹で個展。05、08、09年青木画廊で個展。2010年没、58歳。（出典 わ眼）洋画家

小泉 斐（こいずみ・あやる/1770～1854年）

栃木県生れ。島崎雲圃に入門。唐美人図・鮎図などを習う。30歳頃小泉光秀の養子となり同社の神官を継いだ。立原翠軒に就いて経学や詩文を修め、その子立原杏所に画を教えた。画は唐の王維を敬慕した。各地から門弟が雲集し30年もの間、画技を伝えたという。「小泉檀山門人録」には100名もの人名が記され島崎玉淵・宇佐美太奇などが育つ。高久靄厓も画技を受けたひとりという。「富嶽写真」は富岡鉄斎が富士図製作に携わるとき大いに参考にした。1854年没、84歳。江戸時代後期の絵師

小泉勝爾（こいずみ・かつじ/1883～1945年）

東京生れ。1907年東京美術学校日本画科卒業後は、茨城県龍ヶ崎の中学校勤務。12年川崎小虎、広島晃甫ら「行樹社」（1912～1917）を結成。13年東京美術学校で結城素明の助手。文展、帝展に出品。22年日第一作家同盟（DSD）に参加。31年帝展で特選。33年東京美術学校教授。1945年没、62歳。土岡春郊と共著で『鳥類写生図譜』（鳥類写生図譜刊行会刊行。日本画家、版画、美教

小泉癸巳男（こいずみ・きしお/1893～1945年）

静岡市生れ。1909～12年日本水彩画会研究所で戸張孤雁、織田一磨に師事。堀越寛一の彫版所に入り恩地幸四郎、長瀬義郎の作品にふれ、11年頃から木版画を始める。24年「木版画の彫り方と擦り方」出版。29年春陽会に出品。旭正秀らと「版画」を創刊。代表作は「昭和東京百図絵」。45年没、52歳。版画家

小泉 清（こいずみ・きよし/1900～1962年）

東京生れ。父は小泉八雲。東京美術学校西洋画中退。里見勝蔵のフォーヴィスムに影響を受ける。1946年新興日本美術展で読売賞。47年初個展。48年一燈美術賞。54年国画会会員。銀座フォルム画廊個展。自死、61歳。（出典 わ眼）洋画家

小泉 繁（こいずみ・しげる/1898～1970年）

東京生れ。東京美術学校製版科、同校師範科中途退学、1925年帝展入選、以後帝展、日展に随時出品、52年日展特選、翌年無鑑査、出品依頼者待遇。創元会出品、同会委員。日本山岳画協会々員、毎年同展出品。1970年没、72歳。洋画家

小泉 繁 II（こいずみ・しげる/1898～1970年）

東京生れ。1921年前後に東京美術学校図画師範科中退。25年第6回帝展に初入選。以後3回入選。50年第9回創元会展に出品、51年第10回創元会展で会員。52年第8回日展で特選。53年第9回日展で無鑑査出品。54年第10回日展で依頼出品。58年第1回日展で委員となる。68年二青会展に出品。創元会委員、日本山岳画協会会員を歴任。70年1月22日没、享年71歳。（佐）洋画家

小泉淳作（こいずみ・じゅんさく/1924～2012年）

神奈川県生れ。京美術学校卒。山本丘人に師事。新制作協会展、創画展を中心に作品を発表。1977年山種美術館賞展で優秀賞。水墨画を追究し、陶芸も手がける。2000年鎌倉建長寺の天井画「雲竜図」を完成。10年ふすま絵40面を東大寺に奉納した。2012年没、87歳。日本画家

小泉晋弥 (こいずみ・しんや/1953年～)

福島県生れ。東京芸術大学美術学部芸術学科卒業、同大学院美術研究科修了。現在茨城大学教育学部教授。専門は近現代美術史、美術教育学、博物館学。著書に『岡倉天心と五浦』『岡倉天心アルバム』(中央公論美術出版)など。**美術研究者**

小泉成一 (こいずみ・せいいち/1852～1921年)

広島県生れ。1882年本多錦吉郎の彰技堂に学んだ後、小山正太郎の不同舎に入門。89年第1回明治美術展に出品。93年第5回明治美術会展に出品。東京高等商業学校、神奈川県尋常師範学校、山形県尋常中学校の図画教師を務め、1901年から24年まで宮城県名井の複数の中学校で教鞭をとった。21年仙台市で没、享年69歳。(佐)**洋画家、美教**

小泉富司 (こいずみ・とみじ/1917～1989年)

東京生れ。1941年東京美術学校油画科卒。藤島武二に師事。新文展に入選。65年国画会会員、神奈川県藤野町に疎開。青梅市ゆかりの画家。1989年没、72歳。1996年小泉富司画集刊行(小泉真)。**洋画家**

小泉秀雄 (こいずみ・ひでお/1900～没年不詳)

京都生れ。1920年ペルーより帰国。葵橋洋画研究所、同舟舎洋画研究所で洋画を学び、26年回白日会展に油彩画、27年入選。27、28年国画創作協会展第二部洋画に入選、第7回展でブロックス賞。28年『美之國』「第七回国画創作協会展受賞者」に経歴が紹介。梅原龍三郎、小林利作に師事。32国展に木版画が入選。**洋画家、版画家**

小泉秀松 (こいずみ・ひでまつ/1902～1978年)

東京生れ。太平洋画会研究所に学ぶ。太平洋画会会員、1950年太平洋画会会員を除名、脱会。国画会会員。1978年没、76歳。**洋画家**

小泉倫之助 (こいずみ・りんのすけ/1904～1988年)

神奈川県生れ。1935年春陽会展で春陽会賞、58年春陽会会員。1988年没、84歳。**洋画家**

小磯良平 (こいそりょうへい/1903～1988年)

神戸市生れ。1925年帝展に入選。26、32年帝展で特選。27年東京美術学校西洋画科卒。28～30年渡仏、パリでグランド・ショミエールへ通う。29年サロン・ドートンヌに入選。31年光風会会員。36年脇田和らと「新制作派協会」結成。41年日本芸術院賞。50年東京藝術大学講師(53～70年同教授)。79年文

化功労者。82年日本芸術院会員。83年文化勲章。挿絵も描いた。88年兵庫県立美術館に小磯良平記念室。神戸で没、85歳。92年神戸市立小磯良平記念美術館が開館。**洋画家、美教**

小出三郎 (こいで・さぶろう/1908～1967年)

大阪生れ。信濃橋洋画研究所で小出樽重、国枝金三、黒田重太郎に師事。1934年全関西展で全関西洋画協会賞。38年全関西洋画協会会員。独立美術協会賞。47年独立美術協会会員。汎美術家協会を結成。大阪で没、59歳。(出典 わ眼)**洋画家**

小出卓二 (こいで・たくじ/1903～1978年)

大阪生れ。金沢医科大学薬学専門部卒。信濃橋洋画研究所に入り小出樽重に師事。1927年二科展入選。33年二科展特待。42年二科会会員。45年向井潤吉らと行動美術協会創立。60年現代日本美術展で大阪府芸術賞。48年から大阪市立美術研究所講師。大阪で没、74歳。**洋画家、美教**

小出樽重 (こいで・ならしげ/1887～1931年)

大阪生れ。1907年東京美術学校日本画科入学、09年東京美術学校西洋画科に転科。14年同校卒。19年二科展で樗牛賞。20年二科賞。21～22年渡欧。23年二科会会員。24年信濃橋洋画研究所を起す。芦屋市で没、43歳。**洋画家、美教、信濃橋洋画研究所**

小糸源太郎 (こいと・げんたろう/1887～1978年)

東京生れ。1905年白馬会研究所。06年東京美術学校金工科入学。11年金工科卒。同年同校西洋画科に転科したが中退。30～31年帝展連続特選。31～63年光風会会員。54年日本芸術院賞。59年日本芸術院会員。60年日展理事、61年日展常務理事。65年文化勲章。東京で没、90歳。**洋画家**

郷倉和子 (ごうくら・かずこ/1914～2016年)

東京生れ。27年三輪田高等女学校入学、皇太后に献上作品に推薦。33年女子美術学校日本画科を首席で卒。36年院展に入選、安田靫彦に入門。60年日本美術院賞受賞、日本美術院同人97年日本美術院会員。2002年文化功労賞。03年女子美術大学名誉博士。2016年没、104歳。**日本画家、美教**

郷倉千靫 (ごうくら・せんじん/1892～1975年)

富山県生れ。1913年東京美術学校卒。20年帝展に入選。24年日本美術院同人。のち帝国美術学校、多摩美術学校の教授を歴任。60年芸術院賞。72年芸術院会員。東京で没、83歳。**日本画家、美教**

上坂雅人 (こうさか・がじん/1877～1953年)

京都生れ。日本画を学ぶ。1895年内国勸業博覧会で受賞。1908年上京、白馬会洋画研究所、太平洋画会研究所で洋画を学ぶ。21年頃から木版画を制作。22年日本創作版画協会展に出品。米、仏で個展開催。53年没、76歳。没後パリ、NYで遺作展開催。**洋画家、版画**

神津港人 (こうづ・こうじん/1889～1978年)

長野県生れ。1912年東京美術学校西洋画科卒。黒田清輝、藤島武二、和田英作に師事。15年文展入選。20年農商務省商業美術研究生、英仏留学、ロイヤル・アカデミー・スクール、21年パリ、アカデミー・ジュリアンに学んだ。28～35年構造社絵画部で絵画部主任。25年緑巷会(のちの創芸協会)を主宰。57年第一美術協会に参加、副委員長。第一美術協会名誉会員、日本山林美術協会名誉会員、信州美術会顧問。東京で没、88歳。**洋画家**

香田勝太 (こうだ・かつた/1885～1946年)

鳥取県生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。26～29年渡仏、サロン・ドートンヌ、サロン・ナショナルに出品。三越ギャラリーで滞欧作発表。文展で受賞、のち無鑑査。帝展、新文展を主要な発表の場として晩年まで出品。26年白日会会員。31年女子美術学校教授。島根県で没、61歳。**洋画家、美教**

合田 清 (ごうだ・きよし/1862～1938年)

江戸生れ。1880～87年農業学研究を志望し渡仏。山本芳翠を知り、西洋木版の研究。パリのサン・ニコラ工業学校の教師で木版の大家バルバンの工場5年学ぶ。サロンに出品入選。帰国後、山本芳翠と生巧館画学校を設立。山本芳翠の下絵、合田の製版で文部省教科書、新聞の版下制作。製版工場で門弟を養成。山本の方は生巧館学校と称し、のち白馬会の前進となり、合田の方は生巧館木版部と称した。96年黒田清輝、久米桂一郎の天真道場設立に生巧館画学校を譲る。出版物の挿絵、新聞社の付録木版を彫った。96年東京美術学校洋画科新設にフランス語の講師を30年間務めた。38年没、75歳。**版画家、美教**

合田小三郎 (ごうだ・こさぶろう/1912～1983年)

神奈川県生れ。1939年帝国美術学校本科西洋画科卒、56年新制作協会会員。1983年没、71歳。**洋画家**

合田佐和子 (ごうだ・さわこ/1940～2016年)

高知市生れ。1962年武蔵野美術学校商業デザイ

ン科卒。瀧口修造の勧めでガラス、金属廃品のオブジェ。71年ロックフェラー財団奨学金で渡欧。油彩画制作を始める。78年パステル画、ポラロイド写真の作品を含めフィルム、ビデオ等様々な手法。2003年渋谷区立松濤美術館で個展。16年没、75歳。**洋画家、オブジェ、パステル画、写真、ビデオ**

河内山賢祐 (こうちやま・けんすけ/1900～1980年)

山口県生れ。1930年東京美術学校卒、29年帝展入選。41年展無鑑査出品。39年主線美術協会の解消に伴い同会彫刻部が旧称に復帰した塊人社の同人。制作活動の期間は55年まで。50年日展で最後の出品。主な作品は、山口県平生町の伊藤博文像、56年山口市の井上馨像。山口県で没、79歳。**彫刻家**

神津港人 (こうづ・こうじん/1889～1978年)

長野県生れ。丸山晚霞に師事。1912年東京美術学校西洋画科卒。20～22年農務省美術研修生となり渡欧、ロイヤル・アカデミー・スクール(英)、アカデミー・ジュリアン(仏)に学ぶ。28年構造社の創立に参加、絵画部主任。32年ロスアンゼルス・オリンピック大会の芸術競技役員として渡米。39年緑巷会(第1美術協会)を創立、副委員長。東京で没、88歳。2002年梅野記念絵画館で個展。**洋画家、美教**

幸徳死影 (こうとく・しえい/1890～1933年)

本名は幸衛。高知県生れ。1905年伯父の幸徳秋水とともに渡米。シアトルからロサンゼルスに移り、1921年日本人美術家団体「赫土社」を創立。25年頃パリに渡り平賀亀祐の世話になる。後イタリアに移り、アルコール中毒で視力を失う。33年没、43歳。**洋画家**

河野 薫 (こうの・かおる/1916～1965年)

北海道生れ。1944年日本版画協会展に入選。54年日本版画協会会員。54年国画会展入選、55年国画賞、56年同会会員。57～58年 オレゴン東西展、ニューヨーク、シカゴ、コロombo、ユーゴスラビア各地の展覧会、スイス、グレンヘン・トリエンナーレ展等に出品。1965年没、49歳。**版画家**

河野重軌 (こうの・しげき/1903～1981年)

福岡県生れ。関西工学専修学校卒。林重義、児島善三郎に師事。渡欧3回。文部大臣賞。新協美術会創立委員。1981年没、77歳。**洋画家**

河野秋郎 (こうの・しゅうそん/1890～1987年)

愛媛県生れ。1907年京都で漢籍を修め詩文や画論を学ぶ。12年田近竹邨に入門、南画を学ぶ。15年

日本美術協会で伏見宮買上。17年文展入選。21年富岡鉄斎を顧問に迎え日本南画院を設立、発展につとめる。同院は36年解散。60年に再興。その後は世界各地における南画院展を始め、83年日ソ合同展を開催するなど、国際文化交流に尽力した。84年京都府文化功労賞。88年中国東方美術交流会より最高栄誉賞。1987年没、97歳。南画家

河野次郎 (こうの・じろう/1856～1934年)

東京生れ。浮世絵を北尾某に学び、田崎草雲に南画を学ぶ。1874年上京し高橋由一に洋画を学ぶ。76年愛知県師範学校の画学教員。77年『画学階梯』初編を編集し自ら銅版で製作した。長野市南郷町に「河野写真館」を開業。息子が画家で挿絵でも知られる河野通勢。水彩画、油彩画に取り組む。1934年没、77歳。銅版画家、水彩、洋画、美教

幸野楳嶺 (こうの・ばいれい/1844～1895年)

京都生れ。1852年円山派中島来章に師事。71年四條派の塩川文麟に師事。78年画学校設立建議書を京都府知事に提出。80年京都府立画学校創立し、鈴木百年と北宗(狩野・雪舟派)教員、私塾を開く。各地の内国勸業博覧会の審査員。92年農商務省からシカゴ万国博出品画の委嘱を受け制作。芸艸堂出版の彩色摺画譜に『工業図式』『百鳥画譜』『楳嶺画譜』『花鳥画譜』等。93年に帝室技芸員。1895年没、51歳。明治の京都画壇の代表的日本画家、円山・四條派の伝統を作风に統合し、日本画近代化への基礎を築いた。

高野りう (こうの・りう/1896～1969年)

大高床右衛門・せつの子。結婚し、岡上の姓、1924年岡上りうは、岡田謙三、高崎剛、高野三三男と渡欧。後、高野三三男と結婚、高野りうを名乗る。川村記念美術館に作品所蔵。1969年没、72歳。洋画家

河本真理 (こうもと・まり/1968年～)

東京生れ。東京大学文学部美術史学科卒、2002年同大学院人文社会系研究科博士課程単位修得満期退学。05年パリ第1大学博士号(美術史学)取得。06年京都造形芸術大学比較藝術学研究センター助教授、09年広島大学総合科学部准教授、14年日本女子大学人間文化学部教授。07年『切断の時代 20世紀におけるコラージュの美学と歴史』でサントリー学芸賞、渋沢クロード賞特別賞。西洋美術史専攻。コラージュ研究、美教

鴻池朋子 (こうのいけ・ともこ/1960年～)

秋田市生れ。1985年東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒。98年より社会の境界に生息する森羅万象の物語を、絵画、彫刻、陶物、映像、絵本などの様々なメディアを駆使した壮大なトータルインスタレーションで表現。2012年東山魁夷記念 日経日本画大賞。15年個展「根源的暴力」。16年人間学、おとぎ話、考古学、人類学、民俗学と対話しアートの根本的な問いに挑む『どうぶつのことば～根源的暴力をこえて』(羽鳥書店)を上梓。17年個展「根源的暴力 Vol.2」で芸術選奨文部科学大臣賞。洋画家、彫刻、陶芸、映画、絵本

河野次郎 (こうの・じろう/1856～1934年)

江戸生れ。田崎早雲に師事。足利学校に学ぶ。のち上京、高橋由一に師事。銅版画、水彩、油彩、石版画を制作。1886年長野県師範学校図画教師。1934年没、78歳。河野通勢の父。洋画家、美教、版画、水彩

河野通明 (こうの・つうめい/1919～1993年)

長野県生れ。明星中学校卒。父は通勢。1951年国画会展に入選。61年大調和会創立委員。46年新しき村美術展に出品。新しき村美術展委員。挿絵画家として活躍。清春白樺美術館評議員。著書に「岸田劉生のこと」「劉生展について」93年没、73歳。洋画家、挿絵

河野日出雄 (こうの・ひでお/1922～1995年)

ソウル市生れ。日本大学芸術科予科修了、日本美術学校油画科卒。二科展をはじめ各団体展に出品。1951年病氣療養生活。出版物に童画を描きはじめた。58年陽会展に出品、70年特待賞、74年会員、79年退会。76年現代童画会創立、発起人、第1回展から出品をつづけ、79年会長。84年藤沢市の画廊で、家族四人による最初のファミリー展を開催、92年からは、これを「ファンタスティックの世界展」として、各地で開催。神奈川県で没、73歳。洋画家、現代童画会名誉会長

高野三三男 (こうの・みさお/1900～1979年)

東京生れ。1924年東京美術学校西洋画科中退。24～40年渡仏。サロン・ドートヌなどに出展、30年パリのベルネーム・ジュヌ画廊で個展。29年二科展で二科賞。31年二科会会友。37年一水会会員。新文展無鑑査、のち日展評議員、参与。東京で没、79歳。洋画家

河野通勢 (こうの・みちせい/1895～1950年)

群馬県生れ。1913年高村光太郎や関根正二と交友。14年二科展入選。17年文展入選。岸田劉生と知友。18年草土社展出品。24年春陽会賞。26年春陽会会員。27年大調和会創立参加。29年国画会会員。異色の人物画。日本画、銅版画、多数挿絵を残した。銅版画や新聞小説の挿絵もおおい。長与善郎の『項羽と劉邦』をはじめとする大衆小説の挿絵にも活躍した。東京で没、55歳。洋画家、日本画、挿絵、版画

河野通紀 (こうの・みちただ/1918～2002年)

大阪生れ。1933年中之島洋画研究所で国枝金三に師事。48年行動美術展入選。54年行動美術協会会員。現代日本美術展、日本国際美術展等に出品。1970年オレゴン大学付属美術館主催のアメリカ巡回個展でマジック・リアリズムと評された。69年西宮市民文化賞。02年没、84歳。洋画家

神山 恒 (こうやま・ひさし/1908～1983年)

東京生れ。川端画学校に学ぶ。新世紀美術協会会員。創造美術会会員。大阪府立豊口話学校中等部の美術教師、のち生野盲学校校長。1983年没、75歳。洋画家

高良眞木 (こうら・まき/1930～2011年)

東京生れ。1947年東京女子大学入学。49年渡米。インディアナ州のアーラム・カレッジに転入学。英文学、美術専攻。帰国翌年パリ留学。55年帰国。60年浜田糸衛の長編童話等4冊の表紙・挿絵を描く。63年中川一政とスケッチ旅行などに同行。71銀座・現代画廊で個展。2002年真鶴に”木の家”を開設、真鶴共生舎の代表。2011年没、81歳。洋画家

小枝繁昭 (こえだ・しげあき/1953年～)

京都生れ。大型版画的な展覧会として注目を集めてきたマキシ・グラフィカの最初期のメンバーでもある。1985年京都美術展新人賞、86年現代版画コンクール優秀賞、88年ジャパンエンバコンクール新人賞、91年和歌山ビエンナーレ展大賞。92年文化庁派遣芸術家在外研修員としてロンドン大学ゴールドスミスカレッジに滞在し、翌年から94年まで客員研究員としてイギリスのオックスフォード大学ラスキンスクール・オブ・ドローイング・アンド・ファインアート、ウォルフソンカレッジ、および、オックスフォード近代美術館に滞在、制作。小枝は、写真を介在させることで、版画に現実のイメージを持ち込む作品を制作している。版画家

神津港人 (こおづ・こうじん/1889～1978年)

長野県生れ。丸山晚霞に師事。1912年東京美術学校西洋画科卒。20～22年農務省美術研修生となり渡欧、ロイヤル・アカデミー・スクール(英)、アカデミー・ジュリアン(仏)に学ぶ。28年構造社の創立に参加、絵画部主任。32年ロスアンゼルス・オリンピック大会の芸術競技役員として渡米。39年緑菴会(第1美術協会)を創立、副委員長。東京で没、88歳。2002年梅野記念絵画館で個展。洋画家、美教

高野 達 (こおの・とおる/1922～1983年)

熊本県生れ。1944年東京武蔵工業専門学校建築工学科卒。51年海老原喜之助に師事、デッサン、水彩を学ぶ。53年青々水彩展で西日本新聞社賞。福岡市立住吉中学校に勤務。64年示現会に出品、会友、70年会員。65年日展入選、以後7回入選。1983年没、61歳。水彩画家、美教

上阪雅人 (こおさか・がじん/1877～1953年)

京都市生れ。山元春挙に師事し、第2回内国勸業博覧会入選。図画教員。30歳上京し、白馬会洋画研究所で洋画を学ぶ。1921年木版創作版画をはじめ、日本版画協会展に出品。30年文部省囑託、啓明会から図画教育に関し数冊の著述。春陽会、国画会、日本版画協会に出品。49年米第9軍師団、ライダー司令官夫人の紹介で、米ロスで個展。51年U・S・A・エデュケーションセンター、52年仙台市、パリのチュルヌスキ美術館で個展。1953年没、76歳。56年パリ、ニューヨーク、ウィーン、ローマ等で遺作展。版画家

郡山三郎 (こおりやま・さぶろう/1908～1982年)

鹿児島県生れ。1938年帝国美術学校本科西洋画科卒。47年中央美術協会会長。中央美術学園長(絵画通信教育機関)を歴任。48年機関誌「中央美術」発刊。52年中央美術協会創立 児島善三郎初代会長。東京で没、73歳。洋画家、美術教育、中央美術協会会長

小枝繁昭 (こえだ・しげあき/1953年～)

京都府生れ。大型版画的な展覧会マキシ・グラフィカのメンバー。1985年京都美術展新人賞、86年現代版画コンクール優秀賞、88年ジャパンエンバコンクール新人賞、91年和歌山ビエンナーレ展大賞。92年文化庁派遣芸術家在外研修員ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジに滞在し、93～94年客員研究員としてイギリスのオックスフォード大学ラスキンスクール・オブ・ドローイング・アンド・ファインアート、ウォルフソンカレッジ、および、オックスフォード近代美術館に滞在、制作した。版画家

古賀耕児 (こが・こうじ/1931～2009年)

福岡県生れ。1950年久留米大学医学部に入学、

中退。53年二科会入選。58年福岡県展で文部大臣賞、県美術協会賞、県美術協会会員。64～66年渡仏。68年安井賞展に出品。70年二科会会員、84年評議員・福岡支部長。97年総理大臣賞、2000年二科会理事。98年久留米市功労者。2009年没、78歳。
洋画家、版画

古賀忠雄 (こが・ただお/1903～1979年)

佐賀市生れ。佐賀県師範学校附属小学校高等科を卒、東京美術学校彫刻科塑像部本科入学。1929年帝展入選。39年文展特選。43年帝国芸術院賞。45年日展委員。彫刻、陶器・絵画など制作。67年日本芸術院会員、日本彫刻会理事長。東京で没、75歳。佐賀城公園に「古賀忠雄 彫刻の森」として常設展示。
彫刻家、日本画

古賀春江 (こが・はるえ/1895～1933年)

米市生れ。1912年上京、太平洋画会研究所に通う。13年日本水彩画会研究所に入り石井柏亭に師事。のち日本水彩画会会員。22年二科展に出品、二科賞を受賞。同年、中川紀元、神原泰らとアクションを結成。その後パウル・クレー風の童画表現を試みる。29年超現実主義の影響を受けた幻想的画風を示す。31年日本水彩画会委員。東京で没、38歳。
洋画家、水彩画家

五木田智央 (ごきた・ともお/1969年～)

東京生れ。プロレス関連のイラストを描く。国内外で個展、グループ展、カルチャー、ファッション、ミュージックビジュアルなど手掛ける。2004年頃からキャンバスに描く。モノクロの絵が海外で注目。17年NYやロスでの展覧会にニューヨーク・タイムスで高い評価を受け、世界的評価を受ける。18年東京オペラシティアートギャラリーで個展。
洋画家

小口一郎 (こぐち・いちろう/1914～1979年)

栃木県小山市生れ。18歳油彩画を描く。1951年から木版画制作。上野誠らとともに版画運動協会で活躍。足尾銅山の鉱害事件をテーマにした69年『野に叫ぶ人々』74年『鉱毒に追われて』76年『磐圧に耐えて』の三部作が有名です。1979年没、65歳。
版画家

國領経郎 (こくりょう・つねろう/1919～1999年)

横浜市生まれ。1941年東京美術学校図画師範科卒。55年光風展で光風会賞。57年光風会会員。55、69、71年日展特選。86年日展で内閣総理大臣賞。92年日展常務理事。72～85年横浜国立大学教授。80～84年大学美術教育学会理事長。83年宮本三郎記

念賞。神奈川文化賞。90年日本芸術院賞。91年日本芸術院会員。東京で没、79歳。
洋画家、美教

小坂圭二 (こさか・けいじ/1918～1992年)

青森県生れ。野辺地中学校在学中に阿部合成に師事。42年東京美術学校彫刻科に入学して柳原義達に師事、菊池一雄教室に学ぶ。50年同校を卒業。50年から菊池一雄教室の助手。50年新制作協会展で新作家賞、52年同展で同賞。52～53年東北十和田湖畔の「乙女の像」を制作中の高村光太郎の助手。キリスト教に興味を抱き38才で洗礼を受ける。59年新制作協会彫刻部会員。60～52年渡仏し、フランス国立美術学校に入学。ヤンセスに師事し、エジプト、ギリシャ、ヨーロッパ各国を旅した。70年大阪万国博覧会 Expo'70 のキリスト教館に「世界の破れを担うキリスト」を出品。73年「断絶の中の調和」がバチカン現代宗教美術館買上げとなり、74年東京カテドラル大聖堂に「太平洋の壺」が納入された。80、82年高村光太郎大賞展で優秀賞。十字架の造型に興味を抱き、「ザ・クロス」(67年)、「連立の十字架」(67年青山学院初等部礼拝堂)等、幾何学的形態に象徴性を持たせる作品を制作する一方で、「新渡戸稲造」立像等、肖像彫刻も多く手がけた。東京で没、74歳。
彫刻家

小柴錦侍 (こしば・きんじ/1889～1961年)

東京生れ。1911年東京高等工芸学校卒。渡欧、ルーヴル美術館学校、アカデミー・ランソンに学ぶ20年帰国。20、22、26年帝展で特選。40年創元会創立会員。東京で没、71歳。(出典 わ眼) **洋画家**

児島喜久雄 (こじま・きくお/1887～1950年)

東京生れ。1903年三宅克己に師事。06年学習院中等科卒。09年バーナード・リーチにエッチングを習う。13年東京帝国大学文化大学哲学科卒。14年第1回二科展に入選。16年矢代幸雄と美術新報の編集に当たる。21年学習院教授。米国經由欧州留学。欧州美術史研究。23年東北帝国大学助教授を任じられ、文部省在外研究員となる。26年帰国。35年東京帝国大学教授となり、東北帝大助教授兼務。38～39年渡欧。46年国宝保存会委員。23年東京国立博物館評議員。長尾美術館館長。50年7月5日没、享年62歳。(佐) **美術史家、東大教授、美教、版画**

小島清雄 (こじま・きよお/1914～1982年)

新潟県生れ。1936年日本体育専門学校卒。元走り幅跳びのアスリート。高校の体育教師から画家に転身、独学。1960～70年代京都と仏で活躍。61年光風会会員。67年新日展で特選。日展会友。京都で没、67歳。
洋画家

小島 功 (こじま・こお/1928～2015年)

東京生れ。16歳頃から画家を志し、川端画学校、太平洋美術学校に通った。1947年久里洋二、長新太らと独立漫画派を結成。48年創刊の『新漫画』に1コマ漫画を描く。「昭和の美人画」の一例として大衆的な人気を獲得。56年より8コマ漫画「仙人部落」を『週刊アサヒ芸能』に連載、59年間2681回におよんだ代表作。週刊誌を舞台に活躍。60年『週刊漫画サンデー』の表紙画を手がける。64年日本漫画家協会設立に参加。68年「日本のかあちゃん」で文藝春秋漫画賞。90年紫綬褒章受章。92～2000年日本漫画家協会理事長。2000年勲四等旭日小綬章受章。2010年漫画家協会名誉会長に就任。2015年没、87歳。
漫画家

児島善三郎 (こじま・ぜんざぶろう/1893～1962年)

福岡市生れ。本郷洋画研究所に通う。1922年二科賞。24～28年渡仏。28年二科展に滞欧作特陳、会友。30年独立美術協会の創立に参加。59年銀座松屋で自選展開催。現代日本美術展、日本国際美術展に出品。62年没、69歳。(出典 わ眼) **洋画家**

小島善太郎 (こじま・ぜんたろう/1892～1984年)

東京生れ。1910年絵を本格的に学び始める。安井曾太郎に師事。22～25年渡仏、23年サロン・ドートンヌ入選。26年「一九三〇協会」創立。18年二科展に入選。27年二科賞。30年「独立美術協会」創立会員。東京日野市で没、91歳。(出典 わ眼) **洋画家**

児島虎次郎 (こじま・とらじろう/1881～1929年)

岡山県生れ。1890年莊保二郎に絵を学ぶ。1900年山下久馬太よりデッサンの指導を受ける。01年上京。白馬会研究所に通う。02年東京美術学校西洋画科選科に入学し、成績優秀につき飛び級で3学年に進学。04年成績優秀に付き4学年を飛び越して卒業。07年勸業博覧会で1等賞。08年渡仏、12年帰国。18年中国、朝鮮半島旅行。19年東京美術学校で初個展。渡欧。20年サロン・ド・ラ・ソシエテ・ナショナル正会員。大原コレクションの蒐集を始める。21年帰国。22年渡欧。23年帰国。26年聖徳太子奉賛美術展に出品。29年3月8日岡山県で没、享年47歳。(佐) **洋画家、大原コレクション**

小島信明 (こじま・のぶあき 1935年～)

福井県生れ。大阪市立工芸高等学校卒。1958年読売アンデパンダン展に出品、62年アンデパンダン展でドラム缶の中に本人が一日中立つパフォーマンス。篠原有司男らとの交流。64年に代表作《立像》

を発表、来日中のジャスパー・ジョーンズに注目される。70年代滞米。 **パフォ、彫刻、版画**

小島俊男 (こじま・としお/1935年～)

名古屋市生れ。1960年東京芸術大学卒、62年東京芸術大学専攻科修了、大橋賞。64年新制作展新作家賞。67～69年フランス政府給費生としてパリ国立高等美術学校(ブリアンション教室)に学ぶ。86年中日新聞、89年日経新聞挿絵。90年白日会、内閣総理大臣賞。2000年白日展 中澤賞。愛知県立芸術大学教授・白日会副会長。 **洋画家、挿絵**

児島凡平 (こじま・ぼんぺい/1905～1998年)

愛媛県生れ。1951年、46歳の時、3匹のヤギを連れ松山から歩いて上京。画学校に通う。50歳で帰郷。60歳で再上京。職業、居所を転々とする。73歳で個展。79歳帰郷。97年故郷で個展。洲之内徹が作品紹介。98年没、92歳。(出典 わ眼) **洋画家**

小島真佐吉 (こじま・まさきち/1914～1986年)

山形県生れ。1928年裸童社研究所で三浦鮮治に師事。32年道展に入選('46年雲井賞)、47年全道展会員。32年上京、35年川端画学校修了。37年二科会会員栗原信に師事。39年二科展入選。40年白日会展で船岡賞、43年白日会会員。46年日展に入選('47年)。52年二紀展出品('55年同人賞、'77年鍋井賞、'83年文部大臣賞)。52年二紀会同人('56年委員、'85年評議員)。77年北海道立近代美術館の「北海道現代美術展」に招待出品。81年紺綬褒章。東京で没、71歳。二紀会評議員・全道展会員。 **洋画家、版画**

小嶋悠司 (こじま・ゆうじ/1944～2016年)

京都市生れ。1968、70、71、72年新制作展で新作家賞。73年新制作協会日本画部会員。69年京都市立美術大学専攻科を修了。74年創画会会員。75～76年文化庁研修員としてフィレンツェに滞在、日本画法にデトランプ(卵テンペラ)を併用。79年東京セントラル美術館日本画大賞展大賞。80年京都市立美術大学で指導日本画科教授。2016年没、72歳。 **日本画家、美教**

小清水金司 (こしみず・きんじ/生誕不詳～1982年)

1982年春陽会会員。小清水金司展が開催。1982年没。 **洋画家**

小清水漸 (こしみず・すすむ/1944年～)

愛媛県生れ。1966年東京都立新宿高等学校卒。66年多摩美術大学彫刻科に入学(中退)。70年日本

国際美術展（東京ビエンナーレ）「人間と物質」（東京都美術館、後に京都市美術館へ巡回）に出品。71年パリ青年ビエンナーレに出品。田村画廊にて初個展を開催。93年東京画廊にて「小清水漸」展開催。99年京都府文化賞功労賞。94年京都市立芸術大学教授。「戦後日本の前衛美術」（“Japanese Art after 1945: Scream Against the Sky”）、（横浜美術館、グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、サンフランシスコ近代美術館）に出展。2004年紫綬褒章。05年「もの派—再考」（国立国際美術館）に参加。12年「太陽へのレクイエム：もの派の美術」（Blum & Poe、ロサンゼルス）に参加。**彫刻家、インスタ、モノ**

呉 春（ごしゅん/1752～1811年）

初期の画号・松村月溪も広く知られる。初め大西酔月に絵を、与謝蕪村に俳諧、絵を学ぶ。円山応挙に私淑、南画と円山派を融合し、瀟洒な画風を特徴とする四条派を創始。代表作『柳鷺群鴉図屏風』（文化庁）。1811年没、59歳。**江戸時代中期の絵師、四条派の始祖**

古城江観（こじょう・こうかん/1891～1988年）

鹿児島県生れ。黒田清輝に認められ、東京美術学校教授の福井江亭、山元春挙について日本画を学ぶ。1918年文展入賞、『筏二題』がイギリス皇室の所蔵。23年、4年半、東南アジアを巡遊、仏教美術研究。27～32年渡欧米、サロン・ドートンヌ出品。戦時中は従軍画家としても活躍。63年から4年半、市原市美術会初代会長として総合美術展を開催し、社会文化振興に尽くした。千葉県で没、97歳。**日本画家、木版画**

小杉小二郎（こすぎ・こじろう/1944年～）

東京生れ。1962年日本大学芸術学部工業デザイン科卒。1968年中川一政に師事。70年渡仏、パリのアカデミー・グランド・シュミエールで学ぶ、73年サロン・ド・ナショナル・ボザール・フランマン賞。74年銀座・彩壺堂にて個展開催。76年東京セントラル美術館個展開催。91年有楽町アートフォーラムにて小杉小二郎展（朝日新聞社主催）を開催。静岡、名古屋を巡回。求龍堂より画集「小杉小二郎」刊行。2006年損保ジャパン東郷青児美術館大賞。池田20世紀美術館で個展。**洋画家**

小杉未醒（放菴）（こすぎ・みせい<ほうあん>/1881～1864年）

栃木県生れ。1900年上京、小山正太郎の不同舎に学ぶ。02年太平洋画会に入会。1908年雑誌「方寸」同人に加わる。10年文展で三等賞。11、12年文展で二等賞。13年渡仏。14年二科会を結成。再興院

展を結成。22年春陽会を結成。37年帝国美術院会員。64年没、82歳。**洋画家、浮世絵、版画**

小杉未醒（放菴）Ⅱ（こすぎ・みせい/1881～1964年）

栃木県生れ。のち放菴と称する。1894年五百城文哉に師事。1900年不同舎に学ぶ。02年太平洋画会会員。07年「方寸」創刊に同人として参加。08年文展入選。11年文展で二等賞。13～14年渡欧。14年日本美術院を再興、洋画部同人。22年春陽会創立会員。35～59年帝国美術院会員。60年日本橋・高島屋で画業60年展開催。新潟県で没、82歳。**洋画家、浮世絵、版画**

五姓田芳柳（初代）（ごせだ・ほうりゅう/1827～1892年）

江戸生れ。1848年狩野派や浮世絵を学ぶ。長崎で見たオランダ画に感動、和洋折衷の手法を工夫。52年 独自の洋風画を編み出し。絹地に陰影を施した立体的な画風。64年横浜で絹地洋風画、肖像を描く。横浜絵として輸出。81年内国勸業博覧会に出品。82年没、65歳。次男に五姓田義松、長女は渡辺幽香。**洋画家**

五姓田芳柳（二世）（ごせだ・ほうりゅう/1864～1943年）

茨城県生れ。五姓田義松に師事。ワーグマンに師事。1880工部美術学校でサン・ジョヴァンニに師事。内国勸業博覧会に出品。89年明治美術会の創立に参加。1902年巴会会員。10年渡欧。東京で没、78歳。（出典 わ眼）**洋画家**

五姓田義松（ごせだ・よしまつ/1855～1915年）

江戸生れ。初代五姓田芳柳の次男。1866年チャールズ・ワーグマンに入門。76年工部美術学校入学、フォンタネージの指導を受ける、日本人初のサロン・ド・パリの入選作家。77年内国勸業博覧会で鳳紋賞。80年宮内庁より数々の作品を依頼され描く。80年渡欧、渡英。87年渡米。89明治美術会創立に参加。横浜市で没、60歳。**洋画家**

小平 鼎（こたいら・かなえ/1905～1975年）

長野県生れ。諏訪中学校卒、文化学院に学ぶ。石井柏亭に師事。1929年二科展入選。36年より一水会に出品、40年岩倉具方賞、46年一水会会員。帝展無鑑査。信州美術会樹立に参加。1975年没、70歳。**洋画家**

小館善四郎（こだて・ぜんしろう/1914～2003年）

青森県生れ。1932年帝国美術学校入学、牧野虎雄に師事。36年同校卒。36～43年青森中学校の図画科教師。38年国展入選。53年国画会会員。92年

青森県文化賞。2000年文化庁地域文化功労者表彰。
02年没、89歳。洋画家

日本版画協会会員。1941年没、43歳。洋画家、版画家

小谷ヒロ子 (こたに・ひろこ/1943年～)

東京生れ。1967年成城大学文芸部卒。渡米、コロンビア大学インターナショナルに学ぶ。78年村岡平蔵に師事。創元展に入選。82年創元会会員、創元会運営委員、審査員。80年日展入選、特選、日展会友。
洋画家

小谷博貞 (こたに・ひろさだ/1915～2002年)

札幌市生れ。1935年帝国美術学校工芸図案科入学後、多摩帝国美術学校図案科に編入。36年NOVA展に出品。47～64年自由美術協会会員。64年主体美術協会創立会員。シュルレアリスムとデザインの思想を基盤。67～93年札幌大谷短期大学美術科教授。87年北海道文化賞。2002年没、87歳。洋画家、美教

兒玉勝治 (こだま・かつじ/1904～1995年)

鹿児島県生れ。1920年川内中学校中退。本郷洋画研究所に学ぶ。32年長谷川利行を知る。40年新文展入選。50年一線美術会を創立。58年日展入選。89年青梅市立美術館で個展。1996年没、90歳。洋画家

兒玉果亭 (こだま・かてい/1841～1913年)

長野県生れ。信濃で佐久間雲窓にまなび、のち田能村直入に文人画をまなぶ。1880年郷里に竹僊山房をつくり、菊池契月らおおくの弟子をそだてた。86年の東洋絵画共進会で銀賞。1913年没、73歳。明治時代の日本画家、美教

兒玉希望 (こだま・きぼう/1898～1971年)

広島県生れ。19歳で川合玉堂の門に入り、1921年帝展入選。28年帝展で特選。以後帝展、新文展、日展に出品を続けた。終始、師・玉堂から受け継いだ漢画的作風を底に秘めていたが、大和絵から浮世絵、洋画までを研究対象とし、また一転して南画にも興味をもち、戦後は渡欧の体験をもとに非写實的傾向の作品も手掛けるなど、多彩な画風を展開した。50年自らの画塾国風会と伊東深水の画塾を合併、日月社を興して後進の指導に努めた。52年日展、日本芸術院賞、59年日本芸術院会員。1971年没、73歳。日本画家

兒玉貞平 (こだま・さだひら/1898～1941年)

大分県生れ。葵橋洋画研究所に学ぶ。1927年中央美術展に油彩画入選。28年「一九三〇年協会展」入選。「一九三〇年年協会研究所」に通う。1932年

兒玉貞平 II (こだま・さだへい/1898～1941年)

大分県生れ。葵橋洋画研究所に学び、1927、28、30年中央美術展に油彩画が入選。30年「一九三〇年協会研究所」にも通い、29、30年1930年協会展に入選。31、32、35、37年独立美術協会展に入選。33、35年白日会展に出品。1932年日本版画協会会員。東京で没、43歳。洋画家、版画家

兒玉三鈴 (こだま・さんれい/1915～2002年)

長野県生れ。師・川端龍子、青龍社に属し後に新興美術院会員。56年跡部白鳥 石田粧春らと日本画府を創立。64年文部省より社団法人の認可を受け理事長。72年紺綬褒章。2002年没、87歳。日本画家、日本画府理事長

小玉貞良 (こだま・ていりょう/生年不詳～1759年以降)

松前藩で活躍した絵師。作品に「蝦夷国風図絵」「松前江差屏風(びょうぶ)」がある。蠣崎波響に先行して主にアイヌ絵を描いてその草分けとも評され、北海道の絵画史において最初期に位置する人物である。
江戸時代中期の絵師

兒玉輝彦 (こだま・てるひこ/1898～1992年)

新潟県生れ。1917年津端道彦に師事し、内弟子として学ぶ。27年帝展に入選、32年日本美術協会会員。日本美術協会展で銀賞を2回、銅賞を3回受賞し、委員や審査員をつとめた。65年には神代植物園で「秋之野草」が昭和天皇・皇后の供覧にふされた。80年学研の水上勉「平家物語」、82年NHKテキスト古文にそれぞれ作品が掲載され、68年の泰東書道院展で大阪毎日・東京日日新聞社賞。歴史画を得意とし、日本国画院会長。千葉県で没、94歳。日本国画院会長、日本画家

兒玉博 (こだま・ひろし/1909～1992年)

三重県生れ。父房吉に伊勢型紙の技術指導を受けた。1924年白子町立工業学校卒。25年浅草の伊藤宗三郎に入門して同家の職人となり、縞罫を中心に修業を重ねた。29年独立して日本橋に開業。33年型付師小宮康助の型紙を彫り、以後康助、康孝父子の江戸小紋染に欠かせぬ存在となった。戦後は縞小紋が不人気でもあり、48～64年に停年退職するまで百五銀行本店に勤務、型紙の制作を続けた。日本伝統工芸展にも出品。86年三重県民功労賞。三重県で没、82歳。「伊勢型紙」の縞罫で国の重要無形文化財保持者(人間国宝)

児玉幸雄 (こだま・ゆきお/1916～1992年)

大阪生れ。1939年関西学院大卒。47年大阪市展市長賞を受賞。同年二紀会創立に参加。57年渡欧、以後毎年渡欧する。三越、阪急、日動画廊、松屋で個展。東京で没、75歳。(出典 わ眼) **洋画家**

小塚義一郎 (こづか・ぎいちろう/1888～1973年)

静岡県生れ。1912年東京美術学校図画師範科卒。16年文部省の図画講習会修了。群馬県立高等女学校教諭を経て、22年山形県師範学校の図画教師となる。為本自治雄、今泉篤男、奈良村正史・逸見誠一・石澤健吉らと洋画グループ「毒地社」を結成する。39年山形県師範学校から静岡県不二高等女学校へ転任。静岡県画壇で官展派として活躍した。1973年没、85歳。 **洋画家、美教、版画**

小寺健吉 (こでら・けんきち/1887～1977年)

岐阜県生れ。1911年東京美術学校西洋画科卒。14年光風会展で今村奨励賞。23年渡仏。24年光風会会員。27年再渡仏。28年帝展で特選。65年画業50年展日本橋三越で開催。風景画を得意とする。70年日展参与。東京で没、90歳。(出典 わ眼) **洋画家**

後藤工志 (ごとう・こうし/1893～1929年)

東京生れ。1908年日本水彩画会研究所で学ぶ。11年太平洋画会展、文展に入選。13年日本水彩画会の創立に参加。14年光風会展に出品。16、17年今村奨励賞、18年光風会会員。28年帝展に水彩で特選。1929年没、36歳。(出典 わ眼) **水彩画家**

後藤純史 (ごとう・じゅんじ/1910～1978年)

広島県生れ。広島師範学校卒、創元会会員、1978年没、68歳。 **洋画家**

後藤 仁 (ごとう・じん/1968年～)

兵庫県生れ。立川美術学院日本画科で2年間学ぶ。1989年東京藝術大学絵画科日本画専攻入学。師系は山本丘人、後藤純男。日本画の技術を用いて高級壁紙の金唐革紙や、絵本の原画等の制作を行う。2014年には作画絵本『犬になった王子 チベットの民話』(岩波書店)東京藝術大学・デザイン科 非常勤講師。学校法人桑沢学園 東京造形大学 絵本講師。日本美術家連盟会員、日本中国文化交流協会会員、絵本学会会員。 **日本画家、絵本作家**

後藤真吉 (ごとう・しんきち/1896～1961年)

大分県生れ。大分工業学校卒。上京して川端画学校に入学、洋画を学んだ。29年渡欧し3年間画技の

研鑽に励んだ。中央美術、光風会、文展などに出品した。1961年没、65歳。 **洋画家**

後藤純男 (ごとう・すみお/1930～2016年)

千葉県生れ。1946年山本丘人に師事、田中青坪に師事。54年日本美術院院友。65年特待、74年同人、91年監事、2000年理事。62年院展で奨励賞・白寿賞・G賞。65年院展で日本美術院賞・大観賞受賞。76年院展で文部大臣賞受賞、86年閣総理大臣賞。86年西安美術学院(中国)名誉教授。88～97年東京藝術大学美術学部教授。2016年没、86歳。 **日本画家**

後藤清一 (ごとう・せいいち/1893～1984年)

水戸市生れ。富岡周正に牙彫をまなぶ。東京美術学校で高村光雲に師事し木彫をはじめ。仏教に傾倒、作品のモチーフとした。1930年構造社会員。58年日展評議員、60年文部大臣賞。1984年没、90歳。 **彫刻家**

後藤忠光 (ごとう・ただみつ/1896～1986年)

秋田市生れ。旧制秋田中学を卒。本郷洋画研究所で学ぶ。1920年未来派美術協会展に出品。21年版画と詩の雑誌『青美』を創刊、この年ロシア人画家パーヴェル・リュンパルスキーに感化された版画を制作し、22年日本創作版画協会第四回展に出品。秋田に帰郷、大場清泉らと秋田美術展覧会を開催、自作と『青美』の仲間たちの作品を展示する展覧会も開いた。また『秋田魁新報』に直線を多用した挿絵をしばしば掲載した。26年上京し図案家として生計をたてながら版画も制作した。 **洋画家、版画家、未来派**

後藤禎二 (ごとう・ていじ/1903～1970年)

東京生れ。1926年東京美術学校西洋画科卒。28～30年渡欧。32、33年春陽会に出品。46年日本美術会創立に参加、日本アンデパンダン展に出品。50年点々会に出品。55年丸善画廊で個展。61、63年銀座松屋画廊個展。西洋の写実に迫った孤高の画家。70年没、66歳。(出典 梅愛) **洋画家**

後藤又兵衛 (ごとう・またべい/1925～2002年)

愛知県生れ。無所属、日本・紐育・シカゴ他個展20、米国各展招待、レンブラント賞、ヒューストン美術館他収蔵、2002年没、77歳。主な作品収蔵美術館ニューヨーク市立美術館、ヒューストン美術館。サウスカロライナ美術館、メルボルン国立美術館等。 **洋画家**

後藤泰彦 (ごとう・やすひこ/1902～1938年)

熊本県生れ。1929年妻子を郷里に残し単身上京、

一時彫刻家田島亀彦に師事したが、後彫塑を独修し、30年構造社展に初入選し、32年会友に、34年会員に推薦。晩年の作品として「黎明」「李氏騎馬像」「永井柳太郎氏像」等がある。尚構造社第12回展に於て、遺作を陳列した。1938年戦死、36歳。彫刻家

後藤洋明 (ごとう・ようめい/生誕年不詳)

日本近代洋画の埋もれた分野を知り尽くしている人物。特に物故洋画の資料と知識は群を抜く。洲之内徹、窪島誠一郎、梅野隆と親交。版画、洋画を描く。オークションを企画開催。洋画家、コレクター

後藤芳景 (ごとう・よしかげ/1858～1922年)

大阪生れ。師は中井芳瀧。1886年に名古屋の絵入扶桑新聞附録『金鍔紀聞 惟尾美代葵松葉』の表紙絵・挿絵を描いた。主に関西での錦絵、新聞・雑誌の挿絵活動が知られる。96年には文事堂発行の講談本口絵、『徳川十五代記』全7巻(桃川燕林講演・今村次郎速記 1879)。1922年没、64歳。挿絵、版画

後藤よ志子 (ごとう・よしこ/1927～1992年)

中国青島市生れ。1943年青島日本高等女学校卒。共立薬科大学入学。59年女流画家展入選、63年同会会員。65、66年渡欧。69、71年二紀展で同人賞。74年二紀会会員。81年二紀展で文部大臣賞、のち委員。72年安井賞展で佳作賞。日仏現代美術パリ展でフランス・ソワール賞。90年安田火災東郷青児美術館大賞。東京で没、65歳。洋画家

後藤林之助 (ごとう・りんのすけ/没年不詳)

名古屋の代表的浮世絵版画商、自ら版下絵の筆を執る。版画作品としては、1930年に版元・中村善三郎(隅田町四番地)から名古屋市内及び周辺の景勝地を描いた木版多色摺の大判横絵風景版画(中京堂刻、《中村公園大鳥居》《名古屋城》など)を制作。木版多色摺『名古屋八景』《《別院春霞》《八事晚鐘》《名港帰帆》。『名古屋八景』シリーズはオフセット印刷で「名古屋毎日新聞社選定」刷り込み入り、新聞附録として30年発行。版画美術商、版画

琴塚英一 (ことづか・えいいち/1906～1982年)

大阪生れ。信濃橋洋画研究所で学び、京都で日本画と版画を学ぶ。1930年京都市立絵画専門学校卒。32年春陽会展入選。34年帝展入選。38年青龍社展入選、同社に出品。54、55、56年現代日本美術展に出品。55、57、59年日本国際美術展に出品。66年主宰者・川端龍子の死去により青龍社解散後は無所属。1982年没、76歳。日本画家、版画

小波魚青 (こなみ・ぎよせい/1844～1918年)

伊予国生れ。四条派の流れをくむ伊予の梶谷南海に学び、長谷川玉峰に入門。1882年の内国絵画共進会で宮内省買上げ。90年内国勸業博覧会で褒状。91年ロシア皇太子ニコライ2世の前で、席画を描く。92年日本美術会秋季美術展に出品。長崎市で没、74歳。日本画家、日本の絵師

小波魚青 II (こなみ・ぎよせい/1844～1918年)

1844年生れ。(伊予宇和島伊達家、家老職の家)画家を志し京都四条派の流れをくむ伊予の画家・梶谷南海に学び、のちに京都の四条派の長谷川玉峰(1822-79)の門に入った。明治初頭に長崎に移住し、91年のロシア皇太子ニコライ2世が長崎を訪れた際には長崎県知事官邸で席画を描いたとも伝えられており、唐絵目利の系譜が途絶えた後の長崎で画家として活躍した様子が伺える。「グラバー図譜」(長崎大学)が知られる萩原魚仙などの後進の指導も行った。画家としての業績は、82年内国絵画共進会に8点を出品、92年の日本美術協会秋季美術展に「石猿蓑虫ヲ窺図」「旅雨擣衣図」を出品し、前者は宮内省買上げとなった。1913年には長崎市の料亭・迎陽亭で「小波魚青先生古希祝賀展観会」が開催された。作品としては、長崎の秋の大祭・くんちにおける翹屋町傘鉾の後日の「垂れ」が魚青の筆によるものである他、「大河平屋敷絵図」(1900年、えびの市有形文化財)などがある。魚青の長男・胤雄も魚江と号し、画家として活動していた。1918年没、74歳。長崎県美の作家 検索引用。日本画家、日本の絵師

小西正太郎 (こにし・しょうたろう/1876～1956年)

秋田県生れ。1902年東京美術学校卒。98年白馬会展に出品。22年渡仏、パリ・アカデミー留学、25年パリ・アンデパンダン、サロン・ドートンヌの会員。26年神田に自由研究所を開設。27年東京三越で個展。白日会会員、出品。帝展入選。56年没、79歳。98年秋田県立近代美術館で個展。洋画家、美教

小西治男 (こにし・はるお/1931年～)

広島県生れ。師小林和作。1949年広島県美術展入選。50年大調展特選。54年東京芸術大学油画科卒。57、59年毎日商業デザイン入選。無所属。洋画家

小西保文 (こにし・やすふみ/1931～2008年)

奈良県生れ。1956年神戸芸術研究所にてデザインなど学ぶ。57年二紀会展入選。64年安井賞候補新人展入選。70年二紀会委員、審査員。78年二紀

展で金山平三記念美術賞。78年渡欧。83年渡米NYに滞在。99年吉野にアトリエ。08年没、77歳。**洋画家**

此木三紅大(三男) (このき・みくお/1937年～)

東京生れ。武蔵野美術大学、ローマ・アカデミア美術大学卒。1976年青枢会創立。油画、彫刻を制作。95年那須高原私の美術館。98年松山庭園美術館、2010年ほくさい美術館が開館。06年上海朱屺瞻美術館、08年瀋陽国立魯迅美術大学美術館で個展。(出典 わ眼)**洋画家、彫刻家、日本画**

木島櫻谷 (このしま・おうこく/1877～1938年)

京都市生れ。京都市立商業学校を中退。19歳のとき今尾景年の門に入って四条派を学ぶ。同時に山本谿愚について漢詩を学んだ。花鳥、山水、人物すべてをこなすほど画技の冴えをみせ、1907年文展で毎回受賞。13年文展では景年にかわって審査員を務めた。12年京都市立美術工芸学校教諭、15年京都市立絵画専門学校教授。円山四条派風の様式のうえに自己の工夫を加えて、平明で親しみのある画風をつくり、菊池契月とならんで文展が生んだ最初の花形作家。1938年没、63歳。**日本画家、美教**

木島櫻谷 II (このしま・おうこく/1877～1938年)

京都生れ。今尾景年に師事1899年全国絵画共進会に出品作は宮内庁買い上げ。1907年文展に入選、2等賞。以後、12年まで連続受賞。第6回文展二等賞作品が朝日新聞紙上で夏目漱石に酷評。18年京都市立絵画専門学校教授。一時は京都画壇において竹内栖鳳とならび人気を博す。1938年没、61歳。**四条派の日本画家、版画**

小島廣志 (こばたけ・ひろし/1935年～1996年)

東京生れ。母の鼎子は青龍社の日本画家。父の辰之助は洋画家。1959年東京芸術大学美術学部彫刻科卒。59年二科会出品、特選、61年同展で金賞。75年美学校小島廣志彫刻工房(入間市)で彫刻教育、制作。77年平櫛田中賞受賞。1996年没、61歳。**彫刻家**

小早川清 (こばやかわ・きよし/1899～1948年)

福岡市生れ。南画家の上田鉄耕に師事し、1915年清方に美人画を学んだ。24年帝展入選、異国情緒溢れる美人画を描いた。新版画の分野においても活躍、27年から渡辺版画店において木版画を制作。30～31年「近代時世粧」シリーズを版行。ほろ酔・爪・化粧・黒髪・口紅・瞳などは著名で、また艶姿・湯上がり・舞踊なども佳作とされている。彫ったのは高野七

之助で、摺師は斧富三郎。高見沢木版社、長谷川からも版画を発表。33年特選。36年以降文展無鑑査となり、文展招待展に出品、文展及び新文展に作出品。日本画会、青衿会などにも会員として作品を発表。戦後にも数点作品を発表。浮世絵を蒐集しており、またその研究もしていた。東京で没、49歳。**浮世絵師、日本画家、版画**

小早川清 II (こばやかわ・きよし/1899～1948年)

福岡市生れ。南画家の上田鉄耕に師事し、1915年清方に美人画を学んだ。24年帝展入選、その後、長崎を題材にした異国情緒溢れる美人画を描いた。新版画の分野においても活躍、27年から渡辺版画店において木版画を制作。30～31年「近代時世粧」というシリーズを私家版により版行。ほろ酔・爪・化粧・黒髪・口紅・瞳などは著名で、また艶姿・湯上がり・舞踊なども佳作とされている。彫ったのは高野七之助で、摺師は斧富三郎。高見沢木版社、長谷川からも版画を発表。33年特選。36年以降文展無鑑査となり、文展招待展に出品してからは、文展及び新文展に作出品。日本画会、青衿会などにも会員として作品を発表。戦後にも数点作品を発表。浮世絵を蒐集しており、またその研究もしていた。東京で没、49歳。**浮世絵師、日本画家、版画**

小早川秋聲 (こばやかわ・しゅうせい/1885～1974年)

神戸市生れ。1905年谷口香嶠画塾「自邇会」。09年京都絵画専門学校入学、すぐ退学。水墨画を学ぶため中国へ渡る。12年日本美術協会展出品。山元春挙主催「早苗会」に参加、同会幹事。14年文展入選。文展で4回、帝展で12回、新文展で3回入選。14～16年中国へ渡って東洋美術の研究に励む。20～23年滞欧。翌年ベルリン国立アルトムゼーム研究室2年学ぶ。26年渡米。31～43年従軍画家として戦争画を描く。46年日展委員。戦後は仏画を手がけた。京都府で没、88歳。**日本画家、水墨、版画**

小早川篤四郎 (こばやかわ・とくしろう/1893～1959年)

広島県生れ。本郷絵画研究所に学ぶ。1925年帝展入選。1926年槐樹社展で田中奨励賞。1937年新文展無鑑査。戦争記録画制作。32年東光会創立参加。35年東光会会員、のち委員。戦後は日展会員として活躍。東京で没、66歳。**洋画家**

小早川清 (こばやかわ・きよし/1899～1948年)

福岡市生れ。南画家の上田鉄耕に師事し、1915年清方に美人画を学んだ。24年帝展入選、その後、長崎を題材にした異国情緒溢れる美人画を描いた。新版画の分野においても活躍、27年から渡辺版画店

において木版画を制作。30～31年「近代時世粧」というシリーズを私家版により版行。ほろ酔・爪・化粧・黒髪・口紅・瞳などは著名で、また艶姿・湯上がり・舞踊なども佳作とされている。彫ったのは高野七之助で、摺師は斧富三郎。高見沢木版社、長谷川からも版画を発表。33年特選。36年以降文展無鑑査となり、文展招待展に出品してからは、文展及び新文展に作出品。日本画会、青衿会などにも会員として作品を発表。戦後にも数点作品を発表。浮世絵を蒐集しており、またその研究もしていた。東京で没、49歳。浮世絵師、日本画家、版画

小早川秋聲 (こばやかわ・しゅうせい/1885～1974年)

神戸市生れ。1905年谷口香嶺画塾「自邇會」。09年京都絵画専門学校入学、すぐ退学。水墨画を学ぶため中国へ渡る。12年日本美術協会展出品。山元春挙主催「早苗会」に参加、同会幹事。14年文展入選。文展で4回、帝展で12回、新文展で3回入選。14～16年中国へ渡って東洋美術の研究に励む。20～23年滞欧。翌年ベルリン国立アルトムゼム研究室2年学ぶ。26年渡米。31～43年従軍画家として戦争画を描く。46年日展委員。戦後は仏画を手がけた。京都府で没、88歳。日本画家、水墨

小林昭夫 (こばやし・あきお/1929～2000年)

横浜市生れ。1951年国立東京商科大学予科卒、野沢屋(現 横浜高島屋)入社。56年米ンシルベニア美術学校奨学金支給受け、アメリカ文化センター個展。同年シスコ・スクール・オブ・ファインアーツ奨学生。58年Printmakers National Exhibit in Oakland 受賞し、同年シスコFiengarten Gallery in San Franciscoで個展。59年デヤング美術館無給助手、シンシナティ国際版画ビエンナーレ招待出品。訪欧後60年帰国。62年小林昭夫洋画研究会を横浜市に設立。67年「現代美術ベシックゼミナール(Bゼミ)」を横浜に開設。60年代後半から70年代のBゼミ専任講師には小清水漸、斎藤義重、関根伸夫、宇佐美圭司、高松二郎、李禹煥、柏原えつとむ、中原佑介、彦坂尚嘉、多木浩。80年代、諏訪直樹、岡崎乾二郎、川俣正、鷺見和紀郎、戸谷茂雄、安斎重男が選任講師。80年代のBゼミは、現代美術家として社会的認知を得る作家を輩出する独自の教育機関として注目を集めた。90年代には、赤塚祐二、海老塚耕一、小山穂太郎、Azby Brown、笠原恵実子、宇波彰、西雅秋、丸山直文、蔡国強、鈴木理策、青木野枝が専任講師。Bゼミ所長としてその講義内容、Bゼミ展の企画などの指揮をとった。その時々造形の問題と取り組み続けた。写真、ビデオ、コンピュータなど、狭義の「美術」には容れられなかったメディアにも逸早く注目し、Bゼミの

講義内容に盛り込んでいる。戦後の日本美術界において、戦前に結成された団体の相次ぐ復興が大きな流れを形づくって行く中で、新しい造形のあり方を真摯に考え、それを自らの制作の問題にとどまらず、共同で学びあい、模索しあうBゼミというシステムへ結実させた小林の仕事は、20世紀後半の日本美術史の中で特筆。2000年没、71歳。Bゼミは99年に副所長に就任した昭夫の長男晴夫によりBゼミ Learning Systemと改称されて、現在に至る。2000年没、71歳。現代美術の教育機関のひとつであるBゼミスクールリングシステム所長

小林朝治 (こばやし・あさじ/1898～1939年)

長野県生れ。金沢医科大学卒。1931年須坂で眼科医開業。油彩画～版画制作。29年版画同人誌『版画 CLUB』に作品を発表、平塚運一に師事。30年国展版画入選。須坂洋画会を開催し、十人社結成。33年版画同人誌『樸』を発行。34年信濃創作版画研究会設立、版画講習会開催、長野県内の版画普及活動。日本版画協会展に出品。『版画藝術』『白と黒』九州版画『ゆうかり』創作版画誌に作品を寄稿した。1939年没、41歳。版画家

こばやし あや (生年不詳～)

1970年代、山口県生れ。小林綾。大分県立芸術短大美術科卒後、水彩を描き始める。井の頭アートマーケットに毎週参加している。四季の食材や子供たちを主なモチーフに多数の児童書や絵本の挿絵を描く。2006年初個展「はじめのいつば」。07年より汐留アートファクトリーに参加。09年「NHK ハート展」水彩画家、挿絵

小林勇・冬青 (こばやし・いさむ・とうせい/1903～1981年)

長野県生れ。17歳で岩波書店入店、岩波文庫・岩波新書の創刊に関わる。1928年独立、出版社・鉄塔書院を興す。34年岩波書店に復帰。46年支配人、専務、会長。39歳で絵をはじめ、独学で生涯文人画と取り組む。「吉井画廊」などで個展を十数回開催。山梨県にある青春白樺美術館創設に関わった。随筆家、エッセイスト・クラブ賞。1981年没、78歳。文人画

小林易夫 (こばやし・えきお/1910～1996年)

岡山県生れ。1927年上京し、太平洋画研究所に学ぶ。28年帝展入選。以後帝展、新文展に出品を続け、戦後は日展を主な活躍の舞台とした。52年日展で特選。53年光風会会員。79年岡山県文化賞、84年山陽新聞社賞。1996年没、86歳。洋画家

小林 数 (こばやし・かず/1916～1996年)

北海道生れ。林武に師事、1942年独立展入選、戦後も再び同展に出品をつづけ、58、59年独立賞、同

会会員。61～62年仏留学。67年 G 賞。94年会員功
労賞。千葉県で没、79歳。洋画家

従軍画家として南京へ赴く。83年11月27日没、享年
86歳。(佐)洋画家

小林一枝 (こばやし・かずえ/1933～2012年)

千葉県生れ。山梨大学美術科卒、山梨で美術教師。
二科展、創元展、山梨美術協会展に出品。1965年
山梨美術協会会員、94年創元会会員。優しく明るい
色で記憶の中の風景や心象風景を描き続け、幻想的
な雰囲気独自の画風を確立。山梨美術協会の副
会長。山梨県の芸術振興にも尽力。2012年没、79
歳。洋画家

小林清子 (こばやし・きよこ/1947年～)

新潟県生れ。1972年東京芸術大学大学院版画専
攻修了。79年サンシャイン版画・版種別グランプリ
展・石版画部門大賞。81年現代日本美術展・兵庫県
立近代美術館賞。83年東京セントラル美術館版画大
賞展・個人賞、現代日本美術展・和歌山県立近代美
術館賞。95年ノルウェー国際版画トリエンナーレ・招
待。版画家

小林柯白 (こばやし・かはく/1896～1943年)

大阪生れ。1912年上京して今村紫行、後に安田鞞
彦に師事する。18年再興院展に日本画が入選。以降
出品を重ね24年院展同人。その後京都に移り、京都
画壇で活躍。1943年没、47歳。門下に森田曠平が
いる。日本画家、版画

小林清親 (こばやし・きよちか/1847～1915年)

江戸生れ。1874年この頃河鍋暁斎、柴田是真らと
交流。76年版元大黒屋より「東京江戸橋之真景」等出
版。「東京新大橋雨中図」等西洋画の遠近法、陰影法
を取り入れた「光線画」と呼ばれる洋風版画制作。81
年ころからポンチ絵を描いた。77年第1回内国勸業
博覧会に出品。94年日清戦争の折に錦絵を制作。
明治浮世絵界の三傑の一人。89～96年清親画塾を
開設。東京で没、68歳。版画家、浮世絵

小林喜一郎 (こばやし・きいちろう/1895～1961年)

倉敷市生れ。1916年上京、21年二科展に入選。2
2年二科展で樗牛賞。23年三岸好太郎と共に制作。
33年岡山県に転居。35年赤坂洋画研究所を開設。3
4年二科会展で昭和洋画奨励賞。42年二科会会員。
岡山県で没、65歳。洋画家、版画

小林清光 (こばやし・きよみつ/1892～没年不詳)

愛媛県生れ。1916年頃か、京都の関西美術院で
洋画を学ぶ。木版画は独学だったと思われる。24年
の『詩と版画』に掲載。選者の平塚運一は、佳作であ
ると評した。1927、28、29年日本創作版画協会展に
木版画が入選。31、32年国画会に入選。神戸の山
口久吉の主宰する版画誌、中島重太郎の『きつつき』
に発表。版画家

小林喜作 (こばやし・きさく/1915～1994年)

松本市生れ。松本中学校卒。田川小学校校長。中
信美術協会副会長。1994年没、69歳。1996年松本
市信濃ギャラリーで遺作展。洋画家

小林 邦 (こばやし・くに/1906～1990年)

長野県生れ。川端画学校に学び、小杉未醒に師
事、帰郷後は宮坂勝に師事。1938年新文展に初入
選。38、39年国展で国画会奨励賞。43年国画会会
員。新文展無鑑査。46年日展で特選。信州美術会会
長。65年松本市文化功労表彰。長野県知事表彰芸
術文化功労者。松本市で没、83歳。洋画家

小林清栄 (こばやし・きよえい/1894～1987年)

三重県生れ。1905年青木梅岳に師事。08年従兄
弟西村伊作に油絵技法を習う。20年鹿子木孟朗の門
に入る。24～27年渡仏。藤島武二に師事。31～35
年紀伊半島各地を巡って写真に収め、それらの写真
を吉野熊野国立公園の指定申請書に添付、36年に
指定。38年日中戦争で海軍の従軍画家。42年海軍
の航空艦隊等で従軍し、戦争画の制。43年戦争画を
集めた第7回海洋美術展に出展。46年神川村長。4
8年三重県美術協会が発足するに際し、世話役。54
年熊野市の初代市長。59年三重県教育委員。65年
東京に転居。82年四国八十八箇所霊場の絵の制作
に取り組む。東京で没、95歳。洋画家、政治家

小林邦二 (こばやし・くにじ/1916～2010年)

長野県生れ。16歳で上京。日本橋郵便局に勤め、
1935年太平洋美術学校選科修了。同年二部会展
(旧帝展)入選。42年創元賞。47年日展入選。49年
自由美術家協会会員。50年北荘画廊、54年瀧口修
三の勧めでタケミヤ画廊個展。64年主体美術協会創
立に参加。信濃毎日新聞の挿絵。78年日本実在派
会員。日動画廊、山本鼎記念館(上田)で個展。200
8年紺綬褒章。2010年没、93歳。洋画家

小林喜代吉 (こばやし・きよきち/1897～1983年)

青森県生れ。21年上京、牧野虎雄門下となり、洋画
を学ぶ。早稲田大学卒。26年第7回帝展に初入選、
以後、入選を重ねる。33年旺玄会創立委員。戦中に

小林敬生 (こばやし・けいせい/1944年～)

松江市生れ。1968年インターナショナルデザイン研究所修了。69年より宮永岳彦に師事。70年日本版画協会展に出品、81年会員。78年現代日本版画大賞展で優秀賞。79年版画グランプリ展で優秀賞。86年多摩美術大学、89年福岡教育大学で非常勤講師。97年多摩美術大学教授。2006年紫綬褒章。07年山口源賞・大賞。版画家

小林源太郎 (こばやし・げんたろう/1883～1951年)

東京生れ。義祖父結城正明に絵の手ほどき、狩野芳崖の弟子。1908年東京美術学校日本画科卒。織田一磨に誘われて「パンの会」に参加。東京帝国大学医科図工を経て、12年水島爾保布・小泉勝爾らと「行樹社」を結成。22年行樹社・青樹社・高原会など5つの急進的な団体が結集した「第一作家同盟」の結成に参加。同団体解散後は日本プロレタリア芸術連盟の美術部に参加。27年より伊東深水の画塾(朗峯画塾)で顧問として日本美術史の講義を持つ。38年「成層絵画研究集団」を結成。38年目黒に「南郊外絵画研究所」を設立、熊谷守一、柳瀬正夢などの出入りもあった。1951年没、68歳。日本画家、版画、美教

小林源太郎 II (こばやし・げんたろう/1799～1861年)

熊谷市生れ。一般に熊谷源太郎。初代小林源八正信を継いだ二代目。神社仏閣の彫刻に秀で、趣味として俳諧に通じる。画を金子陵に学ぶ。作品は新潟県伊米ヶ崎町西福寺向拝彫刻・鐘楼、総社町総社神社彫刻、石地町石部神社彫刻、群馬県榛名町榛名神社、桐生市天満宮、小泉町大日社、足利市大日社水屋がある。彫刻家

小林孝一 (こばやし・こういち/1932～1981年)

東京生れ。太平洋美術学校卒。太平洋美術会委員。1981年没、49歳。洋画家

小林古径 (こばやし・こけい/1883～1957年)

新潟県生れ。1900年上京し、梶田半古に師事。日本絵画協会展に出品、安田靉彦らの紅児会に参加。15年日本美術院が再興され、同展に出品、同人。初期には華麗な色彩による浪漫的な歴史画、風俗画が多く、次第に清新な写生にうちこみ、詩情あふれる作品を発表した。21～22年渡欧。帰国後は、広く東洋の古典画法を研究し、独自の簡明厳格な新古典的作風を確立した。35年帝国美術院会員、44年東京美術学校教授、帝室技芸員、50年文化勲章。1957年没、74歳。日本画家、版画、美教

小林鐘吉 (こばやし・しょうきち/1877～1946年)

東京生れ。1899年東京美術学校西洋画科卒。1904年菊坂洋画研究所で長原孝太郎と指導にあたる。12年光風会創立に参加。跡見女学校、青山女学院で教える傍ら、田山花袋の出世作「蒲団」(「新小説」40年9月)の口絵をはじめ、明治後期の小説の挿絵、口絵を多く描いた。また児童書や絵本なども手がけ、著書に絵本叢書「日本一画噺」(全35冊)や「紀行漫画」などがある。1946年没、69歳。洋画家、挿絵、版画、口絵、美教

小林正治 (こばやし・しょうじ/1937～2007年)

甲府市生れ。高校時代に山日アンデパンダン展、山梨美術協会展で奨励賞。二十代で二科展、新象作家展、モダンアート展入選。63年米倉壽仁らが主宰したサロン・ド・ジュアン会員。初期には有機的な物体を想起させる作風や、幾何学的、構成的で緻密な細部の積み重ねによる作品を発表した。60年代後半から80年代にかけては、女性のヌードと水平線などを重層的に重ねた抒情的なダブルイメージの作品で人気を得た。2007年没、70歳。洋画家

小林真二 (こばやし・しんじ/1890～1965年)

群馬県生れ。白馬会洋画研究所に学ぶ。長原孝太郎に師事。1912、14年光風会展に出品、今村奨励賞。関東大震災のより浦和に居住。24～27年渡欧、サロン・ドートンヌに出品。29年光風会会員。35年第一美術協会を創立。36年文展無鑑査。47年目黒洋画研究所開設。71年光風会名誉会員。実践女子大学講師。埼玉県展運営委員・審査員。65年没、75歳。洋画家、美教

小林千古 (こばやし・せんこ/1870～1911年)

広島県生れ。1888年渡米、91年サンフランシスコのカリフォルニア・デザイン学校(後にマーク・ホプキンス美術学校)に入学、苦学した。98年帰国。1900～03年渡仏、黒田清輝、岡田三郎助と交友。05年白馬会展で滞欧作品を発表。06～08年学習院女学部教師。07年東京府勸業博覧会に出品。広島県で没、41歳。洋画家、美教

小林孝亘 (こばやし・たかのぶ/1960年～)

東京生れ。1986年愛知県立芸術大学美術学部油画科卒。86年より作品を発表。当初から一貫して具体的なものを題材に作品を制作。96年文化庁芸術家在外研修員としてバンコクに滞在。個展開催;2000年「近作展 23」国立国際美術館(大阪)、2004年「終わらない夏」目黒区美術館、2006年「ものどころ」西村画廊(東京)、2014年「私たちを夢見る夢」横須賀美

術館。2002年「小林孝亘作品集—ひかりのあるところへ」(日本経済新聞社)刊行。14年「小林孝亘—私たちを夢見る夢」(青幻舎)刊行。16年「ふつうの暮らし、あたりまえの絵—小林孝亘の制作ノート」(求龍堂)刊行。**洋画家**

小林孝行 (こばやし・たかゆき/1915～1939年)

1915年生れ。1932年ニ科展入選、36年よりニ科展九室会に毎回超現実主義の作品を発表した。九室会会員。37年に銀座、サロン・ルウエに壁画を執筆した。39年紀伊国屋に遺作展が開催。神奈川県で没(自死)、25歳。**洋画家**

小林孝至 (こばやし・たかゆき/1984年～)

群馬県生れ。2004年「一枚の絵」スケッチコンクール(ユニーク賞)。06年青枢展(新人賞)。07年青枢展(準会員優秀賞)会員推挙。第36回青枢展(青枢優秀賞)。11年青枢展(那須高原私的美術館賞)。猫ねこ展覧会11(月刊ギャラリー賞)など。11年ほくさい美術館で個展開催。**洋画家**

小林武夫 (こばやし・たけお/1908～1995年)

兵庫県生れ。中野島洋画研究所に学ぶ。熊谷守一・鍋井克之に師事。1946年行動美術協会展入選、会友、47年同会会員。大阪市文化功労賞。1995年没、87歳。**洋画家**

小林武雄 (こばやし・たけを/生誕没年不詳)

1930年頃「版画長崎の会」、「版画長崎」に作品発表。34年渡満。1964年光風会でムーン賞。**版画家**

小林恒火子 (こばやし・つねひこ/1916～2011年)

福岡県生れ。1937年日本美術学校日本画科卒、玉村方久斗に師事。39年新興美術家協会会員。42年中学校教諭。67年日本表現派会友、68年会員、72年文化大賞、75年大賞。71年、個展(福岡県文化会館美術館ギャラリー)。76～82年九州造形短期大学教授。77年個展(長崎県立美術館ギャラリー)。81年個展(福岡市美術館ギャラリー)。2011年没、95歳。**日本画家**

小林哲夫 (こばやし・てつお/1927～1997年)

佐渡生れ。相川中学校卒。満鉄に入社、引き上げ後、1948年関西パステル画研究所、51年大阪府立美術研究所、55年武蔵野美術学校に学ぶ。52年日展入選。64年一水会会員。65年一水会展第十回記念展賞。77年一水会委員。71～72年渡欧、日動画廊で滞欧作展。76年インド、東南アジア、中国取材。76年現代パステル作家協会展を結成。89年公募団

体現代パステル協会創立。92年国際文化賞。藤沢市で没、69歳。**洋画家、パステル**

小林徳三郎 (こばやし・とくさぶろう/1884～1949年)

広島県生れ。1909年東京美術学校西洋画科卒。12年岸田劉生、萬鐵五郎らとヒュウザン会(後のフェウザン会)の創立に参加。芸術座の舞台装飾主任。19年再興日本美術院油画部展入選。23年春陽会展に出品。26年春陽会会員。37年新文展無鑑査。東京で没、65歳。**洋画家、版画**

小林敏夫 (こばやし・としお/1904～1973年)

姫路市生れ。1931年長崎医科大学卒。長崎にて皮膚科泌尿器科医院を開業。53年国画会展入選、会友、60年会員。第1回長崎市展から連続3年入賞。長崎県展創立審査委員、運営委員。10余年にわたり事務局長。野口彌太郎、吉岡憲と交流し、収集もした。1973年没、69歳。**洋画家**

小林ドンゲ (こばやし・どんげ/1927年～)

東京生れ。1949年女子美術大学卒。56年日本版画協会展恩地賞、会員。65年渡仏、フリードリッヒ・ヘイターの工房に学ぶ。66年ル・サロン展・銅賞。70年銅版画集「雨月物語」刊行。72年銅版画集「ポーに捧ぐ」刊行。76年銅版画集「火の処女サロメ」刊行。79年「小林ドンゲ蔵書票作品集」刊。82年近代日本の美術—1945年以降(東京国立近代美術館)。96年個展(八重洲ブックセンター)。**版画家**

小林猶治郎 (こばやし・なおじろう/1897～1990年)

静岡県生れ。1918年慶応大学普通部中退。23年日本美術学校洋画科卒。27、30年帝展入選。29年牧野虎雄に師事。33年旺玄展に出品。49年高校の美術講師を務め、50年自宅で児童洋画教室開設。90年没、93歳。**洋画家、美教**

小林秀雄 (こばやし・ひでお/1902～1983年)

東京生れ。1928年東京帝国大学文学部仏蘭西文学科卒。29年「改造」の懸賞評論に「様々なる意匠」を応募し二席に入選。33年川端康成らと「文学界」を創刊し文学批評とともに時事的発言も行った。戦時中は「無常といふ事」(42年)、「西行」(42年)、「実朝」(43年)。戦後は、「モーツァルト」(46年)、「近代絵画」(58年刊)、音楽、美術論を著した。「考えるヒント」(64年刊)に代表される歴史、思想的エッセイを執筆した時期。65年から「新潮」に連載し同77年に刊行された「本居宣長」の時代に三分して捉えらる。美術論に関しては、その本格的な出発となった「ゴッホの手紙」(27年刊、第4回読売文学賞)で示されているよう

に、「意匠」をつき抜けた「天才の内面」を掘りあてることに関心を集中させ、孤独で強靱な作家の姿を浮彫りにした。「近代絵画」(58年刊、第11回野間文芸賞)において画家列伝形式でモネ、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、ルノワール、ドガからピカソをとりあげ、これを近代芸術精神史というべき域へ昂めた。戦前の陶磁器に関するエッセイをはじめ、美術を論じた執筆は数多い。晩年はルオーの作品を愛していたという。34年日本芸術院会員、44年文化勲章を受章。1983年東京で没、80歳。評論家

小林秀恒 (こばやし・ひでつね/1908～1942年)

東京生れ。池上秀敏の伝神洞画塾に入門、山川秀峰に師事。菊池寛「貞操問答」、江戸川乱歩「怪人二十面相」、吉屋信子「妻の場合」、野村胡堂「銭形平次捕物控」など多数の挿絵を描き、昭和10年代には、岩田専太郎、志村立美とともに「挿絵界の三羽鳥」と呼ばれる。1942年没、34歳。2009年弥生美術館で「小林秀恒展」。唯一の門下生にSF画家の小松崎茂がいる。挿絵画家、版画

小林宏至 (こばやし・ひろし/1988年～)

東京生れ。2012年東洋美術学校造形美術科高度絵画専攻卒。東洋美術学校卒業制作展「優秀賞」。11年主体展で新人賞、12年佳作作家、13年秀作作家、会員推挙。15年銀座・あかね画廊で個展、16、18年渋谷・東急本店で個展。洋画家

小林平八 (こばやし・へいはち/1899～1983年)

愛知県生れ。愛知第一師範学校卒。示現会委員。日本美術家協会連合会理事長。名古屋で没、84歳。洋画家

小林正人 (こばやし・まさと/1957年～)

東京生れ。東京芸術大学美術学部油画専攻卒。1996年サンパウロ・ビエンナーレ日本代表。97年渡欧、ベルギー制作、2006年帰国。「小林正人展」宮城県美術館(2000)、「A Son of Painting」S.M.A.K(ゲント、2001)、「ART TODAY 2012 弁明の絵画と小林正人」セゾン現代美術館(2012)、「Thrice Upon A Time」シウゴアーツ(2016)。洋画家

小林萬吾 (こばやし・まんご/1870～1947年)

香川県生れ。上京、原田直次郎、安藤仲太郎に師事。天真道場に入り黒田清輝に師事。1896年白馬会展に出品、会員。98年東京美術学校卒、翌年同校雇、1904年同校助教授。18～44年東京美術学校教授。03年内国勸業博覧会で褒状。08、10年文展で三等賞。11～14年文部省より仏留学。16年光風会

会員。16年東京高等師範学校教授。18～44年東京美術学校教授。40年帝学院藝術員会員。鎌倉市で没、77歳。洋画家、版画、美教

小林もと子 (こばやし・もとこ/1908～1985年)

1908年生れ。新槐樹社準会員。朱葉会会員。1985年没、77歳。洋画家

小林裕児 (こばやし・ゆうじ/1948年～)

東京生れ。1974年東京藝術大学油画科大学院修了、89年細密な画風を転換し、96年安井賞。現在、ギャラリー椿を中心に国内外で多数の個展を開催、北京ビエンナーレ、ピョンチャンビエンナーレ他、グループ展に参加するほか、様々なライブパフォーマンスを行う。86年春陽会会員。青山学院女子短期大学芸術学科、大妻女子大学、女子美術短期大学講師。洋画家、美教

小林良曹 (こばやし・りょうそう/1909～1999年)

群馬県生れ。1935年帝国美術学校卒。卒業制作が二科展入選。36年創作美術展で受賞。47年山口薫のすすめで自由美術協会に参加、会員。64年主体美術協会に参加。85年群馬県芸術文化功労賞。88～90年県美術協会会長。1999年没、90歳。洋画家

小林和作 (こばやし・わさく/1888～1974年)

山口県生れ。1908年京都市立美術工芸学校日本画科卒。13年京都市立絵画専門学校日本画科卒、20年下鴨画塾で洋画を鹿子木孟郎に学ぶ。27～34年春陽会会員。28～29年渡欧。34年独立美術協会会員。53年に52年度芸術選奨文部大臣賞。広島県で没、86歳。洋画家

小堀杏奴 (こぼり・あんぬ/1909～1998年)

東京生れ。森鴎外と後妻の次女。1927年仏英和高等女学校卒。31年藤島武二に師事。31～34年渡仏。34年小堀四郎と結婚。随筆家であり画家。主な著作に「回想」「朽葉色のショール」「冬枯れの美」「晩年の父」「不遇の人 鴎外 日本語のモラルと美」がある。98年没、88歳。(出典 わ眼)洋画家

小堀四郎 (こぼり・しろう/1902～1998年)

名古屋生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒。28年渡欧。33年帝展入選。34年森鴎外の次女・杏奴と結婚。35年帝展の松田改組に失望し、官展を離れて独自の制作に打ち込む。86年渋谷区立松濤美術館で個展。98年没、96歳。(出典 わ眼)洋画家

小堀四郎 II (こぼり・しろう/1902～1998年)

名古屋生れ。1921年上京、藤島武二に師事。23年美校の特待生となる。27年東京美術学校西洋画科卒。第8回帝展に入選。美校同期生による上社会を結成し、16回まで出品。28年渡欧、ルーヴル美術館にてレンブラントなどの模写に従事。33年帰国、世田谷にアトリエを構える。滞欧作展を上野、名古屋の松坂屋で開催。45年蓼科にアトリエを構える。55年東京に戻る。76年上社会50周年展に出品。78年台北旅行。91年中村 彝賞。98年8月9日埼玉県で没、享年96歳。(佐)洋画家

小堀 進 (こぼり・すすむ/1904～1975年)

茨城県生れ。1923年葵橋洋画研究所に学ぶ。34年日本水彩画会展でキング賞。同年会員。36年白日会会員。二科展にも33～39年出品。一貫して水彩画を出品、水彩画新開拓運動の中軸。40年水彩連盟結成。69年日展理事。70年日展で日本芸術院賞。70年名古屋芸術大学教授。74年日本芸術院会員。東京で没、71歳。水彩画家、美教

小堀靉音 (こぼり・ともと/1864～1931年)

栃木県生れ。川崎千虎に有職故実、川辺御楯に土佐派を学ぶ。日本青年絵画協会・日本絵画協会に参加、日本美術院創立に加わり正員。官展で活躍する。大和絵復興に尽力、歴史画で一家をなし、その門下から安田靉彦・川崎小虎らを輩出した。東美校教授。皇室技芸員・帝国美術院会員・文展審査員。1931年没、68歳。日本画家、版画

小堀令子 (こぼり・れいこ/生誕年不詳～)

1970年武蔵野美術大学卒。小堀靉音が祖父、小山田二郎に師事。作家活動は小山田没後から。2004年、11年 ギャラリー絵夢にて個展。企画個展は41回を数える。現代抽象作家展、Ange de Noelほかグループ展多数。現在、ギャラリー併設のアトリエ絵夢にて絵画教室の講師。立軌会所属。洋画家

駒井哲郎 (こまい・てつろう/1920～1976年)

東京生れ。1934年慶応義塾普通部在学中にエッチング研究所で銅版画の技法を習う。42年東京美術学校西洋画科卒。41年新文展入選。戦後、「思い出」「夢の始まり」などの作品で慧星のように登場し、53年銅版画による初の個展を開く。48年日本版画会会員、51年春陽会会員、53年日本銅版画家協会設立に参加。54年渡仏、55年帰国後、数多くの詩画集を出版。59年日本国際美術展でブリヂストン美術館賞。多摩美術大学講師、71年東京芸術大学教授。代表作に「東の間の幻影」「樹」など。版画家

駒井哲郎 II (こまい・てつろう/1920～1976年)

東京生れ。銅版画家。1942年東京美術学校卒。戦後ルガノ、サンパウロ・ビエンナーレで受賞。春陽会会員。72年東京藝術大学教授。長谷川潔、浜口陽三と並ぶ銅版画の先達。夢と現実を結ぶ文学性の高い作品を制作。76年没、56歳。(出典 わ眼) 版画家、美教

駒井美信 (こまい・よしのぶ/生没年不詳)

師系・経歴不明。作画期は宝暦から明和にかけての頃で、鈴木春信風の錦絵や肉筆浮世絵を描いているが、春信の門人だったかどうかは定かではない。『浮世絵師伝』は「画風春信に似たれども其が門人にはあらざるべし」と述べ、画系の項を空欄としている。錦絵は中判の美人画が多く、他に石摺絵も手がける。肉筆画は明和の頃の作が知られている。江戸時代の浮世絵師

小牧源太郎 (こまき・げんたろう/1906～1989年)

京都府生れ。1933年立命館大学専門部卒。35～39年独立美術研究所に学ぶ。37年独立展に初入選。39年美術文化協会創立に加わり出品。シュルレアリスムの草分となる。41年ころから仏教的な主題に取り組む。その後、民族学的時代、宇宙空間的時代シリーズ。57年サンパウロ市近代美術館で個展。61年国画創作協会会員。伊丹市立美術館で個展。京都で没、83歳。洋画家、版画

小牧盛行 (こまき・もりゆき/1905～1980年)

宮城県生れ。日本水彩画研究所に学ぶ・1959年示現会会員。1980年没、75歳。洋画家

小松崎邦雄 (こまつざき・くにお/1931～1992年)

東京生れ。1954年東京藝術大学油画科卒、卒業制作は芸大買上、安井賞、56年同大油絵専攻科修、大橋賞。56年一水会賞。57年一水会会員。66年渡欧。68～69年ユネスコ・フェローシップ奨学金で再渡欧。69年昭和会賞。82年安田火災東郷青児美術館大賞。91年宮本三郎記念賞。浦和市で没、60歳。洋画家

小松崎茂 (こまつざき・しげる/1915～2001年)

東京生れ。高等小学校卒業後、堀田秀叢、小林秀恒に学ぶ。1938年「小樽新聞」連載挿絵。39年少年科学雑誌「機械化」。43年陸軍美術展、国民総力決戦美術展に戦争画出品。戦後は絵物語「地球 SOS」(冒険活劇文庫 1948～51年)や「大平原児」(「おもしろブック」1950～52年)。SFの世界や戦艦・戦闘機を雑

誌やプラモデルの箱絵に描く。特撮映画のデザイン、TV「サンダーバード」キャラクター画。77『懐かしの銀座・浅草』刊行。90年『小松崎茂の世界ロマンとの遭遇』日本美術出版最優秀賞。2001年没、86歳。**洋画家、挿絵、SF作家**

小松秀雄（こまつ・ひでお/1924～1962年）

諏訪市生れ。1944年長野県師範学校卒。教師。田崎廣助に私淑。一水会展、日展に入選。71年一水会会員。東京で没、37歳。**洋画家、美術教育**

小松 均（こまつ・ひとし/1902～1989年）

山形県生れ。川端画学校で日本画を学ぶ。1924年土田麦僊の山南塾に入塾。26年国画創作会展で国画賞、会友。28年国画創作協会日本画部解散後は、福田豊四郎らと「新樹社」設立に参加。29年帝展に入選。30年院展に入選、特選。46年院展で日本美術院賞、同人。75年芸術選奨受賞。86年文化功労賞。銅版画を制作。1989年没、87歳。**日本画家、版画家**

小松益喜（こまつ・ますき/1904～2002年）

高知市生れ。1930年東京美術学校卒。二科展に出品。プロレタリア美術運動にも加わった。神戸異人館の風景に魅せられ異人館を描く。36年新制作派協会創立に参加。41年同会会員。42年同会で昭和洋画奨励賞。57年から渡欧、海外の取材旅行多い。59年兵庫県文化賞。98年神戸市立神戸小磯記念美術館で個展開催。東京で没、98歳。**洋画家**

小松美羽（こまつ・みわ/1984年～）

長野県生れ。2004年女子美術大学短期大学部卒。09年阿久悠トリビュートアルバム『Bad Friends』のジャケット(アクリル画)と挿絵、専門誌「2020 Value Creator」の表紙絵を描き、創刊25周年の300号も手掛けた。10年限定200冊オリジナル詩画集『出会いこそ人生のすべて』を発表、阿久悠トリビュートアルバム『歌鬼3』のジャケット(アクリル画)と挿絵担当し、TSUTAYAのオリジナル絵本も手がける。10年アートフェア YOUNG ARTISTS JAPAN Vol.3に出展し、評価を受けた。12年地元坂城町の鉄の展示館で【画家・小松美羽 ふるさと坂城を描く～神ねずみと唐ねこさま～】を開催。地方から日本を元気にするプロジェクト【ニッポンコレカラプロジェクト】長野県代表に選出。坂城町特命大使に任命され、地元中学の美術の指導やバラ祭りの開会式、びんぐし湯さん館のテーブルカットなど地元のイベントに精力的にも参加。12年北野美術館別館にて【小松美羽展 信州からの覚醒と神秘～原点～】を開催。12月にはフランスの文化

通信省主催のチャリティーイベント日仏合同展で日本代表アーティストの一人として染色作家・奥田祐斎とコラボでクリスマスツリーを制作。13年長野灯明まつりにおいて長野県を代表するアーティストとして中島千波と共に巨大灯籠を制作、善光寺の仲見世通りに展示。13年フランスの老舗製紙メーカーのCANSON財団が毎年開催するPRIX CANSON2013にて日本代表として選出され、60数カ国からのエントリーの中から世界ファイナル39人にミネートされ、パリ市立プティ・パレ美術館にて特別企画展示された。**洋画家、版画、現代アーティスト**

小松義雄（こまつ・よしお/1904～1999年）

東京生れ。昭和期の洋画家・抽象画家。慶應義塾大学仏文学部卒業。渡仏。ピカソに影響を受ける。1939年銀座三越で個展。自由美術家協会会員。個展を重ねる。50年モダンアート協会創立に参加。72年日動画廊で個展。1999年没、95歳。(出典 わ眼)**洋画家**

小松良和（こまつ・よしかず/1949～1985年）

長野県生れ。1976年東京芸術大学大学院修了。インスタレーションを多く手がけ、グループ展などで発表を重ねる。81年から長野県内の高等学校に勤。83年再び絵画制作をスタートし、「今日の作家展」(当館主催)などに出品するが、1985年没、36歳。**インスタレーション、美教**

五味清吉（ごみ・せいきち/1886～1954年）

盛岡市生れ。盛岡中卒(現・盛岡第一高等学校)卒。岡田三郎助に師事。1908年東京美術学校西洋画科入学、首席で卒業。文展で三等賞、帝展に出品。渡仏。32年帝展無鑑査。岩手県初の洋画団体・北虹会結をはじめ、明治・大正期の岩手県の美術会を牽引。盛岡市で没、68歳。**洋画家**

五味悌四郎（ごみ・ていしろう/1918～2004年）

東京生れ。1945年日展出品。47年一水会出品。64年渡欧、パリ・グランシヨミエールに学ぶ。サロン・ボザール、ル・サロン展銀賞。68年一水会優賞。98年日展特選。2004年没、86歳。**洋画家**

五味文彦（ごみ・ふみひこ/1953年～）

長野県生れ。1977年武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒。89年国画会展出品。94年白日会展出品。2001年安田火災財団選抜奨励展出品。02年写真・リアリズム絵画の現在出品。(奈良県立美術館)。05年白日会内閣総理大臣賞。**洋画家**

小向井美嗣 (こむかい・みつぐ/1952年～)

青森県生れ。上京、川崎市内の自動車工場に勤務。会社を退職し、絵画研究所に通う。指導者は芸大彫刻科卒。1977年第一美術展で奨励賞。ブロードウェイ新人賞展入選。79年第一美術展50回記念大賞。84年第一美術展会員努力賞。85年京都山総美術登龍会展受賞。86年国際デッサン展入選。88年広島天満屋、川崎西武で個展。フランス取材旅行。89年広島天満屋、船橋西武、川崎西武、錦糸町西武で個展。月刊美術11月号NO.170に「写実のウラにひそむ神の領域」が掲載。現在無所属。洋画家

小室翠雲 (こむろ・すいうん/1874～1945年)

栃木県生れ。父は日本画家・小室桂邨。1889年田崎草雲に師事。99年草雲が没し、上京し南画会に加わる。1921年矢野橋村らと日本南画院結成に参加。24年帝国美術院会員。37年帝国芸術院会員。41年大東南宗院を創設。44年帝室技芸員。1945年没、70歳。日本画家、南画家、版画

小村雪岱 (こむら・せつたい/1887～1940年)

埼玉県生れ。1908年東京美術学校日本画科選科卒。下村観山教室に学、古画の模写、風俗考証を学ぶ。14年泉鏡花の多くの鏡花作品を装幀、木版多色摺りによる挿絵。22年里見弴の挿絵も手掛けており、装幀のほか、新聞雑誌の挿絵で活躍。雪岱の木版画は、生前のものより、その没後に高見沢木版社などから版行されたものの方が多く、いわゆる新版画に分類。舞台装置の世界で自ら一時期を画した。33年挿絵の代表作となった邦枝完二作の新聞小説『おせん』(東京朝日新聞)、34年の『お伝地獄』(読売新聞)、挿絵の分野で大きな足跡をのこした。1940年没、54歳。浮世絵師、日本画家、風俗、挿絵、版画

小村大雲 (おむら・たいうん/1883～1938年)

島根県生れ。1903年山元春挙に師事。12年文展で第2科3等賞6席に入賞、以後3年連続入選、16年文展で特選、以後も特選、無鑑査。19年帝展で「推薦」、永久無鑑査となり、以後ほぼ毎年作品を出品し、委員、審査員を歴任。35年明治神宮に壁画「京浜鉄道開業式行幸図」が完成。1938年没、54歳。日本画家

小室孝雄 (こむろ・たかお/1892～1955年)

長野県生れ。1914年岡田三郎助に師事し、本郷洋画研究所に学ぶ。1917年文展に入選。画風は印象派的写実主義で、朝鮮・満州・北支に画行脚を送り、信毎紙上に挿画を描き、従軍画家として北支・中支・南支に写実の絵筆を握りました。池上秀畝・中村不

折・丸山晚霞等の諸先輩と協力し奔走して、信濃美術会を創立したほか、各美術団体の委員を務め、郷土と日本洋画壇に幾多の功績を残しました。日本洋画壇で活躍。1955年没、63歳。洋画家

小室 達 (こむろ・とおる/1899～1953年)

宮城県生れ。1919年宮城県立白石中学校卒、東京美術学校彫刻科塑造部入学、24年同校卒、研究科にすすむ。帝都復興記念合同彫塑展「淵」妙技賞4席、帝展出品。25年東台彫塑会展出品、東台彫塑会々員、帝展で特選、26年帝展無鑑査、27年帝展委員。東京で没、53歳。彫刻家

小室 寛 (こむろ・ひろし/1911?～2009年?生没年不詳)

師 辻永、中村研一。多摩ゆかりの画家。2004年セッション杉並で小室寛回顧展が開催。日動画廊扱い。日本美術会会員。2009年(88歳)小室寛画集刊行。洋画家、水彩画家

小室 浩 (こむろ・ひろし/生没年不詳)

元台湾美術学校長、元陽会(洋画)委員。洋画家

小村平八 (こむら・へいはち/1899～1983年)

愛知県生れ。1919年愛知県第一師範学校本科卒。油絵は石川寅治に師事。54年示現会会員。日展、独立、創元、大湖、光風に出品。名古屋芸術大学で洋画講師、愛知県私学協会文化部長、同県私学審議会委員、日本芸術家協会連合会理事長。名古屋市で没、84歳。洋画家、美術教育

古茂田公雄 (こもた・きみお/1910～1986年)

松山市生れ。川端画学校、1932年津田青楓に師事。34年から猪熊弦一郎に師事。39年新制作展に出品、40年新作家賞、協友。以後、無所属として松山で制作。州之内徹は作家の絵を「山水」と呼ぶ。自然、特に岩と水にリアリズムを描き出した。86年没、76歳。2013年久万美術館で個展。洋画家

古茂田美津子 (こもた・みつこ/1921～2007年)

鹿児島県生れ。東京で育ち、絵の勉強。画家の古茂田守介(1918～1960)の妻。守介の死後、再び絵筆を握り描き始め新制作展などに作品発表した。1972年現代画廊で個展(以降74、75、77、81、87年)。東京で没、85歳。2009年信濃デッサン館別館「槐多庵」で遺作展。洋画家

古茂田守介 (こもた・もりすけ/1918～1960年)

愛媛県生れ。1937年上京。猪熊弦一郎、脇田和に師事。中央大学中退。50年新制作派協会会員。美術団体連合展、国際具象美術展、日本アンデパンダン

展に出品。具象絵画を追究。フォルムの求道者。東京で没、42歳。(出典 わ眼) **洋画家、版画**

小森邦夫 (こもり・くにお/1917～1993年)

東京生れ。日大中退。斎藤素巖に師事、構造社展に出品。日展で1953年特選・朝倉賞、55、56年特選、80年文部大臣賞。85年芸術院賞。89年芸術院会員。女性をモチーフにした作品がおおい。1993年没、76歳。作品に「腰かけた婦」「青春譜」など。 **彫刻家**

小森隼人 (こもり・はやと/1985年～)

島根県生れ。2008年奈良芸術短期大学専攻科洋画コース修了。09年白日会展佳作賞、12年白日賞、会友奨励賞、13年関西画廊賞、のち会員。12年現代の具象絵画 それぞれのリアリティー展(阪急うめだ本店)。14年現代の具象絵画展—Without End(阪急うめだ本店)。15年東美ミュージアム展 TOBI WAVE(東京美術倶楽部)。 **洋画家**

小紋章子 (こもん・あきこ/1933年～)

1933年生れ。52年宮城県第一女子高校卒。58年東京芸術大学油画科卒。62年独立展 63、65年奨励賞。72年中央公論2月号に詩「断章」執筆。個展中心に発表。針生鎮郎は夫。詩集8冊発刊。 **洋画家、水彩**

小谷津雅美 (こやつ・まさみ/1933～2011年)

東京生れ。日本美術院の日本画家小谷津任牛の長男。53年再興院展に入選。55年安田靱彦に師事。55年日本美術院院友。58年黎会展(高島屋)へ参加。60年院展で奨励賞。62年日本美術院次賞、63、64、68、69、70、71年白寿賞・G賞。83、85、86、87、89、91、98年院展奨励賞。98年天心記念茨城賞、日本美術院同人。2003年文部科学大臣賞を受賞。06年内閣総理大臣賞受賞。人物から仏画のモチーフを経て、1990年代からは四季折々にうつろう日本の自然の美しさを描き出した。2011年没、74歳。 **日本画家**

小屋哲雄 (こや・てつお/1962年～)

兵庫県生れ。1988年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒、90年同校修士課程油画専攻修了、93年博士号取得。画廊宮坂とOギャラリーで個展開催。青島国際美術祭2onal art fair(チンタオ)。Art Fire Exhibition 2012(ベルリン)。相模原芸術家協会会員。絵画教室アトリエヒュッテ(神奈川県相模原市)主宰。 **洋画家**

小柳秀太郎 (こやなぎ・しゅうたろう/1916～1986年)

東京生れ。木村荘八に師事。日本大学芸術学部卒。1949年春陽会賞、56年会員。甲府で没、70歳。 **洋画家**

小柳 正 (こやなぎ・ただし/1897～1948年)

札幌市生れ。北海中学中退後、上京して岡田三郎助に学んだ。1914、15年日本美術院洋画部展入選。20年札幌で個展開催。20年渡仏、サロン・ドートンヌ会員、サロン・ド・チュイレリー会員として活動。42年日本橋高島屋で展覧会開催。その際の展覧会目録に、フランスの国立美術館、アープル美術館、モスコ国立美術館に作品を買い上げられ、ドイツ、フランスで壁画を制作したとされている。1948年没、51歳。 **洋画家**

小谷野匡子 (こやの・まさこ/1935年～)

1959年 東京藝術大学美術学部芸術学科卒業、61年同大学美術学部専攻科終了、61～64年東京藝術大学美術学部非常勤助手。64年ジョン・D・ロックフェラー三世基金(現アジア・カルチュラル・カウンスル)奨学金を得てニューヨーク大学美術学部コンサベーションセンターに留学。68～71年東京藝術大学美術学部保存技術科講師。71～73年国立近代美術館にて戦争画修復に従事。74年～現在 株式会社絵画保存研究所を設立し代表取締役に就任。82年以降 ニューヨーク大学コンサベーションセンター、金沢美術工芸大学、女子美術短期大学、東京藝術大学、多摩美術大学、嵯峨美術短期大学、東京学芸大学、放送大学、京都造形大学にて非常勤講師。国内外の大学、学会、国際会議などでの講演、研究発表、ならびに海外との共同研究、多数。 **絵画保存修復家**

小柳吉次 (こやなぎ・よしつぐ/1943年～)

弘前市生れ。拓殖大学商学部経営学科卒。1967年弘前市田中屋画廊で個展。68年主体展、二紀会展入選。85年の現代日本美術展で千葉県立美術館賞。88年二紀展安田火災美術財団奨励賞、95年会員賞、2002年宮永賞。2000年文化庁在外芸術家研修員モンゴル国立美術大学で研修。日本ボタニカルアート協会会員。 **洋画家**

小山愛人 (こやま・あびと/1951年～)

岡山県生れ。1975年創形美術学校版画研究科修了、現代日本美術展・兵庫県立近代美術館賞。76年英国国際版画ビエンナーレ・アーツカウシル賞、版画協会展・新人賞。78年日本現代版画大賞展・優秀

賞。86年日本国際美術展・群馬県立近代美術館賞。90、93年高知国際版画トリエンナーレ・佳作賞。版画家

小山栄達 (こやま・えいたつ/1880～1945年)

東京生れ。本田錦吉郎に洋画を学び、日本画を鈴木栄暁、小堀鞆音に学ぶ。1898年安田鞆彦・磯田長秋らと「紫紅会」を結成し、2年後今村紫紅が加わり、名称を「紅児会」と改める。巽画会・日月会に参加。1911年文展に入選し、以降文展・帝展に出品して褒状を受ける。歴史画、武者絵を得意とした。1945年没、65歳。日本画家、版画

小山敬三 (こやま・けいぞう/1897～1987年)

長野県小諸市生れ。上田中学校卒。慶應義塾を中退。川端画学校に通う。1920～28年渡仏、シャルル・ゲランに師事、26年サロン・ドートンヌ会員、のち33年同会審査員。25～33年春陽会会員。34年二科会会員。36年一水会創立会員。59年日本芸術院賞。60年日本芸術院会員、日展理事。70年文化功労者・75年文化勲章、小諸市立小山敬三美術館開館。平塚市で没、89歳。洋画家

小山三造 (こやま・さんぞう/1860～1927年)

東京生れ。工部大学校で洋画を学んだとされるが不明。1879年京都に移住。80、81年京都府画学校の西宗(洋画)教授。81年退職後、石版屋を経営、石版、コロタイプで画手本など印刷、傍ら油彩の制作。主に肖像画を描く。50年守住勇魚らと油絵の展覧会を開催。1927年没、67歳。洋画家、美教

小山周次 (こやま・しゅうじ/1885～1967年)

長野県小諸市生れ。1900年小諸義塾で島崎藤村、三宅克己に学ぶ。02年丸山晚霞に師事。10年日本水彩画会研究所入所、11年幹事。13年日本水彩画会の創立に参加、評議員。17年より二科展に出品。東京で没、82歳。(出典 わ眼)水彩画家、版画

小山正太郎 (こやま・しょうたろう/1857～1916年)

長岡市生れ。長岡英学校で学ぶ。1871年上京、72年川上冬崖の聴香読画館に学び、塾頭。74年陸軍兵学寮に入り、士官学校図画教授掛となり、フランス人教官アペル・グリノーに水彩画法等を学ぶ。76年工部美術学校入学、フォンタネージの指導を受ける。78年退学。浅井忠らと十一字会を結成。87年十一字会は画塾「不同舎」を主催し、後進の育成に努めた。教授陣も多彩で最盛期には300名の塾生がいた。79年東京師範学校図画教員。84年図画調査委員、87年図画教育書編集委員等図画教育普及。85年図

画取調掛で普通教育に毛筆、鉛筆画の採用を巡り、毛筆画を推すフェノロサらに敗れ、洋画排斥論に反対し、90年東京師範学校を解任。89年明治美術会を創立に参画するも93年黒田清輝が白馬会を結成すると明治美術会の画家は「旧派」と呼ばれ高等美術教育の傍流となる。1900年パリ万博の出品監査委員。07年文展の審査員。東京で没、58歳。洋画家、美教

小山昇 (こやま・のぼる/1910～1944年)

札幌市生れ。札幌第一中学校の美術部で林竹治郎に師事。1927年東京高等工芸学校に学ぶ。三岸好太郎に兄事、独立展で活躍。33年三岸を中心に北海道独立作家協会結成に参加。38年自由美術協会展入選、翌年会員。44年戦病死、34歳。洋画家

小山良修 (こやま・りょうしゅう/1898～1991年)

長岡市生れ。日本水彩画会研究所に学ぶ。1923年東京帝国大学医学部卒。24年不破章らと「蒼原会」を結成。29年光風会展で光風賞。40年水彩連盟創立会員。31、32年新制作展で新作家賞。45年東京女子医学専門学校薬理学教授、のち東京女子医大教授を歴任。91年没、82歳。水彩画家、美教、版画

強瀬浄真 (こわせ・じょうしん/1963年～)

横浜市生れ。1986年女子美術大学芸術学部卒、卒業優秀作品賞。88年武蔵野美術大学大学院修士課程修了。94、95、96年川上画廊で個展。97年高野山(光明院)に「桜曼荼羅」奉納。ネパールポカラ修道院へ「聖母子像」寄贈。11年「ヨハネの黙示録」シリーズを発表。12年同シリーズ完結。洋画家

今純三 (こん・じゅんぞう/1893～1944年)

弘前市生れ。1909年太平洋画会研究所、10年白馬会葵橋洋画研究所、12年本郷洋画研究所に入り、研究生第1号として登録。同期に中村研一、長谷川潔、碓伊之助。12年早稲田工手学校建築科夜学入学、20年帝展入選。23年帰郷、石版画、エッチングの研究に着手。27年青森県師範学校図画科教授嘱託。31年東奥美術展覧会審査員。33年青森県師範学校を退職、東奥日報社編集局嘱託となり「青森県画譜」の制作に着手。40年日本エッチング作家協会設立に参加。東京で没、52歳。洋画家、版画家

今純三 II (こん・じゅんぞう/1893～1944年)

青森県生れ。1906年弘前市立高等小学校卒。上京。独乙中学校を三年終了と同時に退学。太平洋画会研究所に入り、中村不折らの指導を受ける。10年葵橋洋画研究所に学ぶ。12年早稲田工手学校建築科(夜間)入学(14年卒)。小山内薫ら主宰の自由劇場の舞

台背景製作に従事。本郷絵画研究所に入り、研究生第一号として登録する。第6回文展に初入選。13年大正博覧会美術展に出品。19年第1回帝展に出品。国民美術協会会員。20年松竹キネマ株式会社蒲田撮影所美術部に入り、背景設計など担当。23年帰郷。石版画、エッチングの研究に着手。「大震災風景」制作。26年日本エッチング作家協会創立評議員。31年東奥美術展覧会の主任審査員を務める。43年一時日本版画協会会員。44年9月28日東京で没、享年51歳。(佐)洋画家、版画家

今田敬一 (こんだ・けいいち/1896~1981年)

秋田市生れ。林竹治郎に師事。札幌第一中学校卒、北海道大学卒。北大黒百合会会員。1925年道展創立会員、74年同会会長。48年北海道大学農学部教授、60年同大学定年退職、同大名誉教授。62年北海道文化賞。71年北海道デザイナー専門学院学院長。1981年没、85歳。洋画家、美教

近藤克美 (こんどう・かつみ/1949年~)

北九州市生れ。独学で創作。福岡県展、西日本美術展に出品。山口、福岡、東京で個展。17年近藤克美作品集を発行(ギャラリーアピアント)。洋画家

近藤浩一路 (こんどう・こういちろう/1884~1962年)

山梨県生れ。1910年東京美術学校西洋画科卒。10、13年文展に油彩出品。漫画や挿絵制作。15年岡本一平らと東京漫画会結成。17~28年平福百穂らの珊瑚会に参加。19年再興院展に日本画出品。21年日本美術院同人。22年欧州、朝鮮・中国・韓国を巡遊。31年フランスで個展、アンドレ・マルローと親交。36年東京に転居。59年新日展会員。1962年没、78歳。山梨県立美術館、練馬区立美術館2006年個展開催。日本画家、漫画、挿絵、洋画、水彩、版画

近藤弘明 (こんどう・こうめい/1924~2015年)

東京生れ。東京美術学校日本学科卒。山本丘人に師事。創造美術展に出品、のち新制作協会、創画会で活躍。1965年日本国際美術展、71年山種美術館賞展で受賞。75年日本芸術大賞。2015年没、90歳。日本画家

近藤吾朗 (こんどう・ごろう/1911~1999年)

福井県生れ。文化学院卒。長く中国、フランスで絵画を研鑽。アジアとヨーロッパの技法の融合を目指した独自の画風を確立。インド、エジプトの古代遺跡を歴訪し、対象のもつ時の重さと存在の重さを作品に反映する技法を加味した。静岡県裾野市にアトリ

エを構え、富士を描いた。元一水会会員。1999年没、88歳。洋画家

近藤竜男 (こんどう・たつお/1933年~)

東京生れ。1955年東京藝術大学油画科卒。新制作協会展入選。61~2001年渡米NY在住。ニュースクール、アート・ステューデント・リーグ、ブルックリン美術館附属美術学校で学ぶ。63年エミリー・ロウ・コンペ受賞。「芸術新潮」ニューヨーク通信を連載。練馬区立美術館2002年回顧展「ニューヨーク-東京 1955~2001」を開催。洋画家

権藤種男 (ごんどう・たねお/1891~1954年)

大分市生れ。1912年東京美術学校図画師範学校卒、12~16年大分県女子師範学校教諭。17年文展に入選。20年文展で特選。30年帝展で特選。33年帝展推薦、永久無鑑査。春台美術展に出品。錦巷会会員。46年大分県美術協会初代会長。大分県で没、63歳。洋画家

近藤文雄 (こんどう・ふみお/1938~2017年)

岡崎市生れ。1960年愛知学芸大学絵画教室卒。以後、中学、高校で教鞭。61年前衛美術展に出品、会員。63年東京銅芳堂画廊で個展。66、67年現代日本美術展に出品。76、79~81、84、从展出品。2012年F氏の絵画コレクション展(豊橋市美術館)17年没、79歳。洋画家、美教、版画

近藤文雄 II (こんどう・ふみお/1938~2017年)

岡崎市生れ。1960年愛知学芸大学絵画教室卒。59~64年日本アンデパンダン展。自由美術展出品。61年前衛美術展に出品、会員。65年今日の欲望100展(モダンアートセンター・ジャパン、東京)。66、68年現代日本美術展。73年豊川を拠点に齋羅衆団を結成。75年版画集『小魔羅夢譚抄』刊行。98年人とヒト展(刈谷市美術館)。2012年F氏の絵画コレクション展(豊橋市美術館)。2017年没、79歳。洋画家、美教、版画

近藤光紀 (こんどう・みつり/1901~1948年)

東京生れ。東京美術学校西洋画科中退。曾宮一念に師事。帝展、文展に入選。1932年新美術家協会会員。新文展無鑑査。39年一水会賞。42年一水会会員のち委員。日展委員。21年松本市に移住。信州美術界、中信美術界の結成に参加。長野で没、47歳。洋画家

近藤幸夫 (こんどう・ゆきお/1951~2014年)

愛知県生れ。71年慶應義塾高等学校卒、75年同

大学文学部哲学科美学美術史専攻入学。80年同大学大学院文学研究科修士課程に進み、83年修了。80年東京国立近代美術館の研究員に採用。91年同美術館主任研究員。同美術館在職中は、「現代美術における写真」展(1983年)、「モディリアーニ展」(1985年)、「近代の見なおし:ポストモダンの建築1960-1986」展(1986年)、「手塚治虫展」(1990年)担当。「モディリアーニ展」は大規模な展覧会であった。調査研究は、コンスタンティン・ブランクーシの研究、論文等にまとめるとともに、現代美術における立体表現、写真へと研究領域を広げた。研究を基盤にした評論活動においては、『美術手帖』の展覧会評「ART 84」の連載(1984年2月-12月)や「かわさきIBM市民ギャラリー」での企画展をはじめ、各種の雑誌への寄稿やギャラリーでの企画、作家展に積極的に参加協力。96年慶應義塾大学理工学部助教授となり、日吉校舎の美術研究室に勤務、総合教育等を担当。在職中は、教育指導の傍ら、とりわけ2004年6月に同大学日吉キャンパス内の施設「来往舎」のギャラリーにて「来往舎現代藝術展」を学生有志と共に企画運営した。美術評論家としては、その評論はアーティストへの敬意と深い共感があった。2014年没、63歳。没後の14年原美術館(東京都品川区)のザ・ホールにて「近藤幸夫さんにお別れをする会」が開かれ同会のために作成された冊子「KONDO YUKIO 09. 02. 1951-14. 02. 2014」に詳細な研究業績及び活動履歴が掲載され、30年以上にわたる活動が記録されている。**美術評論家**

近藤洋二 (こんどう・ようじ/1898~1964年)

埼玉県生れ。川越中学校卒。本郷洋画研究所、川端画学校に学ぶ。28~30年渡仏。サロン・ドートンヌ入選。29年帝展入選。35年太平洋画会会員、のち太平洋美術会運営委員、特に同会の再建と運営の中心的存在であった。太平洋美術学校教授。鎌倉市で没、66歳。**洋画家、美教**

近藤嘉男 (こんどう・よしお/1915~1979年)

前橋市生れ。川端画学校に学ぶ。47年二紀会展で春季展賞。1948年二紀会展で二紀賞同人、51年同会会員、前橋に「二紀会洋画研究所」と絵画教室「ラボンヌ」を開設。78年評議員。1948年には二紀会群馬支部を結成、1950年の群馬県展に招待出品、さらに審査員として参加。1979年没、64歳。**洋画家、美術教育**

今野忠一 (こんの・ちゅういち/1915~2006年)

山形県生れ。1931年山形の南画家後藤松亭に入門し、34年児玉希望の門人となり、40年郷倉千靱の

草樹社に入塾、忠一と号して花鳥画に取り組む。40年院展入選。54年56年59年奨励賞。55年日本美術院賞、57年同賞次賞、58年同賞・文部大臣賞。59年同人。77年内閣総理大臣賞。78~88年愛知県立芸術大学日本画科主任教授。88年日本美術院理事。1990(平成2)年郷土の天童市美術館で「今野忠一とその周辺展」を開催。92年から96年まで『中央公論』の表紙絵を担当。92年東北芸術工科大学芸術学部美術科主任教授となる。92年『今野忠一画集』(ぎょうせい)が刊行。2001年日本美術院常務理事。さいたま市で没、91歳。**日本画家、美教**

昆野 恒 (こんの・ひさし/1915~1985年)

仙台市生れ。東京美術学校彫刻科卒。日本抽象彫刻の草分け。1938年国画会展入選。48年自由美術家協会会員、自由美術家協会展に出品。55年サンパウロ・ビエンナーレ展出品。以後、野外創作彫刻展、アートクラブ・グループ展に出品。代表作品は国立近代美術館にある「成長の形態」。79年仙台駅前の「青葉の風」。1985年没、70歳。**彫刻家**

近馬勘吾 (こんま・かんご/1894~1977年)

岡山市生れ。1912年上京、13年太平洋画会に入り中村不折、岡精一に師事、以後戦前、戦後を通じて同会と共に歩み、戦後は同会展の審査員をはじめ、太平洋美術学校で指導にもあたり、委員。22~23年ロシアへ渡り取材、61年渡仏巡遊した。1977年没、83歳。**洋画家、美教**

紺谷英儀 (こんたに・えいぎ/1908~1973年)

富山県生れ。富山県立工芸学校木工科卒、26年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。31年同校彫刻科木彫部本科を卒業。31年帝展に木彫入選。以後、官展を中心に32、33年帝展、39、41、42年新文展で作品を発表。46年日展を始め、47、49、54年日展に出品、彫刻団体「創型会」(51年結成)の同人。1973年没、65歳。**版画家**

近藤孝太郎 (こんどう・こうたろう/1897~1949年)

愛知県生れ。1919年東京高等商業学校卒。21~22年渡仏、帰国後は岡崎美術展の創設に尽力。24年文芸誌『草原』を創刊し、同年『グレゴリー夫人戯曲集』(新潮社)を翻訳出版。25年版画制作。25年洋画の研究会「我々の会」を結成し、新人育成に努め、26年に我々の会展、岡崎市立図書館)を開催。岡崎市史編纂に従事。東京で没、52歳。**洋画家、版画家、美術著書発刊**